別冊宝島114

いまどきの神サマ

退屈な世紀末，人びとは何を祈る？

オウム真理教入信日記！
各宗教団体の洗脳テクニック！
東大卒の仏陀、大川隆法の正体！
宗教・オカルト・精神世界ブームの最前線での
従軍体験（フィールド・ワーク）！

UFO、おまじない、
超能力、
占い、ハルマゲドン、
前世戦士、チャネリング、
気功、大霊界……
オカルトのメンタリティを
暴露！

別冊宝島114

いまどきの神サマ

退屈な世紀末，人びとは何を祈る?

いまどきの神サマ

退屈な世紀末,人びとは何を祈る?

UFO、おまじない、
超能力、
占い、ハルマゲドン、
前世戦士、チャネリング、
気功、大霊界……
オカルトのメンタリティを
暴露!

INTRODUCTION

豊かな時代の祈りの正体

この本は、よくある「新宗教カタログ」のたぐいではない。
かといって、ありきたりな「若者のオカルト・ブーム」批評とも違う。
その手のものは、この豊かすぎる時代に生まれ育った子どもたちの宗教現象を既成の宗教観で論じようとする。
それら紋切り型の若者宗教論は次の四つに大別できる。
曰く、**若者が神秘的なものに走るのは、彼らが依存性が強いからである。**
しかし本当に彼らは、依存しているのだろうか。違う。彼らが依存しているのはこの社会の母性的システムにであって、そこから飛び出したらあっと言う間に死んでしまうひ弱さを自覚している。だから、自分では宗教やオカルトに本気のつもりでも、実はハマっているふりをしてるだけだ。それはこの本を読めばわかる。
曰く、**わけのわかんないことしてないで、おとなになって働きなさい。**
親心としてはわかる。だが、誰もが食うに困らなくなったうえに、おとなになるための儀式さえ消滅した今、そんなお説教に説得力があるのか。それもこの本を読めばわかる。
曰く、**若者たちは自分たちを指導する強力なカリスマを求めている。**

違う。彼らが求めているのはアイドルにすぎない。それは空虚なほどいい。いいかげんな教祖でも、ヘタクソなロック・バンドでも、アニメの美少女でもなんでもいい。だけど、いちばんカワイイのは、ワタシ。そのへんの心理も、まあ、この本を読めばわかる。

曰く、唯物主義、資本主義のなかで、人びとのこころは荒んでいる。だから若者は神や神秘にすがるのである。

これは宗教やオカルトに肯定的な意見だが、その裏には「もうすぐ宇宙的愛に満ちた〝こころ〟の時代が来る」といったパラダイム変換願望がある。エコロジストや、東洋思想派、ニューエイジなどもこの類だろう。しかし、彼らは本当に〝こころ〟とやらを求めているのだろうか。ましてや宗教やスピリチュアリズムやエコロジーは本当に近代を乗り越える力になるのだろうか？

違う。彼らのほうは別に宗教やオカルトでなくたっていっこうにかまわないのだ。現に、宗教の構成要素からスピリットを抜き取ったものが世の中には満ちあふれ、宗教の代替物として、主体なきメディア人間たちの自我だけを肥大させている。伝言ダイヤル、ディズニーランド、自己啓発セミナー、カルチャースクール、エステティック、マルチ商法、パソコン・ネットワーク、㈱リクルート……その詳細はこの本を読めばわかる。

ようするに、希薄な日常からジャンプできそうなことなら何でもいいのだ。でも、本当は彼らも薄々知っているに違いない。この、地平線の彼方まで平均化された国には、もはや神も外部もないのだと。そして、もう存在しない外部を、自ら作り出そうとする必死の試みが、前世やネットワークづくりやコンピュータなのかもしれないが、そこに見つけられるのも神なんかじゃない。のっぺりした自分自身の顔なのだ。

なぜなら、病も貧困も死も老いも差別も血みどろの争いもメディアの向こう側に閉じ込めてしまったこの国において、すでに（退屈な）千年王国は実現しているからだ。

そう、「いまどきの神サマ」とは、あなたがた、みんなのことだったのだ。

別冊宝島編集部

別冊宝島二四号　いまどきの神サマ……………目次

PART 1

通過儀礼なき時代の宗教体験

PART 2 オカルト・ブームの深層心理

PART 3 前世少女と終末ブーム

PART 4 90年代型の神サマ

表紙立体イラストレーション＝野崎一人
表紙撮影＝富山義則
本文写真撮影＝平山法行
本文写真提供＝共同通信社
本文イラスト＝中川いさみ＋藤川秀之＋根本敬
表紙・本文デザイン＝中山銀士　協力＝加山佳津子

PART 1 通過儀礼なき時代の宗教体験

オウム真理教とは何か……実践編

オウム真理教入信体験日記！

オウム信徒になった私の数カ月

吉峻貞信（仮名）

マスコミによるオウム・バッシングが続く、冬のある日、
ひとりの若者がオウムの門を叩いた……！
既成の新興宗教観から一歩も出ない紋切り型のオウム報道をくつがえす、
現場からの実況中継が暴いた意外な正体！

○月×日

ふとしたことで偶然手に入れた『大乗ヨガ教典』。とはいうものの、なんとなく目を通さないまま、ずっと本棚でほこりをかぶったままだった。しかし、『サンデー毎日』などでオウム真理教の報道が始まり、ひょっとしてうちにあるあの本のことかな、と思い出して一年ぶりに手にとった。

感動的だった。とくに感銘を受けたのは後半の、四人の成就者の記録だ。今までの自分は偽りだと知り、ありのままの自分の醜い姿を勇気をもって見つめ、それと闘って克服していく過程。しばしば自己嫌悪に陥ることのある私には身に染みるものがあった。

この人たちと会ってみたい。そう思った。

○月×日

「駅前でオウムが、象の帽子かぶって踊ってたぞ」

「うちのポストには、オウムのマンガだのパンフだのが次々に投げ込まれてんだ」

友人たちがオウムの話題を振ってくる。

「ふーん、そうなの」と、とぼけてみたが、

世田谷線松原駅近くのオウム真理教東京本部外観

私がオウムに興味を持っていることは、いつの間にか友人たちに知られていたのだ。

オウムに入る決心をする

○月×日

友人を、ひさしぶりに訪ねる。彼は私の顔を見るや、ホッとしたように言った。
「最近、見かけないからさあ、あいつホントにオウムにハマっちゃったのかな、なんてみんなで噂してたんだよ」
「そのことなんだけどさ、これからオウムに連絡とってみようと思うんだ。でも、なんとなく怖いから、そばにいてもらえないかと思ってさ。電話貸してくんない？」
私の言葉に彼は面食らってはいたが、
「そりゃあ君の自由だけど……どうなっても知らないぜ」と承諾してくれた。
私は緊張に指震わせながらダイヤルを回す。
「はい、オウムでございます」若い女性が

出た。まだ幼さの残る声だ。

「あの……ちょっとお尋ねしたいことがあるんですけど……」

「信徒の方ですか？」

「いいえ」

「名前と住所と電話番号を教えてください」

そこまで聞くのか。でも、まあいいや、と覚悟を決めて教えた。

「御用件は？」

「何かイベントでもあったら、いちどのぞいてみたいんですが」

「こんどの日曜日に〝真理の集い〟という初心者向けの集会があります。場所は……」

時間と場所をメモして受話器を置いた。

友人は、「あ～あ、やっちゃった……」とため息をついている。

勧誘は強引ではなかった

○月×日

世田谷線が松原駅に近づく頃、小さなビルの二階の窓ガラスに、「オウム真理教」と大きく書いてあるのが、車窓から見えた。

――東京本部と言いながら、こんなに小さいとは――。

駅から線路沿いに徒歩一分、まわりは閑

私はついにオウムのドアをたたいた……

静な住宅街だ。
　玄関をくぐると手前が受付。右手の本棚にはオウム関係の本がぎっしり。左手前方のカーテンの裏には、書類が散乱した事務机が並んでいるのがわかった。例の白い装束（シッシャ服）を着た五人ほどの男女がせわしなく働いている。
　受付で住所、指名、電話番号を記入し、千円のお布施を払うと、右手前方の部屋に案内された。どうやら修行部屋らしい。オウムの本で見たことはあったが、それよりもいくぶん狭く感じられる。紫の祭壇には麻原彰晃尊師の本が飾ってある。左の壁にはスローガンらしきものが細かく書き込まれた模造紙が、いくつも貼られている。集まった人は十人ほど。そのうち、私を含めて四人が初めての訪問者だった。
　まず、全員で「オーム、オーム、オーム」と三回唱えてから、尊師の説法をビデオで見た。その後、主催者のひとり、三十歳前後の男性から説明があった。
「オウムは阿含経を大切にしているが、自己の救済しか考えない小乗ではなく、かといって、自己の救済もできぬまま他者を救おうとする意味での大乗でもない。まず、自己の救済を完成したうえで他者を救おうというものだ」といった内容を、風邪でもひいてるらしく、ときおり咳こみながら話した。超健康を唱えるオウムの修行者なのに……。
　そして再び尊師の説法をビデオで見るのだが、その間に私たち初訪問者が一人ずつ後ろのほうに呼ばれて、面接を受けた。
　先に呼ばれた二人の面接では、一人目は入信する決意でいる様子だったが、次の人はあっさり断ってしまったようだ。オウムの勧誘はけっして強引ではないらしい。
　とうとう私の名が呼ばれた。面接の相手は先ほど咳をしていた男性だ。会費は月々三千円だが、六カ月分の一万八千円が前払いになると言う。マスコミに言われているほどに法外な額ではない。
　そして、その男性は私に言った。
「あなたは内気な性格ですね」
　緊張していたからそう見えたのだろう。
「だけどこの修行をすれば、自分をしっかり表現できるようになりますよ。あなたが今日、ここに来ているということは、前世で修行者だったのかもしれませんよ」
　受付で会費を納める。
「入会金三万円と合わせて、四万八千円になります」
　今、手もとにはそんなにお金を持ち合わせていなかったので、とりあえず内金だけ払う。
　そこに、高校生くらいの信徒が、元気に訪ねてきた。中年女性といっしょだ。
「お母さんを連れてきました！」
「わー、すごい」
　受付の女性が喜ぶ。その母親はまわりの女性信徒とにこやかに話をしていた。息子の信仰に反対している様子ではなかった。

○月×日

　昨日もらった入会案内のパンフレットを眺めてみる。昨日の四万八千円の他に、修

行コースを選択するとさらに三万円が必要だと書いてある。三万円は、三時間ずつのレッスン十回分の料金だ。電話で問い合わせてみると、やはり合計七万八千円必要だとのこと。

「でも入会なさるだけでも、瞑想用のテープなどを差し上げますので、御自分で修行ができますよ」と言うので、とりあえず入会だけはすることにした。

活動方針はのどかな雰囲気のなかで決められる

○月×日

約束の日、東京本部の受付で私を待っていてくれたのはオウムの本などによく登場するS大師だった。こんな有名人がわざわざ迎えてくれるなんて……。少し奥で作業をしているのは、これまた写真でよく顔を見る、美人のR大師じゃないか。彼らはこんなにも身近な存在だったのか。「あなたがあのS大師ですか?」と思わず確かめてしまったが、二人ともホーリーネームを変更したとのこと。

入信の説明もS大師から直々に受けた。

修行コースは三つ。解脱を目指す「ヨーガタントラ・コース」、超能力獲得を目指す「シッディ・コース」、そして現世での幸福を目指す「ポア・コース」だ。このなかからひとつ選択するのだが、シッディやポアを選んだ人も、けっきょくはヨーガタントラに変更するケースが多いのだそうだ。そこで私もヨーガタントラ・コースを選択することにした。

S大師は笑顔を絶やさずに説明してくれるが、言葉がていねいすぎて、どこかセールスマン口調なのが気になる。まあ、それは私が初心者で初対面だからしょうがない。ともあれ四万八千円払うと、ちゃんとした領収書をくれた。良心的だ。

手続きが終わったので帰ろうとすると、S大師が「今、上で学生班という会合が始まってますので、せっかくだから自己紹介でもしていきませんか」と、私を二階に案内してくれた。

なかでは、二十人ほどの若者がビラを折っていた。新入信者として紹介されると、全員の視線が私に集中する。みんな満面に笑みを浮かべている。「入信動機は?」「学生?」「どこに住んでるの?」「オウムの第一印象は?」

質問攻めだ。これほどたくさんの人から喜ばれた体験はないので悪い気はしない。

学生班にしてはメンバーの年齢は平均してやや高い感じ。部屋の向こうには布施本(勧誘パンフレット)が山と積み上げられている。すごい量だ。

向かって左側には、オウムの主神シヴァ神のカラフルな絵。果物などが供えられていた。祭壇なので、触れてもいけないし、そっちに向けて足を投げ出してもいけないのだそうだ。東京本部を訪れたら、まずここで「オーム、グル(尊師)とシヴァ神に帰依したてまつる」と唱えて頭を下げる。帰るときも同様にする。

さて夜七時になったので、みんなビラ折

りをやめて話合いを始めた。
　どうやったらオウム真理教が世の中に広まるか、布教の方法を、ああでもない、こうでもない、と検討する。といっても堅苦しい会議なんかではなく、みんなで輪になって、ざっくばらんに話し合う。のどかで楽しい雰囲気だ。
「ガネーシャ帽、あれは大成功だったね」
「とくにちっちゃい子どもたちにはうけてたよ」
「でも、一般の人たちには、この人たち頭おかしいんじゃないかって思われるんじゃないかしら」
「マイナスの面もあるってわけだな」
　と終始こんな様子で方針を検討していく。まさにこの場こそ、オウムの奇抜なアイディアの源になっているのだろう。大教団にありがちな上意下達の官僚的な指導とは対照的に、末端の創意工夫が生かされている。ただ、ウケをねらって、その反響を喜んでいるだけに終わらなければいいが。
　入信早々、私も意見を求められる。

入信時にもらえるセット。写真上の黒い石が霊石ヒヒイロカネ

「どうだろう。今、世間にはオウムに対する悪いイメージがあるが、ビラにはオウムの名前を前面に出さないほうがいいだろうか」
「出してもいいんじゃないですか？　オウムの知名度を逆に利用したほうが、関心を引くと思うけど」
　今日初めて出席したくせに、偉そうなことを言ってしまったものだ。
　家に帰り、教材を開く。シークレット・ヨガやら超能力セミナーやら、さまざまなコースの申込み用紙がたくさん入っている。石ころみたいなものはヒヒイロカネといって、一カ月のあいだ邪気を吸い取ってくれる。いっぱいになったら取り換えるのだ。そのほかに信徒証、パンフレット、テキスト、それを解説するカセットが二本。カセットはケイマ大師の声で入っているが、ていねいに説明をしているのは一本目のA面くらいで、二本目のA面はひたすらマントラを唱えているし、B面は「リズム」という内容で、〝プップップッ〟という音が一秒ごとに入っているだけだった。

彼女は「じゃあね」と、去っていった

○月×日

　今日は「勉強会」。入信後、初めての集

会だ。遅刻しそうになってギリギリで道場に駆け込むと、十名ほどの信徒たちがビラをそろえているだけだった。私は勘違いして少々早過ぎてしまったのだ。

そこでしばらくビラ整理の手伝いをした。この間来たときは天井に届くほど積み上げられていたビラが、今日はもうほとんど残っていない。すごいスピードで配るものだ、と驚いていたら、ある大師が「選挙中はこんなものじゃあなかったよ」と言うのでますます驚いた。

ビラを折ったりしながら、隣に座った青年と話をした。彼は高校時代に麻原尊師の著作と出会ったということだ。

「最初は二年ほど自分で修行してたんだけど、功徳がないせいか、魔境に入っちゃうんですよ。それでやっと勇気を出して入信したんです」

彼は地方の信徒だが、ここ数日は東京近辺の支部を転々としているらしい。

「東京の道場は大きくていいですね。僕のとこなんかまだまだ小さくて、いざバクティになってもせいぜい五人ぐらいしか集まらないんですよ」

オウムはお金がかかるから、バイトでもしないとたいへんでしょう、と聞くと、

「ええ、僕もいろいろやりましたよ。弁当の配達とかビル清掃とか。でも財施をすると、自分がすごく変わるんですよ。なあ、そうだろ!」と、隣の小柄な青年に同意を求めた。東京近郊で公務員をやっているというその青年も「ええ、本当にすごいですね、財施の効果は」と答えた。

そうこうしているうちに勉強会が始まった。信徒が続々と集まり、私も受付で三百円の布施を払って前のほうに座る。狭い部屋は百人ぐらいの信徒でひしめいている。

彼らがボソボソ話すのがどこからともなく聞こえてくる。

「昔は二百人は集まったのにね」

「ビラ配りだけでも七十人も集まったそうですよ」

「また、昔みたいになりませんかねえ」

プログラムが始まる。またビデオで尊師の説法を聞く。池の水のたとえから、悪いデータを取り入れないようにしようという内容。

次に三人の大師からそれぞれ三十分ずつ話を聞く。まずR大師。

「最近、マスコミのオウム批判の傾向が変わってきました。かつての『サンデー毎日』による批判は、信徒の親たちの協力によるものでした。ところが先日の『週刊文春』の記事などは脱会者の証言によるものになっています。先ほどの尊師の説法にもありましたように、そのような悪いデータは取り入れないことが第一です」

それを引き継ぐようにO大師。

「そんなデータを取り入れたところで、修行にはなんのプラスにもなりません」

そしてS大師。

「オウムから必死の思いで脱出したという信徒、私はその子を知っています。でも必死どころか『じゃあね』なんてニコニコしながら去っていったんですよ」

マスコミ批判に終始した感はあったが、

ともかく話は終わり、私たち新参者が次々に自己紹介をする。「わあ、大勢いらっしゃったのね」と、感激の声があがる。

そうして勉強会が終わると、有志だけが残って「ボディサットバの会」。つまりビラまきと街頭パフォーマンスについての打ち合わせ。「極智新聞」という布教ビラを各自渡されて閉会となった。近所の家のポストとかにドンドン入れてください、ということだった。

1. 尊師，尊師，尊師尊師尊師，麻原尊師
尊師，尊師，尊師尊師尊師，麻原尊師
日本の尊師，世界の尊師，地球の尊師，尊師，尊師
光を放ち，今立ち上がる
若きエースに，帰依しよう
ぼくらの日本を，守るために
尊師の力が必要だ
尊師，尊師，麻原尊師

2. ……尊師尊師，麻原尊師

オウム真理教の歌詞カード

「彰晃マーチ」が「尊師マーチ」に改められたオウムのソング・ブック

その姉妹は私の鼻水を見て喜んだ

○月×日

二回目の勉強会。最後に「じゃあ、歌の練習でもしておきましょうか」と、オウムの街頭パフォーマンスで歌われる歌の歌詞カードが配られた。

選挙中に有名になった、例の「ショーコー、ショーコー、ショコショコショーコー」という歌詞の「彰晃マーチ」は「尊師マーチ」に変わるということだった。「尊敬すべき尊師の名を気軽に呼び捨てにするのは、おかしいじゃないか、というクレームがついたからです」という説明があり、みんなで合唱してお開きになった。

○月×日

「明日、十一時から浄化法の講習会があり

ますが、参加される方はいますか」
昨日の勉強会の最後に大師が挙手をさせた。私はたんにヒマだったから、わけもわからず、とりあえず手をあげた。参加者には、今から講習会まで、いっさい食事をしないように、との指示が出ている。どういうことだろう。
午前十一時、空きっ腹で本部に着く。入ってみて驚いた。いつもの畳敷きの部屋がビニールシートですっぽり覆われていて、ところどころにポリバケツが置いてある。何が始まるのかと不安になる。
講習会が始まった。参加者は十数名。まず数人のシッシャが手本を見せる。
コーラかなにかの一・五リットルびんにつまった塩水を豪快に飲み干して、それをゲボゲボ吐き出すガージャ・カラニー、数メートルの長さの布をズルズルと胃の中に入れて腹筋を動かすダウティ、ヤカンで片方の鼻の穴から水を流し込んで、もう一方から出すジャーラ・ネーティ、鼻の穴から口に通したひもをゴシゴシしごくネーティ・カルマ。こうしてからだを浄化するのだが、見た目には、まるで奇人変人大会のような異様さだ。私はつい、ゲゲっと叫んでしまいそうになったが、他の信徒たちは声もたてずに真剣に実演を見つめている。
これはひとごとではない。こんどは我われ受講生がやる番だ。始め、の合図でガージャ・カラニーにかかる。みんな、塩水をガブガブ飲んでいる。私はこの期に及んでまだ信じがたい思いでいたので、「本当にやるんですか?」と間の抜けた質問をしてしまった。腹がどうかしてしまうんじゃないかと心配だったのだ。
とにかく挑戦してみたが、ひとびん飲めなかった。ゲボゲボ吐くときには、鼻水も吹き出してグチョグチョになる。みっともないが食べ物が混じっていないだけましだ。食事をしないように注意されたのはこのためだったのか、と納得する。うしろのほうでうら若い女性までが、なりふりかまわずゲーゲーやっている。
続いてジャーラ・ネーティをやる。ツーンとしたがこれは比較的楽だった。
最後にネーティ・カルマである。ひもが鼻の奥の粘膜に触れるだけでものすごく痛いのに、これを口まで通し、さらにしごくなんて、考えただけでも涙が出そうだ。これだけはかんべん願いたいとおじけづいていたら、二十歳前後と思われる姉妹が私を応援してくれた。
「そうそう、がんばって。ほら、粘液が出てきた」
彼女たちは、あとからあとから出てくる私の鼻水を見て嬉しそうにしている。
「大丈夫、大丈夫。もっとギュっと。私なんか初めてのとき血まで出てきたけど平気だったんだから」
小柄ながら意外に気丈な女性だ。彼女にはかなわない。
最後に、「毎日やってくださいね」と勧められたが、思わず「いえ、もう二度と…」(やりたくないです)と言いかけてしまった。シッシャの人も、無理もないな、という顔をしていた。

オウムの衆院選落選は何者かの陰謀？

○月×日

三回目の勉強会。成就した人が富士の本部からやって来て、その体験談を聞いた。最近、成就者が大量に出るようになった。かつては数人ずつだった成就者が、今は数十人ずつ出るようになっている。

「富士のほうではもう、成就者じゃない人を探すほうがたいへんなぐらいです。だから、出家してしまえば必ず成就できるものと考えていいんじゃないですか」

それは修行のシステムが進歩したからだそうで、以前のような「独房修行」はやらなくなったとのこと。それから、今までシッシャと呼んでいた出家者のことは、これからシャモンと呼ぶことになった、という報告があった。オウムはよく変更がある。

次にS大師の話。週刊誌などが、オウムがダライ・ラマを利用していると騒いでいるが、ダライ・ラマはそのような報道に憤慨しているとのこと。そして、オウムとの親密な関係はこれからも変わらない、と書かれたダライ・ラマからの手紙のコピーも示された。私には遠くてよく見えなかった。

「それを公表すれば、マスコミは沈黙するんじゃないですか」と信徒が発言すると、

「それにはタイミングが肝心です。そのあたりは、ただ今検討中です」と大師は答えた。

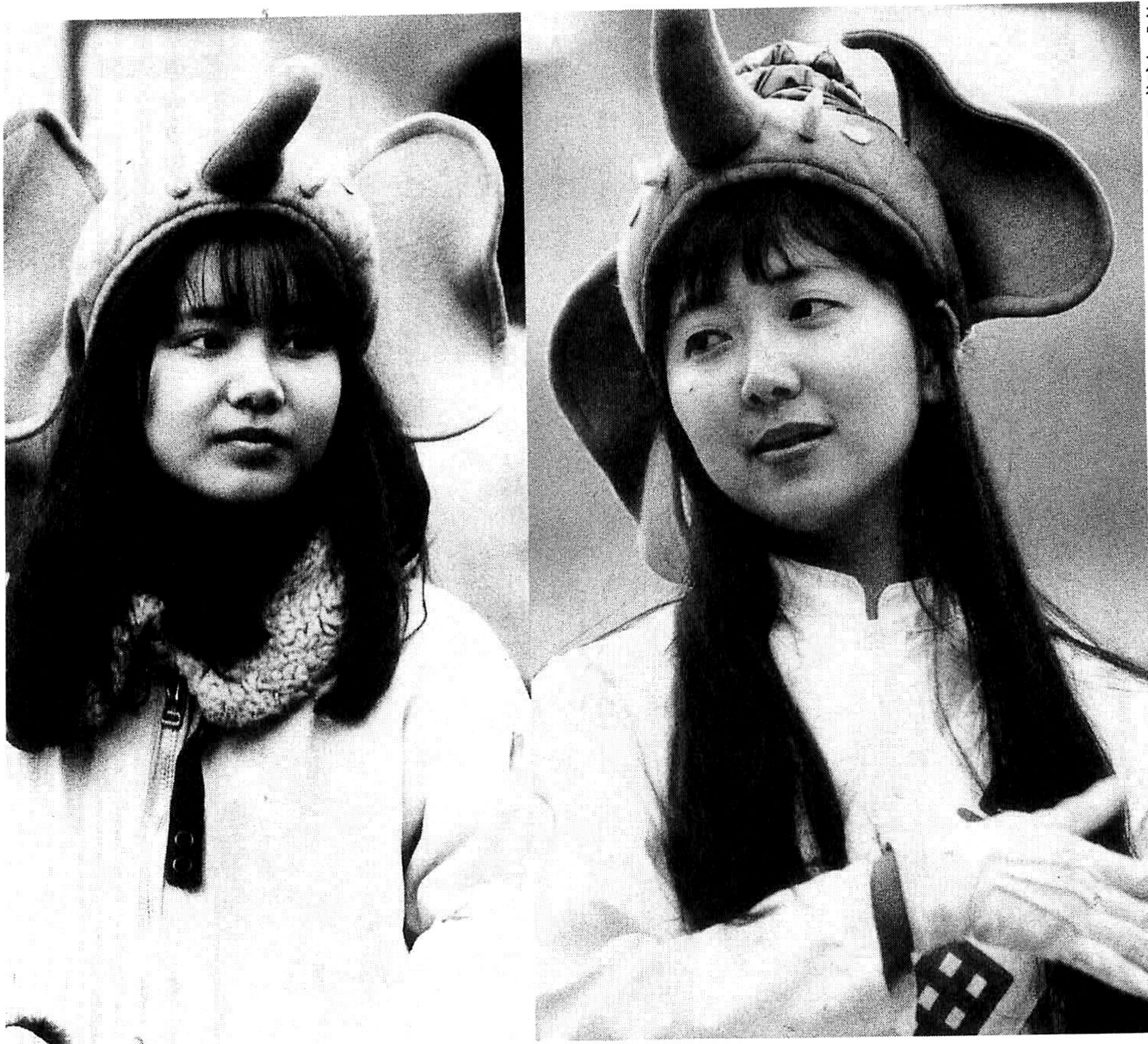
○月×日

「ポアの集い」の当日。松原の東京本部と並ぶ首都圏の拠点のひとつ、杉並道場へ。西武新宿線井荻駅から徒歩で十五分ほど。道に迷ったりして二十分遅れて到着した。あわてて二階の会場に駆け上がると、受付の女性から「静かに。もう始まってますから」と注意されてしまった。受付に千円の布施を払い、プラスチックのコップに入った「甘露水」と、靴を入れるためのビニール袋をもらう。

会場は東京本部よりもはるかに広く、三百人ほど集まったなかには、今まで会った大師やシッシャたちの顔も見えた（年齢は二十歳前後、男女比率では男のほうが多い）。オウムが大きな勢力なんだと感じたのはこのときが初めてだ。

なんとかあいているところを探して腰を下ろして甘露水を飲む。味は、私には普通の水に感じられた。すでに前では二番目に解脱なさったケイマ大師が説法を始めている。澄んだ声で話すケイマ大師は写真で見たとおりの美人だった。

「今、盛んにマスコミによるオウム叩きが行われていますが、真理を誹謗中傷した彼らは、たいへんな悪業を積んだことになります。彼らが行くのは無間地獄というところです。逆に真理に貢献した者はよい来世に生まれ変わるでしょう。たとえば道場ではニワトリを飼っていますが、その卵はなんと、尊師がおめしあがりになられています（未受精卵なので殺生にはならないそうだ）。そんな善行をなしているニワトリは、すばらしい転生をするぞ、と尊師はおっし

オウム信徒には、なぜか美女、美少女が多い

やっています」

次の質疑応答。質問の内容は、教義のなかの矛盾点について等、どれも難解で、私にはまったくわからなかったが、オウムには珍しい、背広にネクタイの男性のこんな質問だけは印象に残っている。

「先日の衆議院議員選挙で、麻原尊師は本当は当選するだけの票を集めていたのに、何者かの陰謀によって得票数が少なく数えられてしまったと『極智新聞』には書いてありましたが、それが本当なら日本の選挙史上の大事件ですよ。裁判には訴えないんですか」

ケイマ大師は答える。

「いざ裁判となると立証するのがたいへんですからね。時間も労力も無駄になるからあえてしないのです。それに尊師は今、修行の最中ですから」

「まったくそのとおりですね」質問者は納得した。

その後、シンセサイザーによるアストラル音楽の演奏を聞いていると、司会者が言

う。
「今、オウムではオーケストラを組もうと計画しています。音楽が好きな人は参加してください。オーケストラを持つ宗教団体はオウムが初めてとなるでしょう」
「ポアの集い」はこうして終了した。後はまた残った有志による「ボディサットバの会」だ。二人が前に出てきて体験を発表する。バクティがいかに自らの修行の促進に効果があるか、という内容。尊師の著作を宣伝するポスターの束を渡されて帰る。町中に貼りまくるように、とのこと。

○月×日

友人と電話で話しているうちにポスターの話になった。彼は私がオウムに入っていることを知らない。
「今日、いろんなところで麻原彰晃のポスター見たんだけど、あれってちゃんと許可とってるのかなあ」
「えっ、ポスター貼るのって許可いるの?」
彼の話だと、建物の壁に貼るには所有者の許可がいるし、電柱には絶対何も貼ってはいけないんだそうだ。でも、このポスターを配るときにはそんなこと何も言ってなかったなあ。

徹夜の超能力修行は本当に厳しかった

○月×日

せっかく入信したのに入信料しか払っていないので修行が受けられない。かといって教材を使って自分でやるのも心もとない。やっぱり何か修行コースをとってみようと思い、「超能力セミナー」に申し込んだ。

午後十一時から翌朝五時まで、オールナイトで一回二万五千円。高いからあまり人は来ないのだろうと思っていたが、行くと三十人以上も集まっていた。

前半は、腹とのどと肛門に力を入れて各チャクラに意識を集中しながら、息をできるだけ長く止める練習である。足は痛いし、息は苦しい。

「この苦しみによってカルマが切れていくんです。地獄の苦しみに比べたらこんなのなんでもありません」

と指導の大師が言う。肛門に力を入れるのはとくに難しい。

「背筋をしっかり伸ばして!」「足が崩れてきていますよ!」大師が巡回し、注意する。組んだ足が痛い。眠気も襲ってくる。逃げ出したいほど苦しい。ひとりで修行するとついつい自分に甘くなってしまうが、ここでは逃げられない。

後半は各チャクラに気を集中させて、ひたすらマントラを唱える。

「オーム、ブフー」「オーム、ブハー」

しだいに唱えるスピードが増し、声も高くなっていく……。

最後に軽く瞑想して終了。疲れたー。ぐったりして時計を見ると朝の四時を過ぎている。

「みなさん、いかがでしたか。初めてでたいへんだったとは思いますが、これでもまだ初歩の修行でして、出家している人たちの修行のつらさはこの比ではありません。でも、何かしら神秘体験をつかめば、ずっと修行が楽になりますよ」

これよりもつらい修行があるのか……。

大師のお話を聞きながら、差し入れの朝食(もちろん菜食)を食べていたら、窓の外はすでに明るくなっている。

お金なんて紙切れ同然になる、と言われた

○月×日

道で偶然にオウムの人とばったり出会う。本部で私の顔を見たことがあるので、声をかけてきたのだ。

「菜食やってますか?」

オウムは殺生を禁じているので、肉や魚は食べてはならないのだが、私はどうも徹底できずにいたので、他の人はどうなのか、聞いてみたかったのだ。

「最初はやっぱりできないですね。でも僕みたいに慣れちゃえばどうってことないですよ」

彼は大学生で、もうすぐ就職を控えているのだそうだ。

「……こんなことをやっていられるのも、学生のうちだけだなあ……」

と、独り言のようにつぶやいた彼の言葉が、別れて電車に乗った後も忘れられな

かった。

○月×日

恒例の勉強会の日なので東京本部に行ったが、一階も二階もドアが閉まっていて入れない。窓からのぞくと中は真っ暗。

マスコミの追及が厳しくなって夜逃げでもしたのだろうか？と心配になる。そこへ信徒がひとりやってきた。

「あれ？　今日は休みなんですか」

「ええ、そうらしいですね。連絡さえないなんておかしいですねえ」

「残念だな。せっかく半年ぶりに来たのに……」

「えっ？　どうして!?　悪いデータ（ここでは週刊誌のオウム批判の記事を指す）でも入れたんですか？」

「そう。あれほど騒がれているんだからしかたないでしょう。あなたよくこんな時期に入信しましたねえ。私、家族には信徒だってこと黙ってたんですが、オウムからの郵便物でばれちゃって……」

「みんな苦労してるんですね」

「そうですよ。うちでネーティ（浄化法）やってるだけで家族から変態扱い（笑）」

富士の総本部に電話で問い合わせてみたら、セミナーをやっているために今月は休みだということだった。それにしても、せめてドアに貼り紙するとかしてくれればいいのに……。いったいどうしたっていうのだろう。

○月×日

寝坊して、「ポアの集い」に行きそびれてしまった。何が話されたのか知りたくて、東京本部に顔を出してみた。もしかしたらこのあいだ急に勉強会が中止になったわけが聞けたかもしれないからだ。

本部にいた信徒と、修行の話になる。私が、超能力セミナーに出てみたけど、つらいだけで、とても神秘体験など得られそうにないなあ、と言うと、

「でもオウムの修行は効果あるはずですよ。阿含宗で十年近く修行して何も得られなかった人が、オウムに来たらいきなり体験しちゃった、といいますからね。……でも不思議なのは、それほどすごい体験をしたような人さえも、マスコミの報道につまずいて去っていってしまうことなんですよ」

「あの、ところで、このあいだ、勉強会に来てみたらドアが閉まってて入れなかったんですが……」

「そうそう、僕のとこにも連絡がなくてね（苦笑）。でも、新聞見なかったの？」

「いえ、何があったんですか？」

「あの日、オウムは石垣島でセミナー開いてたらしいよ。捏造記事かと思って写真見てみると、あれ、これ○○君じゃないかって驚いたよ。僕らにさえ極秘で、石垣島なんて地の果てまでいくぐらいだから、よっぽど重大なセミナーなんだろうけど」

「僕らが知らないのに、なんでマスコミには見つかっちゃうんですかね」

「尊師がおっしゃるように、きっとスパイがいるんだよ。尊師ご自身はもう誰がスパイなのか御存知なんだろうけど。かといっ

て追放でもしたら、また〝まじめな信徒なのに！〟〝人権問題だ！〟とか騒ぎ立てられてますますマスコミの思うつぼだからね」
「なんで極秘なんですかね」
「タントラ（秘儀）だからはっきりとはわからないけど、たいへんな事態になってることは確かだよ。みんな、会社や学校、今まで築き上げてきた俗世のことは全部捨てて、どんどん出家してるみたいだよ」
彼は、おいてきぼりにされることに焦っているかのように、急に深刻な表情でまくしたてる。
「とりあえず君も、せめて荷物ぐらいはまとめといたほうがいいよ。それから、毎日本部に連絡をとったほうがいい。情勢は目まぐるしく変わっているんだ」
別の信徒も口をはさむ。
「僕も今すぐにも出家しなければならないんだが、コンピュータ関係の仕事を持ってるから板挟みになって……わかってはいるんですけどね」
「そんなこと言ってる場合じゃないよ。お金なんかもう紙切れ同然になる時が目前に迫ってるんだから」
切迫した危機を感じさせるやりとりだった。今までのオウムののどかだった雰囲気がウソのようだ。いったいどうしたっていうんだ？

破滅が来るのか?!

○月×日

ここ数日の、信徒たちのあいだに高まる危機感の正体は何なのか。
オウムの予言にある二〇〇三年の世界核戦争の時期が早まったのだろうか。私たち、末端の信徒には極秘で行われた石垣島行きが、その滅亡への策だとすると、出家していない私たちは救済から見捨てられてしまうのだろうか。考え始めると不安になる。とにかく、今日の勉強会で、大師から直接、お話をうかがおう。
そんなことを思いながら、いつになく緊張して本部を訪れた。ドアを開けるとちょうど尊師のビデオ説法をみんなで見ている最中。何か新しい決定が語られているのかと思ったら、それは前に見たビデオと同じものだった。ビデオの横には、尊師のかわいいイラスト入りの風船がいくつかぶら下がっている。そこは再び、いつもの楽しいオウムに戻っていたのである。
ビデオ説法に続く、S大師のお話も六波羅蜜についてのもので、終末については何も語られない。次は、クンバカの練習。これは何分間も息を止める修行。みんなで挑戦したが、私も含めた大半が三分間前後でダウン。二分以内でギブアップした者も数人。四分以上続けた人たちは、終わりのほうで苦しみのあまり手足をバタバタさせていたのがおかしかった。
その後は大師から国際情勢のお話。米ソ対立の解消によってジャパン・バッシングが始まるだろう。そのとき、アメリカは身勝手な国だから何をしでかすかわからない、と言う。だが、具体的に今日明日に必ず破局

オウムのパンフレットより。これによれば、一九九三年に日本再軍備、一九九九年から二〇〇三年までに確実に核戦争が起きるという。

仏陀の国、日本こそ救済の砦だ

次に掲載します説法は、尊師の著書『イニシエーション』より抜粋、編集したもので、尊師とオウム真理教の世界救済について説かれたものです。核戦争を回避し、世界をシャンバラのような聖地にするにはどうしたらよいのか、そして、その中で、我々日本人はどういった役割を果たすべきなのかを明らかにしていきます。

確実に核戦争だ！

これから先世界がどうなるか、私達は一体どんな生き方をしたらいいか――ということにつ
て話したいと思う。
まず、これから日本がたどる道に目を向けてみようか。日本は今まで豊かな生活をしてきた
それは、戦中・戦後しばらくの間の苦しい生活がもたらしたものだ。苦しい生活がもたらし
いうのは、日本人が苦しい生活をすることによって功徳を積んだ。その積んだ功徳によって
…という意味だよ。…それを享受していたら今度は功徳をす

が来るということではないらしい。私の焦りは杞憂だったわけだ。しかし信徒のあいだに不安感が高まっているのは事実で、ここ最近、出家希望者が急激に増えたそうだ。

この日も、新しく出家したシャモンの自己紹介があった。なかでも高校生ぐらいの男の子の話が印象に残った。彼はオウムの本を親に読ませて、出家の許可を勝ち取った（未成年の出家には親の許可が必要）。親は最初はためらって、二転三転したが、最終的には、出家に反対する学校の教師を、「息子がやると言ってるんだから、いいじゃありませんか」と説き伏せてしまったほどの賛同者になった、とのこと。彼は最後まで励ましてくれた大師さまたちにしきりに礼を述べていた。

最後にみんなで歌の練習をして勉強会は何事もなく幕を閉じた。

ヴァジラヤーナ、ヴァジラーヤーナ……
私は歩く、私は進む
真に勇者の道なんだ
ヴァジラヤーナ
あなたも進もう、私も進もう
この道は正しい世界をつくるんだ

歌詞こそ勇ましいものの、メロディは明るいトロピカル調。どうしていつもこう軽いノリになってしまうのか、と思わず苦笑する。

オウムは狂気ではなかった！

入信体験をふりかえって

入信してわずか数カ月の体験で、オウムという教団についてまとめることに、私自身、いささか困難を感じている。

その理由は、第一に、私は麻原尊師自身に、ついにいちどもお会いすることができなかったし、富士の総本部に行く機会も与えられなかったこと。第二に、私はたんなる末端の在家信徒にすぎなかったこと。第三に、ほかの信徒の家庭環境や私生活をうかがい知ることができなかったことにある。

そのため、私の視野には自ずから限界がある。したがって、ここで述べるのは、あくまで私の乏しい経験の範囲で得られた感想にすぎない。あらかじめ了承願いたい。

ただ、今あげた三つの理由は、オウムという教団自体の体質と関連している。尊師の姿を直接拝むことがかなわなかったのは、尊師がこの数カ月間いちども東京本部に現れなかったからだ。また、富士の総本部に行くのを熱心に勧められなかったのは、オウムの総本部は、他の宗教のような「聖地」ではなく、出家の修行道場という性格だからだろう。

ことさらに私に出家を迫ることもなかった。マスコミが問題にしているのは主に出家者についてだが、私には、出家は信徒自身の意志でのみ決定されているように思えた。

そして、信徒たちの個人的背景を知り得なかったのは、オウムの信徒どうしの関係に原因がある。いちどでも勧誘された人ならわかるだろうが、新興宗教の多くは近所の寄り合い的共同体のなかに信者の生活のすべてをからめとろうとする。活動に誘い合うことはもちろん、個人的な悩みごとの相談に乗ったり、ときには生活面で援助したりして、恩を売り、教養そのものではなく、義理や人情のしがらみによってこちらの内面に踏み込んでくる。しかし、オウムにはその部分が希薄だ。事実、入信してから今まで、私の家にはいちどもオウム、または信徒からの電話はなかった。ずっと顔を見せなかった信徒が数カ月ぶりに本部を訪れたときも、大師は「どうしたんですか、みんな心配してたのに。来ないときは連絡ぐらいしてくださいよ」などと、言いはしなかった。大師はなんと「まあ、ひさしぶりねえ」と、無邪気な笑顔で迎えたのだ、彼を責めたりはせずに。

だからといって人間関係がクールというわけではない。気どりのない、ざっくばらんな雰囲気である。東南アジアなどにある、日本人の貧乏旅行者がたまる安宿の、和気あいあいとした感じだと言えばわかるだろ

うか。擦り切れた畳、ぶっきらぼうに置いてある炊飯器。東京本部はオフィスでもホールでもない。まさに家庭なのである。

また、会話の最中、世俗的な話題で盛り上がる、といったこともあまりない。そういった俗っぽいことは、「修行に費やすべきエネルギーのロスになる」と彼らは言う。

むしろ、私の目にはオウムは非常に禁欲的な団体に映った。真面目で真剣なのである。たしかに布教活動においては、超能力の獲得、病気治し、といった現世利益を前面に出してはいるが、それらは入信後、あくまで修行の副産物になってしまう。信徒はそういった世俗的価値観への執着から解放されることを願い、崇高なる目標に向かって精進していた。オカルト・ブームに乗った超能力マニアの集まり、というイメージは当たっていないように思う。

だから、何かおどろおどろしいオカルティズムを期待して興味本位で入信するならば、あまりの堅実さに失望してしまうだろう。

私の知る限りでは、オウムの入信者には、まずオウムの本を書店で買うことから始まり、長いあいだ本を読み続けて迷った末、やっと意を決して本部に電話する、というパターンが多かった。つまり、オウムは自分の意志で入ってきた者だけを受け入れ、また去る者は追わない。事実、私は「真理の集い（入信ガイダンス）」を訪問した人が入信を断わると、あっさり帰してしまった現場を見ている。オウムから必死で脱出した、という週刊誌の記事はオーバーではないだろうか。

知り合いに強引に誘われて、しかたなしに入ってしまったという信徒には会わなかったし、有名な街路での布教活動にしても、たんにビラやパンフを配る宣伝行為だけで、通行人を勧誘することはないようだ。また、私自身、布教活動や奉仕を強いられたことも催促されたこともなかった。

もっとも、こうした押しの弱さは教勢拡大のためには致命傷かもしれない。信仰宗教に限らず、組織にはやはりあるていどの階層構造が必要なのだが、オウムにはそれが感じられない。上意下達的指揮系統も不完全だ。それは、大師といえど三十歳に満たない人が多く、一般信徒との間に年齢の差がないのも原因だろう。また、勧誘者が新入信者の親代わりになってめんどうを見るという制度もなく、構成員の管理をするための班編成もない。ようするに責任の所在がはっきりしないのである。

そのため、入信者は受動的なだけでは何も与えられないが、積極的に参加すれば、すぐに布教活動などにおいて意見を採用される。象の顔をしたガネーシャ帽、彰晃人形、彰晃マーチなど、次から次へと繰り出される奇想天外なアイディアは、そうした民主的運営の成果だ。

度重なる教団内用語などの変更からもわかるように、オウムはいまだ試行錯誤の過程にある。しかし、今のところは、マスコミが仰々しく騒ぐようなものではなく、実にこじんまりとした団体だ、と言えるだろう。

オウム真理教とは何か…………分析編

オウム真理教はディズニーランドである！

宗教学者

島田裕巳

教祖の苦難を強調しない。勧誘をしない。私生活を拘束しない。ピラミッド型ヒエラルキーがない。死の匂いがしない……。宗教団体に不可欠なはずの要素の多くを欠いた謎の教団オウム。それは、麻原彰晃という空虚な中心の周りに作られたコドモの楽園だったのだ！

オウム真理教は、センセーショナルな形で世間に登場した。『サンデー毎日』一九八九年十月十五日号は、「オウム真理教の狂気」と題して告発キャンペーンを開始した。『サンデー毎日』によれば、オウム真理教に娘や息子を奪われたと訴える親たちの声が多数上っており、この教団は子どもに数十万円の布施を強制したり、教祖の生血を飲ませたりする「狂気」の集団だというのだ。「イエスの方舟」の問題が起きたときには、方舟を擁護する側にまわった『サンデー毎日』が、今回は宗教を批判する姿勢を示したことでも注目されたが、『サンデー毎日』は、見出しのなかでも「これは『イエスの方舟』とは違う」と念をおしていた。

『サンデー毎日』の告発キャンペーンは二カ月に及んだが、オウム真理教を追いつめるまでには至らなかった。ところが十一月の末に、「オウム真理教被害者の会」を担当していた坂本堤弁護士一家が十一月四日未明に横浜の家から忽然と姿を消していた事件が公になり、部屋から「プルシャ」と呼ばれるオウム真理教のバッジが発見されたことから、事件とオウム真理教との関係が取り沙汰されることとなった。今度は週刊誌ばかりでなく、テレビも競って取材合戦を行い、オウム真理教の教祖や幹部がテレビに出演して事件との関連を否定したりもした。しかし、失踪事件の手掛りはほとんどなく、オウム真理教との関連をうかがわせる証拠はバッジ以外にいっさい発見されなかった。

麻原彰晃が超能力者になる過程を描くマンガ『あなたもなれるかも?／未来を開く転輪聖王』より。表紙は映画『スターウォーズ／ジェダイの復讐』のポスターのパロディ。

オウムは時代の子

こうして、オウム真理教という宗教教団の名前は、マスコミを通して一躍世間の知るところとなった。ただし、マスコミ側もこぞってオウム真理教を批判したわけではなく、むしろ教団側を擁護する側にまわるものもあった。たとえば、『週刊SPA!』は、十二月十六日号でオウム真理教の教祖を宗教学者の中沢新一と対談させ、両者の意気投合ぶりを伝えているし、『女性セブン』（十二月二十一日号）は、教祖の妻にインタビューを行い、オウム真理教に好意的な誌面作りをした。坂本弁護士一家の安否が気遣われるなか、オウム真理教に対する評価は揺れ動いていた。

さらに、年が明けてもオウム真理教についての話題は尽きなかった。衆議院選挙の折に、彼らは真理党を結成して、教祖をはじめとする二十数名の候補者を擁立した。しかし、話題を呼んだのはオウム真理教が立候補したという事実よりも、そのユニーク(!?)な選挙活動によるところが大きかった。選挙公示前の一月二十七日、教祖の顔をかたどったお面を被った二百名の信者が中野区の杉山公園を出発して、「消費税廃止」といった真理党の政策を記したプラカードを掲げて行進した。その後、このお面は至るところに登場した。また、教祖が自作自演したキャンペーン・ソング（お世辞にもうまいとは言えなかった）を選挙カーで流したりするなど、彼らのパフォーマンスは何かと世間の注目を集めることとなった。

近年では、オカルトや超能力を売り物にした、いわゆる「新・新宗教」が若者の間で信者を増やしてきたとされている。オウム真理教も、そういった「新・新宗教」のひとつと見ることはできよう。いつの時代にも、新しく生まれた宗教は、世間からいかがわしいものと見なされ、好奇の目にさらされることになる。『サンデー毎日』による告発キャンペーンが始まったとき、あるいは坂本弁護士の事件が公になったときに、事件を取り上げたマスコミばかりでなく、一般の人たちも、やがてはオウム真理教の「狂気」を証明するような事実が続々と明るみに出されるものと予測したことであろう。ところがその予測は的中しなかった。オウム真理教を、狂気の集団と断定するだけの証拠は見出されなかった。マスコミも、目立った動きを示したときにしかオウム真理教を取り上げなくなってきた。

しかし、オウム真理教が狂気の集団でないとしたら、それはどういった集団なのであろうか。その内容を見ていくと、いろいろと興味深い事実が浮かび上がってくる。彼らは表面的には特異な宗教に見えるが、やはり時代の子としての側面を持っている。オウム真理教について考えることによって、私たちは新・新宗教ブームの背景を探り、さらには若者たちの置かれた状況を知ることができるのだ。

「しょうちゃん」と麻原彰晃

宗教について考えようとする際には、その宗教をおこした教祖と呼ばれる存在について見ていく必要がある。オウム真理教において教祖に当たるのが、信者たちからは「先生」あるいは「尊師」と呼ばれる麻原彰晃という人物である。彼は、一九八六年にヒマラヤで悟りを開いた、今世紀最後の、そして日本でただひとりの「最終解脱者」であるとされている。

麻原尊師の宗教者としての歩みは、『あなたもなれるかも？　未来を開く転輪聖王』という全二巻のパンフレットに描かれている。おもしろいことに、このパンフレットはストーリー漫画になっている。転輪聖王とは、仏教の釈迦の伝説に由来する。釈迦が生まれたときには、将来悟りを開いて仏陀になるか、そうでなければ世界の支配者である転輪聖王になるという予言が下された。このパンフレットは、衆議院選挙の時に配られたもので、麻原尊師は自らを釈迦になぞらえていることになる。

漫画では、尊師の少年時代からの歩みが描かれる。主人公である麻原彰晃こと「しょうちゃん」は、学校では勉強のできない劣等生で、アルバイトをしても失敗ばかりしている。おまけに失恋して、大学受験にも失敗する。そして、浪人生活三年目を迎えるが、合格の見込みはない。それでも空想癖のある「しょうちゃん」は、頭の中で自分の成功を夢見ている。自分を超えたいという願いを持ち続けている。

そんな「しょうちゃん」が、ある時神秘な体験をする。「幽体離脱」の状態になって、インドの神であるシヴァ神から、特別な力を授けるから修行するようにと申し渡されたのだ。これが彼の宗教家としての出発点となる。彼は自己流で修行を開始し、本を頼りに試行錯誤を繰り返す。そして、ヨーガの聖典である『ヨーガスートラ』に出会い、ヨーガ以外に自分の目標を達成してくれる方法はないと確信して、ヨーガに没頭する。やがて修行の効果が上がり、彼は念願通りに超能力を獲得することとなる。

しかし、空中浮揚やテレポーテーションといったひと通りの超能力を身につけた彼は、それでも満たされないものがあることに気づく。そんな折、高校時代に彼をふった女友達が自殺しかけているのを透視能力で感知して救い、自分の獲得した超能力をすべての人間に伝えていけば、高い満足や幸福をもたらすことができると確信する。さらに、瞑想のなかに現れたヒマラヤに住むグルによって、インドへと呼び寄せられる。実はそれ以前から、日本が水によって滅んでいくというヴィジョンを彼は繰り返し見ており、それをインドの聖者に会って確かめたいと感じていたのだ。

インドの聖者は、彼のヴィジョンの正しさを保証する。そして、後三十日間修行をすれば「最終解脱」するだろうと予言する。

そのためには「死の体験」をしなければならない。修行に最適な場所はヒマラヤである。いったん日本に帰った彼は、予定されていた仕事をこなし、単身でヒマラヤへ向かう。そして、予言通りに最終解脱するが、そのときにすばらしいパワーが発揮され、日本にいる弟子たちもそのパワーを感知して、尊師が最終解脱したことを知る。シヴァ神も、「マハー・グル・アサハラ」（偉大なる尊師麻原）と祝福する。こうして彼は最終解脱者となったのだ。

尊師の言葉はアニメの台詞

尊師は、この解脱の体験にもとづいて、すべては心の現れであるとし、どういった心が優位に立つかによって、現象界の「質」が決定されると説くようになった。そして、優れた心を持つ三万人の解脱者を出す計画を立てる。その第一号が、一番弟子のケイマ大師である。さらに、現在ではノーベル平和賞の受賞者であり、チベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマとの出会いによって、堕落した日本の仏教を再生する使命を自覚することになる。

尊師の救済計画は、「ロータス・ヴィレッジ構想」と名づけられているが、これは未来学者アルビン・トフラーがそのベストセラーである『第三の波』のなかで提起した「グローバル・ヴィレッジ」を彷彿とさせる。漫画のなかで、尊師はこの計画を次のように説明している。

「まずこの人間の世界に生を受けたものが真理の流れに入り、真理の教えにのっとった小学校、中学校、高校できたら大学まであって、真理の実践をしながら社会生活を送っていくと。そして最終的には死の瞬間にポアという特殊な技法を使って、天界に行きたい人は天界に行くと。また人間界に生まれ変わって同じように真理を実践したい人はそうすると。あるいは涅槃したい人は涅槃するというようなシステムができればなあというね、私の一つの構想です。この計画によって闘争のない平和な世界、人が人を裏切らない平和な空間、本当の意味での愛にあふれた静かな空間が訪れるだろうと考えているんだね」

漫画のせいなのか、この尊師の言葉は子ども向けのアニメやテレビ・ドラマの主人公たちが口にする台詞を思わせるが、彼らの現状認識や活動方針もどちらかと言えば漫画の世界に近い。たとえば、彼らは終末に対する危機意識を強調し、富士宮に本部を作ったのも、予想される富士山の噴火を遅らせるための手段だと説明している。衆議院選挙への出馬も、宗教的な救済だけでは迫りくる終末のときに間に合わないという信者の要請に尊師が応えたからだというのだ。

ともかく、落ちこぼれの少年であった「しょうちゃん」は、麻原彰晃尊師として生まれ変わった。このパンフレットとは別に刊行されている『滅亡の日』というコミックでは、尊師はさらに偉大な宗教者として描かれている。このコミックには、ケイマ大師をはじめとする実在の信者たちも登

場し、尊師と一緒に「ヨハネの黙示録」に隠された秘密の予言を解明していくというストーリーが展開されている。その秘密の予言とは、世の終わりが近づきつつあり、オウム真理教に人類を救済する使命が期待されているというものであった。

松本智津夫としての半生

しかし、漫画に描かれた尊師の経歴は事実にもとづいているとは言えない。上之郷利昭がまとめたところによれば、「麻原彰晃は本名を松本智津夫という。昭和三十年、熊本県八代市の生まれで、三十四歳。同じく「オウム真理教」の幹部である妻と、まだ幼い子どもを含めた四人の女児がいる。

松本智津夫は生まれつき目が悪かった。左眼が見えず、右眼〇・三という視力。彼の顔がいつも目をつぶっているように見えるのは、そのためである。郷里では、小学校から高校まで県立盲学校に通った。生計を立てるために鍼灸師の資格を取り、上京後は鍼灸治療を行っていた。そのかたわら漢方に関心を持ち、昭和五十三年から五十五年頃には『漢方亜細亜堂薬局』を、五十六年には『BMA薬局』をそれぞれ経営。最初の薬局経営の時には、保険料六百七十万円を不正請求し、国から返還を求められている。また、『BMA薬局』時代の五十七年には薬事法違反に問われ、略式起訴処分を受けている」(『文藝春秋』九〇年二月号)

薬事法違反とは、ニセ薬を販売して四千万円を稼いだというもので、これは『サンデー毎日』の記事のなかで明らかにされた。教団の側も、問題があったということ自体は認めている。この経歴が事実だとしたら、麻原彰晃はいかがわしい宗教家のひとりであるということになる。少なくともパンフレットでは、この出来事にはいっさいふれられていない。

そもそも、オウム真理教が出している出版物にも、漫画と事実が違うことを示すものがある。真理党の政策を載せて選挙用に配られた『進化』と題されたパンフレットには、「写真が語る！　マルチ人間、麻原党首の生い立ちと素顔」として、いくつかのスナップ写真が紹介されている。五歳のときの写真に始まり、トラックを走っている写真には「陸上競技選手――エネルギッシュなスポーツマンだった」とある。他に、鍼灸師時代の七十六年に友好訪中団に加わったときのスナップ、それに真偽が問題になっている空中浮揚の写真やダライ・ラマと会見したときの写真が紹介されている。

ダライ・ラマとの会見については、その後ダライ・ラマが本当に麻原尊師に日本の仏教の再生という使命を託したのかどうかを調査するマスコミが出てきた。ダライ・ラマが滞在しているインドに赴いて、側近に尋ねたところ、ダライ・ラマと麻原尊師とが友好的な関係を結んでいることは認められたものの、オウム真理教の主張する会見の内容は全面的に否定された。

それはともかく、漫画との違いが明白なのは高校時代の写真である。漫画のなかの

「しょうちゃん」は普通高校に通っていたように描かれているが、「柔道二段――柔道部で活躍した高校時代」というキャプションのついた写真の柔道着の胸元には「熊盲」とはっきり記され、尊師が盲学校に通っていたという話を裏付けている。

ベンツに乗って登場した尊師。ロールスロイスを乗りまわすラジニーシ和尚のライフスタイルに影響されたものか

強調されない、教祖の苦難

一般に教祖の生涯は「神話」であり、必ずしも事実とは言えない事柄から成り立っている。教祖は信者にとって偉大な人物でなければならない。教祖の伝記が、事実にのみもとづいていなければならないとしたら、キリスト教の聖書も仏典も嘘の塊だということになる。外部の人間にとっては虚構(フィクション)であっても、信者にとっては真実（リアリティー）なのである。しかし、教祖の生涯が事実であるかどうかを探っていくことも必要だが、それを確かめたからと言ってその宗教が理解できるわけではない。むしろ、どういった形で神話が作られているのかを見ていくほうが重要な作業なのだ。

これまでの宗教団体であったら、教祖がいかに苦労を重ね、厳しい修行を経て、真理に到達したかが強調されたことであろう。そのパターンに従うなら、オウム真理教の場合にも、尊師の目が不自由であった点が強調できたはずだ。厳しい修行の結果、目が見えるようになると同時に心の目も開かれ、宗教者としての歩みを始めたというストーリーを作り上げることができる。信者はその物語に感動し、尊師に対する尊敬の念は高まるはずだ。

ところが、オウム真理教では、尊師が一般の若者と変わらない生活をしてきたことがむしろ強調されている。「しょうちゃん」はどこにでもいる。彼が宗教の世界に興味を持って近づいたのは、劣等感を克服するために超能力を獲得したいという現実的で世俗的な願いからだった。尊師は、あくまで信者たちに近い存在として描かれている。最終解脱した後でも、尊師は信者たちにとって近しい存在であることに変わりはない。

宗教者としての尊師のモデルとなっているのは、つい先日亡くなったインドの宗教家バグワン・シュリ(和尚)・ラジニーシであろう。オウム真理教の出版物は、バグワ

ンのものに似ている。尊師の説法のスタイルもかなり近い。信者たちが白いインド風の服装を身にまとっているのも、その影響ではないだろうか。

オウム真理教の世界では、イメージがすべてに先行している。尊師の姿にしても、漫画のほうが実際よりもよほど宗教家らしく見える。それは信者たちにも当てはまる。彼らにとって、自分たちの本当の姿は、現実の自分たちのなかにあるのではなく、漫画などに描かれたイメージのなかにあるのではないか。そうありたいと思う自分の姿をイメージのなかに投影することによって、現実の自分たちがその理想に近づいたと考えているのではないだろうか。尊師のダライ・ラマとの会見内容も、オウム真理教の信者たちの願望をそのまま事実に置き換えたもののように思われる。

ヨーガ学校から世界救済へ

オウム真理教では、新しく信者になった人間のために三つの修行のコース、ポア・コース、シッディ・コース、ヨーガタントラ・コースを用意している。ポア・コースは現世での幸福と、来世で高い世界に生まれ変わることを保証し、シッディ・コースをとれば空中浮揚やテレパシーなどの超能力を身につけられることになっている。また、ヨーガタントラ・コースを受けて、イニシエーションを果たせば、最低三年間で解脱できるとされている。

コースが三つに分かれているのは、オウム真理教がヨーガ・スクールから始まったことと関連があるのだろう。しかし、オウム真理教が宗教法人となり、宗教色を強めていくと、コースはヨーガタントラ・コースにほぼ一本化されるようになってきた。今、入信した場合には、自動的にヨーガタントラ・コースに入ることになる。

教団によれば、八八年と八九年の二年間で、「成就者」と呼ばれる解脱した人間は、五十二名に達したという。マスコミの報道で話題になった独房での修行も、解脱するために不可欠な道である。成就者の修行の体験は、教団の出版物にかなり詳しく記されている。また、全財産を教団に寄付する「極限までの布施」や、仕事をやめ、家庭を捨てて教団のために活動する、「出家」が勧められている。

『サンデー毎日』による告発キャンペーンも、元はといえばこういった多額の布施や出家に対する疑問に発していた。オウム真理教に「走った」子どもたちを取り返そうとする親たちの声がマスコミを動かしたのだ。親たちには子どもたちの行動が理解できない。親の側は、自分の子どもが悪徳宗教家にだまされて教団のなかに監禁されていると考えるが、出家した若者たちは自分がすばらしい信仰の道に入ったと考えている。宗教をめぐるこういった対立は珍しいことではない。尊師を最終解脱者として認めるか認めないかによって、子どもたちの

行動に対する評価は変わってくる。
では、若者たちはなぜオウム真理教の信者になったのであろうか。なぜ、麻原彰晃を最終解脱者と信じるようになったのだろうか。その鍵は、彼らが何のために衆議院選挙に出馬したかにある。

駆け引きや下心のない、正義と正論だけでオウムは選挙を戦った

オウム真理教の政治団体である真理党の政策は、衆議院選挙に候補を立てた他のどの政党よりも明確であった。与党の政策も野党の政策も、消費税是か否かを除けば、どこも似たりよったりで区別がつかなかった。その点、真理党の政策は単純明解で、政見放送を二度見ればすぐに理解できた。
まず、消費税の廃止を公約の第一に掲げていた。これは、他の野党と共通するが、代替財源案に真理党の特徴が表れていた。
彼らは、補助金の廃止や削減によって十一兆円の余剰金が生まれると主張していた。
彼らは現在の政治の腐敗が、政治家による票集めのための補助金のばらまきにあるとしていた。そして、補助金の削減による余剰金によって、消費税廃止の代替税源とするだけではなく、福祉を推進し、医療と教育の改革を実施すると訴え、さらに国民の権利拡充のために国民投票制を導入する、という政策を掲げていた。

コドモは建前を許さない

宗教団体に所属する一般の「泡沫候補」たちが、政見放送で奇っ怪な宗教論を展開するのと違って、真理党の候補者たちは、驚くほど生真面目に自分たちの政策を説明しようとしていた。しかも、自分の体験に

もとづいて自分の言葉で政策を訴えていた。尊師の偉大さに言及することはあっても、ことさら宗教的なメッセージを伝えようとはしていなかった。彼らは本気に見えた。周囲は売名行為として受け取ろうとするが、本人たちは真剣に政治への進出を考えていたようなのだ。

私たちは、オウム真理教の奇妙な行動にふれるたびに、その裏に何かが隠されていると考えてしまいがちだが、彼らの行動や主張はむしろ文字通りに受け取るべきではないだろうか。彼らは、表と裏のある世界を嫌い、純粋な世界を求めているのではないだろうか。補助金のばらまきによる政治家と選挙民の癒着を批判するのも、裏の部分での駆け引きを嫌悪するからだ。彼らは言葉（政策・公約）と行動（現実の政治）との間のずれを許せない。それは選挙のときのスローガンである「有言断行」に現れているし、漫画のなかで言われた「人が人を裏切らない平和な空間」の実現というヴィジョンにも通じていく。

そもそも、オウム真理教において強調される、出家という行為に、表と裏、建前と本音、理想と現実との乖離を嫌う心性が現れているのではないだろうか。出家した信者たちは、親子関係に問題があって家を出たのだとも言われるが、出家した人間の手記を見る限り、対立が深刻なものであるという印象を与えない。たとえば、ある信者は親子関係について、『シッシャの詩――限りなき幸福を求めて――』というパンフレットのなかで次のように述べている。

「私の親が『サンデー毎日』の中で親子間のトラブルはなかったと言っていますが、確かに表面的なものはなかったけれど、お互いの深い理解はなかったと思います。私はあけっぴろげの性格ではなく、だから親との争いも避けていただけでした。オウムが私の性格をねじ曲げたわけではなく、そのような私が親以上に麻原尊師を敬愛するようになったのです」

「イエスの方舟」のときに特徴的だった親子の深刻な葛藤は、オウム真理教の場合には見られない。信者の若者たちは、ただ表と裏があるような現実の社会の在り方を許せないだけなのだ。だから、現実の社会でうまく世渡りしていけと教える親たちの態度を容認できない。彼らの心はけっしてタフではない。繊細であり、現実との妥協を嫌う。そして、「しょうちゃん」のように現実よりも空想の世界を大切にする。空想の世界は穢れのない理想の世界であり、彼らは空想がそのまま受け入れられることを望んでいるのだ。

ひっくりかえったおもちゃ箱

オウム真理教の信者は、たわいのない子どもっぽい夢を見ている。彼らは、尊師のDNAが特別な成分でできていて、尊師の血を体内に取り入れれば、霊的なエネル

ギーが上昇すると、大真面目に信じている。だからこそ、百万円の布施を出してでも尊師の血を飲む「血のイニシエーション」を受けるのだ。超能力も、おどろくほど簡単な修行で身につけることができるという。信者たちは、彼らの夢や空想が、現実の社会からどう評価されるかに関心がない。同じような夢を見続けている仲間がいて、夢の価値を保証してくれる尊師がいれば、それで満足できるのだ。

ようするに、オウム真理教は子どもの集団なのだ。そういった見方をすれば、彼らの奇妙な振舞いも理解できる。選挙の際に、運動員が尊師のお面をかぶったり、ガネーシャ帽と呼ばれるかわいい象の帽子をかぶったりしたことも、いかにも子どもらしいやり方だった。お面や帽子のアイディアは、上から押し付けられたものではなく、信者たちの間から自発的に生まれてきたという。選挙の公約に見られた政治の裏取引への嫌悪も、子どもの精神に近い。尊師の生涯や教えを漫画で表現しようとするのも同じ精神にもとづいている。

あるいは、修行を助けるために用意された数々のテクニックや、「修行グッズ」とも呼べる道具のたぐいも、アニメの世界にふさわしいものばかりで、おもちゃ箱をひっくりかえしたような感じがする。霊的エネルギーを注入してクンダリーニを覚醒させるためのシャクティーパット、尊師のエネルギーを込めた甘露水、古代エジプトの秘儀にもとづく神秘の香りを込めたプルシャ型たまて箱、霊石ヒヒイロカネ、大宇宙占星学による運命鑑定、ポアの集い等々、

ディズニーランドのぬいぐるみアトラクションを想起させる彰晃人形
ガネーシャ人形はダンボ、ガネーシャ帽はミッキーマウス帽子に酷似している

オウム真理教がベースにしているはずのヨーガや仏教とはまるで関係のない、古代エジプトや古神道に関連するものまで登場する。

尊師自身も、自分たちが子どもに近いことを認めている。それは麻原尊師と中沢新一との『週刊SPA!』での対談に見られる。

中沢　……教団の活動自体についても、小学生が喜んじゃいそうな、元気と幼児性とアナーキーさをもってて、笑いながら楽しんでいました。

中沢新一が麻原尊師と並べた、小学生の人気者「おぼっちゃまくん」©小村よしのり／小学館コロコロコミック

麻原　そうですか。ありがとうございます（笑）。

中沢　でも、小学生たちはそういう麻原さんたちを見ても、大人がもつようなグロテスク感とか違和感というのはもたないでしょう。

麻原　そうなんです。オウム真理教は小学生には、今すごい人気なんですよ。

中沢　麻原さんは、今や小学生のおもちゃだものね（笑）。素晴らしいことですよ。生身の人間で「おぼっちゃまくん」（筆者注：テレビの人気漫画。主人公のおぼっちゃまくんは、大金持ちの家の一人息子だが、幼児性まる出しでめちゃくちゃをする。また、「ともだちんこ」などの「ちゃま語」を使う）に勝てる人なんて、そういませんものね（笑）。

麻原　でも、私たちのことをおもちゃと思ってくれるのは、せいぜい高校生ぐらいまでで、それを過ぎると「何だこいつ」という感じで嫌悪されるようになってしまうんです。

お伽の国の約束

漫画に描かれた尊師のイメージや最終解脱という観念自体もどこか子どもじみている。私たちは、オウム真理教の世界を見ていると、どうしてもディズニーランドを連想したくなる。ディズニーランドは、たんなる遊園地ではなく、現実の世界とは違う「お伽の国」そのものであるとされている。そのために入場者たちも、そこが本物のお伽の国であるかのように振る舞うことを要求される。その約束に従えない人間は、ディズニーランドを楽しむことができない。お伽の国は、約束のうえに成り立っているのだ。

オウム真理教が宗教として成立するためには、信者たちは定められた約束を守らなければならない。その約束とは、麻原尊師が「最終解脱者」であると認めることである。尊師が最終解脱したという直接の証拠があるわけではない。彼はヒマラヤでひとりで修行して悟りを開いたのであり、誰も立ち会った者はいない。また、尊師の悟りが高度なもので、他の人間には到達できない以上、信者たちは尊師の解脱体験の真偽を論じることはできない。

尊師が最終解脱したことを認めている限り、オウム真理教は人類史に登場した最も偉大な宗教に見えてくる。奇妙なパフォーマンスも、おもちゃ箱をひっくりかえしたような「修行グッズ」の数々も、崇高な価値を帯びたものに見えてくる。たとえば、ただの水も、尊師がエネルギーを注入しさえすれば、一瞬にして聖水に変わるのだ。

約束に従うかどうかで、同じものがまったく違って見えてくる。ディズニーランドをお伽の国と見なければ楽しむことができないように、尊師を偉大な宗教者と認めなければその価値はわからない。私たちの目には、麻原尊師は写真で見るような、いつも半分眠そうな、人のよいおじさんに見えるが、信者たちには違って見えている。彼らには、漫画パンフレットやコミックに描かれた宗教的、あるいは政治的な指導者にふさわしい風貌を備えた、ひとりの英雄として見えているはずなのだ。

しかも、尊師が他の教団の教祖たちと違うのは、隔絶した近づきがたい存在とは見なされていないところにある。漫画パンフレットの「しょうちゃん」は、信者の若者たちと同様に、平凡な人生を歩んでいた。若者たちは、尊師が自分たちに近い存在であるがゆえに、彼と一体化することができる。「しょうちゃん」と同じように修行すれば、超能力を身につけて偉大な宗教者になれるのだ。

尊師はアイドル

尊師は信者たちにとってアイドルである。アイドルという言葉は、本来崇拝の対象、つまりは偶像のことを指している。芸能界のアイドルたちは、元々どこにでもいる、かわいいが平凡な少年、少女である。それが、テレビやラジオ、あるいは雑誌といっ

たメディアを媒介にすることによって、特別な価値を持つ存在に変わっていく。これと同じように、「しょうちゃん（つまりは、松本智津夫）」は、オウム真理教の教団が出している各種の出版物やビデオを通して偉大な尊師に変貌した。

美少女たちが歌って踊るオウムの選挙活動は歌謡アイドルからヒントを得たのかもしれない

オウム真理教では、一時、尊師の宗教家としての偉大さを強調しようとした時期があった。つまりは、作られたアイドルを本物の宗教家に近づけようとしたのだ。水中で呼吸を停止していられることを示すために、巨大な水槽の中で瞑想するという「水中サマディ」などの大掛りなパフォーマンスを行ったりしたのも、そのためだった。

しかし、現在ではそういった方面には力は注がれていない。超能力を偉大さの証にして、尊師を表に出すよりも、むしろアイドルのようにメディアを通して、信者たちから隔絶した存在に仕立てあげようとする方向に転換したようなのだ。尊師に集会で説法させず、ビデオにとった尊師の説法を流すのも、その現れであろう。

信者たちは、尊師がメディアによって作られたアイドルであることを自覚していることであろう。彼らにとっては、それでも一向に構わないのだ。オウム真理教は、終末から人類を救うために戦うという目標を掲げているが、それはあくまでも夢、ヴィジョンであって、具体的な戦略を立てて行動しているわけではない。これまでの新興宗教だったら、教団の勢力を拡大するための布教に力を注ぐ。それは同時に、信者たちの信仰を確固としたものにする役割を果たすことになる（この点については、本書の拙稿「洗脳のテクノロジー」（56ページ）を参照）。ところが、オウム真理教では、大量の出版物を出したりポスターなどを貼って表面的には布教につとめているように見えるが、組織的に信者を獲得する活動にはあまり熱心だとは言えない。

オウムはサークル宗教

彼らは「来る者は拒まず、去る者は追わず」という主義をとっている。新しく入信した人間が、次の集会にやって来なければ、普通なら教団の人間から電話の一本もかかってくる。ところが、オウム真理教では何も連絡がなく、しばらく休んでから集会に行くと、そのまま迎えられ、休んでいた

理由を問い質されたりはしないという。家族や友人、知人に対して積極的に勧誘しろと言われることもない。一般の宗教団体ならば当たり前に行われていることが、オウム真理教には見られないのだ。

オウム真理教は、東京都によって認証された宗教法人である。ところが組織化は進んでいない。信者たちを地域によって、あるいは信仰に導いた人間関係に応じて、地区組織やブロックに配属したりということをしていない。本部や支部はあるものの、特定の支部に所属するようになってはいないため、どの支部の道場に通ってもかまわない。連絡網もなく、信者の間に上下関係はほとんどないに等しい。もちろん、出家した人間や解脱した成就者と、一般の信者との区別はあるものの、個別の信者に特定の指導者がついて指導に当たるということもない。集会に欠席しても、いっさい連絡が来ないのは、教団の組織化が進んでいないことが原因になっている。

オウム真理教の組織は、大学のサークルに似たものとして考えたほうがわかりやすいかもしれない。一般の宗教団体は、むしろ体育会系の運動部に近い。サークルには運動部に見られる先輩後輩の間の厳格な上下関係や、厳しい練習はない。サークルに集まってきた連中の目的は、楽しむためにあり、いやな思いをしてまでそれを続けようとはしない。また、運動部が一流であること、あるいは勝負に勝つことを目指すのに対して、サークルにはそういった意識はない。運動部とサークルでは、世界が決定的に違うのだ。

サークルとしてのオウム真理教の信者たちも、どこかで自分たちの宗教が本物とは言えないことを承知しているのではないだろうか。尊師の最終解脱にしても、信者たちはそれが事実であることを願ってはいたとしても、確証は持っていないように見受けられる。彼らは、自分たちが虚像の世界に生きているという感覚を持っている。その自覚があるからこそ、外から虚像であると指摘されることを恐れているのだ。尊師の宗教家としての価値が、世間からおとしめられることによって、信者たち自身の心は深く傷ついていく。その意味で、マスコミによる攻撃は彼らの心に傷を負わせたことであろう。衆議院選挙の後、教団では信者がマスコミの報道に惑わされないよう、悪いデータを自分のなかに取り入れてはいけないという指導を行っている。

コドモ時代がやってきた

現代の社会は、子どもたちに大人になることを強要したりはしない。むしろ、子どものままでいることを勧めたりもする。それは、子どもの抱く欲望が消費行動をあおり、消費社会を支えることに結びつくからだ。若者たちは、二十歳を過ぎても、二十五歳を過ぎても、大人としての自覚を持たない。大人になるためのイニシエーション

（成人式）を経ないまま、社会のなかを漂っている。企業への就職ですら、人手不足の状況のなかでは試練とはなりえない。大企業は、新卒者を「金の卵」として大切に扱ってくれる。

オウム真理教のような、「子どもの宗教」が生まれてきたのも、そういった社会状況に原因があろう。信者たちは、子どもでいたいがためにオウム真理教に集まってきたのだ。彼らが求めるのは、子どもであり続けたいという自分たちの願いを、もっともらしく感じさせてくれる言葉なのだ。自分たちの子どもらしい夢が、幼稚な幻想でないことを、他人にも、そして自分にも納得させる理屈が必要とされるのだ。

彼らがその説明の言葉を宗教に求めたのは、彼らにとって宗教の世界が身近なものとなっているからだ。若者たちは、子どもの頃から『ノストラダムスの大予言』にあるように、一九九九年に恐怖の大王が現れて、この世界が終わると信じてきた。あるいは、小松左京の『日本沈没』に描かれた日本の水没の可能性を恐れてきた。こうした終末観は、すでに見たようにオウム真理教の説くところに通じている。

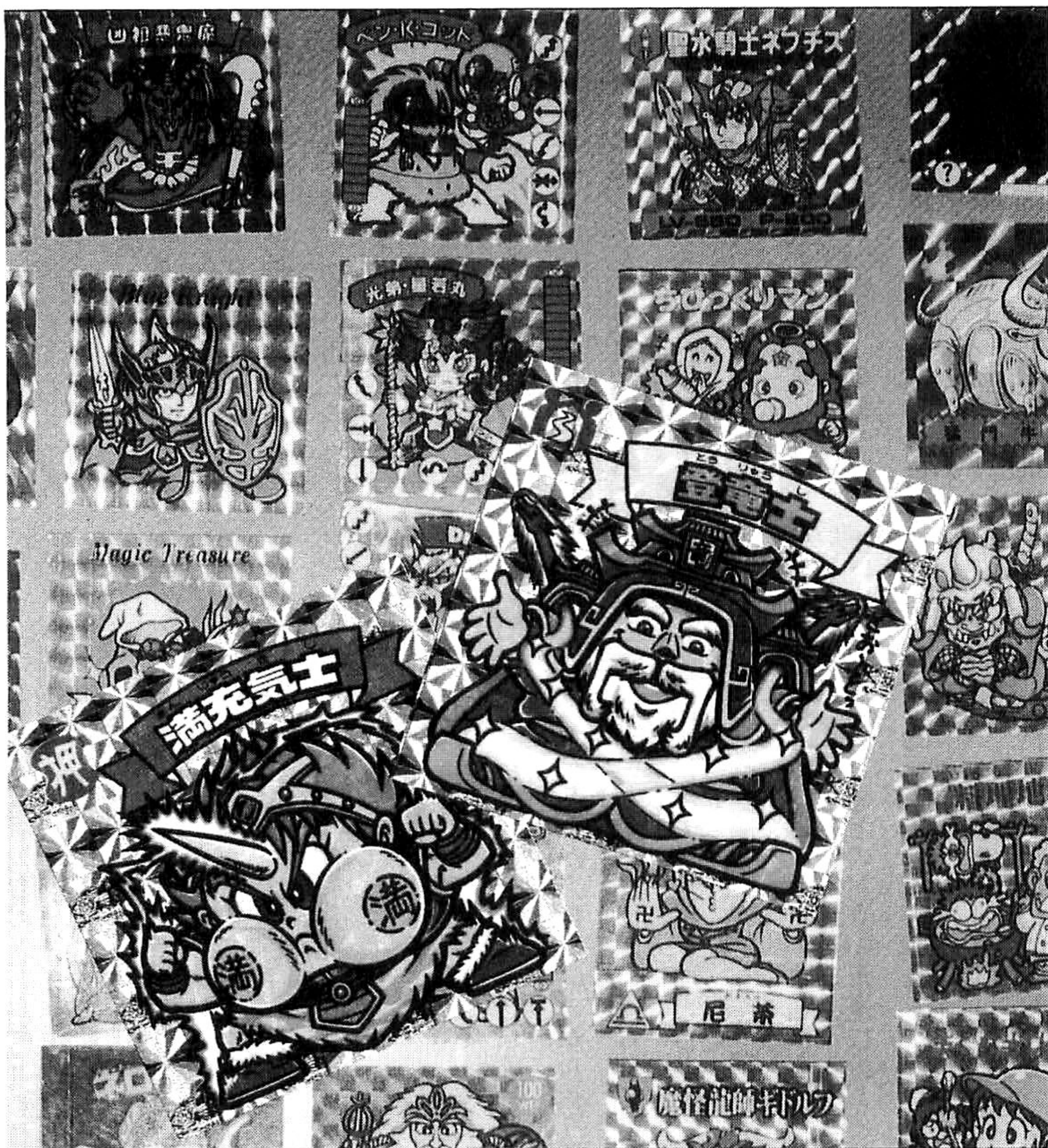
オウムはビックリマンごっこ

そういった終末を前にして、子どもたちには、自分たちが人類を終末から救う戦士であるという幻想がうえつけられていく。各種のメディアが幻想を拡大していく。その代表のひとつが「ビックリマン・シール」である。ビックリマン・シールの世界では、善と悪との対立が永遠に続く、壮大な神話的叙事詩が展開されている。お菓子の中に入っているシールは、物語の展開とともに新しいシリーズに変わっていく。子どもたちは、集まってきたシールから物語の筋を読み解いていく。シールはたんなる収集の対象ではなく、宇宙のはるか彼方で展開されている物語の進行を解読するための手掛りなのだ。

シールに描かれたキャラクターたちは、超能力を発揮するだけではなく、エネルギーを補充し、変身や合体によって強力な存在に変わっていく。しかも、新しく次々と登場するキャラクターは、それまでに登場した他のキャラクターと秘密の関係を結んでおり、その関係を見出すことによって隠された物語の意味が明らかになり、今後の展開を予測することができる。

善と悪との闘争、戦士、超能力、エネルギーの補充、変身、予兆の解読といった事柄は、すべてオウム真理教の世界にも見られた。しかも、ビックリマンの世界で善の側とされる聖天界の中心的なキャラクターは「ヘッド・ロココ」と呼ばれているが、ロココとは心を逆に綴ったものであり、心を中心に置くところでもオウムと類似しているのだ。

あるいは、ファミコンのゲームの世界とも道具立ては共通している。「ゼビウス」や「ドラゴンクエスト（龍退治物語）」に代表されるような物語性のあるゲームは、古代から受け継がれてきた英雄の冒険物語の

現代版であり、その内容は神話や伝説の世界を下敷にしている。ゲームに登場するキャラクターも、超能力を身につけ、敵を打ち破っていく。その冒険の途上においては、守護神や聖者から援助を受けながら、仲間を組織し、変身を繰り返してより強い力を身につけていく。しかも、「裏ワザ」と呼ばれる隠された仕掛けを解読していかなければならない。ゲームに興じる子どもたちは、キャラクターに同一化することによって戦士として神話的な戦いに参加していることになる。

ロッテの「ビックリマン・チョコ」のおまけシールは、
断片的データから子どもたちが巨大な世界像を構築する遊び

ほかにも『機動戦士ガンダム』などの戦士を主人公にしたアニメや、大友克洋の『童夢』や『アキラ』、平井和正の『幻魔大戦』のように終末をテーマとしたアニメや小説がある。現代の子どもたちは、至るところで、善と悪との闘争が続く壮大な終末論的なドラマと出会わざるを得ないのだ。

こういった環境のなかで育ってきた若者たちにとって、オウム真理教の世界は案外身近な世界なのではないだろうか。ようするに、オウム真理教の信者になるということは、ビックリマンのシールを集めたり、ファミコンをやることとあまり変わらない。信者たちは、終末が近づきつつあることを様々な予兆から解読し、戦士（シッシャ）としての自覚を持つ。そして、汚れない心を持ち続けながら、修行によって超能力を身につけていく。苦難に陥ったときには、シヴァ神のような守護神や、インド・チベットの聖者たちが彼らを手助けしてくれる。

オウム真理教の宗教活動も、ディズニーランドのアトラクションのひとつとして考

えたほうがいいのかもしれない。信者たちは、オウム真理教の活動に参加している時だけ、終末を身近に感じることができる。しかし、ひとたび日常の生活に戻れば、終末への危機感は遠のいていく。もし、彼らが本気で終末の近いことを信じているなら、もっと過激な手段に出たことであろう。衆議院選挙の公約を見る限り、終末への危機感は希薄である。

オウム真理教の限界

オウム真理教の魅力も、またその限界も、ディズニーランド宗教だというところにある。信者たちは、自分たちが作られた世界に生きていることを知りつつも、せいいっぱい自分たちの役柄を演じている。彼らのヴィジョンや道具立ては、アニメやゲームといった空想の世界に発するもので、もともと現実の社会との接点を持っていないのだ。

問題は、いつまで彼らがディズニーランドを維持していけるかにある。オウム真理教の熱心な信者たちが、出家者となって宗教活動に専心するようになると、仕事を辞めることになり、そこで収入の道は途絶える。それでも彼らが生活していけるのは、出家者たちが財産をすべて供出しているからであり、また一般の信者たちが修行のために多額の布施をするからだ。教団が大きく発展していく時代には、こういったシステムも円滑に機能する。ところが、いったん新しい信者が獲得できなくなると、システムは破綻をきたしていく。

一時、オウム真理教は急速に信者を増やしていった。しかし、告発キャンペーンや衆議院選挙での敗北の後、やはり拡大の勢いは衰えたように見える。しかも、彼らは強引な勧誘をしない。また、強力な活動をするだけの組織を持っていない。出版物を読んだりして自発的に集まってくる若者を待つしか、拡大の手立てを持たないのだ。

今、オウム真理教はそれだけの魅力を持っているのだろうか。麻原尊師に、多数の人を引きつけるだけの宗教的なパワーがあるのだろうか。虚像としてのアイドルの寿命は短い。あきられてしまえば、人気は急速に衰える。拡大の勢いが衰えることで、出家者や信者の数が減り、経済的な危機に陥って、過激な手段に打って出るかもしれない。人類の終末を予言している以上、社会的な危機が深刻化していかなければ、彼らにとっては困ったことになる。予言が外れた時に、どういった理屈をつけて辻褄合わせをしていくのか、それは終末論を説く宗教には必ず起こる問題なのだ。

オウム真理教は、「子どもの宗教」であるという点で、まさに時代の象徴である。それが時代の象徴である以上、オウムのこれからの行方は、オウムそれ自身の未来だけではなく、「新・新宗教」の未来を占うことにもなろう。もし、オウム真理教が壁に直面したとしたら、それは新・新宗教全体に共通して起こることであろう。あるいは、現代の社会は次々と宗教教団を消費し続けていくのであろうか。その点でも、オウム真理教のこれからが注目されるのだ。

宗教にハメられないための基礎知識…………実践編

私たちはこうして宗教にひっかけられた！

なぜか道端で宗教団体によく声をかけられてしまうあなた。
いつもは振り切ってしまうけれど、もし、そのままついていったら……。
コワイけれど知りたい、そんなあなたに教えます。宗教団体別勧誘の実態！

イエス之御霊教会教団◉

出会ったその日に洗礼されてしまった

荻窪駅へ向かう帰り道、三十歳ぐらいの女の人から声をかけられた。彼女に連れられて、教会らしき建物に入る。四十代の男性が応対に出て、聖書からいろいろ引用しながら説明を始めた。

僕は説明もうわの空で、部屋の向こうにいる数人の白人をながめていた。

「モルモン教やものみの塔みたいな宗教なのかな……」

「この宗教もやっぱりアメリカから来たんですか？」

「それが実は日本で生まれたんですよ」

話の内容はあまりよく覚えていないが、重要なのは洗礼と異言、そして原始キリスト教の精神に立ち帰ることだということはわかった。

「いかがですか、ぜひ洗礼を受けてってくださいよ。べつに洗礼されたって、教会に通わなければならないわけじゃないですから、心配なさらずに」

驚いた。僕は子どもの頃、教会の日曜学校に通っていたことがあり、洗礼というものは何カ月も教会に通い続けて不退転の決意を固めてからようやく受けるものとばかり思っていたからだ。

「洗礼を受ければ、あなたは絶対天国に行けるし、あなたの先祖様も救われるんですよ」

これもまた驚きだ。普通、キリスト教には先祖を救うなどという考えはないからだ。

ともかく洗礼だけでいいというので、まず更衣室で下着を替え、洗礼用の白い衣を着た。布一枚では、真冬だったからかなり寒い。

着替え終わって今度は教会の外の小さなプールに案内されると、すでに十人近くの信徒が待ちかまえていた。この冷たそうな水に入るのか――だが、もう後戻りはできない。

洗礼の授け手の人は何かボソボソ唱えたかと思うと、いきなりハンカチで僕の鼻と口をおさえて水の中へ僕の全身を沈めた……。

一瞬の出来事だった。

再び着替えると、今度は礼拝堂らしき部屋に案内された。真っ白な壁に四方を囲まれた、ただイスが並んでいるだけのシンプルな空間。

「この礼拝堂も、原始キリスト教会の様子を再現したものなんですよ」

　思わず二千年前のローマに思いをはせる。

「ところでどうですか、あなたも私たちといっしょに異言で祈ってみませんか」

　異言とは神憑りの状態で、知っているはずのないことや言葉を口走ることだと知っていたが、ここでは意識的にそれをやるらしい。ただ適当に音を出せばいいのかもしれないが、それが思ったより難しい。「レルレロ、ルララ……」恥ずかしくてしかたがないが、「なかなかうまいじゃないですか。その調子ですよ」と褒められる。他の信徒の人びともいっしょに異言を唱えている。だが、「レレレ、ルロララ、オー、グローリー・マイ・ファーザー！」と、英語を連発する男性が気になった。

　その日以来、僕はいちどもあの教会には行っていない。でも今も毎年、クリスマスになると集会の案内状が届くのである。

阿含宗

浪人生の僕を魅了した「超人類」の思想

志望の大学をすべてすべってしまった挫折からだろうか。他人に負けたくない、何か超能力のようなものを身につけたい、そんなことばかり考えてしまって、勉強に身が入らない浪人生活であった。睡眠学習、記憶術、右脳開発、サブリミナルテープ、α波——。その手の本でめぼしいものは手あたりしだいにむさぼり読んだが、どれも今ひとつ確信が持てない。そんなとき、高校時代の友人Cに勧められて読んだのが桐山靖雄著『変身の原理』だった。

Cは阿含宗に入っていて、すでに桐山靖雄の著作数十冊あまりを読破したそうだ。彼は僕に会うたびに、もうすぐ超人類の時代になるとか、核戦争から地球を救うメシアが現れる、というような話を熱心に語った。そうこうするうちに僕も桐山靖雄の本を次々に読むようになり、いつしかCと話が合う人間になっていた。そしてついに阿含宗への入行を決心したのだ。

入行手続きの日、JR田町駅でCと待ち合わせして、十分ちょっと歩いて阿含宗関東別院なるところに着いた。完成したばかりで真新しかった。一階の受付で入行費二万円を払ってから、隣の広間で「勤行（ごんぎょう）」の説明を受けた。

受付で渡された「仏舎利法珠尊解脱宝生行行法解説」なるテキストを開き、それに従って、まずテーブルにいろいろな仏具を並べる。次に手で「印」を組むやり方の手ほどき。テキストのところどころに「口伝」とだけあって白紙の部分があるが、それは密教なので信者以外の人に知られないためだそうだ。「ロイ」と書いてあるところもあって、それは「口伝」よりもずっと大事な秘密なので「伝」から「云」をとって「口伝」であることすら秘密にしてある、ということだった。

次は、月末に開かれる例祭に出席して「ご宝塔」をもらわなければならない。

その例祭の日、田町駅から関東別院までは長蛇の列が続く。これはすごい集会なんだ、と期待が高まっていく。ホールには人がごったがえしていて、照明も暗くしてあるので、足元に注意しながら、前のほうの新人行者用の席につく。前方に輝いて見える仏舎利を讃えて、オーケストラの演奏が鳴りひびいている。

桐山管長おん指導のもと、勤行が始まった。みんないっせいに読経するが、諳んじている人が少なくないのには驚いた。なにしろ阿含宗の勤行は、読むだけで一時間以上もかかる長いものなのだ。そして僕たち新人行者たち一人ひとりに、管長自らご宝塔が手渡された。ほんの一瞬の出来事だったが、こんな有名人を間近にできるなんて。なんとも言えない感動の余韻が残った。

続いて、やはり管長自ら、多額の布施をした人たちへの表彰が行われる。「金百万円也」「金三百万円也」……。見たところ彼らは決して裕福そうではない。僕はその尊い犠牲に思いをはせた。

それが終わるといよいよ管長の御説法。堅苦しいものかと思っていたらさにあらず、笑いも交じえてざっくばらんに話をする。どこか自慢めいたところもあったが憎めないから不思議だ。

そうして例祭も終わり、阿含の一員となった僕をCは「YAN」という青年組織に誘った。そのときは断ってしまったが、Cは核戦争の危機至らんとばかりに熱心に誘い続け、僕はついに折れた。

毎週木曜日に開かれる「フィールド」というYANの定例集会に顔を出したのは、入行から半年後だった。定例集会ではまず別院の掃除をし、一階で瞑想、次に三階で桐山管長の説法の映画を見たり、三平さんというリーダーのお話を聞いたりする。彼の話のテーマはいつも「どうしたら人生の成功者となるか」ということだ。彼は有

弁で頼もしい感じがする男だ。

最後にみんなで「さあやるぞー！」とかけ声をあげるのだが、肝心の僕の受験勉強はといえば、やはりかけ声だけで終わりそうな今日この頃である。

神慈秀明会

イヤだと言ったら ダダっ子あつかいされた

「あなたの健康と幸せを祈らせてください」

目の前にいきなり小柄な青年が立ちはだかり、いくぶん照れながらこう言った。ここは渋谷の雑踏のなかである。私は帰省のため、大きな荷物を抱えていたが、とくに急いでもいないし、まあいいやと思って、彼の言う〝浄霊〟とやらを受けてみることにした。

ヘソの位置で両手を合わせ、目を閉じる。すると青年が私の額に手を当て、そのまま三分間。長い。目をつむっていても通行人の視線を感じる。恥ずかしい。

やっと終わると、青年は期待に満ちた表情で「な、何か感じました？」と尋ねた。私は答えた。

「いいえ」

実際恥ずかしさに気を取られ、何か感じるどころではなかった。しかし、それでも彼は満足そうに大きく頷いて言った。「いいの、いいの。最初は誰だってそうなの。でもせっかくだから神さまのお話聞きに来ない？　このすぐ近くなんだよ。暇でしょ？」

たしかに帰りの電車にはまだ間がある。時間つぶしにちょうどいいか——と考えて、彼に連れられて渋谷から新玉線に乗り、桜新町の駅で降りた。十分も歩いただろうか、ふいに彼が言った。「今日のは第一講っていって一回千円なんだ。もちろん持ってるよね」

そういうことは最初に言うもんだろ。今さら引き返せないじゃないか。

しかしそこはグッとこらえて、教団の東京支部というところに着いた。二階の小部屋に案内され、中年の、〝先生〟と呼ばれるおばさんから神様のお話を聞く。私の他にも二、三名の受講者がいたが、みな私と同じようなプロセスをたどってここに連れて来られたのだろう。

話が終わり、部屋を出ると例の青年が待っていた。「ねえどうだった？　明日は第二講だよ」

（さっきのお話が第一講だったのか）

教団のなかだし、雰囲気に呑まれてしまってどうにも断りにくい。へどもどして突っ立っているところへ見覚えのある男が通りかかった。

「おまえ、ひょっとしてHじゃないか」

声をかけるとやっぱり田舎の同級生だった。強力な味方を見つけてほっとしたが、それもつかの間、Hは開口一番「第三講まで受けてみて、それから考えろよ」と言った。愕然とした。彼はあちらの人になっていたのだ。

「ほらね、これも何かの縁なんだ。きっと深いわけがあるんだよ」と、青年も調子のいいことを言う。

勧誘は執拗に続き、帰省の電車には完全に間に合わなくなってしまった。こうなるともう、断り続けているのも無意味な気がしてきて、けっきょく承諾してしまった。

その晩、母から電話があった。「みんな、お前が帰って来ると思って待ってたのよ。夕飯だって用意してたのに」

「急な用事ができちゃって。ごめん。できるだけ早く帰るから」

口が裂けても新興宗教にはまったなどとは言えない。言い訳に苦しんだ。

最終日、いつの間にか第三講までできてしまった。もう入信するものとして勝手に話が進んでいるようだ。「第三講を受けてから考えてみたら」というHの言葉も、今となっては空しい。例の青年と彼の班の班長（女性）が、私を説得にかかった。

私はできれば丁重に断り、礼を言って紳士的に去りたかった。だが、どうしても動揺して取り乱し

てしまう。

「まるでダダこねてる子どもみたい。やあね」

と班長が笑った。ここでは理屈は通らない。逃げるしかない。そのときそう確信し、スキをみて東京支部から抜け出した。

もうここまで来れば、と歩調をゆるめたところで後ろから数人が追いかけてくるのが見えた。あの青年と班長の姿も見える。私は足がすくんでしまい、あっという間に彼らに取り囲まれた。しばしの沈黙があって班長が口火をきった。

「あなた、そんなにイヤなの？……そんなにそんなにイヤなの？」

彼女の目に涙が浮かんでいた。青年も同様だ。自分がよっぽどひどいことをしたような気持ちになり、後悔の念にさいなまれた。

そしてついに、素直に入信手続きをとることにしたのだった。

世界基督教統一神霊協会◉「苦しい！頭が混乱する！」

志望の大学に入学したものの、退屈な毎日が続く。「こんなはずではなかった……」というやるせなさ。今思えばこれが私を原理に引きつけた遠因ではなかったか。

たしかに学内では原理運動批判のビラが飛び交っており、私も警戒していた。にもかかわらず、なぜ彼らの勧誘について行ったのか。それを説明できるほどには、まだ心の整理がついていないというのが正直なところだ。

ただはっきり言えるのは、原理のビデオセンターに通って教義を学ぶ日々は、大学のつまらない授業を聞くよりも、よほど充実していたということ、また、私を導いた「霊の親」は誰よりも親身になって私の悩みを聞いてくれたということだ。

だから、霊の親のプッシュ（激しい説得）を断り切れず、ズルズルと2daysという二日間の合宿、そして結果的に7daysという一週間の合宿にまで参加してしまったのである。

ここでその〝7days〟の体験について書いてみたい。

我われ修練生は霊の親に連れられて、次々と修練所に到着した。玄関には霊感商法用の壺が置かれている。私がその壺を指して、隣の原理通の修練生と「これこれ、例の……」とささやきあい、ニヤニヤしていると、何も知らないほかの修練生も「どうしたの？」と集まってきた。しかし、「さあさあ、そんなことはいいから早く寝て明日に備えましょう」というスタッフの一言で私たちは、それぞれのふとんに散っていった。

翌朝からは講義→食事→講義→食事の果てしない繰返し（しかし七日間中、二回ほどレクリエーションとしてドッチボールなどをした）。もちろん外出や、外界との連絡は禁じられている。講義の内容は、古代にあった理想郷から人間が堕落し、今の世界があり、そしてまた地上天国ができる、というもの。講師もまた大学生であった。

それにしても、こんな規則正しい生活するのは学生生活始まって以来だ。最初の二日間はじっくりと吟味しつつ聞いていた講義も、三日目くらいから疲れてきて考えるのが苦痛になる。もうただ無防備に頭の中に流し込むだけだ。今までの自分というものがすべて間違っていたような気分になってくる。

四日目あたりになると「苦しい！頭が混乱する！」と、今にものたうちまわるのではないかと思われるような修練生が出始める。平静を装っている他の修練生たちも、明日の我身を見る思いでいたたまれない。

そんなある夜、私を含めた数人が外に出ることにした。玄関でスタッフのひとりが「どこに行くの？」と緊張した面持ちで尋ねたが、「星を見に行く」という口実でなんとかふりきって、我われは暗い夜道に飛び出すことに成功した。

ホッとして解放感にひたった。

ここまで来れば本音で話し合える。「原理ってやっぱりこわいような気がする」「俺たちこれからどうなっちゃうんだろう」「誰か原理の批判書でも読んでたら教えてくれよ」

不安げな会話が飛び交う。ちょうど私は数冊読んだ覚えがあったので得意になって吹聴した。

「やっぱりそうだったのか。聞いておいてよかったよ。みんなこのことは絶対内緒だぞ」と口々に約束を取り交わしてその夜は修練所に戻った。

翌朝の講義の最中、講師が話を中断したかと思うと突然、「昨日、君たちのなかの若干名に不審な動きがあった……もうリストはできているんだ。みんなせっかく人生に真剣に取り組もうとしているのに……なんのためにそんなことをする!」とどなった。昨日の誰かが告げ口をしたのだろう。仲間を疑いたくはないが、なんとも無念である。

六日目。この頃にはすでに真のお父様、メシア文鮮明の肖像が壁に掛けられているが、修練生の雰囲気にも変化が表れた。食事の準備やふとんの出し入れなどの動作が、てきぱきとしだしたのである。〝為に生きる（人や家族、神のために生きる）〟という原理の教えを足もとから実践しようという意気込みの表れにほかならない。いまだ原理に批判的な私はいよいよ孤立してきた。かつていっしょに修練所を抜け出した仲間からも「やってみなければわからないよ」と言われる始末だ。

七日目。ついに講義がすべて終了した。修練生の霊の親たちが迎えに来る。みんなで最後の食事を

とりながら、新しい人生の出発に際しての注意を受け、入教の手続きを終えた者から順に帰路についた。

ふと気がつくと、修練生のなかで私だけが取り残されている。しかも仕事を終えたスタッフに囲まれて。そして私ひとりを相手に大勢が説得にかかった。私は原理批判に関するありったけの知識を総動員して反論した。しまいには黒板まで使い、徹夜の大討論会さながらの様相を呈してきた。ここまでして抗う私は勇猛果敢な若者か、それとも単なるがんこ者なのか。

途中、つい、「ちょっと体験してみたかっただけなのに」ともらすと、「私たちはあなたのために真剣にやっているのに、なんて不真面目な」と言われた。それは真実だろう。そこでちょっと気持ちがグラつきそうになった。

五時間を経過する頃には、あれほど熱心だったスタッフも疲れてきて、ひとり、またひとりと睡魔に襲われ始めた。空が薄明るくなる頃には、ひとりだけが残っていた。最後は彼と私の一対一での意地の張り合いになっていた。

朝になり、やっとあきらめてもらえたのかスタッフの方々に送られて帰宅することができた。

私ひとりがこうして原理運動の隊列から落ちこぼれてしまったことに、運命の不思議さを感じざるを得ない。あの夜、ともに不安に脅えて語り合った修練生たちは、今もどこかで原理のために生き続けているのだろうか。

世界真光文明教団

「こんな感動初めて……」と彼女は泣いた

繁華街で用事を済ませ、帰路につくため駅に向かっていた。交差点の広場に出ると、いくつかのパネルを展示しながら、道ゆく人にさかんに声をかけている一団がいる。パネルにはさまざまな難病が奇跡的に治った様子が写真入りで生々しくつづられている。二十代前半とおぼしき女性に声をかけられる。

「手かざしというお浄めがあるんですけど、受けてみません?」

そのまま立ち去ってもよかったのだが、その女性のえも言われぬ幸せそうな笑顔にひかれ、手かざしを受けたばかりか、道場にまでついていくことになった。

当時、私はあることに挫折し、落胆していた。そんなときだったので、いっそう彼女の笑顔がひきたって見えたのかもしれない。

道場は駅から十分ほど歩いたところにあるビルの五階だった。そこでは二十人ばかりの青年が、それぞれ二人一組のペアになって手かざしを交換しあっていた。あるペアは額に、あるペアはひとりが横になり、もうひとりがそのからだのあちこちをもんでは、手をかざしている。その様子は、初めてみた私にはいささかいかがわしく感じられた。

道場の責任者らしき人に説明を受けた。温厚な感じの中年男性。かつては学生運動の闘士だったが、この道に真実を見出して引退したのだそうだ。

「かつての仲間に今でも会うんですけどね、『おまえ、新興宗教やってるのか』ってびっくりされるんですよ。『それなら札束ごっそり持ってんだろう』ってね。冗談じゃない。私だってひたいに汗して働いてますよ。そこらの金儲け主義の宗教といっしょにしてくれちゃ困る」

この人に、今月末の三日間ここで研修があるので来るように言われ、その日までに何度か道場に通って研修に備えた。

研修日。授業をさぼってまで来たのだ。私はかなり期待していた。その日は三十人ほどの受講生がいた。一万円の受講料を支払い、テキストとノートをもらう。

講義が始まった。講師はこの前の責任者、教団では道長と呼ばれる人である。

霊界の仕組み、宇宙を貫く法則、その他何やら壮大な世界観が体系

的に説かれ、受講生を魅了して飽きさせない。また薬害を説くときには実例を示して熱っぽく訴える。だが、ゴータマ・シッダールタを、日本語で〝光（コウ）玉（タマ――御霊のことか）知った（シッタ）人（タ）〟と、言霊的に読み替えたのにはいささか面くらった。

講義の合間には十分ほどの休憩が入り、昼食には信者さんの手づくりのおにぎりなどの差し入れがあった。

こうして三日間の研修が無事終わり、引き続き「おみたま」の拝受式。「おみたま」とは首からさげるロケットで、これを身につけることで手かざしができるようになる。ロケットの中は絶対に見てはいけない（本当は「光」と書かれた紙が入っているのだそうだ）。おごそかに式次第は進み、いよいよ受講生一人ひとりにおみたまが手渡される。

「みなさん、その前に手を浄めてください」

受講生はいっせいに洗面所へ向かった。普段と同じように手を洗うと「まだ少し汚れがついているじゃない」と注意され、はっとした。見るとほかの受講生たちは必死になって洗っている。おみたまの尊さを痛感した。

式が終わると、受講生による手かざしの実演に入った。古参の信者たちが手かざしを受けるほうにまわる。初めてとあって、受講生は皆緊張ぎみだが、受け手の「うん。感じる、感じるよ」の言葉に感動する。ほんとうに感じているのか、新入信者への励ましなのか。

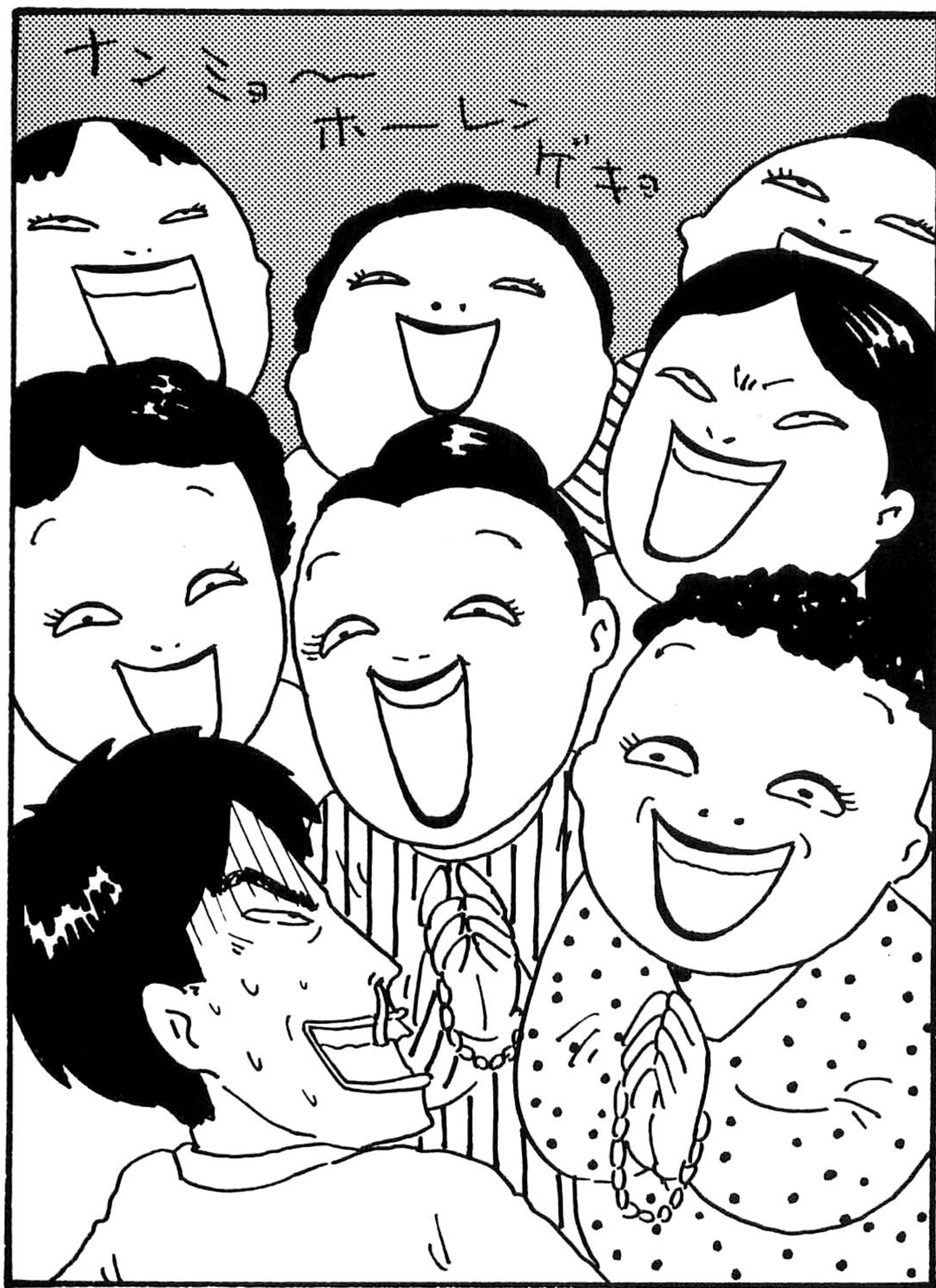
初めての手かざしの興奮もさめやらぬまま、ちょっぴりお酒も出て、にぎやかな祝いの席となった。

そのなかで、人目を避けるようにして泣いている女性がいた。私の隣で受講していた、大学に入って上京したばかりの女子大生である。
「どうしたんですか?」
「よくわからないんだけど、こんなこと生まれて初めて……。お願い、みんなにはこのこと黙っててね」
閉会の時間が来た。三々五々連れ立って帰路につく。私は帰りの電車のなかでひとり、彼女の言葉が耳について離れなかった。

創価学会

教義も言わぬうちに入信書にサインを迫った!

大学に入って間もなく、友人の知人Pが創価学会員だということを知った。Pは県人寮に住む学会員二世。私は仏教に興味を持っていたが体系的知識に関しては白紙同然だったので、信者自身の口から仏教の話を聞いてみたいと思い、彼の部屋を訪れたのだ。棚には学会関係の本がびっしりならんでいた。
「話したってわかんないさ、体験しなくちゃ。仏法は勝負だからね」。私はただ純粋に話を聞きたかっただけだから当惑した。
でも、これは一種のチャンスかもしれない。何事も経験だ、と思ったのが今にしてみれば間違いだった。
「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」
部屋の外までお題目の大合唱が聞こえる。Pに連れられて来たところは異様な熱気に包まれた異空間だった。さして広くない部屋におばさんたちがところ狭しとひしめき、御本尊に向かって手を合わせている。すぐにも帰りたい思いにかられたが、その場の迫力に釘付けになって身動きがとれない。
と、隣にいたPが「みなさん、新しい方がみえました。○○君です。よろしく!」と私の名を叫んだ。全員の視線がいっせいに私にそそがれる。突然のことにどうふるまったらいいのかわからない。
次の瞬間、お題目を唱えていた人々が我さきに握手を求めてきた。「よろしく!」「よろしく!」。皆が皆、気味が悪いほど晴れやかな笑顔をしている。この場では、私はまさしくスーパースターだった。
お題目が終わると菓子とジュースが出て、なごやかな雑談のひとときとなった。そのなかを、人ごみをかき分けるようにしてこちらに向かって来る男がいる。
「○○君。はじめまして。どうでした? ここの御本尊はすごいですよ」
この会合の主催者らしき人物だった。
「○○君、君も御本尊をいただいてぼくらといっしょにがんばろう。池田先生も君の年に御本尊に縁されたんだよ。君がこの年に会合に来たのも、きっと何か深い縁あってのことだと思うよ」
学園ドラマの熱血青年教師ふうにまくしたてる。ふと気がつくと、その右手には何やら書類が握られている。まさかとは思ったが、案の定、早くも入信申込書にサインさせようというのだ。教義もまだろくに聞いていないというのに。
あれこれ理由をつけて、なんとか断ろうとがんばった。しかし、私の抵抗はその場においては世間知らずな子どものわがままだとしかとられず、相手にされない。そうして囲まれて追いつめられているうちに、自分をガードしているいろいろなものが引きはがされ、だんだん不安になっていく。これが彼の言う「本当の自分の生命の姿」なのだろうか。
「ともかくやってみなければわからない。一カ月だけでもいい。だまされたと思って男らしくやってみたら」
つめよってくる彼から視線をずらしたが、こんどは、いつの間にか私を取り囲んでいるおばさんたちと目が合う。もの言わぬ彼女らの視線も私を圧迫する。
それらの視線に押され、とうとう私はペンをとった。「ほんとう

に、ほんとうに一カ月でいいんですね?」と念を押しながら。
　本尊流布の日が来た。まず、車で日蓮正宗の寺へ向かう。Pの仲間も同乗した。みな口々に「よかったね、よかったね」と言ってくれる。
　寺は巨大な近代建築だった。二千円の布施をしてから礼拝所らしき部屋に入る。他にも本尊をもらう人がたくさんいるらしく順番を待たねばならなかった。
　私の番がきた。僧職の前に出る。「汝は……で、……し、……することを誓うか」「誓います」。
　答えてはみたものの、彼の言葉はきわめて難解で、質問の意味はよく呑み込めなかった。そしてお題目の書かれた御本尊が手渡された。今後は朝五座、夕三座、この本尊を拝むのだ。
　一行は再度車に乗り込み、そのまま私の下宿へと向かった。部屋に仏壇を設置し、本尊を祀るためだ。その前にまず、謗法払いをしなければならない。他宗教の礼拝物を処分して部屋を清める儀式である。
　ズカズカと部屋に上がり込んだ彼らのうちのひとりが、机の上の聖書に目をとめた。「これ拝んでるの?」。全員が問いただすような視線を投げる。聖書を拝むなんて聞いたこともない、とばかばかしく思ったが「読んでるだけです」と答えたので、聖書は命びろいした。
　謗法払いが終わり、いよいよ本尊を祀る段になった。Pがうやうやしく本尊にまいてある布をひろげていく。仏壇をきしませながら、本尊には傷ひとつつけまいとするかのように慎重に設置する。その丁寧さたるや、信者にとって本尊がいかに大切なものであるか、つくづく感じさせるのであった。

宗教にハメられないための基礎知識…………理論編

自己投資の時代に蔓延する、洗脳のテクノロジー！

ベトナム戦争時の新兵養成、共産党の思想教育、自白強要、自己啓発セミナー……
宗教団体の洗脳テクニックはありとあらゆる場に応用されている。
しかも、現在はそれが
「自分を変えたい」という消費者の欲望と絡み合っている！

宗教学者
島田裕巳

現在は「宗教ブーム」ということで、多くの若者が宗教の世界に魅せられているという。「心の時代」という言葉がはやり、テレビでは「新・新宗教」についての特集番組が組まれ、本屋に行けばたくさんの宗教書が書棚を賑わせている。金だけがものをいう現実の社会に嫌気がさした若者たちが、宗教の世界に精神の豊かさをを求めているのだと解説される。

しかし、求める者がいるから、宗教が盛んになったと考えるだけでは、あまりにも単純すぎる。一方には、若者たちを宗教の世界に引き込もうとする人々が存在するからだ。彼らは、積極的に勧誘を行い、自分たちの仲間を増やそうとしている。しかも、彼らは信者を獲得していくためのテクニックを備えている。無防備な若者は、蜘蛛の巣に捕らえられる虫のように、宗教の世界に取り込まれていく。しかも、宗教団体ばかりでなく、宗教団体に似たたくさんの組織がいたるところに巣をはっている。

勧誘

例えばこんなかたちで若者は巣にかかっていく。

彼が朝、眠い目をこすりながらアルバイト先に行く途中、街頭で突然、「あなたのために祈らせてください」と言う者がいた。前にも、不意に手かざしをされたことがあった。アパートに帰れば、ドアのベルが鳴り、新聞の勧誘かと思って出てみると、

パンフレットを突き出され、「聖書に関心はありませんか」「人生に不安はありませんか」と聞かれる。その人たちになんとか退散願ってホッとしていると、今度は電話が鳴りだし、友人が今週の土曜日は暇かと尋ねてくる。どうしたのかと聞いてみると、すばらしいところがあるからぜひ一緒に行ってくれと言うばかりで、詳しいことは何も教えてくれない。忙しいという言い訳も通じず、「お互い友達だろ」の口説き文句で、今度ばかりは断れなかった。

友人に誘われた土曜日の集まりは、ある自己啓発セミナーが主催する「ゲスト・イベント」と呼ばれる催し物だった。そういったセミナーのことは初耳だったが、宗教ではないらしい。会場にはたくさんの人が集まっていたが、知っているのは紹介者の友人だけだった。初めての人間は皆、紹介者と一緒に来ているらしかった。

映画「フルメタル・ジャケット」より（ワーナー・ホーム・ビデオ）

集まりが始まると、トレーナーと称する主催者のひとりが現れ、「これから三分間時間を差し上げますから、できるだけ多くの人と知り合いになってください」と言うのだった。初めて来た人間たちは一様に戸惑いの表情を見せているのに対して、紹介者たちは「こんばんは、初めまして」「〇〇です。ようこそ」と、次々と挨拶して回っていた。

予定の三分がたつと、トレーナーがこの時間の意味を説明した。「これがあなたたちの今日までの姿です。何事にも消極的だったのではありませんか。与えられたチャンスを生かしてこなかったのではないでしょうか」

この言葉は、どこか彼の痛いところを突くところがあった。トレーナーや紹介者たちは口々にセミナーへ参加するように誘う。断るのがなかなか難しい。それは、痛いところを突かれたせいでもあった。時間がないとか、費用が高いと言って断ろうとしても、相手は、だから消極的になってしまうのだと突っ込んでくる。たしかに、自分でも言い訳がましかった。四日間という時間がとれないわけでもないし、十二万五千円という参加費が払えないわけでもなかった。紹介者の友人は、金がないなら貸すとまで言ってくれている。

なぜ断れないか

こうしてひとりの若者が、ベーシック・セミナーの参加者となる。このように、自己開発を謳い文句にセミナーを開いている組織は、ライフダイナミックス、Be You、IBDなど幾つもあり、一種のブームになっている(ライフダイナミックスのセミナーの体験記に二澤雅喜『人格改造』〈JICCブックレット〉がある。本稿でも参考にした)。

彼が断れなかったのは、ひとつは本人のなかに消極的な自分を脱したいという思いがあったからだろうが、勧誘する側の巧みなテクニックに乗せられた面が大きい。勧誘する側の目的はただ一点に絞られている。それは、ベーシック・セミナーへの参加申し込みをさせることである。他には何もない。彼らは、参加しなければせっかくのチャンスを失うことになり、消極的な自分のままでいなければならないと主張して引き下がらない。

もしこれが、ある「教え」を受け入れさせようというのだったら、かえって拒否するのは簡単かもしれない。イエス・キリストの復活を信じろというのだったら、それを拒み続けることができる。ところが、相手はただセミナーへの参加を求めているだけだ。何かを信じろとか、集団のメンバーになれと要求しているわけではない。

宗教の布教や勧誘も、すべてこういったかたちで始まる。よく個別訪問でパンフレットを配っているエホバの証人なら、「聖書の勉強をしませんか」と誘う。信じるか信じないかは、勉強してから決めればいい。でも、初めから疑ってかかるのはよくないと言われる。統一協会(世界統一神霊協会、通称原理運動)なら、ビデオの上映会に誘

われる。創価学会は、「ちょっと映画を見に来ませんか」というかたちで誘いをかけてくる。まず、何かの集まりに誘うことが第一歩なのだ。

　未知の世界に触れてみたいという好奇心は誰もが持っている。人の誘いを無下に断るのも、相手に悪いことをしているようで気が引ける。入信しろと言われた時に断ればいいではないか。ところが、そこに落とし穴がある。決定を先送りすることで、相手のペースにはまり、よけいに断りにくくなることを考えていない。相手はそれを十分計算にいれたうえで、誘いをかけているのである。

　そのあたりの仕掛けについては、新聞の勧誘の場合を考えてみれば、誰でも体験的に分かるだろう。新聞のしつこい勧誘員を断る最善の手はただひとつ、勧誘員だと分かったらドアは開けないこと、開けてしまった後に気づいたならば、「いりません」と言って、そのままドアを閉めることだ。話を始めたら最後、相手のペースにはまってしまう。本当は、「いりません」と言う必要もない。まして、なぜいらないかなど説明する筋合いはない。きっぱりと断れば、ことはそれで済む。

　しかし、見ず知らずの勧誘員ならきっぱりと断れるかもしれないが、友人や知人、あるいは家族や同僚だったらそうは簡単にいかない。そこに、新聞の勧誘と違う宗教の難しさがある。相手も長期戦覚悟でじわじわと攻めてくる。そこに恐いもの見たさが加われば、けっきょくは誘いに乗ってしまう。人生何事も経験が第一なのだから、まあそこまではよしとしよう。

カルトによる洗脳

　誘いに乗ってしまうとどうなるのだろうか。誘った側は、その先についてはほとんど説明してくれない。あるいは、疑問が出てこないうちに、次のステップへ進んでしまう。これもまたテクニックのひとつなのだ。なるべく白紙の状態のままで、一挙に染めてしまったほうがいい。

　アメリカには「カルト」（カルト・ムービーのカルトだ）と呼ばれる閉鎖的で狂信的な宗教集団があるが、カルトでは若者を一気に信者に変えてしまうテクニックを持っている。カルトのなかには、アメリカでは「ムーニー」と呼ばれる統一協会や、渋谷の駅前によくいるハレクリシュナ、あるいは日本ではあまり知られていない「神の子供たち（Children of God）」といったグループが含まれる。

　カルトでは、勧誘してきた若者たちを集め、彼らに自分たちの信仰を伝えようとする。そのために、長時間にわたって説教や講義を繰り返したり、録音した聖書の朗読を聞かせる。食事中も、トイレに入っている間も止めない。さらに、神を讃える歌を歌わせたり、聖書の文句を唱えさせる。しかも、これを続ける間、ほとんど休みを入れず、食事も睡眠も満足に与えない。

　こういった状態が続くと、感覚が麻痺してくる。頭の中は空白になって他のことが

考えられなくなり、そのかわりに聖書の文句や歌が絶えず頭の中で響いている状態になる。そして、カルトの側が主張していることをそのまま鵜呑みにしてしまう。カルトは若者たちに、親たちが実は悪魔の手先で、一刻も早くそのもとを離れて、カルトのリーダーのもとに作られる新しい家族に加わらなければならないと教え込む。これこそがまさに「洗脳」である。洗脳された若者たちの人格は変わり、表情まで違ってくる。

アメリカン・カルトでもある統一協会は、日本でもこういったテクニックを使っている。まず、彼らはビデオの上映会に誘い、そこで二泊三日の合宿への勧誘を行う。自己啓発セミナーのゲスト・イベントと同じように巧妙に誘いに乗ってしまう雰囲気作りがなされている。合宿に行くと、統一協会の聖典である『原理講論』の講義があるが、それだけではなくさらに一週間の合宿(「修練会」と呼ばれる)への申し込みをさせられる。

修練会でもやはり一週間の間、一日じゅう『原理講論』の講義が続き、しかも睡眠時間は短い。講義は熱気にあふれ、先輩たちが自分たちの改心にいたる話をして、参加者を感動させたりする。断食が勧められることもある。そして、五日目の最後に教祖文鮮明夫妻の写真が示され、その前で韓国料理を食べる。これは参加者に一体感を感じさせるためのテクニックなのだ。

こうして一気に洗脳が行われる。洗脳された若者たちは、「ホーム」と呼ばれる場所で共同生活をするようになり、街頭募金に駆り出されたりする。私はいちど、このホームのひとつに出かけて行ったことがある。その時はたった一人で講師から『原理講論』の講義を受けたが、その後で夕食に誘われた。夕食はカレーライスだったが、肉はまったく入っていなかった。わずかばかりのツナが混じっているだけで、彼らの普段の質素な生活がうかがえた。

彼らは、また来てくださいと私を暖かく送り出してくれたが、彼らの目つきだけは気になった。目の焦点が定まっていないようで、たのである。あらぬ方を見ているようで、気持のいいものではなかった。しかも、全員が同じ目つきをしていた。やはりそれは洗脳の結果なのだろうか。

兵士はつくられる

アメリカで一時、洗脳(brainwashing)の問題が盛んに研究されたことがあった。それは、朝鮮戦争のとき、中国共産党によってアメリカ人の捕虜が共産主義に洗脳されるということがあったからだ。「洗脳」とはもともと中国語である。日本でも、シベリアに抑留されていた捕虜が、革命家になって帰国したということがよくあった。三波春夫もそのひとりで、帰国直後は社会主義講談をやっていたという(洗脳研究の古典に、ロバート・J・リフトンの『思想改造の心理—中国における洗脳の研究—』〈小野泰博訳、誠信書房〉がある)。

ところが皮肉なことに、やがてアメリカ

映画「フルメタル・ジャケット」より

自身がこのテクニックを使うようになった。それを最もよく表しているのが、スタンリー・キューブリック監督の映画『フルメタル・ジャケット』である。ベトナム戦争の折に、若者を戦争マシンへと変えていくために、洗脳が行われたのだ。

『フルメタル・ジャケット』は二つの部分に分かれている。前半では、アメリカの海兵隊における新兵養成の課程が扱われる。そして、後半では、その訓練を受けてベトナムの戦場に派遣されたひとりの兵士の姿が描かれる。

十七歳で入隊した新兵たちは、ハートマン軍曹のもとで八週間の集中訓練を受ける。彼らはバリカンで頭を剃られ、軍曹のつけたあだ名で呼ばれることになる。軍曹は、新兵たちに卑猥な悪罵を浴びせかけ、彼らの自尊心を徹底的に破壊していく。その悪罵がすさまじい。軍曹役のリー・アーメイは、実際に海兵隊で訓練に当たっていた経験があり、最初は軍事技術の指導に当たるために映画に参加していたが、その罵倒ぶ

りがあまりにも真に迫っていたために、キューブリックはそのまま彼に教官役を要請したのだという。

キューブリックがいかに罵詈雑言を重視していたかは、日本封切りの時のエピソードによく現れている。彼は日本語に訳された字幕をもういちど英語に直させ、そのチェックをした。ところが、セックスにまつわる単語が単なる悪罵として訳されていたために、字幕の作り直しを要求した。その結果、字幕の作成者は別の人間に交代させられたという。

絶対の服従を強いる軍曹の連発する卑猥な言葉の前に、新兵たちは、自分が軍曹の言うように「役たたずのくそったれ」であるとしか思えなくなっていく。軍曹は、彼らが使っている銃に女の名前をつけて大切に扱うように命じる。彼らにとっては銃が恋人であり、セックスの対象である。彼らにとってはそれだけが信頼に足るものであり、その銃のためにベトコンという敵を倒すのだ。

しかし、新兵のひとりであるレナードはデブで動作が鈍く、訓練をうまくこなせない。彼のへまから全員が罰を受けたために、ある晩、仲間全員からリンチを受ける。レナードのそぶりがおかしくなったのは、その夜からである。彼は銃に対して異常な執着を見せ、急速に射撃の腕を上げるが、うつろな表情で銃に話しかけたりしている。彼の人格は破壊されてしまった。彼にとって、敵はベトコンではなかった。彼の自尊心を破壊したハートマン軍曹だったのである。レナードは、訓練が終わって配属が決まったその日の夜、トイレで軍曹を撃ち殺した後、銃口を口に向けて発射し自殺する。

ここまでが映画の前半になる。では、どうして新兵の養成のために洗脳のテクニックが使われたのだろうか。それはベトナム戦争の性格と関連があるのだろう。ベトナムの戦場は、アメリカからは遠かった。アメリカ本土が戦場になっていたわけではないし、第二次世界大戦中のように、国をあげてナチスやジャップをやっつけようという好戦的な気運が盛り上がっていたわけではなかった。平和なアメリカからベトナムへ若者たちを送るためには、意図的に兵士を作る必要があったのだ。

戦争は異常な状況である。日常の価値観は逆転する。人を殺してはならないという常識は通用しない。敵を殺さなければ、自分が殺される。だからこそ、新兵の訓練は人格が変容するほど厳しいものとなる。頭を剃られ、名前を奪われたうえに、軍曹の悪罵の機関銃にさらされた彼らの脳は、完全に空っぽにされてしまう。これこそが文字通りの洗脳である。その空になった脳に、敵を殺せという命令が注入される。そのシンボルが女の名前のついた銃であり、彼らは恋人であるその銃のために戦う戦士に改造されたのである。

イニシエーション

宗教学では、こういった人格の変容のプロセスを「イニシエーション」と呼んでい

る。イニシエーションの目的は、個人を特定の宗教集団へ入信させることにあるが、いわゆる「未開社会」では成人式の儀礼でもある。というのも、未開社会においては、大人だけで構成される宗教集団があり、神話や聖なる知識は大人として認められた人間にしか教えられないからだ。シャーマンや呪術師になるときにもイニシエーションがある。そして、イニシエーションの過程においては試練が課せられ、それを無事耐え抜いた者だけが大人として、あるいは正式なメンバーとして認められる。

　イニシエーションの代表がキリスト教の洗礼である。キリスト教の信者になろうとする者は、儀礼のなかで聖職者から聖別され、信者として認められる。しかし、幼児洗礼の行われるカトリックと違って、プロテスタントの場合には、単に儀礼に参加するだけではなく、信仰の告白が求められる。本当にその教えを信じているかどうかが試されるのだ。これも試練のひとつになる。

　イニシエーションの過程は、三つの段階を追っていく。最初が「分離」の段階で、イニシエーションしようとする人間は、それまで生きてきた世界から引き離される。『フルメタル・ジャケット』で言えば、新兵が髪を剃られ、名前を奪われた段階に相当する。彼らは世間から隔離された状態に置かれる。

　次に「移行」の段階がくる。それは、古い世界から分離されていながら、イニシエーションの目的地である新しい世界に行き着いていない状態である。『フルメタル・ジャケット』では、軍曹の卑猥な罵詈雑言の連射によって自尊心や自意識が徹底して破壊され、頭の中が空になった状態に当たる。新兵たちは今まで信じていたものをまったく信じられなくなり、精神的に不安になる。この状態をくぐり抜けなければ、試練に耐えたとは言えない。

　イニシエーションを施そうとする側は、この段階でイニシエーションしようとする人間を徹底的に追い込んでいく。世間から隔離されているために、追い込まれた側は逃げることができない。カルトの使うテクニックもそれだ。ライフダイナミックスも、セミナーは隔離された空間で行われる。

　中沢新一の『チベットのモーツァルト』（せりか書房）を読むと、いかにして追い込まれていくかがよくわかる。ネパールのチベット・ラマ僧のもとで修行していた中沢は、ある日、自分が自分の身体から抜け出て自分を見ているという体験をする。彼はヴィヴィッドな体験をしたことが嬉しくて師のラマに報告するが、ラマはそれは単なる幻にすぎないと言い放つ。この言葉に中沢ががっかりしていると、ラマは上等なチベット茶をついでくれる。しかし、彼がその茶碗に手をかけたとたん、ラマはいきなり次のように問いかけてきたのだった。

「それを何と言う」

「茶碗（カユ）でしょう」

「どこからみれば茶碗と言えるのだ。上から見たときか、それとも下から見たときか」

「お茶をつぐものだからです」

「ではこの世の誰もそれに茶をつごうとい

う意志を持っていないとき、茶をつがないそういうものは何と言う。どこから見れば茶碗なのか」

彼が答えに窮していると、ラマは続けた。

「おまえが外界にとらえ、名前をあたえている現実などというものは単に条件のあつまりにすぎん。その条件の一面をとらえて、それは茶碗だなどと言っているにすぎない」

その瞬間に彼は不安な状態につき落とされる。修行の時の体験がよみがえり、手にしていた茶碗がブヨブヨした異様なかたまりに変わっていくのを感じた。「まるで身体を遊離した意識が自分の身体を見おろしているように、この現実世界をぬけだした意識が、この世界の頭上から茶碗を見つめているような不安な気持ちにおそわれてしまった」のだと、中沢は述べている。

禅の公案もこれに近い。禅の老師は、弟子に向かって難問をふっかける。老師は、一本の棒を突き出して、「この棒は本当に存在するか」と問う。その時、弟子が、「いいえ、存在していると思っているだけです」とでも答えようものなら、老師はその棒で弟子をしたたかに打ちのめすことになる。

実践と統合

追い込まれた側は、隔離状態にあるために逃げることができない。あるいは、師匠のもとから逃げ出せば、永久に破門されるかもしれない。その絶体絶命の袋小路から脱出するためには、自力で目の前にある高い壁を乗り越えなければならない。それこそが、イニシエーションの最後の段階、「統合」に当たる。

どういったかたちで壁を乗り越えるかについては、『フルメタル・ジャケット』の後半の部分が参考になる。映画の後半では、軍曹の命令でレナードの面倒を見ていたジョーカーという男のベトナムでの姿が描かれる。ジョーカーは激しい訓練を受けたにもかかわらず、完全には兵士としての自覚を持っていない。その証拠に、ヘルメットには「殺すために生まれてきた（Born to Kill）」と書いておきながら、胸にはピース・バッジをつけている。

そういった彼の心境を推し量ってのことか、彼は軍の報道班に配属され、『スターズ&ストライプス』紙の記者となる。直接戦闘に加わらないかわりに、兵士たちの戦闘意欲をかき立てるような記事を書かなければならない。ジョーカーはテト攻勢の翌日、新米のカメラマンと一緒に前線に派遣されることとなった。

ところが、彼の随行していた小隊はベトコンに襲われ、仲間が次々と殺されていく。敵は一人の狙撃兵らしい。ジョーカーもその敵をやっつけるために、敵の潜んでいる建物の中に入っていく。

狙撃兵は若い女だった。危うく彼女に殺されかけたジョーカーは、カメラマンの銃によって救われる。女は負傷してはいるが、死んではいない。彼女はジョーカーに向かって英語で「殺してくれ」と懇願する。彼は躊躇しながらも、最後には自らの銃で

とどめを刺す。彼は初めて人を殺したのだ。こうして彼も本物の兵士となった。最後のシーンで、彼は仲間と一緒に「ミッキーマウス・クラブ」の歌を歌いながら行軍を続けていく。それは、彼にとって戦争が日常となってしまったことを示している。

いったん、自分の手で敵を殺してくる。人間を殺してしまえば、意識は変わってくる。人間を殺すことなどとうていできないと思っていた「観念」が打ち破られる。「お前は自分の手で敵を殺したではないか」。確かにジョーカーは、壁を乗り越えたのだ。

統一協会は、印鑑や大理石の壺、多宝塔などを原価の十倍から数百倍で無理矢理売りつける「霊感商法」を行っているといわれるが、これは単に資金稼ぎとしてだけではなく、信者の信仰を強化する手段としても用いられている。はじめは、それほど高価なものである必要はない。見ず知らずの家を訪問して、原価百円もしないボールペンを恵まれない人たちのためにと称して五百円で売るという体験をすることで、意識が変わってくる。というのも、自分で価値がないと知っている安物の商品を、信仰のために法外な値段で売ることで、壁を乗り越えたことになるからだ。いちど乗り越えてしまえば、高いものでも次々と平気で売っていくことができるようになる。彼らは、霊感商法の実践を通して、統一協会の世界に「統合」されていくわけだ。

宗教団体では、何かができないと考えていることを、「思い込み」や「固定観念」、あるいはただ「観念」と呼び、心の持ち方を変えればそれができるようになると説く。そのために、研修会や講習会のなかで、かなり思い切ったことをやらせ、やればできるという気持にさせていく。例えば、京都の一燈園という宗教団体では、研修生を街に送り出し、普通の人の家の便所掃除をさせてもらうという実践をさせている。

信仰の告白

ここまで見てきた洗脳あるいはイニシエーションのプロセスは、以下のようにまとめられる。

(一) まず、参加者を日常の世界から引き離し、隔離された状態に置く。

(二) 精神的に空白の状態に追い込んでいく。

(三) そこに教義や教えを徹底的に注入する。

(四) 思い切って壁を乗り越える体験をさせる。

しかし、単に壁を乗り越えるだけでは終わらない。最後に、(信仰の) 告白という段階が待っている。人間は壁を乗り越えて、自分が変わったと思うと、それを他人に伝えたくなる。信仰を告白することが壁を乗り越えることになる場合もある。告白した瞬間に、信仰の自覚が生まれる。自分の口をついて告白することで、内面までが変化してくるのである。

ここに人間の心の不思議さがある。自分が信仰を告白したのは、追い込まれた結果なのに、告白した瞬間にそのことを忘れて

しまっている。しかも、告白以前の自分が間違った人生を歩んできたと思うようになり、ようやくにして自分が真実に目覚めたという感覚を持つ。かつてソ連や中国で、共産主義への洗脳が行われていた時にも、告白させることが最重要視されていた。映画『ラストエンペラー』の原作となった愛新覚羅溥儀の『わが半生』(筑摩叢書)では、その洗脳の過程が延々とつづられている。共産党の側は、元皇帝を共産主義者に変えようとして、辛抱強く人格改造の作業を行っている。それは、元皇帝が自ら共産主義者であると告白するまで続けられたのである。

冤罪事件に結びつく偽りの自白が起こるのも、警察の取り調べが洗脳と同じ状況で行われるからだ。取調室は隔離された空間であり、無実の罪で捕らえられた人間でも、取り調べが長く続くと、そこを出ることしか考えなくなるという。警察のほうもその人間が犯人だということを疑っていない。グループ社会派の『冤罪の研究』(現代ジャーナリズム出版会)によれば、警察はハートマン軍曹のように容疑者の身体的な欠陥や弱点をついて自尊心を傷つけることから始めるという。そして、犯行現場の状況などについて、情報を与えていき、犯行を認めなければ取調室から出られないのではないかという気持にさせていく。

取り調べを受けている側は、ここで罪を認めても、自分は真犯人ではないのだから、すぐに無罪が証明されると考え、取調室を出るためだけに嘘の自白をしてしまう。恐いのは、自白したことで、容疑者が自分で犯人のつもりになっていくことだ。取り調べが長時間続くと、洗脳の場合と同じように、容疑者の頭の中も空になり、判断力は失われてくる。しかも、自白を始めると警察の態度が変わり、彼の言うことを本当のこととして認めてくれるようになる。これは、すべての証言が否定されていた自白前の段階と大きく異なる。そういった環境のなかで、容疑者は犯人としてのアイデンティティーを確立していくことになる。どうやって犯行にいたったかは、取り調べのなかで警察が教えてくれた情報を活用すればいい。分からないところがあれば、いくらでも警察がアドバイスしてくれる。

懺悔のカタルシス

犯行の自白が、宗教の懺悔と似ているのは、両者がともに自らの罪を認めるところから始まるからだ。だからこそ、嘘の自白であっても解放感が伴う。懺悔することで、今までの自分が死んで、新しい自分に生まれ変わったような気になってくる。思い込みや固定観念を捨てれば、そこに自由な世界が開けてくるではないか。たしかに今までの自分は間違っていたのだ。その自覚に達したとき、それを誰かに言いたくなる。

イニシエーションや洗脳が集団で行われるのは、集団を前にした告白が重要性を持っているからだ。自分の過ちを認めた人間は、集団全体の前で懺悔したくなる。生まれ変わった自分を一刻も早く、多くの人、

特にその場に集う仲間に伝えたいと思う。涙ながらに、自分の過ちを懺悔すると、他の参加者も同じような気持になっていく。あちこちで、「悪いのは自分だ」と叫ぶ声が聞こえる。会場のなかには参加者の泣き叫ぶ声が響き、全体が興奮状態に陥る。

こういった体験は、心理学の用語で「カタルシス(浄化)」と呼ばれる。自己啓発セミナーでは、特にこのカタルシスの要素が重視されている。ライフダイナミックスのベーシック・セミナーでは、自分が幼い頃の母親の姿を思い出させることで、「観念」に固執していない状態へ引き戻し、カタルシスを体験させるというテクニックが使われる。参加者は涙声で、イメージのなかの母に向かって「ごめんなさい」「ありがとう」と叫ぶ。カタルシスの体験の感動は強烈で、多くの参加者にとっては、それまでに体験したことのないものとなり、ここに強い一体感が生まれることになる。

自己啓発セミナーが宗教に似ているのも、このカタルシスの部分があるからだ。実際の体験がないと、このカタルシスが本当にどういうものか想像がつかない。コンサートの興奮に近いかもしれないが、コンサートには懺悔はない。カタルシスを味わった者同士は、一体感を感じるようになるが、味わったことがない者には理解できない。セミナーの受講経験者は、カタルシスの感動さえ味わってくれればコミュニケーションが円滑に進むと考え、是が非でも友人や家族をセミナーに行かせようとする。ところが、誘われた側は逆に、とんでもないことが行われるのではないかという恐れを抱くようになる。

宗教団体では、集団的な興奮状態のなかでのカタルシスの体験を教祖への信仰に結びつけていく。善隣会という九州の宗教団体の五日間にわたる研修会では、二日目に参加者が教祖のからだにすがるという場面が用意されている。それまでの研修のなかでは、教祖が悩み苦しむ人々を救済するためにいかに厳しい修行をしてきたかが、教師たちの口から繰り返し語られる。そのために、初めて自分たちの目の前に現れた教祖に対して期待感が高まり、そのからだに必死にすがろうとして、研修会場の中は異様な興奮状態に包まれる。そして、すがったことで病いが癒されれば、それは教祖に対する強い感謝の念に結びついていくことになる。

言語と世界観

社会学者の橋爪大三郎は、宗教とは「あることがらを事実と前提してふるまうこと」だと述べている(『仏教の言説戦略』勁草書房)。イニシエーションを果たして信者になった人間は、その結果、普通には信じられていないことを、事実として信じるようになる。エホバの証人なら、終末の日がすぐそこに迫っていると信じている。統一協会の信者なら、文鮮明を救世主だと信じている。あるいは、ライフダイナミックスのセミナーの体験者なら「人生は選択である」と信じているわけである。

前提が変われば、世界は違ったものに見えてくる。周りで起こる出来事も、自分の心のなかで生じる事柄も、これまでとは違った特別な意味を持つものとして解釈されるようになる。環境破壊は終末の近づきつつある証拠であり、今日仕事でうまく契約がとれたのはそれを自分の選択として大切にしたからだ。

各教団では、そういった特殊な前提のうえに成り立つ世界について語る独特の言葉を持っている。信者の人と話していれば、そういった言葉の数々に出会うことだろう。創価学会の信者なら、「宿命転換」「人間革命」「福運」といった言葉をよく使う。天理教では、病気のことを「身上」、死のことを「出直し」と呼ぶ。手かざしの真光では、「霊障」「霊査」といった霊に関する言葉が多い。オウム真理教では「カルマ」という言葉が鍵になっている。ライフダイナミックスにも、「イヤ感」「わかち合い」「コミットメント」というような特殊な言葉がある。急に「人間革命」だ、「イヤ感」だと言われても、その世界に通じていない人間にはピンとこない。逆に、講習会やセミナーに参加した人間は、その言葉を使わなければ自分の体験を表現できない。そこに両者の衝突が起こる可能性が生まれるわけだが、教団では、信者になりたての人間には、教団の言葉を不用意に使うなと釘を刺す。それは、誤解を防ぐためだ。

布教と勧誘の意義

信者になったばかりの人間は、教団の教えや世界観を体系的に理解しているわけではない。彼らの信仰はまだ固まっていない。そのために混乱することもあるし、ふらつくこともある。もし、そのままの状態で放置すれば、やがては信仰を捨てることにもなりかねない。そこで教団は、信者の信仰を強化する手立てをとることになる。勧誘や布教が勧められるのも、そのためだ。

勧誘や布教をするためには、信者が自分で教えを説かなければならない。教えをただ受け入れることと、それを言葉にすることとは違う。自分で教えを説明できるためには、その全体が理解されていなければならない。信仰を始めた当初の段階では、理解は部分的なものにとどまっている。相手に突っ込まれればボロが出る。答えに窮して立ち往生してしまうかもしれない。その時には、必死になって辻褄を合わせようとする。こういった経験を繰り返すことによって、次第に教え全体が自分のものになっていく。

エホバの証人では布教を義務づけ、時間があれば個別訪問してパンフレットを配り、聖書の学習に誘うようにさせている。以前、統一協会では、信者に黒板を持って街頭に立たせ、道行く人たちに『原理講論』の講義をさせていた。今では、黒板は姿を消し、かわりにビデオの上映会が活用されているが、これも布教と信者の信仰の強化のために役立っている。天理教でも、単独布教をやらせる。今でも、関西の駅頭で、天理教

独特の黒いはっぴを着て街頭に立ち、通行人に向かって教えを語りかけている光景に出会う。

単に勧誘ばかりではない。新しく信者になった人間がさらに信仰を深めていくための機会が用意されている。教団では、上級の研修会やセミナーを設け、新しい信者が参加するように仕向ける。信者の側も、いちどはカタルシスの体験を味わっているために、そういった機会があれば参加してみたいと考えている。逆に、そういった誘いを断われば、信仰に熱意がないと評価されるかもしれない。古くからの信者はその点を突いてくる。こうして徐々に深みにはまっていくことになる。

勧誘や洗脳は、やり始めると熱が入ってくる。それは相手に対して優位な立場に立ち、相手を攻撃することができるからだ。勧誘し洗脳する側は、自分たちが絶対に正しいという姿勢のもとに迫ってくる。実は、こういう状態は本人にとってかなり気持がいい。『フルメタル・ジャケット』のハートマン軍曹のことを考えてみればいい。彼には、自分のやっていることに対して少しも疑いがなかったように見える。新兵たちが自分の指導のもとで戦士に変わっていくのを目の当たりにすることは、仕事として以上の精神的な充実感をもたらすのであろう。だからこそ、熱心な信者たちは、嬉々として布教や勧誘にいそしむのである。

ディプログラミング

いったん信者になってしまった人間が、それをやめるには相当の覚悟がいる。教団や仲間は、なんとかして引きとどめようとする。それは、仲間がやめていくことが、自分自身の信仰の否定に通じるからだ。信仰が本当に価値あるものなら、それを捨てていく人間などありえない。しかし、いちど醒めてしまった人間は、けっきょくはその世界を出ていくはめになる。たいていは喧嘩分かれのような状態になり、教団に寄付した財産を失うことにもなるかもしれないが、信じてもいない人間が宗教教団のなかに居続けることは不可能だ。

ただし、投資したり寄付した財産は、けっして戻ってこない。裁判に訴えても、勝ち目はほとんどないだろう。信じていた時の自分がしたことをそのまま受け入れるしかない。無一文になって、また一から出直しということになる。

自分からやめようという気になれば、けっきょくはその世界と手を切ることはできる。問題は、本人にやめる気がなくて、家族がやめさせたいと考えている場合だ。その際には、「ディプログラミング（Deprogramming）」といったことが行われる。日本ではほとんど聞かないが、アメリカではカルトに走った若者を家族のもとに連れ戻すためにディプログラミングが行われている。

ディプログラミングは、イニシエーションや洗脳の過程を逆転させるものだと言えば、分かりやすいかもしれない。つまりは、「逆洗脳」なのである。しかし、その場合に難しいのは、本人がディプログラミング

されることを望んでいないことにある。そのため、若者の親はディプログラミングの専門家と一緒に自分の子供を誘拐しなければならない。子供のほうは洗脳の結果、親が悪魔であると信じ込んでいて、押し込められた車の中で「誘拐だ!」と叫んで、周囲の人間に助けを求めたりもする。そのために警察沙汰になって、誘拐犯として取り調べを受けることにもなりかねない。これは、信教の自由とも絡んで、複雑な問題になっている。

　そういった厄介な問題を処理したうえで、若者をカルトから連れだし、モーテルなどの部屋の中に隔離する。それは逃げ出さないようにするためでもあるが、ディプログラミングにもやはり隔離した環境が必要になるからだ。ディプログラミングを行う側は、若者に隔離の状態がこれから何週間も続くことを暗示しておく。最初、若者は激しく抵抗する。聖書の言葉を吐き続けたり、相手や自分の親を悪魔と呼んだりする。

　それに対して、ディプログラミングをする側は、信仰の矛盾を突いていく。キリスト教系のカルトなら、カルトの聖書の理解が歪んだものであることを指摘し、カルトの教え(例えば、親を悪魔と考えよといった)が本来のキリスト教の教えに背くものであることを説いていく。もちろん、そのためには聖書の知識も必要だし、カルトの教えにもある程度通じていなければならない。若者が矛盾に気づけば、それが転機になる。しかし、そこまでにいたる過程は容易ではない。数日間、格闘し続けなければならない。これがうまくいけば、若者は自分の過ちに気づき、懺悔して親の胸のなかに飛び込んでいく。自分がカルトによって洗脳されたことを自覚するわけだ。

　しかし、それで終わるわけではない。ディプログラムされた若者は、精神的に不安定な状態にある。そのため、数週間は周囲に人がいて、気をつけていなければならない。過度の刺激を受けたりすると、再び元の状態に戻ってしまう。そうなると、カルトに逃げ帰り、ディプログラミングをやった人間を誘拐で訴えたりもする。すべての努力が水の泡になってしまうのだ。ただし、ディプログラミングがうまくいけば、もういちど同じ目に遭う危険は少なくなる。いわば「免疫」ができるのだ。

自己投資の時代

　宗教と言えば、神仏や教祖といった超越的な存在に対する信仰が中心にあると考えられがちだが、これまで見てきたイニシエーションのなかでは、そういった特殊な存在の役割はそれほど大きなものではなかった。そこには、普通の人間を信者に変えていくためのテクニックがあるにすぎない。しかも、そのテクニックはほぼ共通している。さらに、ベトナム戦争の兵士の養成や自己啓発セミナーの場合に見られるように、宗教以外の分野でも同じテクニックが使われている。個人の人格を変容させることが、さまざまな領域で行われていることになる。極端に言えば、対象はどんなものでも構わ

ないのだ。

しかし、こういったテクニックをすべて否定してしまうこともできない。アメリカでベトナム戦争と平行するかたちで盛んになったカウンター・カルチャーの運動のなかでは、人間の感性を解放するために、この種のテクニックが開発され、利用された。それは、戦場で傷ついたベトナム帰還兵の人間性の回復にも使われたのである。ライフダイナミックスなどの自己啓発セミナーも、元をたどればそういった運動（「人間（ヒューマン）可能性開発運動（ポテンシャル・ムーブメント）」）に行き着く。

現在の問題は、さまざまなところで生み出されてきた人格を変容させるテクニックが、互いに影響しあいながら、社会のなかに広まってきたことにある。最近では、商品の販売の分野でも、こういったテクニックが応用されている。「天下一家の会」といったネズミ講（無限連鎖講）はその先駆けである。しかし、ネズミ講が法律で禁止された後も、自分で物を買うと同時に販売員になって、今度は同じように物を買って販売員になる人間を増やしていくことで昇進したり、報奨金をもらったりするシステムのマルチ商法が盛んだ。その販売員になるということは、商品の特別な価値（「幸福につながる洗剤?!」）を信じていることになるが、販売員を獲得していく時には、これまで述べてきた洗脳のテクニックが使われている。神や仏が商品に変わっただけなのだ。

しかし、洗脳のテクニックが広く社会に浸透してきたのは、一般の人間たちの側に、自分を変えたいという欲求があるからだろう。物質的な面での欲求がある程度満たされるようになったことで、今度は精神生活の充実が求められるようになってきた。あるいは、個人の肉体を美しいものに変えていくことに関心が向けられるようになってきた。個人の肉体や心は、金をかけるべき対象に変貌したのである。フィットネスやエステティック、あるいは朝シャンがブームとなったのも、自分の肉体に投資することに価値があるというメッセージが絶えず流されているからだ。これ自体も、洗脳の一種だと考えられる（こういったマスメディアによる洗脳の問題については、ウィルソン・ブライアン・キイの『メディア・セックス』〈リブロポート〉が参考になる。心理学の分野では、これまで広告による勧誘や洗脳などが、条件付けの問題（パブロフの犬を思い出してほしい）として論じられてきた。J・C・ブラウン『説得と勧誘の技術』〈誠信書房〉を参照）。

宗教や精神世界のブームも同じだ。自己啓発セミナーに多くの人間が集まるのも、心が投資の対象となってきたからだ。自分が変われば、世界が変わって見えてくる。こうして肉体と心の商品化が進んでいく。消費主義社会が続く限り、この傾向は変わらない。私たちは、今、消費主義からのディプログラミングを必要としているのだ。

宗教は狂気を救わない

キャラバンの白い少女

精神科医 浅野誠

狂気に追いつめられた、不幸な少女がいた。宗教団体は彼女を見捨てた……。宗教は、もはや狂気の受け皿としての役割さえ放棄してしまっている！

夏の終わり。それでもまだ、海水浴客で町には活気が残っていた。

そんな海沿いの田舎の病院にいた頃の話である。

その美しい娘は、祖母とおぼしき老女に連れられて、夜の病院の外来に現れた。

年は十八。やつれて、眼がうつろで、焦点が定まらないふうであったが、鼻は高くほっそりとし、髪は長く色白だった。少し薄汚れているが白い上品な柄の衣服は大柄なからだによく似合い、優雅ですらあった。

彼女は診察室に入るなり言った。

「今まで服従してきましたが、これからは私の命令に従いなさい。あなたが何を考えているか全部分かります。私はエホバの使いです」

私はエホバの使いに椅子に座ってくれるよう、丁重にお願いした。

彼女は座ったが、再び立ち上がり、傲然と、しかし、声を押し殺して言った。

「あたしはなんでも分かってるんだよ。あんたは鬼だよ。あたしを食べないでよ。あたしの魂を食べないでよ。あんた食べてんだろ」

その口調は激しかったが、どこか苦しげで、限りない危うさを感じさせた。私は言った。

「とっても苦しいんだね」

「苦しいんだ、苦しいんだ、苦しいんだ」

彼女は硬い表情で繰り返した。浜で打ち上げられた花火の音が大きく響いた。ふいに彼女は、恐しげに耳を押さえてうずくまった。その夜、私は彼女を入院させた。

彼女は二カ月ほどで正気に戻って退院した。しかしその後も二度の入院を繰り返した。彼女の三度目の入院の前に、私は別の

illustration＝藤川秀之

病院に移り、その町を去っていた。

そして、三度目の入院から一年ほど経た、やはり夏の日に、病院の裏を流れる川にかかった橋の欄干に紐をかけ、彼女は縊死した。

言いつけをよく守る少女

彼女は千葉の南端の町で生まれた。父も母もその町の出身であったが、彼女が十歳の時に離婚した。

父は代々続いてきた大きな旅館の経営者だったが、事業を拡張したことがたたって、倒産してしまった。家族に負債が及ぶことを避けるため、父母は離婚し、母と兄と彼女は生まれた町を去り、都会に出た。

父はやせていて無口でおとなしく、気のいい男だったが、覇気はなかった。ただ彼女をいたく可愛がりはしていた。

母は少し太り気味で、落ちつきがなく、甘ったれで、いつでも肝心なことには気がつかず、なににつけすぐ大袈裟に涙を流す女だった。しかしダンスにかけてはプロ級で、父と知り合ったのもダンスホールだったという。離婚後、母が都会に出て来たのも、ダンス教師の職を得るためであった。

三つ年上の兄は勉強が嫌いで高校進学の気もなく、中学卒業後はアルバイト先を何度か変わったのち、パチンコ屋の店員になった。かつて、旅館の使用人たちから坊ちゃんと呼ばれて大事にされていた頃とは、大きな境遇の変化だった。しかし、兄はそういったことに目立った落胆も見せず反応はどこか鈍かった。母は倒産までは兄を溺愛していたが、兄がまるで意志薄弱な男であることを見て取ると、妹に期待を移したのだった。

妹は小学校六年生の頃には低学年の生徒に勉強を教え、なにがしかの収入を得ていた(それは彼女と兄の小遣いになった)。成績は中学でもトップクラス。真面目で言いつけを良く守る可愛い女生徒として教師に目をかけられはしたが、教師のなかには彼女の態度に余裕と幅のないことを危ぶむ者もいた。

人は、規律とか道徳などというものには、そこそこに従いつつも、それからはみ出る術を、子ども時代に学んでいくものだ。規律や道徳という一種の共同幻想を型紙のように忠実に守る子どもがいたとしたら、その子どもは逆に、他の共同幻想にも侵食されやすいということでもある。

彼女は、依存的な母や、ダメな兄を心理的にも経済的にも支えながら、なお、自分をみじめな境遇から抜け出させるべく勉強にはげんだ。そんな、おとなしい彼女にも実は好きな男の子がいたなどと誰が考えよう。

その男の子は故郷の町の小学校の同級生だった。故郷を離れて中学に進んだ頃から、彼女はしばしばその男の子のことを思い出した。彼も成績がよく、こまめに働く、やさしい少年だった。彼はクラスじゅうの女の子から人気があり、彼女も同じように彼が好きだった。

彼女は中学三年の頃も相変わらず成績は

よかったが、一年のときよりも二年、二年のときよりも三年と微妙に成績が下がりだしていた。

日本の子どもたちの勉学のスピードは早い。そのうえ塾通いが常識と化した今ではさらに多くの内容を短時間で学習せねばならない。勉学も加速しているのだ。その加速度は学年が進むほどに増していく。彼女は次第にその加速度についていけないと、感じつつあった。少しずつ、少しずつ、彼女は、トップ集団から後退し始めた。少しずつ、苦しくなり始めていた。苦しくなればなるほど、あの故郷の小学校の男の同級生のことが思い出されてならなかった。

彼女は、東京の神田に近い、名門といわれる私立女子高校に進んだ。貧しい彼女が月謝の高い私立に入学したのは、母の名門への強いこだわりのためだった。学費に限って、父方の祖母に出してもらうことになった。

その頃、母は知人の勧めで、布教活動に熱心なキリスト教系のある新興宗教に入信していた。しかし、いくらそのような教団に入ろうと、見栄を張る性格まではなおらなかった。

父の死

彼女が高校に入学した直後、父親が死んだ。

酒を飲んで車を運転し、海岸通りにかかった橋の欄干にぶつかったのである。平生はあまり酒など飲まない男である。ほとんど自殺であったに違いない。しかし彼女は父の死を知ってもあまり悲しみを顔に出さなかった。母は大袈裟に泣きわめきながら、娘を冷たい女だと非難した。

彼女はむろん悲しんでいたのだ。しかし、悲しみより不安のほうが大きかった。不安は名状し難く彼女の心に広がり始めた。父は多額の負債を負ったとはいえ、ぎりぎりのところではなお、彼女に救いをさしのべるであろう存在だったからだ。父の死は、彼女から泣く余裕すらも奪うほどの衝撃だったのである。

高校の一年目は父の死以外には何事もなく過ぎていった。相変わらず成績はよかったが、もはやトップクラスとは言えなかった。中学時代にはわずかにいた友人も、高校ではほとんどできなかった。たまに同級生と通学途上にいっしょになるが、一方的にしゃべりまくる仲間の聞き役にまわった。彼女は、同級生たちが次から次へと実にさまざまな話題を持ち出すのを驚きを持って聞いていた。私は話についていけない。何をしゃべっていいのか分からない。もちろん同級生たちの話の内容はどれも他愛ないものだ。それも、ほとんど自分に関することばかりで、人の話など聞いていなかった。だから、彼女も自分のことをしゃべればよかったのだ。たったそれだけのアドバイスとはいえ、いったい誰が彼女にそのように言ってくれようか。彼女の悩みを知り、彼女が語り出すのをじっと待ってくれる人間はどこにもいなかった。

それに、同級生たちは皆、中流あるいは

上流の経済力を持った家庭の娘ばかりである。衣類はもちろん、カバン、時計、筆箱に至るまで、彼女の持ち物よりはるかに上質だった。実際はたいした差はなかったろうが、彼女の貧しさは、ちょっとした差を過剰に意識させていた。学校へ行くことが少しずつ苦痛になり出していた。

母の再婚

母は、昼間は会社の事務の手伝いをし、夜は週に三日ほどダンスを教えていた。本来ハデ好きな性格の母は、ときどきダンスでの知り合いと酒を飲んで帰るようになっていた。そのうえ、休みの日は教会の手伝いに出かけて行く。だからほとんど家にいないし、たまに家にいても少し酒が入っていた。

このような母は、彼女のような年齢の娘にとっては許容し難いものである。もともと彼女自身は誇り高き性格である。彼女の前に徐々に増え続けていくさまざまな苦難も、真面目な努力を続けていけば解決すると信じてもいた。しかし、酔っ払いでわがままで、そのくせ日曜日には神様にお祈りしている母や、ときどきシンナーをひそかに吸っている無力な兄を見るにつけ、もう、ほとほと家がいやになり始めていた。そもそも、こんなことを平和で豊かな家庭の娘ばかりである同級生たちにとうてい話せるわけがなかった。

高校二年生になった彼女は、休み時間をほとんど図書室で過ごしていた。彼女はマンガというものをあまり読まなかった。その代わり、同級生たちが触ったこともないような図書室の世界文学全集を読みあさっていた。

母親に男がいることに彼女は気づいた。母親はまだ四十を少し越えたばかり。大人ならそういうこともあるとは思えても、彼女が受けた衝撃は父の死にも匹敵するものだった。

母の男は彼女たちが住むアパートにやって来た。母と結婚するのだという。男はハデな格子縞のジャケットを着た、やせて小柄なキザな男で、母よりも五、六歳年下だった。母がダンスを教えていたのだという。彼女は男を見たとたん吐き気がするほどの嫌悪感をおぼえた。男は、しかし、美しい彼女をじろじろ見まわしていた。

母と男は結婚し、同居を始めた。男は何をしているのかよく分からない。廃品回収のような仕事をしているようだったが、詐欺師のようなところもあった。

そんなことより何より、彼女たちの狭いアパートで暮らすようになったことは、敏感な年頃の彼女に緊張と苦痛をもたらした。部屋は三つあったが、彼女の部屋と母親夫婦の部屋は隣り合っていた。ちょっとした物音でも聞こえてしまうし、古いアパートなので、戸の締まりも甘かった。

男は卑猥な言葉を平気で口にしたし、居間を裸でうろつくこともある。夜の睦言（むつごと）も聞こえてくることがあった。夜はなかなか眠れない。都会へ出て来てから寝つきはよくなかったのが、その頃からかなりひどく

なった。深夜の一時、二時まで目がさえていた。それでも、彼女は毎朝早く家を出ていく。

高い月謝を払って学校に行っているのだし、勉強をして、大学に行きたかったのだ。大学に行けば、女だって、人にそれほど頭を下げる必要もなくなる。自立して、立派に生きていける。そうしたら今の貧しさや苦労も、いい思い出になるだろう。あの大好きだった男の子もきっと大学に行くにちがいない。同じ大学とは言わないまでも、学生の気楽さから、ちょっとした口実を作って会いに行くことだってできるだろう。彼女はなぜか、七年も前のその同級生への思いを強くしていった。

貪欲な神

高二の一学期の終わり。もう夏である。その夜、アパートには母も兄もいなかった。彼女と母の男だけだった。男はテレビを見ているようだった。いかに諸事にうとい母

でも、さすがに男と二人だけのときに娘が入浴しないように注意は与えていた。言われるまでもなく、彼女も気をつけていたが、その日は暑かった。

彼女は汗ばむからだをタオルで拭くつもりで風呂場でほとんど裸になった。

突然、風呂の戸が開いて男が入って来た。彼女はあわててからだの前部をタオルで隠した。

「なんだいたのかい。へへへ……」

男はあきれるほどゆっくりと戸を閉め、出て行った。

彼女は以後、母が帰るまでは家に帰らなかった。母の帰りは必ずしも早くない。そんなときは、神田やお茶の水あたりを呆然と徘徊した。

ある日、駅前でうろうろしている彼女を若い男が呼び止めた。暖みはないが真面目そうな男である。

彼女は義父に裸を見られて以来、気分はほとんど強姦にあったのと同じだったから、思考をまとめる力など失っていた。そんな状態では、かなり露骨な宗教への勧誘にも抵抗することはできない。

彼女は男の勧める集会に出席した。

そろそろ夏休みだったし、図書館が毎日開いているわけでもない。なるべく義父と顔を会わせないようにするのにも限度はある。男が誘ったのはキリスト教系の新興宗教で、集会所だけでなく宿泊所まで有していた。彼女はいつのまにか宿泊所に寝泊まりするほどになり、夏の終わりにはもう、立派な信者になっていた。

彼女は入信して以来、しだいに母の言うことを聞かなくなった。おまけに平気で外泊するようになった。母にははじめ、外泊の理由がよく分からなかったが、ある宗教に入信していることが分かり、母と娘はかつてない言い争いになった。母の信仰している宗教と彼女のとは、どこかよく似ており、似ている分だけ互いの宗派は反発し合っていた。

半年後には、彼女はなかば家出同然となった。はじめは学校には通っていたが、母が学費を盾に家に戻るように言ったため、学校もやめてしまった。彼女は家を捨て、勉強を捨て、ただ神への信仰という幻想だけにしがみついた。

しかし、しょせん、それは幻想なのだ。神がいったい彼女に何をしてくれるというのか。

彼女の信仰した神は貪欲だった。教団はわけの分からぬ壺や鋳物を売らせ、駅頭に立って募金を集めさせ、宿舎の掃除、食事の手伝いなど、厳しいノルマを課した。その代償は死んだら天国へ行けるという説明だけだった。

終わりなきキャラバン

彼女は懸命に信仰した。彼女がさほど疲れていなかったとしたら、そのまま教団のなかで生きていけたかもしれない。

どのような宗教団体も、組織である限り、信者からある種の搾取を行わねば存続し得ない。いっさいの搾取を行わない宗教団体

を私は実際のところ見たことはない。どのような教義を持とうと、宗教団体はその搾取を拒む者を受け入れない。罰当たりとして放逐してしまうのである。

　彼女は入信した当初は、心理的に多少救われたが、家や学校を失い、また、他の信者たちも、親切ではあっても、包み込むようなやさしさには欠けた連中ばかりで、しだいに寂しさと孤独感が心に広がっていった。いや、実はかなり以前から、名状し難い不安感が彼女をむしばんでいたのである。この不安感は、神にいくら祈ろうともけっして解消されず、むしろ増していく気配すらあった。

　彼女はもう長いこと、睡眠すらきちんととっていないのだ。

　精神的疲労は、ゆったりとした時の流れに身をゆだね、充分な睡眠と、そして、無償の愛があってこそ、本当に回復するものなのだ。

　彼女は、ほとんど自動的に、生活のすべてを教団に捧げるように求められ、教団は彼女をその正式な構成員に組み込むと、日本各地で行うさまざまな活動に参加させた。そのほとんどは、教団のいう霊的な壺を売ることとか、難民救援資金と称しての募金活動などだった。そういった壺を買ったり、募金に応じた者は魂が救われるから、これはよい行いである、と彼女は教えられていた。もちろん、売上金や募金は教団にすべて吸いとられてしまう。しかし彼女は本当に難民の手に渡っているかどうかなどといった疑いは持ったことがなかった。しかも、活動の間はワゴン車の中で寝泊まりし、入浴は銭湯でした。だから彼女はこの半年ほど、ひとりになるということがほとんどなかった。

故郷の町

　年が明けた春のことである。

　教団は募金活動を千葉県南端の町で行った。彼女がその地方の出身者だったことを教団側は知らなかったようだ。また、なぜか、彼女もそこが故郷であるとは言わなかった。

　周辺の農村での募金活動が終わり、五、六人の信者たちは寝泊まりするワゴン車に戻った。皆、互いによけいな口はほとんどきかない。集めた金の計算が済んだのは、もう十二時に近かった。彼女は浜にとめたワゴン車の外に出てみた。

　ふいに、潮の香りが強く匂った。懐しさとも悲しみとも言えない思いが、激しく胸に突きあげてきた。ちょうど父の死んだ日も近い。父と浜をいっしょに歩いた幸せな幼年時代が脳裏に浮かんできた。

　そこは故郷の浜なのだ。波の音はやさしい。暖かい湿った風が吹いている。沖に船の明かりが浮かび、ずっと先の岬の燈台がときおりピカリと光る。昔と変わらぬ緑色の光である。思い出のなかの父の顔にあの少年の顔が重なった。ふたりはまるで違う人間ではあったが、やさしいことは共通していた。

　彼女がその昔、鉛筆の芯を全部いじめっ

子に折られたとき、少年はそっと削ってくれた。器用な少年で、ナイフで巧みに芯を出してくれた。そんなちょっとした思い出が、めったに泣かない彼女の頬を濡らした。

その夜から、彼女は教団の活動がたまらなく苦痛なものに感じられるようになった。

本当はこれまでも、毎日辛い思いを耐えてきたのだ。自分の家系は呪われており、父親の霊も浮かばれない。彼女が教団に奉仕することによって、一族も救われると教えられていた。よく考えれば他愛もない脅しだが、それは彼女の心にもともと潜む不安に呼応して、がっちりと内外から彼女を縛りあげてしまっていた。しかし今、彼女の心の深みに潜んでいた、もっと激しい流れがその鎖を断ち切ろうと騒ぎ始めたのだ。

いったい、いつまで、この車でのキャラバンは続くのだろうか。もう、自分の未来はこの教団に完全に飲み込まれてしまって、永久に自由はないのだろうか。いつか本当に自分を包んでくれる愛に出会えるのだろうか。そんな思いが、車に揺られながら、ふつふつと起こるようになってきた。

彼女はすっかりやせてしまった。食事はのどを通らなくなってきた。夜はほとんど眠れない。もう、この組織から抜け出したい。どこでもいいから行きたい。しかし、出れば神罰が下る、と彼女のもうひとつの心が脅しをかける。それに、いったい、どこに行ったらいいのか。

七月の終わりだった。

彼女はある日、身を硬くして、何も言わず横になったまま動かなくなった。

発病

他の信者も、さすがに彼女の異常に気がついた。東京の宿泊所に彼女は何日か寝かされていたが、水もほとんど飲まずに横になったままだった。彼女は内科医の診察を受けさせられたが、内科医は精神科に連れて行くべきであると言った。

こういうとき、多くの宗教家たちはその後の面倒をあまり見ないようだ。ようするに、彼らの祈りや説得に耳を貸すことがないから、悪魔につかれてしまったと思うらしいのだ。祈りの通じないものは悪魔つきであるという考えは、大昔以来ずっと生き続けてきている。

彼女は仲間の手によって母のもとに連れ戻された。働けるときにはこき使うが、働けなくなればほうり出すのだ。企業の論理と何ひとつ変わらない。

もちろん、彼女は母の言うことにも反応せず、部屋の隅にうずくまり、じっと一点を見つめている。そこへ、義父が帰宅した。彼女が相変わらず食事も摂らず、母親のどんな働きかけも拒絶しているのを見て取ると、義父はうつむきかげんの彼女の顎に手をかけ、顔を起こそうとした。

突然、彼女は義父を押しのけ、アパートから外へ飛び出して行った。

その後、どこをどうやってきたのか分からない。彼女は次の日、故郷の町の駅のベンチに横になっていた。警察に保護されたが、なにぶん狭い田舎町のことである。た

またま彼女の顔を見知った者がいた。彼女が小銭入れの中に持っていた小さな印鑑も身元の確認に役立った。

まだ健在でひとりで生活していた父方の祖母が彼女を引きとった。祖母は彼女の父が自殺したのち、ひとりで町の外れの市営住宅に暮らしていた。

一カ月ぶりに彼女は入浴させてもらった。一カ月間まったく取り代えなかった衣服も代えてもらった。祖母は自分が女学生の頃に着た白い服を着せた。彼女は少し元気になり、食事も摂るようになった。しかし、やはりおおむね部屋の隅に、だまってうずくまっていた。祖母のところへ来て十日ほどした夜、ふいに彼女は家を出て行った。そして、あの、やさしい少年の家に現れたのである。

少年は家にいなかったが、少年の母が、じっと玄関に立ちつくす娘を訝った。迎えに来た祖母は、そのまま彼女を私のいる病院に連れて来たのだ。

幻聴

町はこの時期、海水浴客であふれ、華やぐ。浜では、その日花火が打ち上げられ、通りには違う土地のナンバープレートをつけた車が並ぶ。

しかし、彼女の耳には神の言葉が聞こえ始めていた。その内容は彼女を脅かすものであった。

たとえば彼女が食事を摂ろうとすると食べるなと言ってくる。食べると地獄に堕ちるぞと言うのだ。しゃべろうとすると、しゃべるなとも言う。その神の声は彼女の行動をことごとく監視し、彼女のしようとすることを妨害してくる。彼女の行動を封じようとするのだ。

彼女の頭の上でドーンと花火が鳴った。義父に似た男が駆けてきて、彼女にぶつかった。彼女はよろけ、男は何か叫んだが去っていった。

彼女はふいに確信した。それまで聞こえていた神の声は悪魔の声なのだ。なぜなら、今しがたぶつかっていった男は、彼女に向かって「エホバ様」と叫んだではないか。

ここで、なぜ彼女の心のなかでそのような変化が起こったか、これ以上は私にも分からないが、その後、彼女は自分のことをエホバの使いであると思うに至ったようだった。

彼女を拒否する教団

彼女は入院後、二カ月ほどでほぼ正常な状態に戻った。ただ、元気はなく、まとまったことを長時間続けることはできなかった。まだ長い療養を要したのだ。しかし何もしないで長期間、祖母の家にいることはできなかった。祖母も彼女の世話をいつまでもしたくはない様子だったし、彼女自身、人の世話になるのを嫌うたちなのだ。東京へ行くというので、東京の病院への紹介状を書いてあげた。だが、彼女は東京へ戻ってからは病院に行かなかった。ほんのしばら

く母のもとにいたが、間もなくまたもとの教団に戻ったのだ。教団の仲間が、病院などに行く必要はないと彼女を説いたという。

たしかに彼女は、表向きの行動は発病以前の状態に戻っていった。しかし実際はまだ病気はよくはなっていない。たとえば、病気になったときのことについて思い出せても充分な理解に乏しかった。そういうことが分かるまでには、少なくとももう半年ほどかかるのが普通である。しかし、けっきょく、彼女は再び教団のなかで生きることを選んだのだ。

それから一年経った頃、彼女の病気は遠く北海道での布教活動中に再発した。

そのときは著しい興奮状態となり、制止した仲間の指に咬みついて、かなりの怪我を負わせたらしい。彼女はそのまま北海道の病院に半年入院し、母に引きとられ、再び私のいる病院に来た。彼女は母のもとに戻るのなら、私のいる病院に入院したいと言い張ったようであった。

そして退院するとき、こんどはどこに戻るかが問題になった。祖母はますます老いている。かといって、母のところにも戻りたくない。では教団が受け入れてくれるだろうか。

ワゴン車に寝泊まりし、四六時中仕事をさせる教団の苛酷なノルマに、彼女はもはやついていける状態ではなかった。

彼女はなんとかひとりで生活できるまで、祖母のところにいるということにはなった。しかし祖母は体調を崩すことが多くなり、そのたびに入院をするようになっていた。彼女はひとり、居残ることになったが、そんなとき、彼女は薬を飲むのをやめてしまった。彼女が薬をやめたのは、自分が病気であることを分かっていなかったからとは言えない。血圧の薬だって、長い期間きちんと医者に言われたとおり飲んでいる人は少ないのだ。

そして薬を飲まなくなってからしばらくして祖母の家を勝手に出て行ってしまった。

私はその頃、他の病院に勤務を変えたが、その直後に、彼女は再び母親に連れられて来院した。

祖母の家を出た彼女は教団に向かったという。しかし、もはや彼女には奉仕活動ができないと見た教団は、さっさと彼女を母親のところに戻したのである。

さほど病状は悪くはないにしても、自立して生活するには、あと数年はかかるはずである。こうして、彼女はその病院に三回目の入院をした。

救わない神

彼女は、具合の悪いときは「おまえはエホバの使いだ」という声が聞こえてくると言っていた。すると、彼女は昔の誇りを取り戻したかのように胸を張り、私や看護者に命令してきた。しかし病気の回復とともに、しだいに元気がなくなっていく。そして、自分には帰る場所がない、と嘆きはじめる。

ひとりで生きていければいいのだが、いつ自分を失うかもしれないという不安は容

易に彼女から去らない。そもそも、病気でなくても、巷で困ったときに頼れる肉親を持たずに生きるのは辛い。そんなことを考えるうちに、もう何もかもいやになっていく。

ときおり、「死ね」という幻聴が聞こえるようになってきた。今死んだら自分の一生は何だというのだろう、そう思うこともあった。しかし、また「死ね」という声が聞こえてきた。自分の一生はまったくの無駄だったと思うのは何より辛い。せめて、今いちど、あの大好きだった少年に会いたい。せめて、今いちど。しかし、また「死ね」という声が聞こえてくる。幻聴はかかるほどに執拗なものなのだ。

彼女はその少年に、面会に来てくれるよう手紙を書いてみた。もちろん手紙の返事もなく、少年も現れなかった。

彼女がなぜ死んだのか、私もよく分からない。ただ言えることは、自殺は病気の悪いときばかりでなく、治りかけのときにもしばしば起こるということである。つまり、辛い現実を受け入れざるを得ないときに起こるのである。

彼女は父親と同じ墓に葬られた。母は大袈裟に泣いていた。兄はボーッと立っていた。寺の者以外に他には誰もいなかった。

病院にはさまざまな宗教に入信していた患者が来る。しかし私は精神病者を長く援助し続ける宗教団体には、いちどもお目にかかったことがない。だから、最後に患者たちは今まで入信した宗教を捨ててしまうことが多い。本当に困った時に救おうとしない宗教は、やはり本当の宗教ではないだろう。私はいつもそう思っている。

PART 2 オカルト・ブームの深層心理

❶精神世界（スピリチュアル）マーケット探検隊

インスタント・ハイのハシゴ体験記！

思想なんかないし、神なんてどうでもいい。退屈したくないだけさ！ ただトリップだけを求める精神世界ジプシーたちとの出会い！

突撃体験ライター
高崎真規子

「あのー、体験ルポ一発お願いしたいんですが。例の『別冊宝島』で」

編集者から取材の依頼。電話を受けたときから、なんかいやな予感がしていた。その件で私はすでに、神様になっちゃったマンガ家とやらの資料を読まされたり、その人を囲むクリスマス・パーティに出席させられたりしていた。こんどはどこへ行けと言うのだろう。

「池袋の駅前なんかで『私はバカですー！』って叫んでる宗教団体があるんだけど、知ってます？」

「いいえ」

「じゃあ、スーフィダンスっていって、原宿のホコ天なんかでグルグル旋回してる人たちは見たことない？」

だから何なのよ、早く用件言ってよ。

「そういうのやって、体験記書いてくれません？」

ゲッ、予感は当たっていた。わりと体験記なんか好きなんですけど……なんて口をすべらせてから、『別冊宝島』から来る仕事は、テレクラ体験とか、こんなのばかりだ……と思ってブスッとしていると、

「いや、宗教に入れっていうわけじゃなくて……とにかくそういう〝修行〟って、一見滑稽でつらそうだけど、実はものすごく〝HIGH（ハイ）〟になれるんだって。だから、

> 「エイズ検査受けて
> ほしいんだけど……」

その〝ハイ〟ってやつ体験してもらおうと思って。まず、手軽に誰でも修行させてくれるところがあるんで、そこ行ってもらえる？　ラジニーシっていうインド人が提唱したトレーニング教室で、ありったけの大声出しながら全身をメチャクチャに動かす、という瞑想、というのかな、それやってみて」

　宗教じゃない、というならまあいいか。

「ただ、入るのにエイズ検査陰性の証明書がいるんだよね……いや、なにもセックス・ヨガ強要されたりっていうんじゃなくて、念のため、念のためでしょうけどね。いい仕事だと思いません？　気持ちよくなって、それで原稿料ももらえて、おまけにエイズかどうかまでわかる。いやあ、いい仕事だなあ」

　そんなにいいことなら自分でやればいいじゃないか。だいたい私は、べつにそんな修行しなくたって気持ちよくなれる。お酒飲んだり、知らない土地を歩いたり、コンサート観たり……そう思いながらも断らなかったのは、その〝ＨＩＧＨ〟ってやつに少し興味があったからだと思う。

フロート・カプセルでトリップ中の筆者。ほんとは全裸で入る

　数日後、エイズ検査陰性の証明書を大切に手帳に入れ、私はラジニーシ瞑想センターに向かった。その瞑想はダイナミック瞑想といって、毎朝八時から一時間ほどやっているとのことだった。

　入口を入るとすぐ、芝居の切符売り場のような受付があり、ヨガの先生ふうの、細くひげのはえた男の人が座っていた。

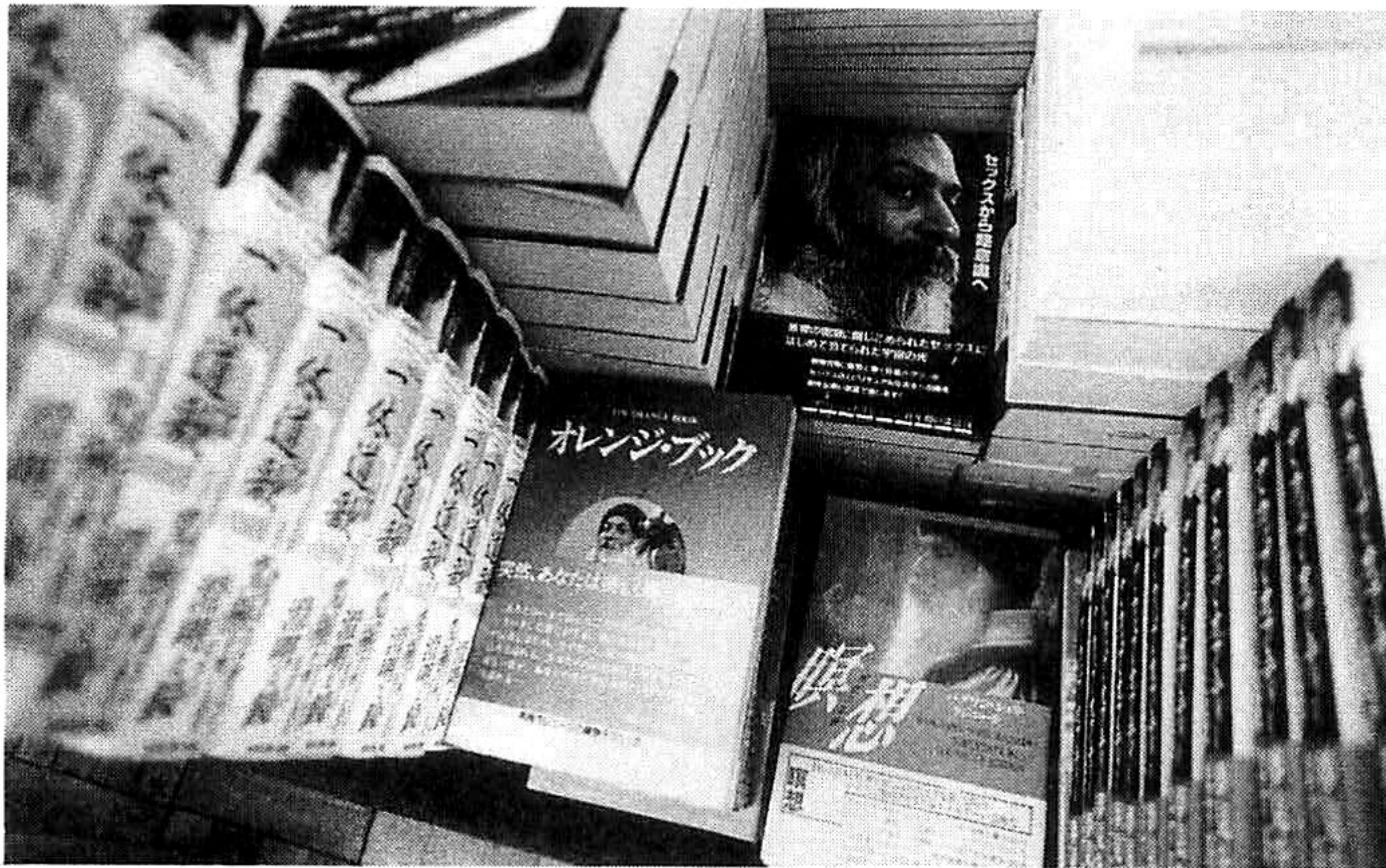
「あの……初めて来たんですけど」

「エイズ証明書は持ってますね」

「ハ、ハイ」

こわごわ差し出すと、大学ノートに私の名前と検査日が記入され、

「三カ月間は有効ですから、こんど来るときは名前を言ってね」

とやさしい返事が返ってきた。

ラジニーシの著作は書店でも人気

一回七百七十円のチケットを買って瞑想室に入る。ヒッピーだのヨガだのってのに先入観があったから、もっと暗いドロドロしたとこだと思ってたんだけど、ジャズダンスのスタジオというか、これからクラブの朝練が始まっても少しもおかしくない、健全な雰囲気だった。

ラジニーシ瞑想センターで 〝無〟の境地を垣間見た！

簡単にやり方を教わってから、軽く目を閉じ、音楽に合わせて瞑想を始めた。最初の十分は、とにかく速く大きく呼吸をする。当然それにつられてからだも動くし、「スーハー、スーハー」と激しい息の音が聞こえる。これだけだって外から見たらそうとう異様だ。が、しばらくすると、だんだん頭の中が白くなってきて、さほど気にならなくなってくる。

いつの間にか曲調が変わり、次がいよいよ、物さえ壊さなきゃ、十分間は泣こうがわめこうが踊り狂おうが好きにしろっていうダイナミック・メディテーション。いくらそう言われたって、いきなりできるもんじゃない。

うす目をあけてまわりを見ると、床を叩いて叫んでる人がいる。そうか、高校の演劇部の合宿で似たようなことやったなと思い、勇気を出して「アーーー」と叫びながらヒコーキのマネをしてみた。さっきの呼吸で少し大胆になってるみたいで、けっこう解放的な気分になってくる。〝いいぞ、この調子だ〟と、外から自分を見たとたん、〝親が見たらなんて思うだろう〟という考えが頭をよぎって、現実に引き戻されてしまった。

また曲調が変わり、次の十分間は「ヒュー」と言いながら跳び上がって、着地のときに子宮のあたりにエネルギーを集中するという動き。これは、まるで強化トレーニングだ。きつい、もうダメかと思ったころ、声がかかり、その瞬間にピタリと動きを止める。〝だるまさんがころんだ〟の静止状態を十分間続けるわけだ。さっきの跳躍で

足は痛いは、息はゼイゼイするは、汗は流れるはで最初はすごくつらいんだけど、呼吸が整ってくると、右手の感覚がないのに気がついた。これがシャーリー・マクレーンのいう〝無〟の感覚だろうか……このまま全身がなくなっちゃったらきっと気持ちいいにちがいない。

　また曲が鳴り出すと、それに合わせて、なすがままにからだを動かす。このころになると、外から自分を眺めて恥ずかしいという思いは消えている。指先から、からだ全体、足先まで一本につながってクネクネと流れてるようでけっこう心地よかった。

　瞑想が終わると、音楽がやさしい心静まるような曲に変わった。そのまま突っ伏している人もいる。私もしばらくぼんやり座っていた。というより、くたくたで動けないのだ。二日酔いじゃなかったのがせめてもの救いだ。

　帰り道、駅の階段を昇ろうとすると、すでに筋肉痛で足が痛かった。電車から外を見ながら、すっかり拍子抜けしてしまっている自分がいた。ここに来る人たちは、自分自身を高めたいと修行し、ある境地を獲得しようというような人たちばかりだ。彼らの瞑想には思想があるのだ。考えてみたら、単にそのキモチ良さを知りたいと二、三回まねごとしたところで、そんな境地にいけるはずもない。

　だいたい毎晩夜中まで飲んでるような人間が、毎朝八時から強化トレーニングのような瞑想をするなんて、よっぽどつらいことでもあって人生をはかなんで、断食して滝に打たれてるようなもんじゃないか。

「この体験で何が起きても責任は すべて自分で負います」

　バカバカしくなって、編集者にデンワした。

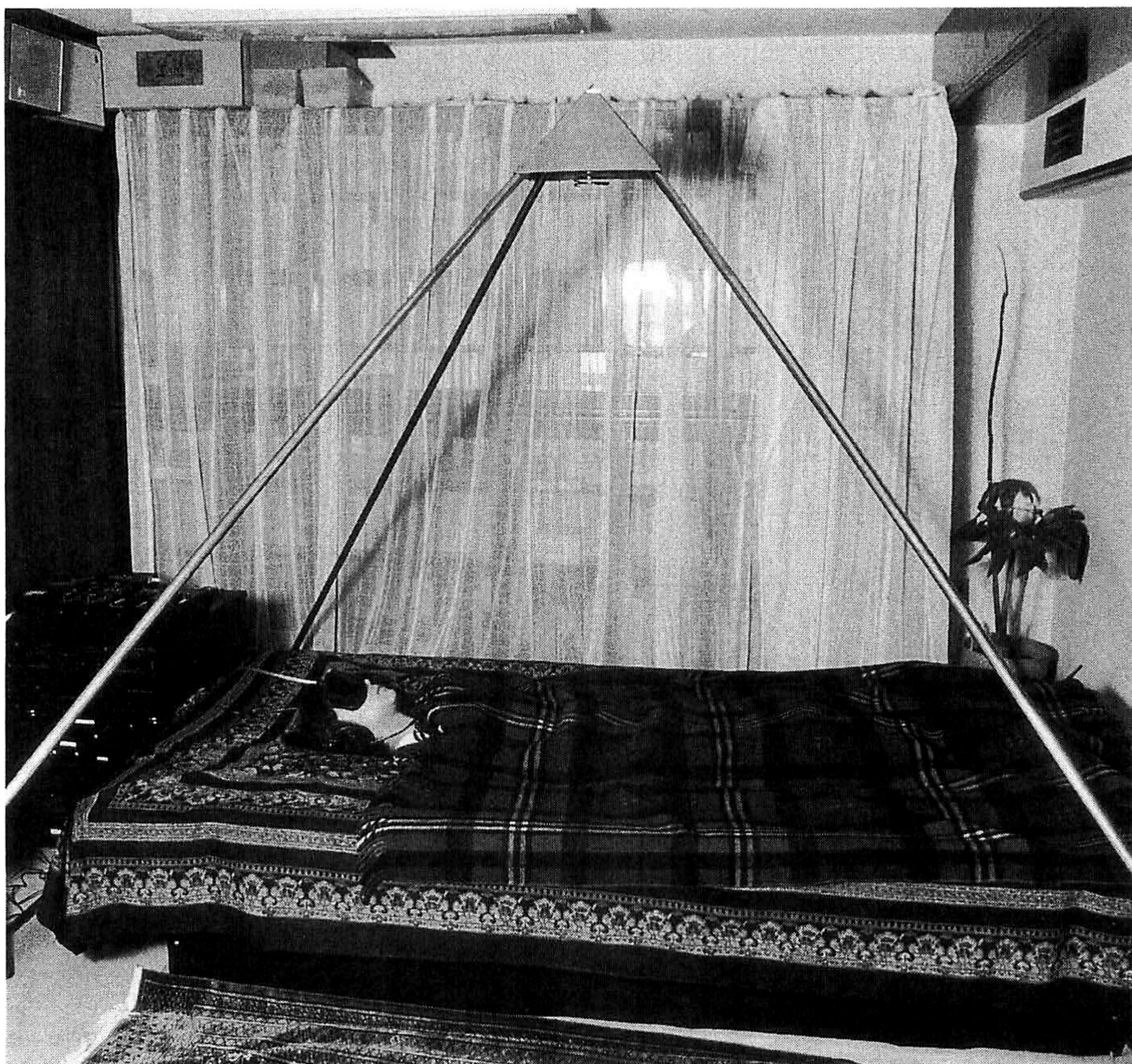
「あの……私一カ月あそこに通っても、その〝ハイ感覚〟ってやつを味わえるか、いささか不安なんですけど……」

「そうですか……。それじゃあね、一時間くらいでハイになれるっていうマシーンがあるらしいんで、そっちやってみてください」

　……めげないやつ……。いいわよ、こうなったらなんだってやってやろうじゃないの!!

　数日後、こんどはそのマシーンの体験をしに、小金井にある「ロダンセ」というサロンに向かった。このマシーンはヴァイブラ・サウンドといって、買うと一台三百万円もする。これが置いてあるのは、日本でここだけ。入会金五万円、一回三十分三千円で二百人ほどの会員がいるとのことだった。

　美容院のような入口を入ると、南米のアクセサリーや小物のようなのが並んでいて、その奥の応接室で簡単なアンケートに答える。好きな音楽や興味あること、そして健康状態……てんかんの人と妊婦はダメなのだそうだ。それといっしょに、〝この体験で何が起きても責任はすべて自分で負う〟というような同意書にサインさせられる。

「これはどういう意味なんでしょうか」

ヴァイブラ・サウンドのマシーン　㊞ロダンセ☎0423(86)0100

と少し不安になってたずねると、
「アメリカではなんでもかんでも裁判ざたになるので、こういう手続きをふむんです。アメリカからきたマシーンなので、そのやり方をそのままここでもやってるだけなんですよ……」
と言われ、そのときはすんなり流してしまった。
さて、いよいよ体験だ。奥の部屋に入るとピラミッド型のワク（テントの骨組だけを組み立てたようなもの）の中にベッドが一台ある。インストラクターにうながされ、横になると、ヘッドホンとゴーグルのようなマシンをつけられる。少しすると音が鳴り出した。そのとたん、閉じたまぶたの裏に白い光がパシャパシャと点滅し、腰のあたりにズズーンと何か感じた。
光は、赤や緑や黄色や青やとメチャクチャに色や形を変え、徐々に足がピクッとしたり、ベッドの上に置いていたはずの手が浮いてるような気がしてくる。ありきたりな表現だけど、宇宙をさまよっているよ

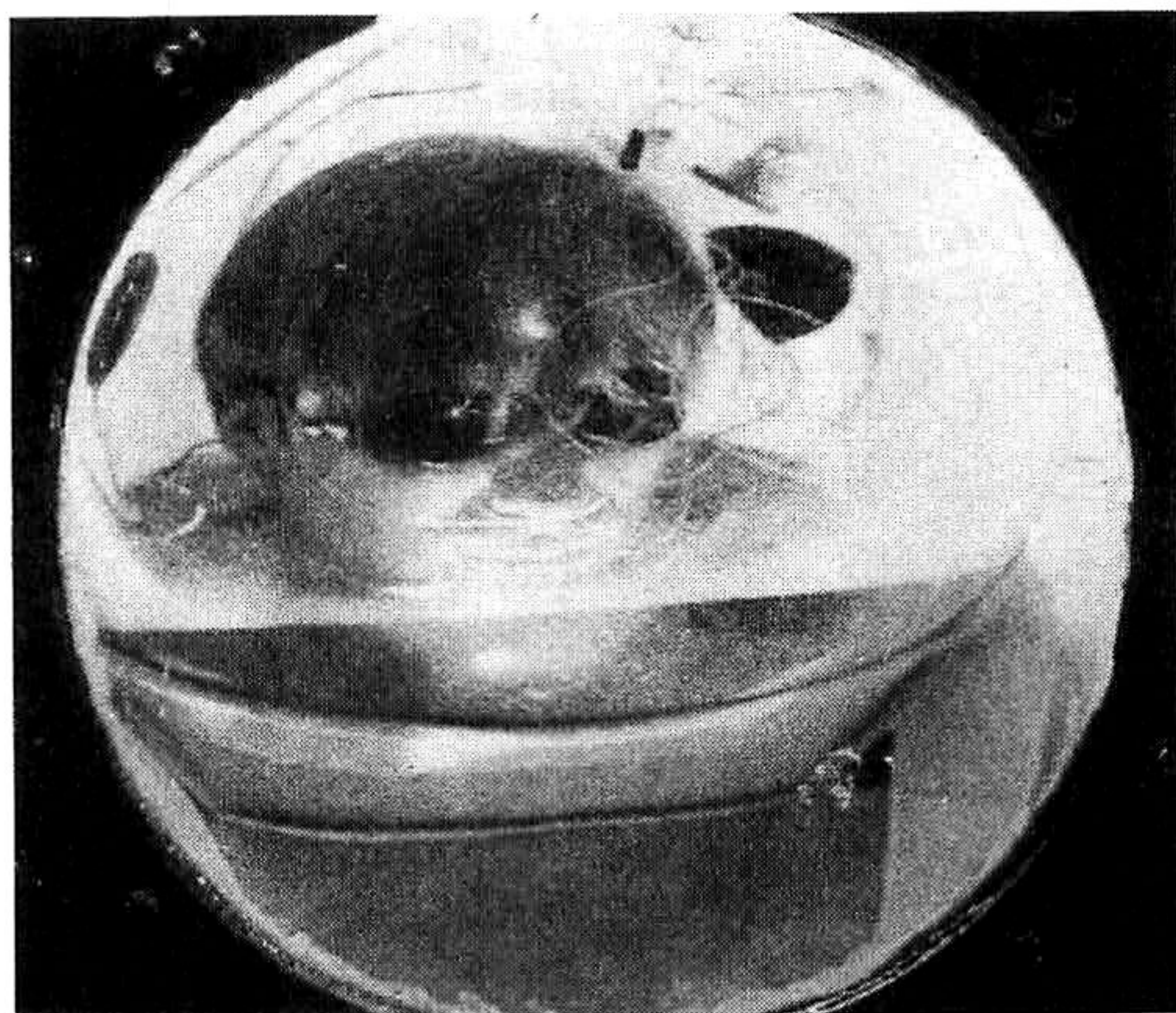
うな感じで気分はなかなかだ。
その間、いろんなことが頭に浮かんでは消え、めぐっているのだけれど、あとになると、とりたてて何か特別なものが出てきたという感じはしない。

ヴァイブラ・サウンドで花の咲き乱れる 天国を見た！

そんなことが繰り返されるうちに、突然パタッと音がやんだ。そのとき、閉じていた目の前に、バァーッと薄紫の地に白い花が咲き乱れている光景が広がった！　数十秒なのか数分なのかまるでわからないのだけれど、天国ってのがあるとしたらきっとこんな感じなんだろうなというような、シーンとした静かな夢のような世界だった。
終わってから別室で感想を書かされたのだけど、手がマヒしているのか、なんとボールペンがうまく持てない。ここにこうしている自分が変な感じなのだ。さっきの世界はいったいなんだったんだろう――。
インストラクターの話だと、会員の人は好きなCDを持ってきたり、講演テープを流しながら体験することもできるのだそうだ。でも、ものすごく強烈に心に影響を及ぼすので、演歌とか暗い歌は困るのだと言っていた。なるほど、これは一種の催眠術みたいな作用があるのだろう。
それに、この今まで味わったことのない、心で直接感じるような快感は忘れがたい。たとえば、恋人がささやきかけてるテープなんかをかけながらやれば、セックスを超えたトリップになるかもしれない。いちど試してもいいなと思ったのだけど、
「ものを書いたりする方なんかは、クリエイティブな発想がどんどんひらめいたっておっしゃるんですよ」
と高尚なことを言われ、なんか口に出せなくなってしまった。
終わってから三十分くらい雑談していたのだけれど、外に出るとまだからだの力が抜けたような感じで、気をつけないと車にひかれそうだった。
フラフラと街を歩きながら、私はすごいところに足を踏み入れてるんじゃないか……という気になってきた。たった三十～四十分でこれだけハイになるということは、そのときの精神状態や、方法を誤るとたいへんなことになる。キモチいいのはいいけど、イっちゃってそのまま帰って来られなくなったらどうするんだ。ふと〝一切の責任は私にあります〟とサインした同意書のことが頭に浮かんだ。
私は自分のからだを実験台に、けっこう危ないことやってんじゃないだろうか。

フロート・カプセルで、 私は胎児になった!!

そんな私の不安も知らずに、編集者からは次の資料が届いていた。
「『フロート・カプセル』といって、よーするに大きなおフロのようなもんだと思います。子宮に戻ったみたいで、きっとキモチいいですよ」
なんて脳天気なんだ、コイツは……。でも、こんどのはアスレチック・スタジオに

ケン・ラッセル監督『アルタード・ステイツ』（ワーナー・ホーム・ビデオ）は、フロート・タンクを描いた映画。主人公は麻薬物質を服用しながらタンクに入ってＤＮＡの記憶をさかのぼろうとする

あるって書いてあるから健康的なんだろうな、などと考えて少し安心し、さっそく出かけていった。私もけっこうこりないやつだ。

スタジオ・ウェルネスの入口を入ると、すぐガラス張りのエアロビクスのスタジオがあり、その横にフロントがある。まだ新しいせいもあってけっこう明るい雰囲気だ。

「カプセルに入る前に少しトレーニングするとからだがリラックスしていいですよ」と言われ、スウェット・スーツを着て上の階にあるトレーニング・ジムで三十分くらいからだを動かす。地下にはプールもあり、おフロからは泡が噴き出してるし、サウナはついてるし、こんなに健康的な雰囲気のなかにハイになるマシーンがあるなんて。どうもピンとこない。

カプセルは六畳くらいの個室に置かれていて、入る前には必ずシャワーでからだじゅうゴシゴシ洗う決まりになっている。液は毎回殺菌してるとはいえ、私の前に油ペットリのおじさんでも入ってたらやだな、と思っていたのでいちおう安心。

「耳栓をして、からだを締めつけるものはみんな外して、裸で入ってください。下着も全部ね」と言い残してインストラクターは出ていった。……とうとう私は、仕事のためなら裸も辞さぬライターになってしまった。

そろーり中に入ると、深さ三〇センチくらい、ヌルヌルとした液が入っていて、おフロよりは少しぬるめだ。体温と同じだという。フタを閉めてあおむけになると、ポッカリとからだが浮いてきた。真っ暗だから、どのくらいその液の中に浮かんでるのかわからないんだけれど、顔とおなかは水面上に出てるようだ。当たり前だ。でなきゃ溺れてる。

最初の十分くらいはインターホンで簡単な説明が入る。

「それではからだを楽にして、まず額に意識を集中して、ゆっくり、ゆっくり力を抜いていきます……次に手に集中して……」と瞑想用のテープによくあるやつだ。

自然にしてれば気分よく浮いていられるのに、そんなこと言われるとかえって意識して、その部分に力が入っちゃうから、ガクンとバランスを失ってしまう。おまけに耳栓がゆるかったのか、耳に液が入ったみたいでグワグワいうし、水蒸気がたれたみたいにおなかにしずくは落ちてくるしで、最初はなかなか集中できなかった。

フロート・カプセルの外観。㊐アスレチックスタジオ・ウェルネス☎03（818）8907

が、そのうちに、みーんな忘れちゃった、というか、気がついたら〝ここはどこだっけ?〟って感じで〝そうだ、私はカプセルに浮いてたんじゃないか〟と思い出す、というへんな感覚だった。眠っちゃったのかな、とも思うんだけど、それにしては目が覚めた覚えもない。上下の感覚もないけど、時間の感覚もまるでない。

CIAの使う 洗脳マシン!?

「終わりです」とインターホンから聞こえても、いつまでも出たくないみたいな感じだった。

ただ、フロート・カプセルのトリップは、中に入っているときだけで、出てからあとをひかない。サウナにでも入ったようにスッキリしている。

「どうでした」と感想を聞かれ、「寝てるんだか起きてるんだかわからないような不思議な感じでした」と言うと、「そうでしょう」とインストラクターは満足げだった。なんでも三十分間で六時間睡眠したのと同じ効果があるそうだ。

ただ、耳栓をしっかり入れないと、耳に中の液が入ってなかなか出てこない。三日すぎても出ないし、ときどき耳がゴロゴロするので、思い切って電話をしてみた。

「あの……カプセルに入ったとき、耳に液が入っちゃったみたいでなかなか出ないんですけど、耳鼻科へ行ったほうがいいでしょうか」

「綿棒とか入れるといいですよ」

（そんなもん、試したに決まってんだろう

が……）
「いろいろやったんですけど出ないんです」
「まあ出なくても、そのうちに塩みたいに固まって耳アカといっしょに取れるから大丈夫ですよ」
「そうですか。それとあの……カプセルに入ると無重力状態になってアルファ波が出るので気持ちいいって話なんですけど、無重力だとどうしてアルファ波が出るんですか」（耳のことを聞くためだけに電話したと思われるのが、子どもみたいで恥ずかしかったのだ）
「ちょっとお待ちください。わかる者に替わります」
　しばらく間があって、
「あの、こちらではわかる者がいないので、カプセルを売っているところに直接聞いてくれませんか」
「いえ、べつに難しい話じゃなくて、どうして気持ちよくなるのかっていう単純な質問なんですけど……」
「すいません。ちょっとこちらではだれもわからないので……」
　施設使用料とカプセル代とで一万円近くもとっておきながら、そんなこともわからないなんて少し無責任じゃないか……。そう思いながら、しぶしぶ教えてもらった番号に電話する。
「人間は寝てるときでも重力で引っぱられて圧迫されてるんです。だから無重力にしてしかも音と光を遮断して刺激をなくすと、脳波が下がってものすごくリラックスするんですよ」
「あー、なるほど……それで、ほかに何か効用はないんですか」
「ありますよ。脳波が下がると、ものを吸収しやすい状態になるんです。ですから中にテレビを設置してゴルフのレッスンとか英単語の暗記とかに使う方法もあるんですよ。つまり脳裡に焼きつくってことです。これはサイバービジョンといって、洗脳意識ですから、アメリカではＣＩＡの管轄にあるくらいなんです」
　洗脳――!!　そんなすごいものをあんな何も知らない人たちが扱っていいんだろうか。たしかにお腹のなかの赤ん坊みたいになっちゃうなら、何でも頭に刷りこめるだろうが。

心をいじられたがる人びと

　ヴァイブラ・サウンドにしても、フロート・カプセルにしても、マシーンのトリップは、ある目標に向かって修行を積み、自分の力を自分で引き出してトリップするという宗教的な瞑想とは根本的に違う。何の思想もなく、ただその場のトリップを楽しもうというインスタント・ハイだ。べつにそれが悪いとは少しも思わない。ただ、人間の心というものをあまく見ると手痛い目にあうんじゃないかな……と、ふと思った。いくら科学が進歩して、精神世界の探究が進んだとはいえ、まだ解明されていないことは山ほどある。心というのは遊びでコントロールできるほど簡単じゃないんじゃな

いかな、という気もしたのだ。
けれど街には、三十分いくらの手軽なハイがどんどん出まわりつつある。そこに集まる人たちは何を求めてるんだろうか。トリップマニアと言われている人に話を聞いてみた。

K氏は出版・映像など広い分野でフリーの仕事をしている。

「ぼくの場合、ハイになることっていうのは、おもしろいことのひとつなだけなんだよね。UFOや超能力にしたってインチキもあると思うし、全部信じてるわけじゃない。精神世界にひたってる人って、信じるとなるとそういう現象を全部肯定しちゃう人が多いじゃない。そういう部分ではぼくはさめてるよね。ただ、精神世界っていうのはまだ一般的じゃないでしょ。だから、おもしろがってるところはあるね。それが当たり前になっちゃったらもうつまらないだろうけど……。でも、宗教を本気で信じられるほど、みんなウブじゃないでしょ。絶対的に信じられるものがなくなってきたから、自分自身の心に目が向けられてきたってことはあるんじゃないかな」

N氏は音楽・映像の仕事を経て、今はコンピューターのソフトをつくっている。

「ハイっていうのは脳の中で麻薬みたいな物質がジクジク出てくる状態なんですよ。不眠トリップってのもあるし、恋愛だって一種のハイだしね。ぼくの場合、最初はロックやってればハイだったのが、それにあきちゃって、セックスとドラッグに走ったけどそれにも限界感じちゃって……それで合気道とかマインドコントロールとか始めたんです。マシーンもやりましたよ。でも今はそれさえもあきちゃって、あまり期待してませんけど――。だからぼくは、ただハイになれるものを追求してるってだけで、神とか、哲学とか、イデオロギーとか、からだにイイ、ワルイとか何も考えないですね」

インスタント・ハイは
人類最後のレジャー

彼らにとって、ハイは神秘でも思想でもなく、ただおもしろいことなのだ。そしてトリップマシーンにかかわらず、身のまわりでおもしろいこと＝ハイになれることをいつも探している。マシーンでインスタント・ハイを求めるという人たちの発想も、まったくそうなのかもしれない。トリップするということは、痛んだ心をいやすためではなく、ただの遊びのひとつなだけなのかもしれない。

そして、そういう意味では、平和が当たり前になり、生活が豊かになり、社会が安定していくにしたがって、いろんな欲望が満たされていって、昔おもしろかったことがどんどんおもしろくなくなってきたんじゃないかという気がする。だから心をいじくることのスリルも含めて、それに快楽をおぼえ始めたんじゃないだろうか。

でも、からだも心も、いじりあきたら、その先はいったいどうするんだろう?

そんな破滅的な匂いを、私自身のなかにも感じるのだ。

❷ 精神世界（スピリチュアル）マーケット探検隊

通信販売で超能力を買う人びと！

「持つだけで幸せになるペンダント」「寝てるだけで暗記できる睡眠学習法」根拠なしの「自信」だけを売る、通販業界の需要と供給！

ルポライター 小原田泰久

従来、多くの人びとにとって、オカルトはもっぱらフィクションとして楽しまれてきた。ブラウン管の向こうで展開されるテレビドラマを観るように、私たちはオカルトと接していた。あくまで、現実生活にうるおいを与える「夢」にすぎなかったはずだ。

それが、ここ数年のオカルトブームは、過去のそれとちょっと様相を異にしている。オカルトを物語として、読んだり見たりして楽しむだけでなく、その世界に自ら積極的に参加しようとする若者がどんどん増えているのだ。

そんな状況を反映してか、最近のオカルト雑誌をパラパラめくってみると、有形無形のオカルト商品の広告がやけに目立つ。面白いことに、いずれも通信販売、通信教育、という形式をとっている。そのキャッチコピーをいくつか並べてみよう。

「ただ、身につけるだけで誰にでも幸運を呼ぶ驚異のヒランヤ・ラピス・ペンダント」「異次元エネルギーは実用化の時代に入った！」「瞑想しなくても中にすわるだけで超能力充満の家庭用ピラミッド」「私だけこんなに幸運になっていいのかな。奇蹟と幸運を呼ぶアステカンブレスレット」「超能力に憧れる必要はない、誰でもすぐに持てる能力なのだ」——。

オカルト雑誌には、これらのオカルト商品以外にも、「潜在能力開発法で、恋愛・仕事・受験すべて思いのまま」になるサブリミナル・テープだの、睡眠学習法だの、速読術だのの広告も多い。ようするに、苦もなく楽を得るという、人の怠け心をくす

超人つくる驚異の気功術、日本初公開

"気"の爆発エネルギーが常識の枠を超える！

中国四千年の禁を破り、"気功術"の実戦技を世界に先がけ、日本にて初公開。幻の秘術と呼ばれていて"気功術"は一般の人では修得できなかったのです。"力"をはるかに超えた"気"の爆発エネルギーをキミも手に入れないか!?

"気"の前には"筋力"も無力だ

この気功術を極め、修得し"気"のパワーを体内で自由自在に発生させることが出来るようになれば、もうこの世の中に恐いものはありません。どんなに相手に体力的に劣っていようと、いともカンタンに相手を倒すことが出来るようになるのです。"気"は生命体のエネルギーそのもの。修業を積んだ者は、相手の体に触れるまでもなく、相手を吹っ飛ばすこともできるのです。うそではありません。"気"の前ではいかなる"筋力"も無力なのです。このすごい"気"のパワーを今、本格的に伝承する100年に一度の機会を得たのです。

気で大男を吹っ飛ばす！

拓天地…相手からの攻撃を受けると同時に即、反撃に変わる形である。意念は丹田にある。"気"の力が勝負!!

術を身につけた後、絶体悪用しないで下さい。

日本の気功術の第一人者金兵衛会長を遂に説得。日本初の限定公開。

武術を学ぶ、すべての人に学んで欲しい

"気"を発する身体は鋼鉄と化します。

日武会の気功術講座の雑誌広告と、一万六千円払うと送られてくる商品

ぐるような商品がオカルトの名を借りてはんらんしているのだ。

通販という怪しげなビジネスとオカルトの取り合わせはいかにも、といったところだが、昔からのいわゆるテキヤ的通販とはかなり規模が違ってきているようだ。なぜなら、この業界最大手のひとつ「オリオン商事」の社長こそ誰あろう、昨年、世間を騒がせた竹藪二億円事件の張本人なのである。

竹ヤブ会社の青年社長

川崎市の竹藪で約二億四千万円もの現金が発見されたという騒ぎが発生した。それだけ多額の現金を「竹藪に置いておいた」というオリオン商事の野口和康社長のコメントは、常識ではとても理解できないものだった。このオリオン商事の男性向け部門が㈱日武会。問題の二億円に関しては、犯罪とは無関係という結論が出て、騒ぎはすでに終結したわけだが、日武会には、どう

してもあの竹藪事件からくる不透明さと不可解さがつきまとう。しかし、あの事件かからそれほど歳月を経ていないにもかかわらず、日武会はこちらの取材申込みをすんなりと受けてくれた。

同社はもともと、「やっぱりデブがいや」とか「モテる男をつくる驚異の兵器」「女を酔わす男をつくる」「短足は伸びる」といったコピーで、バーベルや武道具、顔面マッサージバンド、ニキビ治療器などを通信販売してきた。いわゆるコンプレックス産業というやつだ。

人知れずたくましくなって、いつか突然みんなを見返してやりたい……という若者の陰性の願望を、通販という秘密性の高い販売法がすくいとる。そしてそのノウハウを精神世界の分野にまで拡げたのが最近の、超能力、気功、大除霊術、忍術、催眠術、呪術といったオカルト関連の通信講座なのだろう。

「やあ宝島さん、仲良くしましょうよ」

日武会の針生達也社長は、現れるなりそう言って私の肩を抱き締めた。

針生社長は、昨年夏に突然、主任から大抜擢されて社長に就任したのだという。年齢は明らかにしなかったが、その顔はどう見ても二十歳半ばから後半。その笑顔には、現代っ子らしいなれなれしさと同時に、商売人らしいしたたかさを住まわせていた。

「今度はね、UFOを呼ぶ講座を作ろうと思ってるんですよ」

針生社長は弁舌さわやかに話を進めていく。人を言いくるめてやろうといった駆け引きこそ感じられないものの、オカルトの商品化に対する態度のあまりの安易さには閉口した。

「実は、UFOを呼べるという男がいましてね。彼はしばらくうちで働いていたんですが、ここでの仕事は自分の使命ではない、とか言って辞めちゃったんです。今は道路工事の現場で働いてる変わったやつですよ。彼を説得して講師にするつもりです」

UFOが呼べるという人がいればUFO講座を作り、超能力者を自称する人がいれば超能力講座を開設してしまう。もともと実体がないだけに、作ってしまえば勝ちという感覚なのであろう。オカルトは、その存在を科学で証明することが非常に困難であると同時に、存在しないことを証明することも同じように困難である。UFOがいることは証明できないが、それだからといって、UFOを身近に呼ぶ方法があることを否定することもできない。化粧品や薬のようには、インチキかどうか判定することはできないのだ。

それにしても、この手の当たれば儲けもん的商品は、外れたときのダメージがそうとう強いはずだ。在庫を抱えて右往左往ということにならないのだろうか。

この疑問には、ある関係者が明快に答えてくれた。

「ここの商売は広告先行型です。商品が企画されたら、まず雑誌広告とかダイレクト・メールによって消費者の反応を見ます。まだ商品もできていないのに、販売中だと称

して注文を募るんです。その反響を見たうえで、商品化するかどうかを決めるんです」

なるほど、ある程度の注文、あるいは注文見込みがあっての商品化ということならリスクはほとんどない。通信販売ならではの商法である。

雑誌広告には「限定募集、今回は百名のみ」といった但し書きが設けられている。これは注文が少なくて商品化しなかったときの隠れ蓑なのだろう。

「すいません。今回は募集定員に達しましたので、次回またお申し込みください」

ボツになった商品を注文した人には、こういった断りが入るのかもしれない。

大男を吹っ飛ばす気功!?

㈱日武会が販売している「気功術養成講座」を取り寄せてみた。注文時に電話口で受付の女性が「この講座は在庫がなくなるほど出ました」と言うくらいのヒット商品である。

注文してから約五日ほどで商品は届いた。一セット一万六千円の中味は、一五ページの実践編テキスト五冊、五〇ページの理論編一冊、講座の進め方の手引書（一五ページ）一冊。それに、講師である佐藤金兵衛先生の演武のビデオテープが一巻ついている。

講師の佐藤先生は、開業医であると同時に昭和三十三年から気功師としての活動も始めており、気功術の道場も持っているという。正統的中国気功の伝承者という触れ込みだ。

実は私も、ここ二年ほど気功術の取材を続けている。中国へも出かけ、何人もの気功師に会って話を聞いた。日本人気功師とのつき合いもある。気功術については人並み以上の知識があるつもりだ。その知識から言えば、佐藤先生が指導する気功術は、たしかにポピュラーな中国気功術に間違いない。このテキストに沿って気功鍛練をすれば、心身の健康状態を向上させるうえで、非常に有効なトレーニングとなるだろう。

しかし、である。オカルト雑誌に掲載されているこの講座の広告には、一人の老人が四人の若い男を〝気〟で吹っ飛ばすイラストが描かれ、それにかぶせて「気で大男を吹っ飛ばす!」という文字が躍っている。たしかに〝気〟で人を吹っ飛ばすことを売り物にしている武術家もいる。しかし、それは長い修行の末に得た力で、とても生半可な訓練でそんな力がつくとは考えられない。

テキストを見る限り、佐藤先生の気功術は内気（自分の体内を流れている〝気〟。気功師が手などから出す〝気〟を外気という）を練る訓練と見てとれる。これは、人間を吹っ飛ばすなどという芸当とは無縁のもののようだ。

念のため、直接、佐藤先生に電話で話をうかがってみると、「人が飛ぶなんて、あんなのは催眠術ですよ。気功じゃ飛びません」との答え。

講師の意図とは無関係に商売が独り歩きしてしまっているわけだ。しかし、商品が届

いても、話が違うぞと言って訴え出る客はいないだろう。人に知られず上達しようという考えが前提にあっての通信教育だから。

他愛のない祈り

「会員は今、どのくらいですか」
「全国で三十三万人くらいです」
ラピス・クラブ事務所への電話の返事である。三十三万といえば、新興宗教・崇教真光の信者数、三十六万七千三百九十四人（『宗教年鑑昭和六十三年版・文化庁編』より）に匹敵する数だ（もちろん公称の数字だから信用には値しないが、それは宗教団体の信者数のほうも同じこと）。
奇跡と幸運を呼ぶと言い伝えられている青い石、ラピス。このラピスをペンダントにしたり、時計に組み込んだりしたものを販売しているのがラピス・クラブだ。これもやはり通信販売が中心。オカルト雑誌や女性誌の広告では、数々の会員が自らの幸運体験を、くどいほどに訴えている。

「身に付けてたった二週間でまず、待遇のいい会社に就職が決まりました。また、お金が必要なときに不思議と援助が得られ、窮地を脱することができました」（二十六歳・男性）
「ラピスを手にしてから一カ月、私の十年来の拒食症が、潮の引くごとく自然に治っていったのです」（二十八歳・女性）
「私の場合、つけ始めて二カ月たっても幸運がやってきませんでした。ですが、あきらめかけた三ケ月目、何と片思いの彼からTelがあり、交際を申し込まれました」（十七歳・女性）
「ラピスが着いた日、さっそく首にかけると、さっきまで水色だったラピスがみるみる深いブルーになったのです。びっくりしました。そしてクラス替えで何と、私がずっと好きだった男の子と同じクラスになれました」（十五歳・女性）
他愛ないといえば他愛ない。しかし、わずか六千七百円のペンダントを身につけているだけで右の体験談のような幸運体験が

できれば、そんなありがたいことはない。
ラピス・クラブの広告を担当している㈱ナックの営業部長代理、太田博氏に会い、ラピスの効果について聞いてみた。
「嘘だと言われればそれまでですね。私たちは、ラピスにまつわる伝説やラピスを身につけた人の体験から判断するしかないからです。科学的にはどうなんだと言われると答えようがないのです」
開き直ったような発言にも聞こえるが、太田氏の言うのはもっともと言えばもっともだ。科学的に価値判断できないからオカルトなのだから。しかし、売る側からすれば、だからこそ商売しやすいということになる。
何かいいことが起こったとき、人は無理をしてでもその理由を見つけようとする。そのほうが居心地がいいからだ。ラピスは幸運の到来を説明してくれる根拠として、幸運者の前にニヤニヤと笑って現れるといったものなのではないのだろうか。
「そうではない。ラピスには確かにパワー

がある」

と断言するのが、二十九歳のフリーライターIさん。Iさんは、ありとあらゆるオカルトグッズを集め、その効果を自ら試しているという本格的なオカルティストである。

「ラピスに限らず、宝石類にはある種のパワーがあります。水晶(クリスタル)のパワーは有名です。このパワーが、願いを増幅してくれるのです。たとえば、好きな彼女といい関係になりたいと思ったとき、強く強く願えば、ラピスによってその願望は増幅され、より大きなバイブレーションとして彼女に伝わっていきます」

Iさんは、ユングの理論である共時性とか集合的無意識といった超心理学の専門用語を交えて、ラピスや水晶の神秘のパワーについて、三十分ほど熱っぽい口調で話してくれた。Iさん自身も、この方法で二年かかって、ある女性といい関係になったという。

そんな徹底したマニアのIさんも、すぐに石やオカルト的なものに頼る若者たちに苦言を呈する。

「ヒステリックにメーカーや販売店、広告掲載雑誌に文句を言ってくる人もたくさんいるようですよ。『何もいいことが起こらなかった』って。そんな人はだいたい、持っただけで願いが叶うと安易に思っているんです。まず自我が確立されていないと、霊的な力に頼っても効果は出ません。自分自身が問題に直面できるだけの強いものを持っていてこそ願望もかなうのです。そんなに甘くはないですよ」

当然だろう。たとえラピスになんらかのパワーがあるとしても、部屋に閉じ籠もっていたのでは恋がつかめるはずもない。

ラピスやクリスタルによるヒーリング(癒し)講座は、シャーリー・マクレーンの影響などで最近ブームだというが、ここラピス・クラブでも会員向けのカルチャー・スクールが定期的に開催されている。三月は、右脳と左脳の働きをテーマにした二時間の講座が大塚フォーラム(東京・豊島区)で開かれた。一時間遅れでその講座に潜入してみると、五十人近い会員が講師の話に耳を傾けていた。圧倒的に若い女性が多い。九割は女性。そのうち七割は中高生といった割合で、講師の話がつまらないのか難しいのか、睡魔と懸命に闘っている姿があちこちで見られた。

ラピス・クラブの雑誌広告

講座終了後、会場の前で参加者をつかまえて話を聞いてみた。

「ラピスを持ってて何かいいことあった?」

「いえ、まだ買ったばかりだから分かりません」(二十歳代半ば・主婦)

「ラピスのペンダントは買って、すぐに失くしたんだけど、試験に合格しました。全然勉強しなかったのに」(二十歳・女子専門学校生)

「うーん、どうかな。いろんな男の子から電話がかかってくるようになったことかな」(十七歳・女子高校生)

「いえ、べつに。お守りとして持っているだけですから」(二十代・OL)

　彼女たちの顔には切実さはまるで見られない。今以上の幸せを真剣に求めようと思っているふうでもない。そもそもこの豊かな日本では、超自然的な力にすがらなければ解決できないほどの困難は、そうあるとは思えない。

　何かにすがるという意味では、宗教が最もポピュラーな存在であろう。その宗教でさえ、近頃は不幸や悩みから逃れるために神に「すがる」という信仰的な図式が消え、興味本位あるいはなんとなくという無目的な態度で入信する若者が増えているという。

　渡りに船という言葉がある。棚からぼた餅という言葉もある。まさしくその心境であろう。ラピスはその媒介物として存在しているのだ。自らの手で感動を引き寄せることをせず、自らの行動に責任を持たない世代の断面が、ラピスを通して浮かび上がってくる。

　渋谷にあるオカルトグッズの店「トライアングル」の店長で、店内ではタロット占いもやっている彬里(あり)さんは、占いを通して見る現代の若者像を次のように話してくれた。

「お遊びですね。全然真剣さがない。それに、切実な問題を相談しようというのではなく、常識ですぐに分かることを占いに持ってくる。たとえば、友だちにお金を貸したけどなかなか返してもらえない。どうしようかと来るわけです。請求したのって聞くと、何も言っていないという。じゃ、いちど請求してみなさいといって帰すと、しばらくして、請求したら返してくれました、占いのおかげですと店へお礼に来るわけです。占いがどうのという問題じゃないんですよ。自分の判断では何もできないんですね」

　笑えない笑い話である。

ヒランヤ少年の根拠なき自信

　続く「ヒランヤ」の取材は、複雑な心境のうちに終わった。そのまま家に帰る気になれず、国分寺駅前で、まだ日も高いというのに、ビールを喉に流し込んだ。

　ヒランヤ、というのはある種のパワーを発するとされる図形のことで、それを身につけていればラピスと同じように幸運が訪れるという代物である。六芒星が基本的な形で、それを金属の表面に刻み込んだペンダントや置き物が通販で売られている。

　発明者の出羽日出夫氏は、七年前までサ

ラリーマンをやっていた。あくせく働くことに疑問を感じていたある日、出羽氏は瞑想中に素晴らしいパワーを発する物体と遭遇。それがヒランヤだったと言う。

このヒランヤによって人生ががらりと変わったと言う若者がいる。千葉県市原市に住む松石和博君(十八歳)である。彼を知ったのは、オカルト雑誌に掲載されたヒランヤの広告だった。「ありがとうヒランヤ」と題された松石君のヒランヤ体験が綴られていた。

「心待ちにしていたヒランヤが送られてきたその日から、ぼくのすべてはものすごく変化しました」

と始まる彼の体験談は、〝サントリーで募集の「夢大賞」に一等入賞〟〝ミス学園に選ばれた美少女と交際のチャンスを得た〟などの具体例を挙げてヒランヤ現象の驚異を紹介するとともに、「もっともっと素晴らしい道が、充実した生き方が僕の心の底にはあったのだと気が付いた」と心境の大変化を述べている。

ヒランヤ研究所の雑誌広告

その広告には彼の顔写真だけでなく、住所と電話番号までが明記してある。ただごとではない思い入れがそこには感じ取れた。とにかく私はそこに電話し、国分寺のヒランヤ研究所で会うことになった。

「どうしてヒランヤを買ったか、特に理由はないんですよね。『これが噂のヒランヤだ』という本を読んで、なんとなく買う気になったんです。四千八百円のスタンダードタイプを通信販売で買いました。いろいろと実験をしてみたり、ヒランヤの前で瞑想をしているうち、だんだんと自分が変わっていくのがわかったんです」

最初は、彼が体験談に書いているように、かわいい女の子と親しくなれたり、賞で一等を取ったりという他愛のないものだった。ところが、その他愛のないことをきっかけに、彼は新しい世界へと目を開かれたと言

う。
「今までの自分は、あまりにも固定観念に縛られすぎていたということがわかりました。こうあらねばいけないとか、こんなことはしちゃいけないとか。その規制が、外界に対する働きかけを素直じゃないものにしてきたと思うんです。僕は今、その規制をとっぱらい、自分の可能性を一〇〇%信じて、思ったように行動しているんです。楽しくってしかたないですよ」

オカルト志向、神秘性志向の人たちは、自分たちの考えを、よく意識や想念という言葉を使って説明しようとする。意識は時間、空間を超えたものとか、強い想念が願望を成就させるといった具合にである。そういう話は抽象的すぎて理解しにくいのだが、どうも彼らは、ある願望を実現するためには、努力がその過程として必要だ、という常識を疑問視している節が見られる。

「努力しなければ成功しない、苦労しないと願望は手に入らない、という考えがそもそも、固定観念に縛られているんです。固定観念というフィルターを通して物事を見ているから、行動を起こせなかったりするわけでしょ。起こせないと思う行動を無理やりに起こそうとするから、そこに努力というものが発生するわけです。フィルターを外してしまえば、何だってできちゃいますよ。簡単ですよ」

松石君は、そう言って愉快そうにケタケタと笑う。彼は、自分自身が無視されるタテ社会に入るのがいやだからと就職しなかった。学校へ行くことも無意味だと言う。

「自分を制限しないんです。だから、予定というものも特に立てません。その日、自分がやろうと思ったことをやるだけです」

それはただの現実逃避なんじゃないだろうか、甘えなんじゃないだろうか、と聞くと、

「人間には瞬間しかありません。自分自身を信じて、その瞬間瞬間を大切にしていくことが大切だと思います。自分がやりたいと思ったことをやるのがそういうことなんじゃないでしょうか。人生はそんなに甘くないよとよく言われますが、僕は自分の自由を犠牲にしてある枠組みに入ってしまうことのほうが甘いと思いますけど」

若者らしくない、と言えばそれも固定観念だと彼は言うだろう。しかし、十八歳といえば挫折や自信喪失、自己嫌悪の日々のただなかにいて当然の年頃のはずだ。しばし考え込んでしまった私に、松石君は念を押すように言った。

「自分の可能性を信じていれば、努力なんかしなくても、自分が望むものは手に入るんです」

「じゃあ君の望むものとは？」と喉まで出かかったが、思い直して言葉を呑み込んだ。

「それは自分の意識しだいで、可能にも不可能にもなります」云々といったたぐいのそっけない答えが返って来ることは明らかだったからだ。

楽しくてしかたがない、という松石君の笑顔が頭から離れない。あくせくと仕事に飛び回っている自分が馬鹿みたいに思えてきて、取材の帰り、私はビールでも飲まずにはいられなかった。

「そのままでいいのさ」

こうしたラピス、ヒランヤ、それにサブリミナル・テープなどの、ようするに「自信」を売る商売の背景にあるものは何だろう。

この種の「自信」を売る商売を支える背景を、心理療法の専門家であるライフマネージメント研究所所長、近藤裕氏に聞いてみた。近藤氏自身、イメージ・トレーニングやサブリミナル効果などで、患者に自信を持たせてガンに抵抗する、という心理治療を研究しているのだが、オカルト少年、少女たちに対しては、厳しい見解だった。

「ようするに自分の人生を自分でマネージメントできない。みんな、とにかく勉強さえしていれば、あとは親がなんでもやってくれるという環境のなかで育てられている、というのがいちばん大きな原因だと思います。占いがなぜ流行るかといえば、みんな自分で判断したくないからです。だれかが結果を提出してくれることが快感なんです。プロセスを飛ばしていきなり結果に飛びつきたがるというのが、現代の大きな特徴ですね」

ヒランヤの松石君も熱心に読んでいると言っていた『BASHAR／宇宙存在バシャールからのメッセージ』(ヴォイス社)という本を読んでみた。欧米でブームのチャネリングの本で、地球よりも三百年文明の進んだ宇宙人バシャールが、ダリル・アンカというチャネラー(霊媒)の口を借りて、さまざまな質問に応えている。最近は日本でもバシャールを降ろせるチャネラーが数人登場し、人気を集めているらしい。

三十ページも読み進むうちに、松石君の言っていた「努力の否定」が、バシャールの教えとも共通していることがわかった。

バシャール「努力して、苦労した後にエクスタシーを得るようでしたら、これは非常に疲れてしまいます。(中略)誰も努力する必要はありません。今、あなたは想像できるすべてのものを、今、すぐに手に入れることができます。あなたが想像できることはすでに手に入れたと同然なのです」

欲望を戒め、努力を奨励し、自己や、ひいては世界の変革を目的とする今までの宗教とは違う。ここにはただ全面的な肯定だけがある。そこが今の若者をひきつけるのか。「このままでいいのさ」というコーラのCMソングのような歌詞の歌ばかりが流行る現状とも関係があるのかもしれない。

そういう言葉は非常に気持よく心に染み込んでくる。ああ、このままでいいんだな……催眠術のように心が軽くなっていく。この「すべての肯定」による「根拠なき自信」は、やはり、武道や潜在能力開発の通信講座にからめとられるコンプレックスと表裏一体になっているのだろう。

バシャール「今のあなたがじゅうぶんに今のあなたであれば、宇宙から必要なものは全部その時のあなたに与えられます。情報も、状況も、人との付き合いも、物質、何でもすべてのものが、今あなたに与えられます。自動的に、努力なしで、がんばることなしに、すぐに……」

❸精神世界（スピリチュアル）マーケット探検隊

おまじない少女と占いウーマンの幸せ？

占いと心理分析が好きで、自分が嫌いな死にたい少女は言う、「幸せになりたい！」遊園地のノリで霊能者の話を楽しむキャリアウーマンも言う、「幸せになれて当然！」

フリーライター 那須ゆかり

「コックリさん、コックリさん、私は高校に入れますか？　って聞いたら、いいえ、に入っちゃったんですよぉ。もうショックで泣いちゃいました」

ところが、なんのことはない、彼女はちゃあんと高校に合格した。コックリさんの予言はハズレだったわけだ。

「けっきょくね、キツネとかは、霊のなかでも位が下のほうらしいんですね。あっ、成仏できないでさまよってる霊よりは位が高いかもしれないんですけど。だから、人をいじめたい、人を困らせたいっていうのがあるみたいで。でもね、霊からすればとんでもない話ですよね。突然呼び出されて、こっちの聞きたいことだけ言わされて。いじわるしたくなるのも当然ですよねー」

フーン、そんなものかなあ。

おまじない女子高生のストーン・オブ・ハート

渋谷にある、占いとおまじないグッズを売るお店「トライアングル」に、うつむき加減でひとり立っていた、制服姿の女の子がいた。

店内には、ラピスラズリという霊石（神の霊が宿る宝石。恋人たちを守る石などといわれている）や、身を守る色とりどりの天然石（ひとつひとつの石には、何に効用があるのか、いちいち注釈が付いている。たとえば、女性の愛と健康を守ってくれる石だとか、やさしい女の子になれる石だとか、まるでお風呂用の温泉シリーズみたいに）、何十種類ものタロットカード、石を

使ったペンダントなどがぎっしり並んでいる。

ときどき天然石を手にとったりしながら、制服姿のおかっぱ頭の女の子は、何かを待っているようだった。店の奥では二人の占い師が、簡易敷居で隔てられたボックスでタロット占いをやっている。

おまじないグッズのお店「トライアングル」渋谷公園通り店㊔03（477）7277

十分くらいたったろうか。占いを終えて占い師が出てくると、おかっぱ頭の少女はツツツーと寄っていって、「こんにちはー」とはにかみながら笑顔を見せた。

「あら、久し振りね！」と、まだ若そうな占い師のお姉さんが気づいて、彼女に声をかけた。

「あらぁ、ずいぶん変わったわねぇ。髪型のせいかしら」

「えー、そうですかぁ。そんなに変わりましたかぁ」

どうやら彼女は、お目当ての占い師さんをずっと待っていたようだ。

「今日は？　占い？」

「ええ、お願いします」

「じゃあどうぞ」

二人はボックスに入っていった。奥からは、何やら状況を懸命に説明する女の子の声がとぎれとぎれに聞こえてくる。

十五分か二十分くらいたっただろうか、占いが終わって帰ろうとする彼女に声をかけた。スラリとした体型に小さな顔。アゴが小泉今日子のようにとんがっていて、頬には少しニキビが見える。ハキハキとした声が返ってきた。

――今日は何を占ってもらったの？

「恋愛……」

――どうでした？

「えー、恥ずかしいから。ノーコメントに

してください」

都内の私立女子校に通う高校二年生。去年の六月に、占い雑誌『マイ・バースデイ』でこのお店を知って、以来十回以上通っている。だいたい一カ月に一度の割合で占ってもらっていることになる。

「私って、ほんとすっごく心配症なんですよ。マイナス思考に考えるほうなので。この人、私のことどう思ってんだろうかとか気になって……」

気持ちを明るくするために、いつもこのお店で買った石を手放さない。制服の小さな胸ポケットから、彼女はローズクォーツという名の、きれいなピンク色をした石のペンダントを出した。

「これは、女性のためのお守りで、心をきれいにしてくれたり、ニキビや吹き出物をなくしてくれたりする石なんです」

右のポケットからは、透明な黄金色の石。ダビデスターマークという、星のようなマークのついた黄色い袋に入っていた。

「えーと、これはちょっと名前を忘れたけど、気持ちが明るくなれる石です」

石も、ただ買ってきたものを身につけるのではない。一晩水につけて、月の光のもとで「悪いものが流れてください」と唱えながら、石に水をかけていく。これをすると石の効果は倍増するのだという。月明かりと水と石……、なかなか神秘的ではないか。

——石を身につけて何か変わった?

「だんだんニキビが減ってきちゃったんですよぉ。それと人を思いやることができるようになってきたかな。まだ欠けてる部分があると思うんですけど、あとは自分自身の問題だから」

中学時代はさまざまなおまじないをやったという。だけど、どんなおまじないをやったかは「忘れちゃった」と、いとも簡単に言ってのける。

「おまじないはもうやりませんけど、占いはやめられないです。占ってもらって、一種の心のやすらぎっていうか、こうすれば大丈夫よって言われると心配はおさまる」

自分のことが知りたい
神秘と心理学ファンの女子大生

神秘的、心理的なものに興味を持っているという、都内の私立大学に通う一年生。黒の丸いメガネをかけ、髪の毛はストレート。少しうつむき加減で、ときどきズリ落ちてくるメガネを人差し指で上げながら、トツトツと話す。去年の秋頃から、部屋でお香を焚き始めた。

「毎朝、焚かないとダメなの。たまたま忘れた日にすごく心配なことが起きたし。お香の煙がまっすぐ上る日はきっといいことがある……とか」

ある日、いっしょに暮らす姉が幽体(ゆうたい)離脱したという。それを聞いて、うらやましく

て自分も試してみたが、まだできないのだそうだ。

「あお向けに寝て、眠りに入る瞬間、精神だけが起きあがる。フワッと空中に浮いて、自分が寝ている姿を見下ろすことができるの。姉は怖くてすぐ戻ったっていうけど、私は戻れなくてもいいから経験したい。どこにでも行けそうで、おもしろそうじゃない」

高校二年生くらいまでは、コックリさんとか、好きな人の口に自分の髪の毛を入れたり、鏡の裏に好きな人の名前を書いて逆さに貼ると彼に会える、などといったおまじないのたぐいをいっさい信じなかった。けっこうバカにしてた、と言う。それが、高三くらいから、学校がほんとにいやになって、一時期登校拒否みたいになってから、占いや神秘的なものを信じるようになった。

「現実逃避だよね（笑）」

――学校や日常とは違う世界、場所を持ちたかったということ？

「うん。たぶんそうだと思う」

大学に入ってからは、あちこちの占い師のところに通い始めた。

「占いをして自分がどうなるか知りたい。とにかくいまの自分がすっごくイヤなの」

――どこが?

「全部」

――全部って?

「脳ミソが。考えることが全部イヤ」

――……。

「やっぱ占いとかおまじないって弱い人がやるんじゃない? 私はほんとに自分のことしか考えてないの。早く死ねるか、とか。だって自分の存在がムダ。もちろん意識的には死にたいとは思わないけど」

「精神分析とオカルトって関係あると思う。フロイトは、来世はオカルト研究したいって言ってたみたいだし、アインシュタインは手相学に興味を持ってたというし」

占いで「早死にする」と言われたのがうれしいという彼女。とはいえ、いわれのない不幸を占われるのはゼッタイいやなのだとも言う。

「不幸になるというのはイヤ。占いは人を悲しませるためにあるわけじゃない。神だのみみたいなもんだから。おまじないも占いも精神安定剤。んー、朝にお香を焚いたりするのも、イヤなことが起きませんようにっていうことかもしれないし。死んでもいいと思う人間がどうしてお祈りするのかと……、なんか矛盾してますねー」

ときどき考え込んだりしながら、ゆっくりと言葉を選びながら話していく。

靴下は右からはかないと気持ち悪い、神社やお寺にお参りしたあとは、絶対お尻を向けて帰れない。境内を出るまで、お尻を向けず、後ずさりして帰っていく。ときどき、顔だけ後ろにまわして、何かとぶつからないように注意しながら……。

二十九歳キャリアウーマンの占いはオートクチュール

それにしても、なんで女の子ばかりなんだろう。占いやおまじないの周辺で男の子を見かけることは、まずない。

おまじないを大量生産するメディア

最初に会った女の子は、

「女の子にはやっぱりどっか、誰かに頼りたい、甘えたい、何かにすがりたいって気持ち、あるんじゃないかな」と言っていた。

じゃあ、いわゆる「自立」を目指す女性たちは、占いに頼ったりはしないんだろうか。

「占いに頼らずにいるキャリアウーマンがいるなんて、そっちのほうが信じられなーい」

とスッとん狂な声を出したのは、シナリオライターの二十九歳の女性。

「たしかにね、信じてんの？って言われたら、ウーンって空を見るしかない。でも信じてないとも言いたくないし……」

彼女のまわりでバリバリ働く独身女性たちのほとんどが、占いツウだという。

「あのね、みんなこの年になると、エキスパートになる。たいてい顔見知りの占い師がいるわよ」

四柱推命の欠点はコレよ、星占いなんて当たらない……とそれなりに一家言持つようになるらしい。

そう言う彼女自身もまた、二十歳前後から占いにどっぷりつかってきた。しかし原宿で店を開いているようなのではダメで、口コミだけで密かに知られる占い師がいいのだそうだ。

「政治家のナントカ先生もみてる××さんとか、占い一回何万円もするとこに行っちゃうわけ。パーソン・トゥ・パーソンね。そうでなくちゃ、もう信じない」

同じ星座の人は同じ運命なんていうのは

バカバカしい。自分のためだけのオートクチュール占いじゃないと嫌だというわけだ。

彼女は東京生まれの東京育ち。友だちを見まわしても、希望するソコソコの短大に入っていわゆる一流ドコの企業に就職して、自宅から通い、お金はある、海外旅行にも行く、そうやって、ハタと気づくと二十九歳……、そんな人が多い。

「何でも、あるていど思いどおりにやってきて、ないのは結婚運だけ。変えられないのは未来だけ」

海外留学して、MBIとって、なんて才能が自分にないのはじゅうじゅう承知している。かといって、仕事の先も見えない。

「占いに行く理由の八〇パーセントは結婚運じゃないかな。いまの自分の人生を解決してくれるのは結婚しかない、と思ってるワケ」

彼女はいま、ある一流企業に務めるOLの友人から、出雲大社旅行に誘われている。

「出雲大社神話、圧倒的に効くというのがあって。けっこういい齢して、おさい銭五円でいちどの御縁。四十五円でしじゅう御縁、みたいなことを、ひそかにやっちゃったりするのよ」

社内販売の二万円も三万円もする開運ハンコに飛びつく。

「マジよ、マジ」

お金があっても手に入らないものは、もう祈るしかない。

キャリアウーマンと占い……、それを結びつけているのが「結婚」というキーワード。そのマジな情熱にただただ圧倒されるが、かといってジメジメしているわけでもなく、突き抜けた明るさを感じてしまう。

「けっきょくね、他力本願なわけでしょ。それって非力だったからじゃないかなあ、女が。女の時代だとか可能性のある時代だとかって言われても、やっぱり二十九歳にもなって仕事を続けていくとなると壁に突き当たる。アメリカだったら、カウンセリングが当たり前のようにあるけれど、日本の場合はまだまだ。すがれるものは、男でも社会でもなくて、超現実なものだけなのかもしれない」

最近はもうただの占いじゃ満足できなくて、超能力のほうにいっちゃったと、彼女は言う。

「前世がわかる人とか、未来を透視する人を探すの。サイキックになればなるほど確実だ、と思うようになるのね」

——ほんとにそんな占い師いるの？

「自分で経験してみないと信用できないと思うけど、私はズバリ当たった。いまは、それこそディズニーランドのスター・ツアーズに乗ってるような気分で、その人の話を聞いてるけどね」

うーん、そこまでいっちゃったのかぁ。それにしても、ほとんどこういう世界と無縁だった私も、最後の「ズバリ、当たる」のセリフには少々心動かされるものがあった。

私は幸せになるはずだ、という確信

「幸せにならなくちゃ、おかしいっていう

確信があると思うの、やっぱり」
「幸せ」って、なって当然、のものだったのか！　そういえば彼女、さっき「変えられないのは未来」って言ってたけど、普通、変えられないのは、過去のほうだったんじゃなかったっけ？
「でもね、私の友だちが言ってた。占いに通う回数の多さは、不幸の数と比例するって。ほんとそう思うわー」
うーん。でもその「不幸」ってなんだろう。結婚できないことが「不幸」なの？他力本願じゃなきゃダメなの？
「不幸」という言葉で、「早死にする」って占われて喜んでた大学生のコが話していたことを思い出した。
「死ぬっていうのは、不幸なことなんかじゃないの、私にとって」
――じゃあ、いまは不幸？
「ううん。幸せ」
――もっと幸せになりたい？
「うん。そう、ほんとに」

「空飛ぶ円盤」から「宇宙存在」へ

UFOは宗教になってしまった!

UFOといえばSFの領分だと思ったら大間違い。最近はチャネリングなる宇宙イタコも大流行で、すっかり新興宗教になってしまった。横尾忠則、シャーリー・マクレーンなどの著名人を夢中にさせるUFO教の実態。

科学解説家 志水一夫

UFOとは〝未確認飛行物体〟、すなわち天空に目撃される正体不明のもの、ということである。ところがなぜか、オカルト的、宗教的なものに結びつけられてしまうことが少なくないのが現状である。

ここではその背景や実態に、ちょっぴりせまってみることとした。

アダムスキーはもともとオカルティストだった!

UFOカルト(UFO宗教)とかフライング・ソーサー・カルト(空飛ぶ円盤教)と呼ばれるものの起源は、一九五〇年代までさかのぼることができる。

その元祖は、ポーランド生まれのアメリカの在野哲学者、ジョージ・アダムスキー(一八九一―一九六五)だとされている。

彼は、一九五二年に友人たちが遠くから見守るなかで金星人に会ったと言い、一九五三年に『空飛ぶ円盤は着陸していた』(いわゆる円盤実見記)という著書でそのことを発表した。

そしてその後間もなく、こんどはひとりで彼らの宇宙船に招かれて宇宙人たちのリーダーであるグレート・マスターに会い、太陽系には十二個の惑星があって、そのどの惑星にも人間が住んでいることなどを教えられたという。その時の話も『宇宙船の内部で』(いわゆる円盤同乗記)という著書にまとめられて刊行された(両者合本邦訳『宇宙からの訪問者』文久書林)。

彼の体験記が発表されると、「私も会った」とか「私は彼よりもっと前に会ってい

た」といった、二番煎じ三番煎じ的な人びとが次々と登場してきた。

そして、それぞれに〝信者〟を得て、現代の預言者よろしく活動を始めたのである。

このような〝自称宇宙人会見者〟のことを、UFO研究者は〝コンタクティー〟と呼び、彼らの〝体験〟内容を〝コンタクト・ストーリー〟（宇宙人会見談）と呼んで、たんにUFOの内部もしくは周辺に人影を見たという形の、いわゆる〝コンタクト・ケース〟ないし〝第三種接近遭遇〟（〝接近遭遇〟という訳は、厳密には不正確）とは区別している。

アダムスキーと、彼が会った宇宙人

アダムスキーの話の真偽については、別のところで多少詳しく述べたので（『SFイズム』一三号、八五年一月）ここでは再論はさけるが、意外に知られていないのは、彼の体験記、とくに宇宙人のグレート・マスターの言葉のあちらこちらに、聖書や神智学（セオソフィー）（ロシア生まれの元霊媒、H・P・ブラヴァツキー夫人によって創始された、インド宗教の影響を強く受けた神秘主義哲学の一派）文献の言い回しが歴然と見られるということである。

たとえば、グレート・マスターが太陽系には十二の惑星があると語るところには、ヨハネ伝十四章二節の「我が父の家には多くの住居（すまい）あり」という言い回しがほぼそのまま登場しているという具合である。

だいいち、このグレート・マスターという言い方さえ、神智学のマハトマ、すなわち仏教で言う大師のことなのである（角川文庫版『UFO同乗記』の大沼忠弘氏訳では、このことを踏まえてか、はっきり〝大師〟と訳されている）。

もし日本で、宇宙人に会ったという人が宇宙人からのメッセージだとして般若心経によく似た教えを示したならば、どのようなことが起きるであろうか。多くの人びとはソッポを向き、ごく一部の人びとには熱狂的に迎えられるに違いない。アダムスキーに対する欧米人の態度は、そう考えるとよく理解できるように思われる。

なお、アダムスキーがUFO問題に首を突っ込む前に「ロイヤル・オーダー・オヴ・チベット」という神秘主義哲学のグループを主宰していたことも、よく知られている。彼の死後、彼が若い頃にチベットにいたことがあるという噂が流されたのも、理由がないわけではないのだ。（もしこれが事実なら、そんな重大なセールス・ポイントを長年にわたって隠し通すことができたとは、まったく驚くべき忍耐力である）。

アダムスキーのルーツ、すなわちUFOカルトのルーツは、明らかに現在〝ニュー・エイジ思想〟と呼ばれているような（西

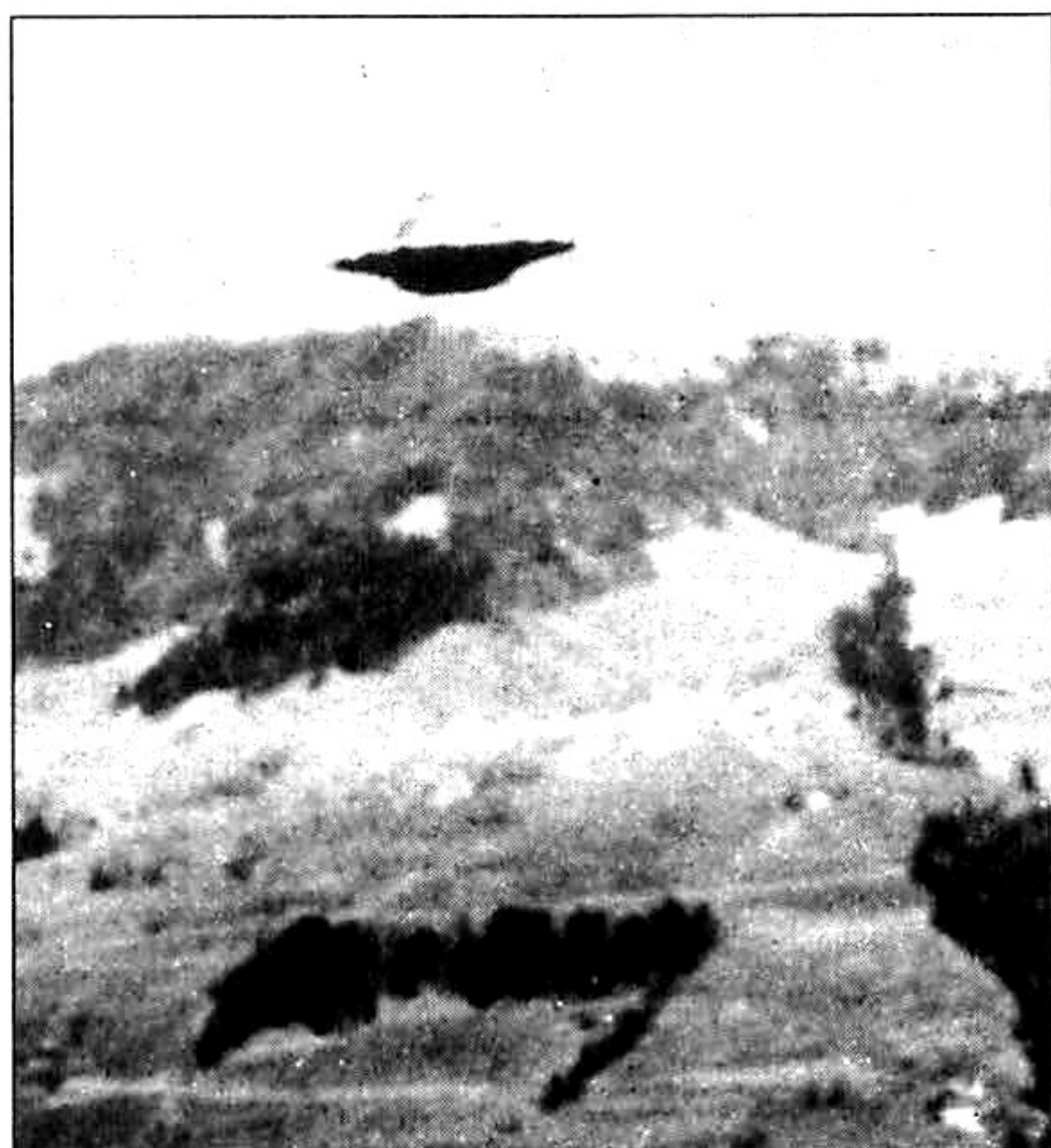
洋流の）東洋風神秘主義にあるのである。

そして、そういう背景についてほとんど知ることができない日本でこそ、いまだに彼がもてはやされているというわけである。世界最大のアダムスキー支持派の団体（日本GAP。会員数三千人以上と言われる）が日本に存在するのは、決して偶然ではないのである。

異端のキリスト教としてのUFOカルト

しかし、キリスト教文化の国ぐにのこと、宗教的なものと言えば、やはりなんといっても聖書である。

アダムスキーが登場した後に雨後のタケノコのように現れ、多くは一時的な人気に終わったコンタクティーたちのほとんどが、その種の〝教え〟を含んでいたようだ。現在良くも悪くも〝第二のアダムスキー〟と呼ばれている、スイスのエドアルド・ビリー・マイヤー（一九三七―　）も例外ではない。

マイヤーのインチキUFO写真

彼は、子どものころから、プレアデス星団のなかのエラという星から来たという、セムジャーゼと名乗る三百三十歳の女性を初めとする宇宙人たちと、百回以上にもわたって会見し、さまざまなメッセージを受け取ったり、多くのUFO写真を撮影したりしているという。彼が撮影したというUFOの写真やフィルムは、日本のTVでも何度か紹介されたことがあるので、ご覧になった方もあるだろう。

その彼も、聖書の原典だ、という文献を、自分が訳したものだと称する『タルムード・インマヌエル』という本を発表しているのである。しかし、その文体が最も一般的なドイツ語聖書であるルッター（ルーテル）版に手を加えた以上のものではないというので、彼の信者を除いては誰も相手にしてはいない。

しかも、現在ではその写真の大部分がトリックであることも明確になっており、彼の話は海外ではほとんど信頼を失ってしまっているというのが現状である。

なお、彼もかつて神智学のグループに属しており、しかも、彼の〝同時目撃者〟のほとんどが、そのメンバーなのである！

最近人気があるコンタクティーのなかで聖書が最も露骨な形で出てくるのは、フランスの元ジャーナリスト、クロード・ヴォリロン・〝ラエル〟（一九四六―　）である。

彼は本名をクロード・ヴォリロンと言い、〝ラエル〟は、異星人から名乗るように言われた洗礼名のようなものらしい。彼のいくつかの著書によると、彼は一九七三年に

宇宙人とコンタクトして地球の大使役に任命され、地球人は異星人の作ったロボット、すなわち聖書に出てくるエロヒムによって作られた存在であると教えられたという。

しかし、彼が宇宙人から教わった内容は、彼の最初の著書の邦訳が『聖書と宇宙人』という題名で刊行されたことにも現れているように、まったく聖書の唯物論的読み変え、ないし新解釈(?)である。

ただ、あいにく、彼の著書のなかには科学上の基本的な誤りが少なくない。また他にもその種のものが多いことなどもあって、海外では日本ほどには注目されていないようである。もっとも、ラエルのほうは頭の良いことに(?)UFO写真の類はとくに発表していないので、他のコンタクティーたちのようにそこから尻尾をつかまれることがないのは、かえって強みなのかもしれない。

日本ラエリアン・ムーヴメントの本

〝予言者〟としての〝宇宙人会見者〟

キリスト教で言う預言者とは、読んで字のごとしで、〝神の言葉を預かる人〟のことである。そして、それが神の言葉であることの証明として、そのなかに神の計画が含まれていることがあるとされているため、将来起きることを予め（あらかじ）言う人、すなわち予言者でもあるというわけである。

現代の預言者たるコンタクティーたちのなかにも、予言を行う人がときどきいる。

有名なところでは、アメリカの双子のコンタクティー、スタンフォード兄弟（一九三八― 弟のレクス・G・スタンフォードは、現在はセント・ジョンズ大学助教授の地位にあり、博士号も持つ正統派の超心理学者として著名）が、その一九五八年の著書『面（おもて）を上げよ』（邦訳『地軸は傾く？』宇宙友好協会）のなかで異星人たちから伝えられた情報だとして、地球の地軸の急激な変動、すなわち〝地軸傾斜〟の発生が迫っており、「大規模な変動はおそらく一九六〇年に発生し、小規模な変動はそれ以前にも突発するかも知れません」（松村雄亮訳）と述べている。

彼らは直接宇宙人たちに会ったのではなくて、そういった通信をテレパシーで受けとったというのだが、UFO出現時にたまたま立ち会っていた警察官たちの宣誓供述書なども掲載されていたためか、同書は日本のコンタクティー支持者たちに大きな影響を与えた。しかし、原著は私家版で、欧米ではあまり注目されず、予言が当たらなかったからといって、彼らもとくに責任を追及されるようなことはなかったようである。

同様のことは、日本でも起きたことがある。一九五〇年代末、前記のスタンフォー

ド兄弟の邦訳本も刊行していた宇宙友好協会（後のCBAインターナショナル）では、一九六〇―六二年の間、とりわけ一九六〇年に、地球の地軸の位置が急激に変化して、大災害が起きると予言していたことがある。同会の忠実な会員たちは、その時宇宙人の円盤に救い上げてもらえるというのである。

後に同会が一般にも公表したところによると、同会の代表であった松村雄亮氏（一九二九―）が、一九五九年七月に円盤の母船内に招かれて、宇宙人の長老と英語で会談した際、このこと（ただし期日は「きわめて近い将来」となっている）を教えられたのだという。

最初それは一九六〇年三月二十一日に起きるとされ、次いで六月二十一日に変更されて、さらに十一月二十二日になった。

いざという時には「りんご送れ、C」という電報が会員に発信され、琵琶湖の岸辺に集まることになっていたという。この〝C〟は、最初はカタストロフィー（大変動、天変地異）のイニシャルだとされていたが、後にチェンジの頭文字だとされた。

同会の会員のなかには、財産を処分して会に寄付してしまった人も何人かいたと言われ、また「どうせ大災害が来るなら」とすっかり生活を乱してしまった女子高生の話なども伝えられている。

この事件の後、同会には幹部の総辞職など、まさに〝大変動〟があり、その後再び松村氏が〝最高顧問〟としてヘゲモニーを掌握してさかんに〝活動〟を行っていたが、一九六七末に突如一般会員を放り出して海外向け会誌の発行を中心とした地下活動に入ってしまい、そのまま現在に至っている。松村氏は現在でもときどき海外のUFO研究団体の会誌で名前を見かけることがあるが、こういった事件があったことについてはほとんど知られていないようである。

海外ではこの種の終末騒ぎがときどき起きており、日本の新興宗教でも終末論的教義を持っているところがけっこうあるのだが、日本でこれだけ大きな騒ぎが起きたのは、大正期の大本教を除いて他に例がない。これも、〝空飛ぶ円盤と宇宙人〟というそれなりに唯物的な外観を持っていたためであろうか。

〝奇蹟〟としてのUFO体験

いわゆる〝UFO宗教〟の人びとの言動を見ていると、彼らにとってUFOの出現は、ちょうど宗教における〝奇蹟〟の役割を担っていることがわかる。

UFOを目撃したという人が嬉々として自分の目撃について語る時の表情は、宗教団体で自分が体験した奇蹟について語る人びとのそれと、あまりによく似ている。彼らは、宇宙人のUFOは頻繁に地球を訪れていると主張しながらも、その一方で、実はそれが稀にしか起きない特別なことであると確信しているかのようである。

ときとしてUFOは、聖パウロを回心させたが如き〝天の声〟として作用することすらある。最近ではむしろ心霊研究家として有名な観もあるマンガ家のつのだじろう

氏が、そういった問題に関心を抱くきっかけになったのは、UFOの目撃であったというし、それ以外にもUFO目撃をきっかけに、それまでの世界観がゆらいでオカルト的なもの全般へと向かうことになった例は少なくないようである。

　また逆に、それまで西洋医学一辺倒だった医師が、東洋医学の効用にショックを受けたのをきっかけとして一気にズルズルとそっちの世界に入り込み、UFOカルトの幹部にまでなってしまった例もある。

　ようするに、その人のそれまでの信念をゆるがせるものでさえあれば、なんでも構わないということなのであろう。しかし、単なる天空に目撃される正体不明の現象にすぎないUFOが、そのようなことを引き起こしてしまうところが独得である。

　たとえばそれが、実際には飛行機や人工衛星か何かの目撃にすぎなかった可能性は、きわめて高いのである。〝UFO学のガリレオ〟として名高い元米空軍UFO研究部門科学顧問の天文学者、ジョーゼフ・アレン・ハイネック博士（一九一〇―八六）によると、米空軍に報告されたUFO目撃の実に九四％までもが他の既知の現象の誤認だと考えられ、最も信頼性の高かった複数の科学技術者による目撃の場合でも、誤認率は五〇％に達したという。

　それほどまでに、天空と宗教的な感情というものは結びつきやすいものらしい。

　日本のUFOカルトの代表格だとされる前記のCBA（宇宙友好協会）の会誌には、UFO〝観測〟中に現れたUFOの飛び方によって、彼ら宇宙人たちが伝えようとしていることを知るための比較一覧表が掲載されたことがあったし、現在でも同様のことを信じている人びとがわずかながらいる。

　たとえば、これまで多くのUFOカルト運動に身を投じてきたことで知られるK氏は、何かわからないことがあると、人里離れた所にひとりで行って、空に向かって呼びかけるのだそうである。「宇宙人に会ったという〇〇さんの話は本当ですか？　もし本当なら、お姿を現してください」というふうに。

　K氏自身が直接私に話してくれたところによると、そういう場合、ときとして彼らは、空いっぱいのさまざまな色のUFOの乱舞といった形で、その答えを知らせてくれるのだという。

　こうして彼は、UFOの教えに従い、前記のラエルの支持団体である「日本ラエリアン・ムーヴメント」に代表されるさまざまな運動に次々と身を投じてきた。しかし、けっきょくはどれも実を結ぶことなく、現在はラエリアン・ムーヴメントの代表も退き、別のコンタクティーを支持している。果たして、UFOの答えは正しかったのだろうか……。

〝守護霊〟としての〝宇宙人〟

　宇宙人信仰ということになると、最近流行している〝チャネリング〟に触れないわけにはいかないだろう。

　これは、一部の週刊誌で〝宇宙イタコ〟

などと呼ばれていたように（『週刊プレイボーイ』五月一日号）、ようするに一種の霊媒現象なのだが、通常の霊媒とは異なって、死者の霊魂などが憑依してくるのではなく、もっと漠然とした〝宇宙存在〟などと称するものが現れて来ることが多いのが特徴である。前記のスタンフォード・コンタクティーと呼ばれていたものも、今ふうに言えば、チャネラー（チャネリングをする人）ということになる。

『愛と追憶の日々』でアカデミー賞を受賞した米国女優、シャーリー・マクレーン（一九三四―　）がいくつかの神秘体験を経てこのチャネリングに夢中になり、『アウト・オン・ア・リム』（一九八三。邦訳・地湧社）以下一連の自伝的著書のなかで絶賛したのをきっかけに、チャネラーは急激に注目を浴びることになった。

日本では、画家の横尾忠則氏が、ある日本人女流チャネラーの信奉者であるとして一部で話題になった。「宇宙人の許可が出ないから」と、インタヴューを断わったことがあるというから、たいした熱中ぶりである。

チャネラーの元祖的存在は、世界三大予言者の一人などといわれるアメリカの超能力者エドガー・ケイシー（一八七七―一九四五）だとされることが多いが、彼の語った内容はもっと宗教的・哲学的背景を帯びており、また現れてくる人格の様相なども異なっていて（ケイシー本人はキリストだと信じていたといわれる）、宗教というよりむしろ道徳の教科書的な内容を持った最近のチャネリングとは必ずしも一致していない（この辺、ケイシーの名声を利用しているような感じで、古くからケイシーに好感を持っている筆者としては、いささか面白くないのであるが）。

そして、旧来の霊媒ともうひとつ異なるのは、現れてくる人格が特定の死者などではなく、その身元確認といったことが、まったく埒外のものだということである。つまり、言ったら言いっぱなしなのである。

こういう点が、旧来の心霊主義者（交霊信者）たちから「チャネリングは審神者（さにわ）（霊媒に現れてきた第二人格と問答して相手を見極める役割の人）なき霊媒である」といわれる所以である。

こうなると、語られる内容によって、その程度を見通すしかないのだが、前記のように、けっきょくは小学生の道徳の教科書並みのものにすぎないことが少なくない。

また、アメリカのあるチャネラーが来日した後で、日本人でも同名の〝宇宙存在〟からメッセージを受け取るようになったという人が何人か現れたが、その内容は、互いにそれほど一致しているとは言えないようである。

それに、最初のうちはよいように見えても、だんだんとおかしくなってくることが少なくないという点も、旧来の霊媒現象とあまり変わらない。

そういった不名誉なチャネリングの代表格は、かつてシャーリー・マクレーンも著書のなかで絶賛していたラムサ（かつて大

バシャール、アリオン……オカルト雑誌をにぎわす数々の宇宙存在

西洋の失われた大陸アトランティスの戦士であったという）であろう。彼は一九八五年に「三年後に疫病が町々を襲って大量死が発生する云々」といった予言を行い、見事にはずれてしまったのである。しかもそのチャネラーであったJ・Z・ナイト自身も、通常の意識状態でチャネリングの練習をしているところを目撃されるなどして、すっかり信用を落としてしまったという（『たま』一九八九年二月号掲載の加藤整弘氏記事他による）。

この種のことは、旧来の霊媒やテレパシック・コンタクティーにしても、近年のチャネラーにしても、いわば日常茶飯事のはずなのだが、とくに日本では、そういう部分については報道されることが少なく、人びとの間に伝わりにくいのが現状である。

少なくとも、たんに出てくる霊の人格や名称が何か目新しい感じがするという以外に、いわゆるチャネリングが旧来の霊媒現象やテレパシック・コンタクト以上に信用できる存在だという証拠は何もないのであ

る。いや、それどころか、確認材料をほとんど提供しないという点で、むしろ信憑性に欠けるというべきであろう。

こういう動向を見ていると、かつてSF作家の平井和正氏が筆者に語ってくれたことを、いやでも思い出してしまう。小説のなかに〝霊〟という言葉を入れたところ抵抗を感じるという人が多かったのが、〝意識体〟と言い換えたところ、まったく同じことなのにそういう抵抗がほとんどなくなったというのである。

〝宇宙考古学説〟のオカルト的背景

一九七〇年代に大きな隆盛を見たもののひとつに、いわゆる〝宇宙考古学〟がある。

これは、遠くはるかな昔に異星人が地球を訪れて、地球人類の文化ないしは起源に関わりを持ったとする説、ないしその〝研究〟である。英語ではエンシャント・アストロノーツ・セオリー（AA説・古代宇宙飛行士説）ということが多い。

これは一九六八年に西ドイツで刊行された、スイスの旅行家で作家の、エーリヒ・アントン・フォン・デーニケン（デニケン。一九三五―　）の著書『未来の記憶』（邦訳・早川書房&角川文庫。英訳題『神々の戦車？』）がベストセラーになったことから、世界的なブームとなったものだが、起源ははるかに古い。

一九五〇年代にUFO研究者たちの間で、現在来ているものなら、過去に来ていたとしても不思議はないではないかといった考えから注目されたのが最も有名なところだが、六〇年代初頭にはソ連圏で宗教の唯物論的解釈として注目を浴びたこともある。

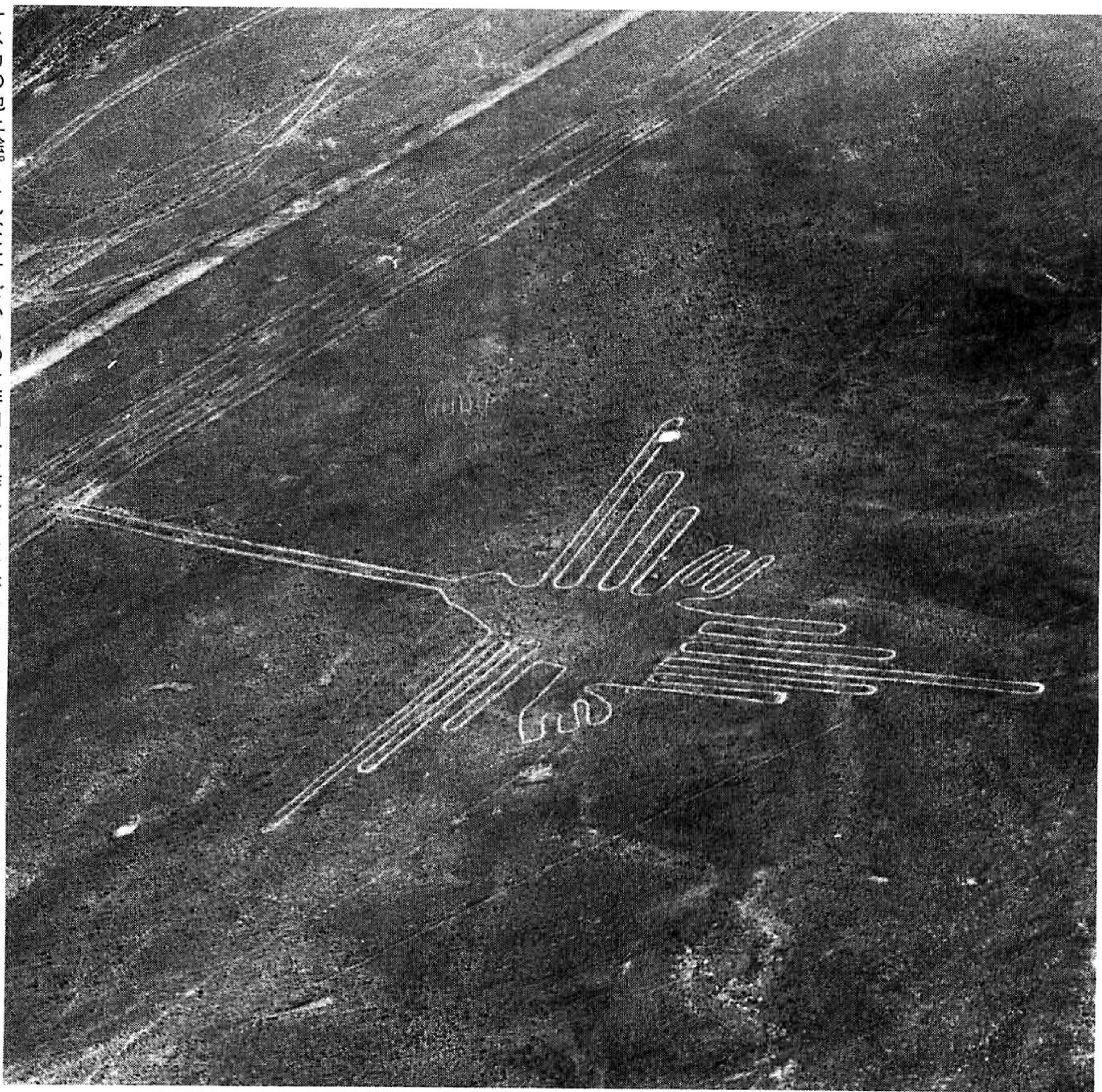
また、十九世紀末の神智学文献にそういった思想の片鱗がうかがえると見る人もいる。

というよりも、宇宙考古学には、やはり宗教的な神秘主義が背景にある。

というのは、宇宙考古学で用いられている〝証拠〟のなかには、かつてピラミッド学（エジプトの大ピラミッドはエジプト人が作ったのではなく、その寸法には聖書的な予言が盛り込まれているといった〝研究〟）や大西洋や太平洋に沈没した大陸にかつて高度な白人文明が栄えていたという〝失われた大陸〟説の影響が明白だからである。

そして、そうした動きは、進化論に代表される近代思想やヒンズー教に代表される東洋思想といった、非キリスト教的な発想に対する当時の欧米人の適応異常の結果であったと考えられる（明治以降の日本のオカルト運動も、多くはこの逆に西洋文明との出会いの衝撃の結果だと考えられる部分が少なくない）。

その代表格とでも言うべきものが、いわゆる〝ニュー・エイジ〟のルーツだとされる神智学の創始者、ヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー夫人（一八三一―一八九一）によるオカルト的進化論『シークレット・ドクトリン（秘密教義）』（一八八八。邦訳・竜王文庫）である。（ちなみに、〝ニュー・エイジ〟という言葉は、前記スタンフォード兄弟の著書にもとくに新造語といった

ナスカの地上絵。こんなにすごいものを非白人に作れるわけがない→宇宙人だ！　という発想の被害者

ニュアンスではなく登場しており、ちっとも新しくない〝おニューの古着〟である）。
そして、そうした神秘思想の流れの言わば終着点が、宇宙考古学だと考えられる。
欧米の神秘主義ブームの背景には、白人の有色人種への優越感的蔑視と劣等感的恐怖とがないまぜになった独特の感情があると見られるのだが、日本では例の「夢があってよい」という論理停止思想に留まっているようなのは、おめでたい限りだと言うほかない。
いずれにしろ、天から来た人びとが我われを導いたり、あるいはズバリ作り出したりしたという発想は、特にキリスト教圏では独特の心理的効果があるようなのである。
例のシャーリー・マクレーンも『アウト・オン・ア・リム』などのなかでチャネラーの言葉に従っていわゆる宇宙考古学説に言及しており、同書がTVムーヴィー化（日本ではVTR販売）されたときにはペルー政府から「わが民族の遺産を宇宙人のせいにしてしまうとはけしからん」と、抗

議があって、一時期完成が危ぶまれたとも言う。

また、最近話題になっている、アメリカ政府が異星人たちと秘密の協定を結んでいるという証拠の機密文書を見たことがあると主張している人の証言でも、異星人が地球人を作り出しただの、世界の主な宗教は異星人たちが作っただのという主張が登場していて、まさに〝お里が知れる〟というものである。

UFOカルトは究極の拝外思想だ！

それにしても、どうも日本におけるこの種の運動にはオリジナリティーが欠けているように思われてならない。

何かひとつくらいは、日本独自のUFO運動のようなものがあってもよいように思うのだが、これまで見てきたように、実に見事なまでに欧米産の運動のパロディーもどきばかりである。

かつてCBAの会誌に掲載されて話題になった、国電の中で地球に隠れ住んでいる宇宙人を見かけた（どうしてわかったのかと言うと、テレパシーでそう感じたので同様にテレパシーで話しかけたら相手がニッコリとうなずいたというのである！）話は、どう見てもたんなる外人さんを見かけたという話以上のものではないし、同会〝最高顧問〟のコンタクティー松村氏に至っては、なぜか英語で宇宙人と話してしまうのだ!!なんという拝外思想であろうか！

もっとも、前記のように、宇宙人会見談に登場する宇宙人たちは、西洋人の顔つきをしていながら、語る内容は東洋的で、やはりここにも拝外思想が見られる。

いや、考えてみれば、高度な宇宙人という発想自体が、まさに究極の拝外思想ではないか！

そう言えば、ひとつ興味深いことがある。

前世は宇宙人だったという人が名乗り出る、宇宙人の使者を自称する人が来日する、宇宙人とテレパシーで交信しているという人が話題になる、宇宙人から地球の大変動が近づいていることを知らされたという人が現れる、新興宗教がそういったことを教義に取り入れる、有名な画家がその種の話に熱中する……。こういった現象は、どれも三十〜四十年前にもあった。チャネリングでさえ、前記のように旧来の霊媒現象の名称が変わっただけにすぎない。

山のあなたの空遠く

ただ、ひとつ異なるのは、当時こういった人びとが口にするのが、金星人や火星人であったのが、最近はもっと遠い未知の惑星になっているということである。

これは、かつて自称イギリスの陸軍大佐のジェイムズ・チャーチワード（一八五二—一九三六）が、太平洋に沈んだという失われたムー大陸をでっち上げた際に、謎の粘土板の記録を発見したのが最初はインドの某寺院だとしていたのが、後の著書ではもっと奥地のチベットの寺院だとされていたことを思い出させる。ちょうどその頃、

インドはそのようなものが発見される場所として必要なだけの〝秘境性〟を失ってしまったのだ。
かつてドイツの詩人カール・ブッセは「山のあなたの空遠く、幸い住むと人の言う……」とうたったが、「光は東方にあり」と教えられた人びとが、ヒマラヤのあなたに幸いがあると思い、次いで崑崙のあなたに幸いがあると思い、そして富士のあなたにも幸いを見つけることができず、さらに東方のカリフォルニアに集ったのは、あまりにも象徴的ではある。カリフォルニアは、東洋に最も近い西洋であると同時に、東洋のドン詰まりでもあるのだ。
そしてついに、求めるものが地球上のどこにもないと悟ったとき、はるかなる山のあなたの遠い空を目指すことになった、というのが、UFOカルトの実態なのではなかろうか。
コンタクティーの元祖であるアダムスキーが自称チベット思想家だったのは、決して偶然ではない。ベストセラーのインチキ自伝『第三の眼』（一九五七。邦訳・光文社&講談社）で有名な自称チベットのラマ僧ないしその化身テューズデイ・ロブサン・ランパこと生粋の英国人のシリル・ホスキン（別名チャールズ・クォン・スォ）が、『チベット上空の円盤』（一九五八。邦訳はCBA刊『我われは円盤に乗った』に収録）というコンタクト・ストーリーを発表しているのも、偶然ではない。宇宙考古学が旧来の多くの神秘主義的歴史観を引きずっているのも、またそれを多くの神秘主義者が肯定的にとらえていることも、偶然ではない。
こうして見ると、『スター・ウォーズ』の主人公ルーク（ルカ）が柔道着もどきを着ていたり、フォース（御力）について老師ヨーダと禅問答を交わすのも、これまた決して偶然ではない。『スター・トレック』に登場するヴァルカン星人、スポックが日本語もどきを話すのも、もちろん偶然ではなく、アダムスキーがヒントにしたと言われるSF映画の名作『地球の静止する日』（一九五一）で、密かに地球人に紛れて地球の調査を行う高度な宇宙人がカーペンター（大工すなわちキリストの本職）という偽名を用いていたのも、やはり偶然ではないのである。
そして、求める秘境がもはや地上から消え失せたとき、宇宙に秘境を求めて火星人や金星人が登場したように、火星も金星ももはや秘境ではないとわかった今、さらに遠い誰も知らない星に何かを求めようとしているのが、UFOカルトの現状なのではなかろうか。
果たして、こんどこそ彼らは「涙さしぐみ帰り来ぬ」とならずにすむのであろうか。そしてもしやはりそうなってしまったとき、それでもさらに今度は異次元か何かに求める秘境を仮託して「山のあなたの空遠く……」と言い続けるのであろうか。
宇宙……。それは、人類最後のフロンティアである。
——TV映画『宇宙大作戦』より

その本音とタテマエ！・虚々実々のエンターテインメント

オカルト雑誌編集者覆面座談会！

編集者に罪悪感はないのか？
信じすぎた読者をどうするか？
鑑定済みの心霊写真はどう処理するのか？
ここだけのヤバイ話！

出席者
A氏►業界最大手のオカルト雑誌A誌編集スタッフ
B氏►昨年休刊したオカルト雑誌B誌編集スタッフ
C氏►低年齢向けオカルト雑誌C誌元編集スタッフ

──やはり皆さん、もともと興味があってこの世界に？

A❖いえ、とんでもない。まず言っとくと、僕は、オカルト雑誌なんて読んだこともなかった。あくまでたまたま紹介されて始めたというだけです。

──じゃあ、神秘学とかにも全然？

A❖そういうのには興味があった(笑)。

C❖僕も、そういう意味では、民俗学や文化人類学には興味があって、ゲゲゲの鬼太郎とか柳田国男とかは好きでしたが。今のオカルトとは関係ないですね。

B❖じゃあ、僕は言っちゃいますけど、根っからのオカルティストですから(笑)。遊びでやってるんじゃないんだ、ぐらいの意気込みはあった。だって、編集って肉体労働でしょ。好きだからやってるんだと思うしかないですよ。たとえばCさんみたいに、文化人類学とか民俗学的なスタンスって、やっぱりオカルトに対してある程度距離をとろうとするんだろうけど、僕なんかドップリですね。

A❖それに比べるとA誌の編集部は、情報産業の大手に就職したら、たまたま配属されちゃったという人が大半ですね。

──どういういきさつでA誌が創刊されたんでしょうか。

A❖学年誌でオカルト特集するとけっこう反応がよかったかららしい。それでもこれだけ伸びるとは、やっぱり思ってぃなかったんじゃないかな。まあ最初は完全にお子様向けの内容で、たいして売れなかった。それをもっと難しくして、文字数をぐっと多くして専門化したら、どーんと売れ始め

たそうです。

——普通は逆ですよね。一般的なほうが売れると思われてた。

A❖マニア的な人、というのがここんとこ急に増えたからじゃないですか。数としてはそんなに変わってないかもしれないけど、今まで隠れてたのが、表だって平気で言えるような時代になった。ただ、やっぱりほんとのマニアというのは、ほんの数パーセントだと思うんですよ。読者の多くは、わあすごい、わあすごい、こんなのウッソーとか言いながら読んでるんじゃないかと思うけどね。

オカルト雑誌編集者の
罪悪感

——B誌は、やはり大手のA誌に対してはライバル意識があったわけですか？

B❖いやもう部数じゃとても太刀打ちできないですから……。でも、A誌に対抗できる手段として、というわけじゃないですが、A誌ならやらない危ないネタにも手を出し

てヒンシュクかってましたね(笑)。
――たとえばオウム真理教なんかについても、B誌ではかなり前から何度も扱っていたわけですよね。
B❖オウムを最初にとりあげて、盛り上げていったのはうちの雑誌だったんですよ。まず、麻原さんのほうからうちの編集部に、取材してくれという依頼があったんです。空中浮遊できるようになったから、と。で、行ってみたら、最初は宗教法人なんかじゃなくて、単にヨーガのアシュラム(道場)だったんですよ。麻原さんがトランクス姿になって、六人の女の子と一生懸命ヨーガをやってた。それでうちの雑誌で二年ぐらいにわたって登場してもらった。その後ですね、彼が最終解脱直前に、インドに行ったのは。それでダライ・ラマにも会って、麻原尊師こそ仏教の正当な後継者であるという御墨付をもらって……。
――そういえば、阿含宗の桐山靖雄も仏教なのになぜか、ローマ法王の御威光を売りものにしてましたね。
B❖どこの宗教団体でも、教勢拡大のためにそれくらいはやってますよ。
――麻原彰晃もたしか阿含宗の前身である観音慈恵会に関わってた人だし。
B❖そうです。実は麻原さんがダライ・ラマからもらった親書というのはようするにチベット難民への寄付金の御礼状みたいなものなんですがね。でも、まあそれでオウムはどんどん有名になっちゃってね。うちの雑誌なんて見下げられちゃって、寄稿してくれなくなった。うちの広告営業やってる連中はすごく怒ってましたね。
C❖僕の場合は、もともとC誌を辞めた理由というのも、こういう仕事をしていていいんだろうか?と思うところがあったからなんです。そこで、ひと言お尋ねしたいんですが、つまり、麻原彰晃という人間がいて、今は社会的に問題になってるわけでしょ。B誌が扱ってた頃は分からなかったわけだし、広告がらみの事情もあったんだろうけど、でもね、それについて責任というか、反省みたいなものがなんでひと言もないのかな。
B❖社会的に問題になっていると言っても、それはスキャンダルとしてですよね。でもB誌としては、麻原さんの修行体系のオリジナリティをある面で評価したからこそ、掲載したわけです。その辺はアプローチの違いでしょうね。
――Cさんは、オカルト雑誌を編集しながら、罪悪感というか、嫌だなという気持があったんですね。
C❖だから、そりゃもちろん、矛盾なんですけどね。今は辞めたといっても、やってた人間が他の人のこと言うこと自体おかしいとは思うんだけど。
――やはり広告がらみのいわゆるヨイショ記事はかなりあるんですか。
A❖実際はA誌の編集部自体ではかなり排除していますよ。ただ、代理店が、押し込んでくる場合があって、そういう場合は否応なくやるときもある。いかにもパブ記事のようには、なるべく見せないようにしてね。でも、そういうことってオカルト以外

の雑誌でも同じでしょう。

——宗教団体とか、オカルト商品、ああいったものを扱う広告業界というのは謎の存在ですね。

A❖弱小の代理店が多いみたいです。一つの団体に一つくらいの勘定で。基本的にオカルト雑誌にはいわゆる一般企業の広告がほとんど入らないでしょう。だから否応なしに載せてる部分があるんじゃないかな。

編集者自身は信じているのか?

C❖もちろん、仕事だからと言えばそれまでなんだけど、A誌とかC誌の場合、学習誌を中心にしてる会社がやってるわけでしょ。その責任というのがあるでしょう。

A❖編集部の姿勢としてはふたつあると思うんです。ひとつは編集者自身が、こういうものを、記事にするに値するかどうかちゃんと検証しているか、どの程度本気なのか。それとも、ただ面白ければいいとか、あるいはクライアントがつけばいいという姿勢なのか、ということですね。ところがね、それはきっちりと分けられないんですよ。両方が相乗効果でやってる部分がある。とくにオカルトって実体のないものだから。

C❖それは分かります。僕だって、オカルト的なものを全面否定するわけじゃない。たとえば西野式呼吸法なんかはインチキらしいと検証したことがあるんだけど、別にそれは西野その人を批判しただけであって、気功とか気という現象はあると思っていますよ。けれど、商売ということになると違うでしょ。雑誌にしても、商売でやるようになったら、矛盾が出てくるのは当たり前だと思うんです。

A❖そうね、基本的に、面白ければいいんだというのは、やっぱりどこかにある。話のつじつまがあってればいいや、とかね。エンターテインメントとして楽しんでもらえるといちばんいいんだけれど、無批判に信じ込まれるのはどうかな。子どもとかには影響あるかもしれない。

B❖僕はCさんみたいに、子どもへの影響を心配したりってことはなかったですね。もちろん、最低のモラルとして、子どもにこんなこと読ませちゃったらヤバイなというものは載せないけど、読む側は自分で判断してほしいという姿勢を貫いているというか。ホントかウソか、なんて価値判断はしませんよ、取材してる側は。

C❖そりゃ、分からないですからね。例の西野が気功で人間を何メートルもぶっ飛ばす、というやつにしても、はじめは疑ってみたけど、見ただけじゃどうしてもインチキとは思えない。けっきょく、最終的には内部から告発者が出たから。「私はわざと飛びました」という人がね。それだって、告発者が利害関係でウソついてる、と言われれば、それまでの話になっちゃう。

——いちおう記事つくるときに検証しないんですか?

C❖調べないですよ。調べたら分かっちゃうから、はじめから調べない。調べなきゃ書けるからさ。知ってて書けば嘘ついたことになる。だからわざと調べないんですよ。

鑑定なんか、絶対出さない。
——でも、ある程度信じてたら、取材するのが怖かったりするでしょう。
C❖C誌で鑑定してもらってた宣保愛子さんは、必ず御祓いして焼きなさいと言うんだけど、編集部はいいかげんですね。けっこう置きっぱなしにしてますよ。
B❖うちの場合も、外注のプロダクションに全部押しつけちゃう。そこ行くと山と心霊写真が積まれてて(笑)。
——宣保さんの鑑定そのものはどうですか?
C❖けっこうシビアですよ。だから、五十枚写真持っていっても、一枚も本物がないって言われることあるから。こっちはもう締切だから、早く決めてほしいじゃないですか。困っちゃいますよ。その事実だけみれば確かに本物っぽいですね。
B❖でもね、写真の専門家に見せると、なんだ、これ全部カメラの初歩的なミスじゃねえかって言いますね。
C❖うちの場合は、宣保さんに、霊がいそうなところを指示してもらってそこを撮った写真も載せてたんだけれども、要するに岩とか、茂みとかしか指示しないんですよ。何もない白い壁とかはとらせない。数やれば顔らしいのは確かに見えるわけですからね。

オカルト雑誌はプロレスである!!

A❖だから、変なたとえだけど、やっぱりオカルト雑誌って、昔のプロレスみたいなものだと思うんですよ。
B❖なんでもありの馬場プロレス(笑)。
A❖昔のプロレスって、最初からみんなインチキとして楽しんでるわけでしょ。ファンはみんな、インチキだって百も承知で、でもそのなかに真実がある、という。ところがたとえば相撲にしたって、実はかなりインチキをやってるわけですよ。相撲は、まっとうなふりをして、実はインチキをやってる。だから相撲はプロレスとは逆の構造ですね。

正当と自称するジャーナリズムも、そういう部分がある。まっとうなふりして実はかなり虚構でしょ。それに対して、オカルト雑誌というのは、読むほうだって、こんなのフィクションだとか思いながら、でもどこか本当のことがあるんじゃないか、本当の部分がどこかにあるぞ、と。
B❖だからオカルトを楽しめない人は、プロレスをインチキだという奴と同じだね。
——要するに最初からキッチュだからこそ、まっとうなものよりも、逆に真実が隠されている、という心理ですね。そこには、もう信じるべき「まっとうなこと」なんてこの世にはないぞ、という心理。いわば既成の価値観に対する反発心がある。
A❖だから、オカルトや神秘主義に夢中の人に、それがインチキであることを説いても説得にはならない。
——そんなの分かってる、と言われるだけですね。サメつつノってるわけだし。
C❖そのへんは、僕がやってたC誌と、A誌は違うと思うんです。C誌の読者は、す

ごく低年齢なんですよね。小学生なわけだから、サメつつノるなんてできない。完全に信じてノっちゃう危険性がある。だからC誌の場合は、マヤ文明とか、ムーとかを中心に、ロマンとして紹介するという姿勢でやってた。B誌みたいに超能力者とか宗教とかは危険だからあまりクローズアップするべきじゃないと思うんですよ。

B❖分かるんですけどね。うちが麻原さんみたいな人を大きくとりあげたという問題ね……。まあ、ウソっぽいかもしれないけども、やっぱりどこかに本物がいるんじゃないか、という期待、それを読者といっしょに楽しんでいるんですよ。

C❖でも、僕の考えだと、宗教法人になった時点で、はっきりいって、そこにはもうほんとにマニア向けのオカルティックなものは、存在しないと思うんですよ。たとえば『SPA!』で中沢新一が麻原彰晃にすごく肩入れしてたけど、あれはおかしい。中沢新一の言うとおり、僕も、宗教とかオカルトというものは、既成の社会からはじきとばされる存在であって、そこが狂気であると同時にまた、魅力でもあると思うんです。でも、宗教団体になってしまうということは、けっきょく今の社会のシステムを受け入れることだから、矛盾が出てくるのは当たり前の話ですよ。少なくとも宗教団体になれば集金しないといけないわけで、そしたらもうそれは資本主義システムのなかに入っちゃうでしょ。

A❖うん、でも読者の心理としてはオカルトと宗教は同列ですよ。たとえば、雑誌自体がもはや一個の宗教団体という雰囲気もある。読者全員が同志だ、みたいな意識もあるような気がするんですけどね。そういう意味では、ただの雑誌というメディアにすぎなくても、世間から認められない価値観を共有する共同体みたいなものがある。組織実体があって、集金システムによって

前世の仲間探しで盛り上がる読者欄と、編集部からの警告

稼いでいる宗教法人とは違うけど、根っこは同じなんじゃないかな。

「あるものはある!!」じゃぁ相手にされない

C❖オカルト雑誌の社会的役割について、言わせていただけますか? 少し前ソ連にUFOが出たというとき、僕はオカルト雑誌がどういう対応をするのか、ものすごく興味があったんです。これを機会にマニア誌としての殻を破って一般に広くアピールするかもしれないって。しかし、そういう動きはまるでなかった。また、『女性セブン』のニセ心霊写真のときも、オカルト雑誌は社会的なアプローチをしてこなかった。そんなだからオウムのときもオカルト雑誌はバッシングさえされない。要するに世の中に相手にされてないわけでしょう。

A❖オカルトが今もってずっとマイナーなのは、一般の批評精神に耐えうるものを出してないというのが大きいんだよ。努力してるんだけどね。だってUFO見たんだからしょうがないだろう、という居直りから始まっちゃってるから、説得力がない。俺は見たから絶対に存在する、信じない奴には何も見えないというんじゃ常識の側もただ排除するしかない。

——信じてると、ないものも見えちゃうってこともありますからね。

B❖でもUFOは信じてる人間のほうが見やすいというのも事実だし。

——そこがおかしい。ほんとにインチキやってる人でも、自分はインチキだと思いながらやってる人はいないと思うんですよ。チャネラーなんか特にそうだけど、自分でしゃべってるくせに、何かにしゃべらされていると思っている。

A❖いや、チャネリングでは、明らかにそのチャネラー個人が知っているはずのない情報をしゃべってるとしか思えないことは確かにありますよ。でも、やってるうちにちょっとチャネラー自身が演じ始めちゃう時期があるみたいですね。そのポイントは明らかにあって、自分自身が知ってますよ、きっと。

B❖例のバシャールさん、僕も公開チャネリングの会場に行ったんだけど、なんと世間話してるんだもん。一回目の来日のときものすごい宇宙的な話とかをしていたのに。でも、だからインチキだというんじゃなくて、チャネラーとバシャールとが同一化してきた、というか日常と神秘がひとつになるステージに達したからだと、僕個人は考えたいんですけど。

A❖けっきょく、信じる人も信じない人も共通の認識ができるものを提出しないと意味がないんですよ。僕は忘年会で、メタルベンディング(スプーン曲げ)パーティをやったことがあるんです。僕なんか半信半疑の人間なんですけど、僕も曲げてしまったんですよ。そのときはさすがに驚きましたね。それは自分の常識的概念と、実際の宇宙の現象みたいなものが、やっぱり完全にフィットしてないわけで、そういうことはいくらでもあるでしょうから。

ハマりすぎた読者への アフターケア

C❖そのへんの認識をしっかりしたところでやらないと雑誌はあぶないですよ。子どもが読んでるんだし。

——おかしくなっちゃった読者が編集部に電話してきたり、直接来たりすることはありませんか?

B❖半年にいっぺんずつくらいありましたね。たとえば女の子でね、毎晩、夢のなかで男に犯されてるという手紙が来て、電話もかけてくる。たいていそういう電話は僕のところにまわされちゃう。

——どう対応するんですか?

B❖しょうがないから、いちおうカウンセリングというか、一時間ぐらい話を聞いてあげます。そうすると妄想の背景みたいなものが見えてくるんですよ。どうやらやっぱり人間関係とか、受験勉強とか、家族関係に本当の問題があって、でも本人はそちらから無意識に目をそむけてしまって、霊的な問題にすりかえているらしい。で、話をとことん聞いてあげると、それっきりになることが多いですね。

——魔術とかを雑誌のなかに出しておいて、効きすぎちゃった子には、ダメだよ、そんな本気になっちゃ、と言う。

C❖そこがキツイところですね。

B❖だから逆に読者を信頼したい。世俗的な問題を超えた部分で、ほんとうにそういう情報が必要な人はいますからね。問題のある人は、オカルトなんてやらなくても、どこかで問題が表面化する。

C❖僕はもともと、オカルト雑誌の前に教育関係書をやってたから言うんですけど、彼女たちはようするに大人になるのが嫌という気持は絶対あるわけでしょう。だから、それに対するひとつの叫びだと思うんですね、極端に言っちゃえば。

——子どもってようするに、自分が世界の王様でしょ。だからオカルト雑誌の読者欄で小・中学生が、私は戦士だ、とか、ユダヤとフリーメイソンの陰謀が云々と、天下国家を論じちゃうのかもしれない。

C❖あのユダヤに対する幻想はすごく危ないですね。日ユ同祖説とかも。ユダヤ史観もそうなんだろうけど、世紀末を救うのは自分たちの民族だという話になるでしょう。日ユ同祖説の根拠になってる竹内文書とかの一連の偽書が出てきたのは、ほとんど幕末から昭和初期にかけて、つまり皇国史観がいちばん盛り上がってた時期ですからね。そういった歴史的な意味で問題にすべき点が問題にされないまま、その手の本が次々に売れてしまうのは問題ですね。

——ユダヤ人陰謀の根拠とされてるプロトコルだって偽書だしね。で、歴史と言えば、オカルト雑誌で謎の古代文明の記事を読むと、学校で習う歴史とは、全然違うことが書いてあるわけでしょ。そのとき子どもの価値観はふたつに引き裂かれるんじゃないですか。

C❖でもそれは必要なことだと思いますよ。今の学校で教える歴史というものは、全部西欧史観なわけでしょう。要するに、先進

偽史、偽書、陰謀史観が乱れ飛ぶ誌面

国から見た歴史観。学校が教えることだけが真実ではないんだ、ということを知るだけでも意味がある。

A❖だから、やっぱりそれも、「家族」と同じように、「学校」という制度そのものが力を失っているということを証明してるんじゃないいか。

B❖栗本慎一郎みたいな先生がいたら「アトランティスは状況証拠からいって、あったとしか思えません」って、生徒に教えちゃうんじゃないかな。

A❖ただ、そういう投書を書いてくる読者って、わりと頭が良くて、勉強なんかきちんとやってて、ただもっといろんな世界を知りたいと思ってオカルト雑誌を読むという子が多いと思うんですよ。だから、そんなに心配するようなことはないような気がするけど。

C❖ツッパリは、バイクとか、あっちのほうに行っちゃう。シンナーとかね。

親や学校のスキマ産業としての
オカルト雑誌

――とは言っても、やっぱり子どもって幻想と現実の境目がないし、ウソをついてても、だんだん自分のウソを信じちゃう。

A❖たとえば、小学校高学年ぐらいの女の子がね、マリア様が自分についてるんだという。それで、マリア様にお願いしたら願いがかなっちゃった、というような話をよくするわけですよ、子どもは。それは大人にしてみればウソだということになるんだろうけど、子どもにしてみれば、マリア様というのは現実なんだ。

――サンタクロースとか「となりのトトロ」とか。

A❖こういう雑誌が売れているというのは、やっぱりそういう現象が、子どもたちの世界には現実としてあるからなんですよ。それを否定しないで聞いてくれる親が、どこ

にもいない。学校の先生もダメ。それで雑誌とかに頼らざるを得ない。

C❖そういう不思議なものを信じる気持というのは、大人になったら忘れちゃう。競争社会のなかで埋もれてしまうんだけど、ほんとはそれをずっと保つのがいいと思うんですね。子どもの心というのは、絶対いつまでも持っていられないものだけど、だからほんとはそういう気持がつぶされないように、なおかつ宗教とかに行かないような場所がいちばん求められてると思うんですよね。そういう役目を担わなければならないのが、今はオカルト雑誌じゃないのかと思っているんですけれど。

A❖やっぱり、今の社会はそういう気持をちゃんとコントロールできるだけの制度とか知恵が遅れてるんだと思うんですよ。そういうものをちゃんと解放して、残すべきことを残してやれば、日常にちゃんと帰ってこれるのに、無理に抑えつけちゃうから、いつまでもグジュグジュ、エネルギーの高まった状態で……狂気とか宗教のほうにいっちゃう。うまく解放してやっていけば、それは日常と接点を保てると思うんですよね。オカルト雑誌というのは、ある程度それをまっとうにテーマに出してるわけですよ。非常に制約のあるなかで。ただやっぱり日常との接点を持ってるとは言えなくて、変なことを変なままやってる部分がある。

注意書きなき精神世界カタログ

B❖さっきから、雑誌とか、オカルトで商売する人たちの責任が問われてるんですけど、そういう商品を買う側の問題はどうなのかな。実際に、クリスタルとかラピスとか買ったんだけど効かない、効かないって文句言ってくる人たちは多いですよ。

C❖でも相手は子どもだから、しかたがないでしょ。あ、若い女の子も多いか。

B❖二十歳すぎてやってる女性もいますよ、けっこう。

A❖女性週刊誌ってオカルト雑誌と同じだもんね。水子供養にしたって、やっぱり昔からある騙しのテクニックだしね。

——ああいうヒランヤとかラピスとか、何か根拠あるんですかね?

B❖懐疑的なスタンスでは何も感じられないんですよ。内部感覚というか、ある種の感受性を前提としている。

A❖いや、まず言わなくちゃいけないのは、そうじゃなくて、ポジティヴ・シンキングというものがあるでしょう。不安にかられてビクビクするよりも、自分はこれを持ってるから大丈夫、と思ってしまって、不安を取り除いたほうが、物事がうまくいくということ。それを前提にして、つまり人間の持ってる意識の力というものを、まず認めるか認めないかということが前提としてあると思うんですよね。

——ヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメントですね。

A❖それで、ああいった道具というのは、たしかにインチキがいっぱいあって、玉石混交なんです。でもそれこそ鰯の頭も信心からという話で、インチキなものでも本当

に信じちゃえば、それで、その人自身のエネルギーで物事がうまくいくということはあるわけですよ。

——それはあるでしょう。でもそういうオカルト商品なしでもポジティヴなパワー出してる人もいっぱいいるんだから。

A❖ええ、それがいちばんいい。そこに行くための道具として、必要とする人がああいう道具は使えばいい。

むしろ、問題は、エゴの欲求を満たすことだけを目的にしていることじゃないですか。自己改造セミナーとかセラピーとかでも、自我の幻想を拡大、拡張する傾向がある。たしかに一瞬は積極的なエネルギーが出てくる。でも、幻想の拡張だから、時間がたてばとうぜん現実とぶつかって落ち込むわけですよ。一方では、正当に自己の創造的な部分を開花させようとするシステムもある。そこを分けもしない。玉石混交のままますべてがお膳にならんでいる。これが今のスピリチュアル・スーパーマーケットの現状だと思うんですよ。

「悟り」はいいから、気持ち良さだけ欲しい

B❖それをいうなら、オカルト雑誌の実用ページなんかでやってる、瞑想法とか魔術なんかのハウトゥも、見方によっては危険ですよね。伝統的な修行の世界では超能力なんかついて当たり前なんだけど、ほんとの修行の目的は、超能力なんかじゃなくて、悟りとか、超越的な境地に至ることであって、それは、ちゃんとした伝統的な修行の世界に入れば、教えられるんだけど、オカルト雑誌とか、マイナー・オカルト団体とかは、呪文を唱えると変身できるなんていう部分だけクローズアップしてる。

A❖やっぱりこういう雑誌の読者は、なんて言うかな、コンプレックスがあってね、強くなりたいとか、超能力で人に注目されたいとか、そういう願望をすくいあげてるんじゃないですかね。

B❖伝統的な修行の世界に入れば、間違いのないように修行するにはどうしたらいいかというノウハウがシステムとしてあるわけですよね。だから修行やってて、ヴィジョンが見えたとか言っても、師匠は「それは違うぞ、ほんものの悟りじゃないぞ」って、ちゃんと指示してくれる。でも、そういう修行のシステムのないところで個人が勝手にクンダリニーとか上げちゃうと、頭がアッパッパになっちゃう危険があるわけでしょ。こういう世界に入るということは、エゴというものをちゃんと確立して、さらにそれを超えるためのものなんだ、という認識がなくて、今の人たちはスタート時点が、即物的な願望とかコンプレックス解消でしかない。

A❖日本の消費社会自体が、エゴを拡大する、個人の充足第一の社会だからね。利己的欲求のみをあおるシステム。それに対応して超能力で金儲けができるとか、モテるようになるとかになる。

——でも、それは不治の病なんかは別にしても、自分の努力で解決すべきことでしょ。昔みたいな階級社会じゃなくて、機会均等

の自由競争資本主義なんだから。

A❖だから、そこからちょっとハズれちゃった人用の受皿というのが、本来、宗教の役目なんですよ。

——それが今はちゃんとした宗教には入らないんですよね。「信じれば救われる」じゃ、今の人にはアピールしない。

A❖そうそう。だからもう宗教も信じられない人が多くなった。受皿になってないわけ。ちょっと頭のいい子は、今の社会の価値観がいやだな、と思っても、でも宗教なんてもっと信じられない。

——そしたらみんな禅でもやればいいと思うんだけど。禅は人気ないらしいですね。

B❖禅が理想とするのはメンタル界の境地なんです。神でも仏でも、とにかく何かに依存すること自体がナンセンスという、「覚の境地」ですね。悟りのレベルにはまずね、現実の物質的世界があるでしょ。で、その次にアストラル界という世界があって、その先にあるのがメンタル界。アストラル界っていうのは、いろいろ奇跡が起こったり、超能力を体験したりとかで、すごい肉体的、精神的快感がある。断食して一週間たったら、世界のすべてが銀色に包まれて、至福感に満たされたとかね。ようするに今のオカルト・マニアが求めてるのはこの快楽なんです。だからアストラル的なレベルにはまっちゃったら、本人がそこで、いやこれはやっぱりなんか違うという感覚を持ってなかったら、抜け出せないんじゃないかな。

A❖〝おためしを受ける〟という用語があるんだけど、宗教とかオカルトで、お金が儲かったりとか、いいことがいっぱい起こるでしょ。それが終わると、今度は逆にどんどん落ち込んでいく。もうドン底にいくわけ。倒産したりとか、人生上のあらゆる苦難が襲ってくるんですよ。それでも信仰を続けるかどうかという、ためしが来るわけですね。それは、信仰のプロセスとしてよく言われるんですけどね。おためしの部分は宗教もオカルトも宣伝しないですよね。

B❖そこを超えてやっと「悟り」に向かうんだけど。悟りじゃ商売にならないでしょう。超能力とかを目当てにオカルトに入った人に、女とか金とか幸福だとかの価値観をすべて捨てて自分ひとりになることなんだよ、といったら、じゃあ俺、オカルトやらないよと言うでしょう。

宗教ハシゴから、一人一宗の時代へ

A❖宗教の考え方も変わってきてるんじゃないかな。今までのやり方としては、出家というのがあって、日常の価値を一回否定してゼロからスタートさせるわけだけど、そういうのを別に否定する必要はないんだ、満たしてしまえばいいんだ、否定するとかえって、それが妄想になって帰ってくるんだ、という流れもあるよね。金を稼ぎたいなら金を稼いじゃえと。稼いじゃえば、もう次のステップに上がるんだというふうに。

B❖肉と霊というテーマがあって、今までは肉を排除して、霊の高みに至ろうというのが宗教だったでしょう。ところが十九世

紀末ぐらいから、神秘主義思潮のなかに近代オカルティズム運動が起こって、ブラヴァツキーとかシュタイナーとか、グルジェフとかの神秘家が現れたんですが、彼らは、肉体とか物質というのは排除すべきものじゃないんだと言った。これがある意味ですごく大衆化されて、じゃあセックスしても、金稼いでもいいじゃないかという、自分と世界の全面肯定という方向に行ってるんじゃないかと思うのね。

A❖普通の生活をしながら、むしろそのなかで覚醒することのほうが大切だと言い始めている。

――オカルトがブームになったのは、そのせいでしょう。今は誰でも超能力者になれるみたいな雰囲気になった。

B❖オカルト商品の広告出してるクライアントにしても、もともとは単なる読者だったという場合が多いんですよ。で、それが高じて、超エネルギーとか念力マシンを、とうとう発明しちゃったと。でも、オカルト雑誌しか広告出すところがないというんで、広告クライアントになっちゃう。だからある意味では、あの広告主は読者の代表なんですよ。

A❖やっぱりそういう時代なんじゃないですか。教祖様がいて、その人を通して神様なんかと話すんじゃなくて、もうみんな直接自分で霊界とコンタクトしちゃう。もう一人一宗教、みたいな。

宗教って二つのレベルがあったと思うんです。たとえば仏教の歴史を見ても、一方に浄土真宗とか観音信仰とか、お題目あげてれば、信じれば救ってくれるんだという非常に民衆的なものがあって、一方に禅みたいな冷静な覚醒の世界を求めるものがあって。そういう二つが今はつながりつつある時期に来てるんだと思うよ。ただ無知蒙昧な民衆と、すごくさめたエリートとが分離してるわけではなくて、今まで大衆とか言われていた層のレベルが上がってるから、もう誰も本気でアホみたいな教祖様にはのっからないわけよ。今まではみんな自分をなくして、何かに依存したかった。それは、神様でもいいし、国でもいいし、会社でもいいし、家でもいいし、恋人でもいいしさ。いろいろなものがメニューとしていっぱいあったわけじゃない。そういったものが、ほとんどみんな崩れちゃってるでしょう、今。だって家も信じられないし、国だって信じられないし、会社だって半分ぐらいしか信じてないしさ。イデオロギーなんてもう完全にダメでしょ。だからみんな、浮遊しているというか、渡り歩いているわけですよ。バシャールのチャネリングだ、と聞けばワーッとそっち行って、占星術ですごい人がいるんだというと、今度はそこ行ったりしてる。でもみんな完全には依存しなくなってるから、そうやって渡り歩けるんだと思う。今までだったら一回入っちゃうと、もう出てこないでしょ。これってまったく新しい傾向だと思う。

僕も私も神様だ

もはや教祖も神もない。

B❖たしかに最近は新宗教だか、新・新宗

教やってる連中、みんなハシゴやってるんだけど、あれはハシゴ症候群なんですよ。アイデンティティが確立しないから、ハシゴしてるわけでしょう。

A❖でも、けっこうみんな、さめてると思うんだよね。それで、自分に必要なところだけをもらってきてるだけだと思う。

B❖そんなに信頼しちゃっていいのかな。

——それって宗教団体が増えるだけじゃないですか。

A❖そう。でも今度は信者さんを作らないと思うんですよ。もう一人一宗、もちろん宇宙を信頼してるとか言うだろうけど。

B❖今、宗教が機能してなくて単に依存の温床になっているのは、現代社会が死を直視してないからだと思うんだけど……。

ところでね、シャーリー・マクレーンが、本のなかでアメリカのニューエイジ・ムーヴメントがどんなものなのかって簡単にまとめてるんですけど、それはね、霊的には誰もが平等なんだ、と。

——民主主義ですねえ。

B❖昔って、霊的な貴族主義でしょう。霊的な指導者がいて、その人がすごく孤高の存在で、あとの下々は、濁世、汚れた現世の中ではいずり回っていると。一般大衆は、そういう高みに行くのをあきらめてしまっている。ところが、今は誰もが自分の内側に神がいるんだと。

——そういうのが微妙に絡みあって、今の大衆オカルト現象みたいなものを作りだしてるということですかね。

B❖ニューエイジの学者とかね、実践家が少しばかりいても、社会的な影響力はたいしたことないでしょう。でも、マクレーンがひとりダントツに出たことで、悪い言葉で言えば大衆化しちゃったかもしれないけど、でもみんなが、ニューエイジって何だろうと関心を持った。ある意味で、マクレーンがやったことは、すごく象徴的なことなんじゃないか。いいかどうかは、わからないですけどね。

A❖いいとは思わないけど、まあ、象徴的ではある。だから、やっぱりそういうエネルギーをどんどん無制限に解放していくだけでいいのかという問題だよね。核にしても何にしても全部そうなんだけど、人間はエネルギーの解放の方法を獲得してきたけれど、それを自我の欲求とか、そういうものを満たすためだけに使い始めてるでしょう。だけれどやっぱり、ただ解放すればいいというものではなくて、エネルギーをどうコントロールするか、解放したら何が起こるのかということを、ちゃんと見極めなくちゃ危ないんですよ。だからそれをちゃんとやるメディアが必要なんです。

——……そうすると、ほんと宗教雑誌でもなくて、オカルト雑誌でもないものが何か出ないとちょっと難しいですね。ニューエイジの本でもなくて。

A❖ようやく少しずつ、そういう本のニーズが出てきつつあるんじゃないですかね。

巷のオカルト分子を断固殲滅！ 右に左に叩き斬る

◎オカルト馬鹿につける薬

【お話】呉智英（封建主義者）
【聞き手】吉岡順一郎（以費塾塾生）

気功、超能力、ニューエイジ……
神秘の復権を訴え、近代を批判するエセ予言者どもよ！
貴様らは民主と平等、ヒューマニズムを擁護する限りにおいて、
けっして反近代ではない。
近代に巣くう寄生虫だ！

——近頃、巷には、オカルト、円盤、超能力など、さまざまなる怪異が流行し、それを唱える妖人どもが民百姓を惑わしておるとのこと。このままでは人倫は地に堕ち、ひいては国家衰亡のもとにもなりかねませぬ。そこで、真の知識人（インテリゲンチャ）として高名なる呉智英夫子（せんせい）のお力で、妄説を破邪顕正（たたきのめ）して、民の迷いを解いていただきたく思い、こうして参上つかまつった所存にございます。

夫子曰（せんせいのたまわく）では、まずオカルトというものを、なるべく広義にとらえ、大きく三つに分けてみよう。まずは神秘とか霊のたぐい。悪魔祓いとか、易、占星術など、かつて信じられていた世界観を利用した妄説。次に、うちは神秘じゃなくて超科学ですよと言っている擬似科学。超能力、異星人などのSF的なものから、占いでも血液型占いはこの部類。最後に俗（いかがわしい）流東洋思想。気功とか、タオ自然学とか、もっと大きくガイアがどうのというエコロジーまがいのものなんかもここに近い。つまり、反西洋近代、反合理主義を標榜しているものすべて。

これら三つが検討の対象になる。

これらを批判するには、順序として、三つのステップで論じるのがわかりやすい。

第一に、単純に実証性、論理的整合性を問う。第二に、これは本当に近代科学批判なのか？と問う。第三に、この現象の根底にある精神構造、あるいは反近代を標榜する人たちのメンタリティを問う。この三つだ。

illustration＝根本敬

ということ。我われには意外と、そういう習慣がなかったりして、それが落とし穴になることが多い。全部やっていくと紙面の都合もあるから、代表的なものだけ各個撃破していこう。

第一章▼オカルト各個撃破

——しからば夫子、実証性、整合性とは？

夫子曰　わかりやすく言えば、素直なコモンセンスというか、冷静な常識で判断すればすぐにおかしいんじゃないかってわかる、

処女座（おとめ）に膜があるか！

夫子曰　まず、みんな蟹座だ処女座（おとめ）だと言ってるけれど、空を見て、本当にその星が蟹なんかの形になっているのを、おまえたちは見たことがあるのか?! 見たことがある人は手を挙げてくれと言うと、まず誰も手を挙げられない。

いちばん問題なのは処女座だ。処女かどうか、どうしてわかるんだ。女の形に見えたとしても、生身の女でさえ、処女かどうかなんてわからないのに。星が処女膜の形に並んでいるのか。

――（笑）なるほど、しかし占星術師は、あれは古代の女神である、古代の神話から、星を処女の形に結んだのだ、と主張しておりますが。

夫子曰　神話とか伝説というものは文化だろうが。文化というものは共通認識なのである。星座は古代バビロニア文化に発祥したものであって、共通認識のない日本の女子高生にどうして星座が影響を与えるのか。

よしんば共通認識が成立しているところにおいても、それは宗教体系、観念の体系として成立しているだけであって、具体的な実証レベルにおいては成立しているかどうか。たとえばキリスト教国においては、キリスト教文化というものが、観念の体系としては成立してるわけだけれども、だからと言って、具体的に、神が天地を造ったわけではない。

さらに言うと、星座が地球や人間に影響してるといった場合、我われが言っている星座というのは、基本的にこれは北半球の星座なわけだ。南半球の人はどうなるのか。月で人間が生まれるようになったら、星座はどうなるのか。

それから、占星術のいう黄道十二宮は実は地球の自転の歳差運動によって、少しずつずれ続けている。誕生日を黄道十二宮に当てはめるという占星術は、たとえば、蟹座のところを太陽が通る時期に生まれた人間に蟹座の影響があるという考えだが、すでに今はずれているのだ。

――それは占星術のほうでも、ひとつの周期に数えておりませんか？

夫子曰　たしかに数えているが、それはかなり後世になってからだ。古代バビロニアあたりで占星術が発祥したころは歳差という概念はなかった。あとでどんどん理論を継ぎ足してもっともらしさの応急処置をしたにすぎない。

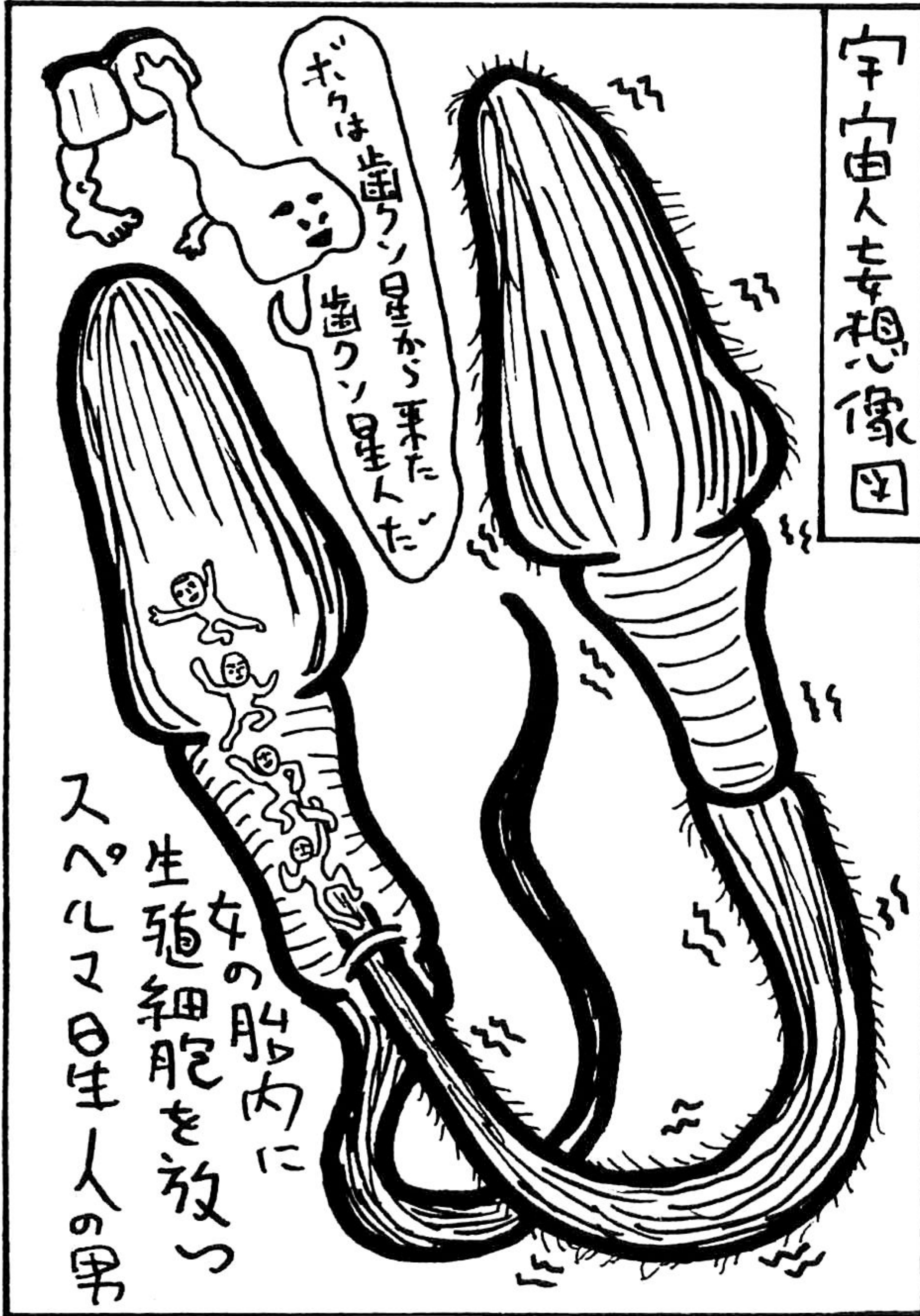
血液型性格判断には説明原理がない！

夫子曰　ＡＢＯの血液型性格分類。これは擬似科学。血液型にはほかにもMN型、Ｒｈ式など、知られてるものだけで約三十ぐらいあるわけで、これを全部カバーしないで判断するのはあまりにも粗雑だ。これに対してはなかなか有効な反論はできまい。

だいいちA型云々と言っているのは実は日本だけだ。能見とかいう親子が二代で、つまり宗匠と二代目みたいにしてデータをいっぱい集めているのだ。

統計学的には、データの母集団はたしかに多い。しかし説明の原理がない。

ようするに血液型はAかBかで明確に分類できても、人間の性格とか職業というのは、そう単純に割り切れるものではないわけだ。たとえば、何型だから温和な性格、といっても、他人に優しくて家族には当たりちらす人もいる。何型だから編集者向き、といっても講談社とJICCじゃ雲泥の差がある。

つまり、血液型という物質的要素を、性格とか職業という心理的、社会的レベルと同列に扱ってしまっている。これには明らかに無理がある。もしやるんだったら、A型ならAの因子によって、内分泌腺のここがこう刺激されてこうなる、といった説明原理なり仮説ぐらい立てる努力でもすべきだ。まあ、でも血液型占いには唯一利点があって、それは、血液型がわかるからという理由で、若くて健康な女の子たちがすすんで献血するということ。これは世の中の役に立つ。

——（笑）なるほど、泥棒にも一分の理、妄説にも一分の利、というとこですか。

異星人は地球に来ていない！

夫子曰　宇宙人と円盤の問題だが、これは擬似科学と神秘主義の混合形。まず、宇宙人が存在する可能性。実はこれがあまりない。たしかにこの宇宙には、地球と同じように、生物の発生が可能な惑星が約十億は存在する、と言われている。UFOが宇宙人の乗り物だと主張している連中は、十億も可能性があれば、そのうちいくつかの星には人類同様の知性を持った生物が必ずや

生まれているだろう、と言うわけだ。ところが、その十億というのは、実はそれほど大きな数とは言えない、という説が最近、出てきた。

というのは、たとえば小さいマンションを想定してほしい。あまり大きくない、俺が住んでるていどの三階建てのマンション。各階に十部屋ある。その各々の部屋がみんなドアでつながっているとする。たとえば一号室に入るとその奥にドアが二つあって、一つは開けると非常口に出てしまう。もう一つを開けると二号室に行ける。二号室以降の部屋もずっとそうなっている。そういう構造のマンションの一〇一号室に入って、三階の三一〇号室までたどりつく確率を計算してみると、なんと十億七千三百七十四万千八百二十四分の一になるのだ。二の三十乗分の一である。つまり、十億分の一というのは、たかだか三階建てのマンションを一〇一から三一〇にまで行けるていどのものでしかない。有機物らしいものがいっさいない、原始地球の状態から生物ができるまでの試練が、三階建てのマンションを全部通過するていどのことで済むわけがないだろうが。ましてや知的生命にまで進化する可能性にいたってはほとんどゼロであろう。

——そうすると我われがここにいるというのはやはり神の奇蹟でしょうか。

夫子曰 そうなると宗教だから、それは別問題。後述する。

それから、よく異星人とコンタクトをとったという話があるけれど、そのコンタクトが、突然のテレパシーによるというのが、だいたい不純だ。逃げ道を用意した姑息な言い方だ。もちろん、テレパシーに逃げなくて、本当に会った、話をした、というレベルのコンタクトの例もいくつかある。その場合、異星人の名前というのが、地球人の言語にきわめて似ている、というのがおかしい。エロヒムだのなんだの。

たとえば、クジラやイルカは人間と同じく文節言語を持っているという説もあるが、それでもクジラの「言葉」を人間は話すことはできない。たとえ音はそっくりに物真似できても、意味までは伝達できない。よしんば意味を翻訳することはできても、音を訳すことはできない。固有名詞、特に人名、星の名前はどうする。英語の発音を日本語に表記するのさえ難しいのに、発声器官からして違う生物なのに、エロヒムなんてカタカナに表記できることじたい大ウソの証拠だ。

『浜松中納言物語』という平安朝の文学がある。支那の王族が悲恋かなにかで死んで、その魂が日本の朝廷の貴族の世界に入ってくる物語だが、面白いことに、その支那人は恋文を出すときに、和歌を詠むんだよ。当時の日本人は、ほんとに支那人も和歌を詠むと思ってたわけだ。それと同じように、宇宙人とコンタクトした、とか言うやつらは異生物、異種生物という概念が、まったくわかってない。

また、人は宇宙人に会ったとかいうウソをつくときも、自分たちのなかの異生物「らしさ」という凡庸なイメージを投影し

てしまう。目撃例に多い、無毛で緑色、目が大きいという宇宙人。あれは両生類のイメージだ。カエルとかだな。カエルもののホラーというのは昔からたくさんあるし、どうやら人類にとってカエルというのは変なものだったようだ。カエルは身近でもあるし、尻尾がなくて人間に似ていて、しかも触ってみると異類である。

——胎児のイメージもあるようです。ひょろっとしてて、頭がでかい。しかし、UFOの場合、とにかく確かに見た、だから存在する、という人がおりますが。

夫子曰　見た、なんてことには実はなんの実証性もない。夢だって幻覚だって「見る」ではないか、たとえ、空に何か発光する物体が飛んでたとしても、どうしてそれが宇宙人の乗り物でないといけないのか。不知火みたいなものかもしれないではないか。けっきょく、見る側の願望が投影されてるにすぎないわけだよ。

清田君より手品師のほうが偉い！

夫子曰　清田君というのは、これもやはり冷静な常識というもので考えると、スプーン曲げや透視術もできるし、子どもの頃には空飛んでたっていうのに、なんで、もうちょっといい大学に行けなかったのか。それは誰でも感じる疑問だよ。

それから清田君は、ロック歌手とか言ってレコード出しても、なぜもっと売れないのか。超能力があるはずなのに。清田君はそれを聞かれると、邪道であると言う。

——占師は自分のことを占えないと言います。そういう天啓を受けた人というのは、自分の利益になることは占えないのではな

いでしょうか。

夫子曰　いや、そうでもない。偉大な予言者は大事な節目節目の予言は全部している。イエスだって、自分がもうじき磔になると予言している。

　それから、曲げる云々の場合でも、物理力とどう違うか。もし違うというなら、延性、展性に富んだ金属じゃなくて、じゃあ木とか竹も折らずに曲げられるはずだということになる。なぜそれをやらないのか。とすれば、それはたんに物理力にすぎないのではないか。

――しかし、現にこの目で曲がるのを「見た」という人が……。

夫子曰　手品師が曲げているのも「見た」だろう。手品師が同じことをやってるのに、わざわざ超能力ということで説明せねばならない必然性はどこにあるのか。しかも手品師は、清田君よりもっと不思議なこともできるのである！　彼らのほうが、ハイクォリティであり、ハイキャパシティであり、ハイグレードなわけだ。

　ある現象を説明する二つの概念があったときに、常識で説明できる概念があれば、やっぱり常識のほうをとるべきであるし、今まで人類が歩んできた二百万年の歴史のなかにおいて、常にそうしてきた。それでも説明できない現象があって初めてオカルトだのなんだの言えばいい。

呉智英vs十人の気功師

――さて、ここで愚生、ひとつお尋ね申し上げたいことがございます。夫子は、封建主義者として、孔孟の道統をお継ぎなされようというお方、また、支那より本朝にかけての知識人の常識として、老荘の教えもたしなんでいらっしゃるとか。たしか孔門にも孟子に浩然の気の教えがあり、荘子もまた気について述べた節がございます。その夫子がなぜ、それほど気功をお嫌いになるのでしょうか。

夫子曰　いや、俺は東洋医学への関心が高まってること自体には、医学技術論的には反対しない。ただ、支那の古典哲学のなかには、手から出てくるパワーとしての「気」なんてものは出てこないのだよ。「気」という単語は出てくる。しかし哲学における気というものは、イデアとかエイドスと同じ、単純に説明の概念なのだ。

　たとえば、荘子に「気」云々が出てくるのは、万物斉同という真理を悟ることで、つまり、病気も奇形も五体満足もみんな同じだ、生死も関係ない、と洞察することなんだ。だから、気功で病気を治して長生きしようなんてとんでもないわけだ。

　今、日本で一般に「気」という場合、民間療法におけるそれを指す。もともとは儒学の一派の宋学、とくに朱子学だな、その「気」という根本的な哲学概念が、民間レベルに下がって説明概念として使われただけなのだよ。

　だから、それはべつに「気」が云々で説明し続ける必要はなくて、いずれは近代医学の説明体系に取り込まれるべきことだし、そうなってもなんの不都合もない。詳しく

は次の章の冒頭で述べるが、今、日本で気功云々と言ってるやつらは、これは近代科学とは違うんだ、としきりに言いたがっているわけだ。たとえば、気をあてると蛍光灯がつくという現象を近代科学で説明できるか、とかな。

だがそれは、小学校の理科のレベルだ。なぜ白熱電球でなくて蛍光灯なのか。蛍光灯は、中に封入された水銀蒸気に電子線をあてると発生する紫外線が、蛍光物質にあたって可視光線に変わっているわけだから、摩擦かなんかで静電気起こしてやればボーッと光るわけだよ。

だいたい、支那では気功で病気を治したり、電気をつけたりしている、というのなら、なぜ支那人は家に一個の電灯もないような貧しい生活をしているのか。なぜ、原発なんて導入しようとしているのか。それから支那人の寿命はなぜ、こんなに日本人よりも短いのか。日本人は医害、薬害に冒されていると言われながら、なおかつ八十歳の世界最長寿の寿命を保っている。にもかかわらず、支那人はなぜ平均四、五十歳で死んでしまうのか。これに対しては反論できまい。

それから、支那の紅軍は、なぜ武器の近代化をしているのか。手から発する気で相手をぶっとばす達人がいるんだろうが。いるって言うのなら、その気功の名人十人連れて来い、俺は一丁の機関銃があれば皆殺しにしてやる！

――しかし夫子、それは実証性というより

有効性の問題でございますな（笑）。

第二章▼オカルトは本当に反近代か？

——それにしても夫子の御高説、まことにごもっとも。素晴らしいの一語に尽きますが、世のオカルト馬鹿どもには夫子の御言葉も豚に真珠、馬鹿の耳に念仏。呉智英はしょせん近代主義者じゃ、と言うばかりでございましょう。馬鹿は近代医学でも治せぬ病ゆえ、彼らも気功に頼るのかもしれませぬ。しかし、彼らのふるう「反近代」なる伝家の宝刀、実のところはどれほどのものなのでございましょう。

夫子曰　彼らオカルト馬鹿は近代主義批判とか近代科学批判とか、近代合理主義批判とか言いながら、実はまったく本当の近代批判をしようとしていない。近代の本質とは何かというところにおいて、ひどいごまかしがある。

まず、彼らのように鍼とか気功とかを持ち上げることは、果たして科学批判になり得るのか、という問題。

たとえば十九世紀、ある医学者が、患者の腹を切らずにじっと見るだけでガンがあるかどうかわかったら、こんなに便利なことはないなと思ったとする。もしそのことを発言すれば、彼は魔術でも信じている馬鹿なやつだと、当然思われただろう。しかし、それはただたんにX線というのが未発見だったからだ。「未」というからには、いつか発見されるものなのだ。

そうしたことは、近代医学の領域でもごく当たり前にあった。抗生物質だって、もとはやはり民間療法で、未開民族の呪術師がカビかなんかを薬にしていたのが発見されたものだ。近代医学で使われている医薬品のほとんどは、もともと伝統的な生薬なんであって、そこから薬効物質を抽出して、化学的に合成しただけである。

とすれば、今言われている気功などは、いつか科学的に証明されるかもしれない、証明されないかもしれない。いずれにしても、それは論証や証明や実証の可能性があるわけで、決して「科学によって解明できないこと」ではない。ただ「未解明」なだけだ。近代科学のエレメントになり得ることではあっても、近代科学に対抗するパラダイムでもなんでもない。

——そうそう、意外に近代科学史上の偉人には神学やオカルトに凝っていた人が多いと聞き及びます。錬金術に凝っていたニュートンや、心霊学に凝っていたクルックスとか。

夫子曰　だから、人間をインスパイアするものとして、目の前にぶらさげられたニンジンは、とりあえずオカルトでもなんでもいいわけだ。それをきっかけに科学が進歩するのだから。ただ、その際に忘れてならないのは、こうあればいいという仮説と現実との間を埋めていく作業だ。それが実証とか論証なわけだ。ニュートンなどはそれ

をきちんとやって、人類の知を豊かにしていったのだけれど、今のオカルト主義者どもにはそれができない。

なぜ、そういう馬鹿が出てくるのか。それは実は、現代の科学とは直接に関係はなく、むしろ現代の文化、現在の思考体系というか、その知的体系に参加拒否された人間どものコンプレックスとルサンチマンから出ているのだね。別の言い方をすれば、イソップの「酸っぱい葡萄」のメンタリティ。早稲田大学なんかが、在野精神ということをしきりに叫ぶのと同じ構造を持っているわけだよ。

——ははあ、つまりちゃんとした学問が難しくなってしまったから、それにタッチできない人間が、それに対する不信感を声高に叫ぶ、と。

夫子曰　本当は自分も偉そうぶって何か言いたいのだが、哀れなことに、馬鹿だから言えない。しかし言いたい。本来の、公認された知の体系に入るだけの能力はないけれどもそこに入りたい馬鹿が、ナグサメとして近代批判とか言っている。

——なるほど、たしかに文化人類学でも呪術とか魔術というものは、一種のルサンチマンの表現だと言われておりますな。なんらかのシンボルを操作することで現実を支配できるという幻想なのですから。つまり、憎い相手と闘うだけの力がないから、わら人形を釘で刺す、というように。

占いは差別の代わり

夫子曰　ここでちょっと話を占いに戻す。なぜ占いが流行るのか？　今は自己紹介欄にも、血液型や自分の星座を必ず書くというが、それはいったい何なのか？

よく、したり顔で、現代科学への不信だなどと言われてるけれども、実はそんなことではない。もっと単純なことで、しかもさっき言ったような、現在の知的世界に入ることを拒否された人間どもが、絶対に言いたがらないこと。わかっていながら知らないふりをしてとぼけていること。それを俺は言いたい。

占いは、ようするに差別の代わりなのである。人間は差別をしたいのだ。しかし差別をしちゃいけないと言われてるから占いをするのだ。

たとえば、自分の彼氏は将来どういう人間になるだろうかと占う。それで、水瓶座でB型だから彼はきっと将来エンジニアになるんだわ、なんてことを言って、自分には合うとか合わないとか言っている。ところが、もっと確実に当たる占いがある。なぜそれをやらないのか。

それは、俺が唱えている呉智英式占いだ。三つの要素を組み合わせる。一つ、偏差値。一つ、出身の出自。それからもう一つ、出身階層、金持ちか中流か貧乏人か。この三つを組み合わせれば、その人間の将来などたちどころにわかる。

典型例を言おう。偏差値が高くて、朝鮮人二世で、しかも実家が大きな焼肉屋やってて、金がある。この三つが当てはまる人間は、将来、他の条件の人よりも医者にな

る確率が高い。当たり前だ。就職差別されないためには手に職をつけねばならない。だが、そのためには頭が良くないといけない。それに、医大に行くには金がかかる。

このように、この三つの要素で、その人間の将来はほとんどわかる。にもかかわらず、なぜかそれをやれない。それは差別に触れるからなのだ。能力差別、身分差別になってしまうからだ。

近代の本質はここにある。近代は、貨幣の普遍性によってすべての差異をなくしていった。差異は必ずしも差別だけとは限らないのだけれど、もちろん差別も含んでいっさいをローラーで地ならししてしまう。それが近代なわけだ。

ということは、根本的なところで近代批判を言うのなら、人間は平等じゃないんだ、馬鹿は馬鹿なんだとはっきり言わないといけない。本当の近代批判とは差別を復活させることなのだから。

そして、差別はいけないという思想と、差別をしたいという気持ちの折衷案が、まさに今の血液型占いや、星占いによる人間の分類なんである。

——前世占いというのも流行っておりますね。あなたの前世はお姫さまですとか言う。前世に自分は何だったという、その段階でランクづける。

夫子曰　それは明治になって身分制度が撤廃されたとき、みんなが武士や貴族の家系図を金出して買ったのと同じだよ。それ以前の日本の人口の九〇％は、農民か漁民だったのだから。やっぱり自分を美化したいわけだ。

超能力ブームは究極の民主主義

夫子曰　差別をなくすという近代の本質から生まれた民主主義は、近代のパラダイムのなかの一要素にすぎない。しかし現在、いわゆる近代科学批判を標榜している魑魅魍魎どもは、民主主義ときわめて親和的な関係を持っている。

だいたい、自称文化人で超能力とか気功とかUFOとか言ってるやつらを見なさい。清田君の周辺では、広告批評の天野祐吉、景山民夫、あのへんのやつ。みんな物わかりのいいリベラルな進歩的文化人で、人権を守ろうとか、自然保護だとかそんなことばかり言っている。あとは転向左翼もしくは左翼くずれだね。左翼論理を根本的に疑うことがないまま、たんに自分のプライドのために反体制のポーズだけを保とうとする連中。体制が今は近代なわけだから、反近代と言うと、反体制のように聞こえるから言ってるだけ。典型的に言えば太田竜とか……津村喬！

——また津村ですか。夫子もいいかげんしつこうございますな（苦笑）。

夫子曰　あの馬鹿どもは近代科学批判とか、近代合理主義批判、さらに近代主義批判と言いながら、けっして民主主義の批判はしないじゃないか！

——超能力ブームの裏にもそういう平等思想が匂いますな。曰く、超能力は誰にでもある。ただ潜在してるだけなんだ、と。

夫子曰　そこを清田君なんかは強調するわけだよ。そう、今のオカルトの基本にあるのは、それだ。みんな才能を持っているということがキーワードになっている。

じゃあ絵描きになる才能は誰にでもあるのか。誰でも一〇〇メートルを十秒や十二秒で走れるか。そんなことですら人間には差があるというのに、超能力なんてものが、万人平等にあってたまるか！

超能力は、仮にありうるとしても、凄まじい修行を積んだ人とか、神の子ども、神に見込まれた人、それ以外にはなかったわけだよ。ふしだらな日常を送っている人たちに、超能力なんてあるわけはないというところに、宗教は成立するわけだ。

――でも、宗教のほうも最近はとくに、あなたのなかにも神がいるんだと言っておるようですが。

夫子曰　もちろん神は万物に遍在するという考えは、あらゆる宗教に見られる。キリスト教だって、神が自分に似せて造ったのが人間なのだから。

しかし、たとえ、獣のなかにも仏性はあるという仏教にだって、凡夫、独覚、菩薩、如来、といったランクづけはある。キリスト教では、神の国に入るのはラクダが針の穴を通るより難しいと言っているだろう。

だが、民主主義は、誰もが無条件で無限定に平等である、誰でも生まれながらに狭き門をくぐる権利があるのだ、と主張する。民主主義下においては神性とか超能力というものがア・プリオリになっておるわけだ。それを批判しないで超能力がどうのこうの言う奴らの、どこが近代批判なものか。

だから今のオカルトなどというものは近代の落ちこぼれというよりも、近代が生んだ病理現象であるな。まともな人間は、オカルトなど信じてない。良家の子女のようにすくすく育って、今の社会を支えているのだ。そうなりたくてもなれなくてルサンチマンを抱えてる連中が、民主主義的平等への憧れに固執しつつ、馬鹿な呪文を唱えている、というのが、典型的なオカルトのあり方なのだよ。

ニューエイジ、エコロジーの深層心理

――ニューエイジとの関係で、ガイアとかエコロジーについては……。

夫子曰　地球を守れと言われれば、誰も文句は言えないからな。人権派が差別反対を唱えるのと同じ。しかし太田竜なんか肉食っちゃいけないって言うけど、それを聞いた食肉加工業の人たちがどんなに屈辱を感じるか、考えたことがあるのか！

また、反原発派が言う、電力は余ってるじゃないかというのは今現在では事実だ。しかし、電力が余りだしたのは技術革新のおかげで消費電力効率が上がったからだよ。それは誰がやったかと言えば、地味な技術者なのだ。べつに市民運動家でも反体制的な人間でもなくて、まじめに汗を流して働いてる人たちなのだ。

だから、エコロジストというのは、基本的に全員がモラトリアムなのだ。モラトリアムは、現実に誰かがどこかで流している

血や汗についてはいっさい目をつぶっている、というか、知らないのだよ、そもそも苦労というものを。苦労していれば、あんな脳天気なことは言えない。

――では、近代の落ちこぼれではなく、正統的近代科学のなかで真面目に量子物理学をつきつめていった欧米の学者が、最近急に「易だ！」とか「タオだ！」と口走る傾向はなんなんでございましょう。

夫子曰　思想の体系をこう同心円状に考えると、中心部分には、その第一原理、プリンシプルがある。しかしこの第一原理は、実証できないものである場合もあるのだ。科学者は、その同心円の周辺部分で非常に技術的なことだけを研究している。そうしてるうちはいいのだけれど、だんだん中心部に近づくと、そこには何もなさそうだ、ということが見えてきて、突然不安になっていく。そのとき、別の説明体系をここに持ってくればいいんじゃないかと思って、宗教とか古代哲学とかから拝借してしまうわけだ。たとえば原子に関する説明理念は、ギリシアのデモクリトス、支那の太極のほかにも、古代から世界中にいっぱいあった。逆に素粒子は永遠に分割可能である、という考えも昔からいっぱいあるのだ。

――しかしなぜそこで東洋思想ばかりなのか……。

夫子曰　キリスト教の思想体系は、非常にタイトな構造を持っているから、応用が効かないのだよ。神にはエホバなんて固有名詞まであって、そのうえ神学者たちが千年以上かかって、三位一体説とか教義をギッチギチに構築してしまったから、ひとつの矛盾を指摘したら、全部が崩壊してしまう。そのことを、普通の欧米人は自分の心をごまかして済ましてるのだけれど、科学者はつきつめてしまう。だがキリスト教は、彼らの骨身に染みているからどうしても疑えない。で、東洋に逃げる。東洋の哲学はわりとルーズにできてたものだから、応用しやすかったわけだ。

第三章▼本当のパラダイム変換とは

――先ほどおっしゃられた、思想体系の中核たる第一原理が論証不可能な場合というのは、いかなるものでございましょう。

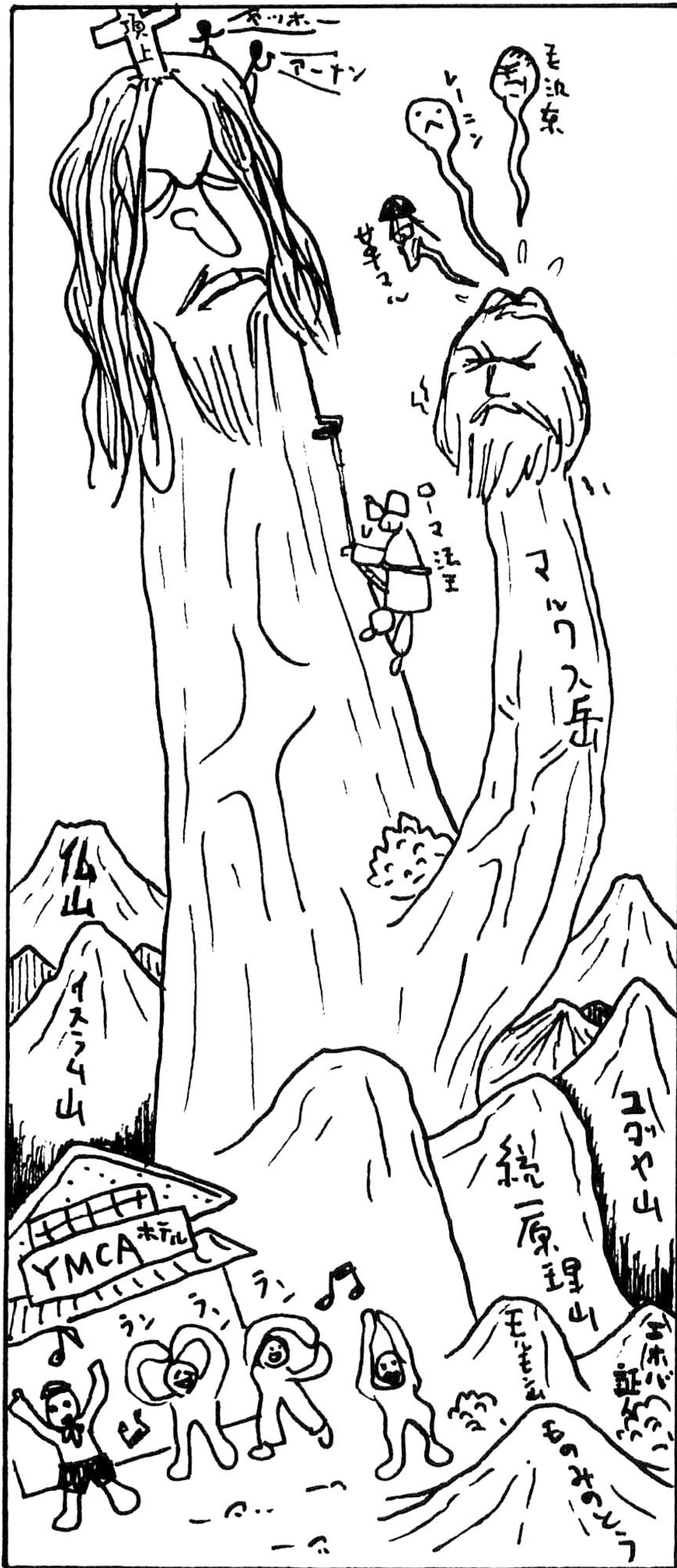
夫子曰　そんなものはいくらでもあるだろうが。キリスト教など、もとはイエスというキチガイが、わけのわからないことを言って死んでしまっただけの、あほな話なのだけれども、そのあほな話が核となって、二千年も世界を支配した。マルクス主義も実はキリスト教から出てきたわけだが、史的唯物論も実はそうで、信ずるか信じないかの問題だという学者もいる。しかし、そういった論証不能なもののうえに、人間の文化や思想体系が成立してしまうことはあるのだよ。

　冒頭で実証性からオカルトを批判したけれど、俺は実証できないことは全部否定しろと言っているわけではない。キリスト教

文化のように、迷信とか妄想を核として成立している文化の体系、思想体系であっても、マイナスだけとは限らない、プラスのこともいっぱいあるのだから。

じゃあイエスは正しいかというと、やっぱりキチガイはキチガイ。では、宗教家と精神病者との違いというのは何か。精神病者が、俺は神だとか言っても誰も同意しない。しかしそれを信じる人間が別にもうひとり出てきたら、すでにそれは妄想ではない。普遍性を獲得するから宗教になってしまう。ふたり以上で妄想の山を築きはじめたら病気じゃないのだ。

だから、すべての思想が妄想であるとして、それぞれが山なんだ、と考えてみるといい。この大きい山はキリスト教。こっちの山はマルクス主義。たくさんある小さな山が新興宗教。思想のクォリティの高い山、低い山、裾野の広い山、狭い山、整合性がとれて美しい山、醜い山、いろいろある。

とにかくその山の大きさ、質を評価するべきであって、ただその核が迷信だからというだけで批判するのでは、俗流の反オカルト主義になってしまう。それは非常にく

だらない。それだったら、最終的にキリスト教もなにも全部否定しなければならない。

しかしそれでは、一種のニヒリズムになってしまう。つまり現在、今まであったあらゆる教学やイデオロギーが解体してきている。たとえば近代的思考方法、ヒューマニズム、人権思想、民主主義、それらが長いスパンで変質し、さまざまな解体現象を見せている。それと並行して浮上しつつあるのがニヒリズム。だから、そのニヒリズムを克服することこそが、実は近代主義批判になるのではないか。それをやらずにオカルト云々というのは、けっきょく近代を裏で支えることにしかならない。

——彼らは何も信じられないから、オカルトだと言ってるのでは？

夫子曰　やつらがそこまで絶望してるのなら、俺はもうちょっと評価してやってもいい。そこまでいけば宗教だから。だが、実のところ彼らはそのオカルトを本気で信じてない。宗教だったら、独自の強固な整合性と一貫性を持つ観念体系なわけだから、イデオロギーと同じで、場合によっては近代と全面戦争する覚悟もあるだろう。しかし今のオカルト現象というのは、民主主義において近代と密通している。近代と本気で戦争する気がない！

中心は空虚でも山を作るのだ！

——では、ニヒリズムを克服する道とは？

夫子曰　新しい山を作るのだよ。今そびえたっている近代という巨大な山脈より、どれだけでかい山を構築できるか、どれだけ、整合性、実証性の高い山として成立させるか。その山どうしは相対的にしか評価できないものではあるが。

——そうすると、今のオカルトなんてものは、この近代山脈のほんのすみっこのみすぼらしい小さな山にすぎないわけでございますね。

夫子曰　それで自滅してくれればいいのだけれど、許せないのは、偉そうに精神世界だの反近代だの、パラダイム変換だの言って婦女子をたぶらかして小金を稼いだり、女の子をモノにしてるやつらだ。

——それを聞くと愚生もなにやらムカムカとしてまいりましたが、これはやつらと同じルサンチマンでは？

夫子曰　ルサンチマンがいけないとは言っていない。それをオカルトなんかでごまかすのがいけない、と言ったのだ。そういう怨みつらみは正しい。差別されたことがバネになって偉くなった人はいっぱいいる。すると世の中の役に立つ。だから差別も正しい。これはこれで整合性はとれている。

——なるほど、さすがは夫子。夫子のありがたき教えをもちまして、邪教（オカルト）に目がくらんだ愚民どもも、自ずから英知の光にめざめ、必ずや正道にたちかえることでございましょう。

合掌礼拝

PART 3 前世少女と終末ブーム

前世少女という異界……現場編

人類救済の戦士たちは、チョコパフェがお好き！

今、ここにいる「私」は「私」じゃない！　本当の「私」は……戦士サディラ！
学校帰りのミスタードーナッツで、キャピキャピと地球の危機を語る少女たち！

新山哲（突撃ライター）

「今、こうしている間にも、ハルマゲドンは刻一刻と近づいているんです。早く仲間を見つけ出さないと……。仲間も私のことを必死になって探しているかもしれない。まだ目覚めてないのかもしれない。早く見つけ出してあげないと……」

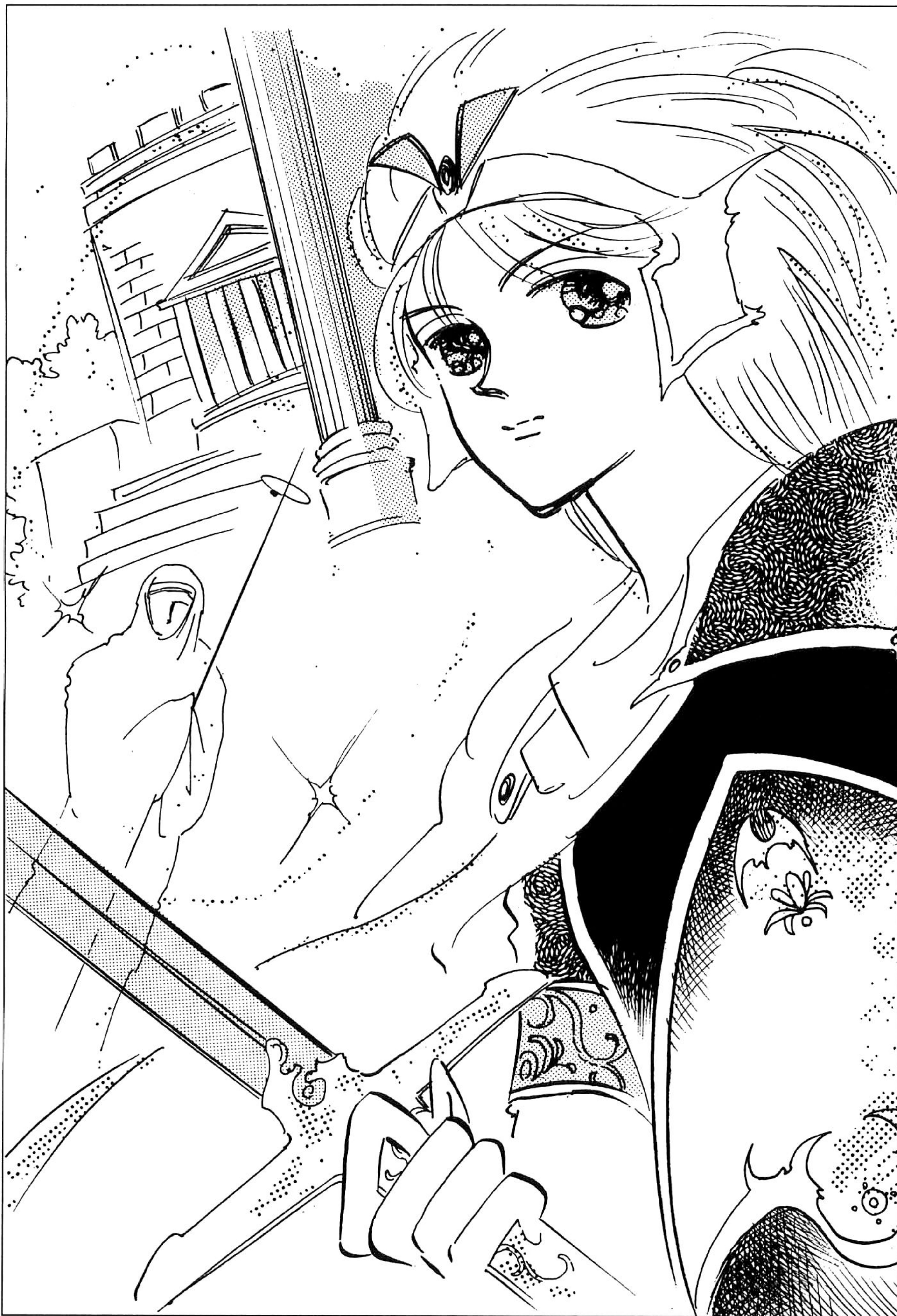
SF少女漫画にでも出て来そうな、リアリティの欠落したセリフだが、これは実際に、ある二十歳の女性の口から、きわめて真剣に、私に向かって発せられた言葉だ。彼女の名はプライバシーの保護のためKさんとするが、仮に本名を公表したところで、それも、彼女にとっては仮の名でしかない。彼女の真の名はサディラ。戦士サディラ。そしてサディラは男だった。

「戦士」にテレフォン・コール

彼女たち「戦士」の存在が注目され始めたのは、オカルト雑誌の文通欄に、その手の投書が殺到したことがあったためである。差出人のほとんどが、十代の少女。その内容は、だいたい次のようなものである。

「戦士、竜族の民、金星人、巫女の方、是非お手紙ください。私は戦士です」

「エリア、ジェイ、マイナ、ライジャ、カルラなどの名前に聞き覚えがある方、大至急御連絡を！」

断片的なキーワードから察すると、これらは、来たるべき「最終戦争（ハルマゲドン）」で共に戦う、前世での仲間を集めるのを目的とした呼びかけであるらしい。竜族とは何なのだろうか。どうやって彼女たちは自分の前世を知

ったのか。最終戦争とは何なのか。敵は？

ここで最も疑問なのは、仲間を探しあてたところで、彼女たち一人ひとりの持つ前世の「物語」が本当に一致するのだろうか、という点である。ざっと見回しただけでも彼女たちの世界観は、いくつかのパターンに大別はできても、はっきりした共通点はない。つまり前世少女の数だけ先史文明の数があるのだ。

彼女たちが互いに出会った後、それぞれの物語はどうなってしまうのか。それを知るにはやはり彼女たちの生の声を聞くしかあるまい。

私はとりあえず、文通欄の住所に片っ端から手紙を出してみた。何十通も送ったにもかかわらず、返事はゼロ。私が彼女たちの求める「前世の仲間」ではないことを、文面から悟られてしまったからだろうか。

これではなんの進展も望めないと判断した私は、意を決して文通欄の住所から電話番号を調べ、ほとんど発作的に電話をかけた。ところが、二回目のコールのあと、今が早朝の六時であることに気がついた。あわてて受話器を置こうとしたとき、電話口に相手が出た。

私の前世のほうが正しい！

電話をとったのは茨木県に住むMさん。現在、家事手伝いをする二十一歳。四年前にオカルト雑誌に載ったMさんの投書は、「戦士、巫女、天使、竜族、妖精、金星人とのコンタクトを求む」というものだった。

Mさん自身は戦士であり巫女でもあるという。前世の記憶を取り戻したのは、高校二年生のとき、霊感の強い友人に霊視してもらったのがきっかけだ。ただ、生まれたときから半分違う世界にいるようなふわふわした感じがあったらしい。

「なにか漠然と、私は周りの人とは違うな、という気持ちが小さい頃からしてたんです」

Mさんの転生は、地球上だけで繰り返していたわけではないという。もっとも、Mさん自身はひとつの世界での記憶しか残っていない。彼女が戦士であり巫女であった世界。ギリシャによく似たその世界で、彼女は何と呼ばれていたのだろう。

「名前はあるんですけど、人間には発音できないんです……。なにしろあの世界には、アならアだけで二十種類もの発音の仕方があるので」

雑誌で募集した、Mさんの前世での戦友は見つかったのだろうか。

「ええ、まあ。でも、あの投書を見て連絡してきた人は、ほとんど違いました。雑誌にはいっぱいそういう人たちが出てるけど、本物はいかに少ないかを知りましたね」

本物の判定はどうやってつけるのか。

「話をよく聞いたうえで、つじつまの合わないところを問い正したり調べたりします。でも、たいていは勘、インスピレーションでわかりますね。なにしろ、自分のことを〝天使次長のガブリエルであり、魔王だ〟とか〝人外（人狼の亜種だそうだ）の者だ〟とか言うんですよ！」

そうして前世の記憶が一致しないとき、Mさんは相手の思い違いを諭(さと)してあげるのだそうだ。
「たいていの娘(こ)は自分を取り戻せて喜んでましたよ。三割ぐらいは最後まで自分の前世のほうが正しいと言い張る人もいます。そういうのを〝なりたガール〟というんですけど、よっぽど自分以外の存在になりたいんでしょうね」
　では、他の娘たちはみんなウソつき少女の妄想ということなのか。
「いえ、そういうんじゃなくて……、はんぱに霊感がある少女なんかが、悪い霊にニセの前世記憶を植えつけられたりしてるケースが多いんです。それに私のいた世界以外のいろんな世界からも人が……人と言っていいのかわかりませんけど、この世界に転生して来てるのでしょうから」
　そして、けっきょくMさんの本当の前世の仲間たちは、彼女の身近にいた人たちだったのだという。

最終戦争(ハルマゲトン)は来ない!?

　Mさんの言う竜族の民や金星人とは、具体的にはどんなものなのだろう。
「竜族とかっていうのは、こちらの世界で言うなら職業のようなもんだと思ってもらえれば……。ごめんなさい。私、断片的な記憶しかないもんで、あまり詳しくあの世界のこと説明できないんですよ。私、なにか『力』が強すぎて、よく暴走しちゃってたみたいなんですよね。で、危険だからって、この世界に転生する際に、かなり強い封印を施されちゃったんですよ。だから、あの世界の記憶は一〇パーセントくらいしかないんです」
　彼女の言う「力」とは、筋力や体力ではなく、超能力のような、精神的なパワーのことだ。
「あの世界では肉体的な要素はあんまり関係ないんですよ。霊の世界っていうか、カラダはあるんですけど、たとえば剣なんかで目茶苦茶に斬られて、自分の血で足が滑るくらいになってても、呪文ひとつ唱えれば治っちゃうんです」
　呪文一発で生き返るとは、まるでファミコンの世界のような話だ。
　戦っている相手は何者なのだろうか。
「別の種族みたいなもんです。アメリカとソビエトみたいな」
　その戦いが現世にまで波及して、いわゆるハルマゲドンになるのか？と尋ねると、Mさんは口ごもった。
「うーん……言っちゃっていいのかなあ。あのですね、ハルマゲドンとか、いろいろみんな誤解してるんですけど、べつに私たちの戦いっていうのは最終戦争とかいうもんじゃないんですよ。ただたんに次の戦いというか……。あくまで向こうの世界のことなんですよ。私たちがこの世界に転生してきたのは、次の戦いに備えての休息と、修行をするためなんです。修行というのは、古文書を訳したり、集中力を養ったりすることなんです。ただ最近はあまりそういう

ことはやってないんですよ。というのは、仲間にかなり覚醒してる人（Mさんを霊視した友人）がいるんですけど、その人が言うには、今生では向こうの世界でも次の戦いはないらしいんです。だから今、中断してる状態なんですよ」

自分が前世で戦士であったことに覚醒したばかりの頃は、時間があれば、毎日のように集まっていた仲間とも、現在ではほとんど連絡も取り合っていないらしい。

「戦いがない以上、普通の人間として今の生活をきちんと生きるべきでしょう？ 前世が何であれ、中身が何者であれ、人の子として生まれた今は、人間以外の何者でもないんですから。まず、人としてしっかりしていなければ、地に足をしっかり着けて生きていなければ、他の何をもやる資格はないんですよ。……すいません。話がズレましたね」

なんにせよ、現在のMさんは、ハルマゲドンとは縁のない、普通の人間の平和な生活を送っているようだ。彼女は電話では詳しく話をしてくれたが、直接会ってはくれなかった。言葉は礼儀正しいが、二十一歳にしては幼いその声が印象に残った。

壮大なアトランティスの記憶

冒頭で紹介した、前世で戦士サディラだったKさんは、埼玉県に住む二十歳の専門学校生。

待ち合わせ場所の喫茶店に、Kさんはもうひとりの女の子を連れて来た。Kさんの中学時代からの同級生のUさんだ。ふたりとも小柄でファッションが地味なので、ぱっと見はまだ中学生ぐらいに見える。Kさんはショートカットにジーンズ地のキュロットスカートでちょっと男の子っぽく、Uさんはストレートのロングヘアーに長めのスカートでおとなしい感じ。実に対照的だった。

Uさんの前世での名前は巫女エイミリオン。ふたりは、アトランティス人だった。

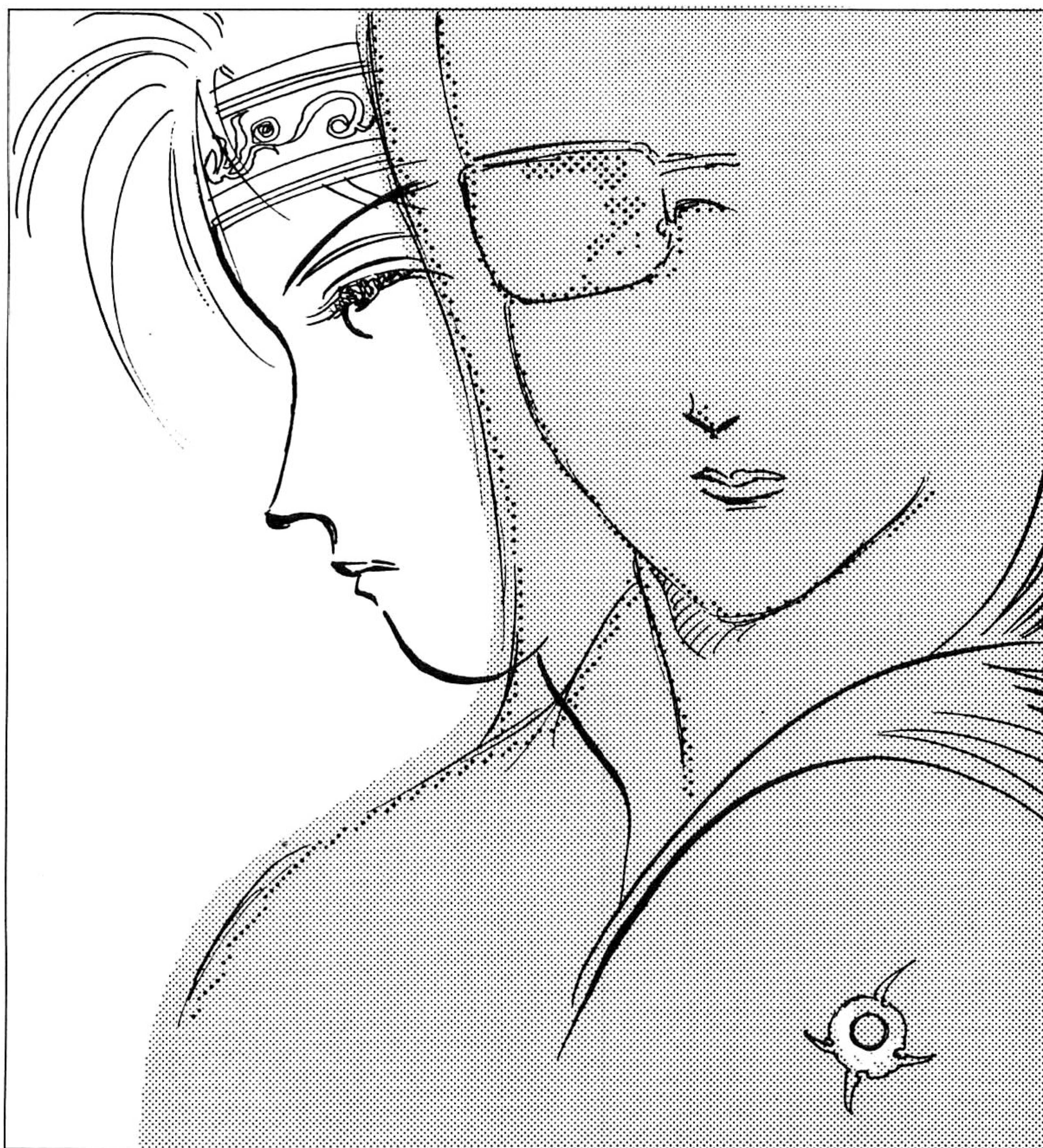
「正確に言うと、アトランティス人は、シリウス星から移住した民族なので、シリウス人と言うべきなんですけどね」

熱心に話すのはKさんばかりで、Uさんは、ときどきKさんが同意を求めると、黙ってうなずくだけだった。

「アトランティスは、御存じのとおり、たいへん文明の発達したところだったんです。といっても、いわゆる未来的な世界ではなくて、もちろん科学は発達していたんですけど、精神エネルギーのコントロール法が発達していたんで、機械をあまり必要としていなかったんです。ね、U、そうよね」

アトランティス人のすべてが、なんらかの超能力を使えたという。超能力の源は「コボル」と呼ばれる巨大な光球で、アトランティス大陸の中心にそびえ立つ塔の先にそえられていた。コボルはアトランティス大陸全土を照らし、その光の届く範囲ならば、誰でも超能力を使えたらしい。

「私たち戦士は、アトランティスの外にまで出て行くことが多かったので、コボル・ブレスレットという腕に着ける小型のコボ

ルを特別に支給されていたんです」
そう言うと、Kさんは取り出したノートにサラサラとコボル・ブレスレットのイラストを描いてみせた。ノートを受け取って、なんの気なしに他のページをパラパラめくると、Kさんは「あーっ」と大声を出してノートをひったくった。頬を赤くしている。
「ヘタだから見ないでくださーい」
チラッとしか見えなかったが、そこには、少女漫画風のイラストが、達者なタッチで描かれていた。

人類を救うのは私たちしかいない！

Kさんが、前世の記憶を取り戻したのは、前出のMさんと同じ、高校二年生のときだった。一週間続けて、群衆が自分に向かって何事かを叫んでいる夢を見続けたKさんは、その群衆のなかに、Uさんがいるのを見つけた。といっても、顔かたちはまったくの別人。インドの民族衣装・サリー風の衣をまとった、たおやかな金髪の女性だった。それがなぜUさんだとわかったのか自分でもわからない。
次の日、学校でUさんにそのことを話してみるが、Uさんは当然そんな夢は見ていなかった。それから夢は見なくなったが、ふたりが些細なことで絶交した夜、再び同

じ夢を見た。そのなかで、自分の前世と使命について告げられたのだという。

「最初自分でも信じられなかった。だって前世では私は男だったんだもの。Uに相談しようか迷ったけど、重大な使命があるからそうも言ってられなくて」

重大な使命とは、地球の存亡を賭ける、ハルマゲドンに関することだった。

「アトランティスが滅んだのは、けっきょく、アトランティスに住む民の心が荒んだためなんです。コボルは人間の霊に感応して精神エネルギーを増幅させる装置だったんですけど、悪い心ばかり吸収するんで、壊れちゃったんですよ。そのとき、私と仲間は日本に調査に来ていたんで免れたんです」

しかし、コボルは今も海底にあり、この世界も危機に向かっているらしい。

「人間が悪しき行いを重ねたために、負のエネルギーがコボルに伝わってしまったんですよ。こんどコボルが爆発したら、ハルマゲドンが起きてしまうんです。……コボルといっしょに沈んだアトランティス人は、まだ死んでなくって、霊界との間で漂ってる状態なんです。こんどのコボルの爆発の時に放射される負のエネルギーを浴びると、彼らの善の霊が溶かされてゾンビみたいな人類の敵になるんですよ。彼らとの戦いになったら、私たちアトランティスの転生者以外に戦えるものはいないんです。だから早く仲間を見つけ出さないと……」

前世の絆に結ばれた友情

悲愴な使命を帯びた戦士サディラの「自画像」を、Kさんに得意のイラストで描いてもらった。その姿は、「やおい族」と呼ばれるおたく少女たちが熱狂する、『聖闘士星矢』や『天空戦記シュラト』などのアニメ美少年に酷似していた。腕にはくだんのコボル・ブレスレットが輝いている。

「自分で言うのも変ですけど、けっこう美少年だったんですよね」

照れ臭そうに言うKさん。隣りに黙って座っているUさん。ふたりの顔を見ているうちに私は気づいた。戦士サディラと巫女エイミリオン、いや前世のKさんとUさんは、恋人同士だったのだ、と。

「だってしょうがないでしょう。前世でそうだったんだから」

Kさんは平然と開き直る。私は思わず「そんなことで結婚できるのかよぉ」と言ってしまったが、

「結婚なんてできると思ってません。どうせハルマゲドンになったらあたしたち死ぬかもしれないんですから」

という答えが戻ってきた……。

後日、私はどうしても気になることがあって、Uさんと再び会うことにした。Kさんに語っている間、彼女はただ黙って、Kさんが、何かにとりつかれたような勢いで私に語っている間、Kさんの顔を見つめていた。あの瞳は何を物語っていたのだろう。Uさんは、Kさんの物語にあまり主体的に関与していない。Uさんにとって、Kさんの物語はどうでもいいことのように見えた。

「そんなことないですよ。あなたには信じられないかもしれないけど、私、Kを信じてます。べつに構わないですよ。他の人が信じなくても。私はKを信じてますから」

Kさんが前世に覚醒して以来、学校でも休日でも、ふたりはほとんどいっしょだ。たまに、オカルト雑誌の文通欄で知り合った仲間と電話で話す以外は、両親ともほとんど話さない。将来のことを聞くと、Uさんは、できればKさんと同じ会社に就職したいと言う。

Uさんは、確かに信じているのだろう。「Kさんの物語」ではなく、「Kさん」を……。

チョコサンデーを食べる戦士

Kさんに紹介された別の転生者、Pさんは、「前」宇宙で、悪魔と戦った天使軍団の隊長だったという。

そのときの戦士名はアズファ。Kさんと同じように、彼女も前世で男だった。彼女によると、前宇宙の戦いの時には、なんとか神の側が勝利したものの、悪魔を滅ぼすには至らず、封印したのみに終わったという。その封印が、現宇宙で解かれてようとしている。黙示録にあるハルマゲドンが来るのだ。悪魔の復活を阻止するため、神から遣わされた天使アズファが、人間のからだに転生したのが、十九歳の、現在某市立大学に通う、Pさんである。

Pさんは化粧っ気のない顔に度の強そうなメガネをかけているが、いわゆる「ネクラ」な女の子ではない。

「自分の使命に覚醒したのは、高校三年になったばかりの頃なんです。それまではホントにごく普通の人間でした」

高校三年という、ただでさえ受験で大変な時期に使命を告げられて、葛藤はなかったのだろうか。

「全然なかったんですよ。神様によると、私の行く大学に、仲間がいるって言われてましたから。だからフツーに受験しましたね」

キャピキャピした口調で、男の天使だったと言いながら、チョコサンデーをおいしそうに食べるPさん。

「甘いものが好きなの?」

「これって私の肉体の好みなんですよ。肉体は人間ですから。食事の好みって天使にはないんですよ。神や天使は物を食べませんから」

私は、恋人がいるのか知りたくなった。

「そんなこと聞くんですか。それがなんの関係があるんですか」

Pさんはスプーンを置いて怪訝な顔をした。

「デートぐらいならしたことありますけど。まあ、美術館をひと回りして、それじゃ、って、淡ぁいもんでしたけどね」

相手はもちろん男性だった。ということは、戦士アズファとしては同性愛になるのでは?

「その頃は自分の前世について何も知らなかったんですから。しかたないでしょう」

敵である悪魔たちの目を眩ますため、と

いう理由で宿った女の肉体だが、戦士アズファは、肉体との折り合いがうまくついていないようだ。

「私、子どもの頃から風邪とかひきやすいし、体力ないんですよね。なんて言うか、それで、けっこうイジメにもあったし。中学時代は毎朝学校へ行きたくなくって、仮病使ってしょっちゅう休んでましたよ。うん。友達もできにくかった……。でも、それで精神が鍛えられましたよ。ハルマゲドンでは精神力が必要ですから」

別れ際に最後の疑問をぶつけた。――もし、ハルマゲドンが来なかったら?

「かまいませんよ。裏切られるのは慣れてるし。それに、来ないに越したことはないですもん」

Pさんの覚醒は浅く、記憶もごく断片的なため、まだ前世での仲間は三人しか見つかっていない。彼女たちは、週一回、精神力を高めるため教会に礼拝に行く日々を送っている。

なぜ、みんな「戦士」なのか?

彼女たちの話は、荒唐無稽な妄想と言ってしまうにはもったいないほど構築度が高い。

だから彼女たちの記憶は事実だ、というのではない。何人かと会ううちに私が確信したのは、彼女たち自身が、それが想像の産物であることを内心承知しているのだと いうことである。

そして、より構築度の高い「物語」が、構築度の低い「物語」を吸収合併したりしながら、さらに大きな「物語」を築いていく。その「物語」を共有することは彼女たちのコミュニケーションに必要不可欠なのだ。

前世を語る少女たちに特徴はあるのか。ない。いや、強いて言えば普通すぎるのが特徴というところか。すごい優等生でもなければ、ひどい不良でもない。もちろん、ごくごく普通の家庭に育ったのだろう。

そんな少女たちがなぜ「戦士」なのだろうか。オカルト雑誌の文通欄の投稿は、ほとんどみな「私は戦士です」と主張し、他の竜族や妖精を募集している。巫女だとされていた例のUさんを除いては、誰もが戦士だと主張する。ましてや前世が農民だったなどと言う少女は絶対にいない。

これに似たものをオカルト雑誌以外でも見たことがある。『バンドやろうぜ』という音楽雑誌の、バンド・メンバー募集欄を開くと「当方ボーカル希望。ボーカル以外の全パート募集!」という呼びかけが目立つ。とりあえず何もできないけど主役になりたい!という気持ち。それは「戦士」と共通する心境ではないだろうか。

みんなが平等なこの社会は、誰もが主役になれるという幻想をふりまいてきた。しかしそうなれるのは、本当はやっぱりほんのひと握りの人間でしかない。

何者でもなく、とことん普通の少女たちは、前世をサクセス幻想の拠りどころにして、アンデンティティの自給自足を行っているのかもしれない。

前世少女という異界……論考編

前世夢紡ぎ——少女たちの共犯幻想！

先祖や歴史上の人物ではなく、超未来や異星、別次元から転生してくる少女たち。前世とは、聖なるものも異界も失った現代からの必死の逃避行なのだ！

赤坂憲雄（日本精神史）

昨年の夏、徳島の三人の少女が演じてみせた、前世を覗き見るための奇妙な自殺ごっこは、わたしたちに深い驚きをあたえた。自分たちは古代の王女の生まれ変わりで、死の寸前までゆけば、前世が覗けると信じて、少女たちは自ら自殺ごっこのシナリオを作ったらしい。三人は解熱剤をそれぞれ八錠・一錠・零錠飲み、その場で意識不明になる・一一九番したあと倒れる・最後に助けをもとめて叫んだあと気を失う、という役割分担を決めていた。

前世における少女らの王女としての名は、「エリナ」「ミルシャー」など西洋風のものであった。中学生二人は同じ部に属し、小学生も同じ校区に住んでおり、顔馴染みだったといい、「たがいに知り合えたのも前世があったから」と話していたらしい。少女らの通う中学校の校長は、幼児期の遊びがいまだに続いている、体や頭に比べて、心の成長がどこかで止まっているのではないか、と語ったという。たしかに、そう思いたくなるのも無理はない。現代っ子の少女たちと、前世などという古めかしい「迷信」とがワンセットで登場してくるなど、大方の大人にとっては思いも寄らぬことであったはずだから。

この日、三人の少女は徳島市内で買い物をし、アニメ映画の『魔女の宅急便』を見たあと、薬局で解熱剤を買った。そして、少女たちは一冊のマンガをかかえて、自転車専用道に倒れていたのだった。みずき健という若手マンガ家の、デビュー作品集である『シークエンス』が、少女らの前世へ

の旅の同行者であった。『魔女の宅急便』と『シークエンス』の取合わせに関心を惹かれるが、いまは『シークエンス』に収められた同名の作品に、とりわけ眼を凝らしてみることにしよう。

『シークエンス』にみる前世物語の定型

『シークエンス』のあらすじは以下のようなものだ。少女らの前世への旅を理解するための手掛かりが、いくつか得られそうな気がする。少し長くなるが、全体像が浮かびあがるように辿ってみる。

六歳のとき事故で記憶を失った少年・俊明がいる。そこに、昔隣に住んでいた少年・司があらわれる。生まれてから六年間の記憶の空白をかかえる俊明とは逆に、司は前世の記憶を持っている。俊明が夢のなかで、司の前世における名前（大蛸）を口にしたことから、二人の前世が交錯しはじめる。校舎の壁が崩れおちる事故が起こり、俊明のテレパスによってPK（念動力）を呼び起こされた司は、前世というより未来・二十三世紀の記憶をとりもどし、俊明（前世＝未来名は歳蘭（セイラン））に未来の記憶を語って聴かせる。

俊明「おまえオレがその歳蘭だって言うけど、歳蘭ってこんなじゃなかったろ？違うんじゃないか？」
司「違うヤツが夢になんか見るかってんだ」

みずき健
「シークエンス」
新書館

そのとき不意に、航時機(マシン)の事故で、二十三世紀の俊明の恋人である華羅(カラ)が姿をあらわす。俊明は、自分＝歳蘭がタイム・マシンの爆発で一九七九年に飛ばされ、その爆発事故に巻きこまれて死んだ六歳の少年の身体にはいり、同時に、すべての記憶を失ったことを思い出す。俊明は六歳で死んでる……、俊明の六年間の記憶はもう二度と甦らない！　それでも……、都築俊明は十六年間生きている、ああ、そうだ、足りなかった六年を補うための想い……、なくした想い(もの)はもどらないけれど、かわりに生まれる想い(もの)がある、なくした想い(もの)も大切にしたい――。追ってきた二十三世紀の人びととの小さな戦いがあって、二人は現代に残り、作品は幕を閉じる。

　この、前世の記憶をめぐって展開される作品『シークエンス』は、いかにも荒唐無稽なものだが、けっして孤立した作品ではない。実はほとんど同様の定型をもった一群の少女マンガが、八〇年代には、多くの読者の熱狂的な支持を得てきたのである。

　のちに、あらためて触れることとして、ここでは『シークエンス』に見出される定型的要素をいくつか指摘しておくことにする。前世の記憶を失い、あるいは甦らせるきっかけとしての事故、夢が果たす大きな役割、前世（＝未来）の名前にみられるエキゾチズム、前世の記憶と超能力との結び付き、共同作業としての前世や未来の記憶の甦り、ごく身近にいる前世を共有する者、意識と身体の二元論などを、とりあえず抽出することができる。おそらく、徳島の少女らの自殺ごっこには、こうした先行する定型的な物語が色濃く影を落としているはずだ。

伝統的信仰における転生

伝統的な生まれ変わり信仰は、アジアには古くより存在したが、近年になって西欧社会にも広く見出されるようになった。前世を知っている（と称する）人びとの話が、さまざまなメディアをつうじて流布されることによって、天国／地獄というキリスト教的な来世観を信じてきた西洋人のあいだにも、生まれ変わりにたいする関心や信仰が急速に広まっていった。女優のシャーリー・マクレーンのような、生まれ変わり信仰の伝道者まで出現している。

　日本の若者たち、ことに思春期の少女たちのなかに、唐突に生まれ変わり＝転生にたいする関心が浮上してきたのは、八〇年代の初めのことである。転生と超能力を中心的なテーマにもつSF小説や少女マンガが、そこで果たした役割はおそらく、わたしたちが想像しているよりもはるかに大きかったように思われる。徳島の少女たちが『シークエンス』という転生マンガを携えていたのは、だから、あきらかに偶然ではなかったのだ。

こうしたマス・メディアに媒介された生まれ変わり＝転生への関心の拡がりは、伝統的な、たとえば仏教の輪廻転生観といったものとは直接の繋がりをもたない、むしろ欧米型に近いものといえそうな気がする。少なくともそれは、伝統的な習俗のなかにしばしば見出される、新生児を、最近亡くなったばかりの親族、たとえば祖父母や夭折した兄・姉などの生まれ変わりとみるたぐいの転生観とは、断絶があることは否定しがたい。

伝統的な転生信仰のよく知られた例としては、チベットのダライ・ラマの転生がただちに思い浮かぶ。チベットでは、霊性の高い僧侶は自らの来世を自在に変えることができ、生まれ変わってのち前世の自分を明らかにする手掛かりを示すと信じられている。この信仰自体はさほど古いものではなく、成立は十一世紀から十五世紀までのあいだといわれる。

ダライ・ラマ

ダライ・ラマを生む物語

ダライ・ラマは慈悲の仏陀・観音菩薩の化身であり、死後ひとりの小児に化身転生すると信じられている。ダライ・ラマの死去とともに、転生者探しが開始される。たとえば、第十四世ダライ・ラマの自伝『チベットわが祖国』によって、転生者探しのプロセスを辿ってみれば、以下のようなものだ。

まず、摂政が国民議会によって任命され、昔ながらの習慣と伝統にしたがって、神託を告げる人と学識ある高僧があつめられた。首都ラサから見て東北の空にあらわれた奇妙な形の雲、また、遺体を座らせてあった聖堂の東北側の木の柱に、突然生えてきた星の形をした大きなキノコが、どの方角に新しいダライ・ラマを探しもとめるべきかを示していた。翌年、摂政はラモイ・ラツォという聖なる湖に行き、湖畔で祈りと黙想のうちに数日間を過ごした。水面に見えたチベット文字の幻影や、寺と瓦葺きの家の風景は、極秘に書きとめられた。さらに、この翌年、摂政が水面に見た場所を探すために、高僧や高官たちがチベット全土に派遣された。

東に向かった賢者たちが、ついに秘密に合致する家を見つけ、そこに二歳になる男の子がいることを確認する。変装した高僧たちが訪れ、男の子とのあいだに問答を交わし、いくつものテストを重ねた。チベット文字の幻影の謎も解かれ、捜索隊は転生者を発見したと全面的に信ずるにいたった。男の子はやがて輿に乗り、大キャラバンに守られて、聖なる都ラサに向かった。通り過ぎるあらゆる村や町では、僧俗を問わず、大勢の人びとが笛・太鼓を鳴らして歓迎し、

喜びの涙を流した。ラサでは荘厳な即位式がおこなわれた。四歳半の男の子はこうして、チベットの宗教界と世俗界の支配者である第十四世ダライ・ラマとして承認されたのである。このあと、徹底的な教育がほどこされ、道徳と知識の両面において文字通りにすぐれた神聖王が作りあげられることになる。

　いずれにせよ、聖俗にまたがる強大な権力をもってチベットを支配する王ダライ・ラマは、化身転生をめぐる伝統的な信仰を背景として誕生するわけだ。それはチベットの人びとが疑いの余地もなしに共同化している信仰＝物語であり、聖なる王はその物語に抱かれながら、しかも幼年期からあたえられる最高の教育をつうじて、はじめてチベット全体の運命を託される権力者となるのだ。ある意味ではこれは、たいへん合理的に組み立てられた神聖王権誕生のプロセスであるといってよい。

　文化人類学者のG・バランディエが王の誕生についてこう書いている。――王位に就くことは変身なのである、王は作られるのだ、と（『舞台の上の権力』）。のちに触れるが、少女たちの紡ぐ転生の物語のなかで、彼女らはしばしば自身の前世の人格が戦士・巫女・天使あるいは王女であったことを語る。しかし、伝統的な転生信仰のもとでは、子どもが自ら物語る前世の記憶は、それを支えつつ現実に架橋してゆく幻想の共同体なしには意味をなさなかった。王が作られるように、戦士・巫女・天使そして王女もまた作られるのだ、むろん、転生の物語を抱いた幻想の共同体によって。少女は独りぼっちでは、けっして戦士にも王女にも生まれ変わることはできない。

欧米の「前世を記憶する子どもたち」

　最近邦訳の出た、イアン・スティーヴンソンの『前世を記憶する子どもたち』という本は、前世や生まれ変わりについて考える際には、なかなか興味深い内容を含んでいる。著者の立場は、周到に留保されているとはいえ、生まれ変わり信仰にたいして肯定的である。この、アメリカ超心理学界の会長をつとめたこともある精神科教授の一連の仕事は、むしろ端的に、前世や生まれ変わりが「真実」であることを証明せんとする執拗な意志によって支えられているかにみえる。

　スティーヴンソンは著書のなかで、意図的に前世の記憶を掘り起こそうとした成人の例よりも、偶発的に発生する幼児の例を重視している。スティーヴンソンによれば、人間の心は成人に達するまでに、たくさんの情報源から得られたさまざまな知識で満たされてしまう。こうした知識の多くは、心の奥底にひっそりと収められ、当の本人がその知識を持っているのを知らないことすらある。無意識の奥底に蓄えられた誕生以後の記憶は、前世の記憶を意図的に引き出そうとするときに、知らぬ間に利用され

「前世を記憶する子どもたち」（日本教文社）

やすい。誕生ののちに、さまざまなメディア（テレビ・映画・本など）をつうじて得た知識が、前世という物語のために総動員されるのである。そうした例にはこと欠かない。

　成人になってから前世の記憶を語りはじめる場合、多くは人の前世を見たり言い当てたりすることができると称する人物や、催眠・夢・薬物などが、重要なきっかけや媒介物となっている。そこで物語られる前世は、必ずと言ってよいほど、歴史上の大きな事件の真っただ中にあって、本人もまた歴史的に重要な役割を演じたとされるのが常だ。欧米人の前世をめぐる物語のなかには、十字軍の遠征やフランス革命、アメリカの南北戦争、イエス・キリストの磔刑などの出来事が繰りかえし登場する。前世の自分はいわば、そうした「大きな物語」とともに、その歴史的な主人公（の一人）として存在したと語られるわけだ。

　スティーヴンソンはそれら成人の例を生まれ変わりの証拠としては採用せず、考察の対象からはずしたうえで、前世を記憶する子どもたちの十二の典型例について詳述している。個々の事例に触れている余裕はない。むしろここでは、スティーヴンソンが生まれ変わりの「完全型」と呼ぶ事例にみられる五つの特徴を、とりあえず検証しておけば足りる。

関係性から生まれる前世記憶

（1）予言——ひとりの人物Aが、死後にもう一度この世に生まれ変わると予言するところから始まる。

（2）予告夢——その人物Aの死後、ほかのだれかBが、ある家族のもとにAが生まれ変わる夢を見る。

（3）スティグマ——生まれてきた子どもCには、故人Aの身体についていた傷などと一致する母斑や先天的な欠損がある。

（4）物語り——子どもCは口がきけるようになると間もなく、Aの生涯をはじめは断片的に、しだいに詳細に物語るようになる。

（5）奇行——子どもCがAの示した行動と符合するような、風変わりなふる舞いをすることを、情報提供者Dが証言する。

　これら五つの特徴をすべてそなえた事例はほとんどないし、〈予言〉は稀れであるという。とはいえ、生まれ変わり＝転生の物語の定型的な要素として、〈予言〉〈予告夢〉〈スティグマ〉〈物語り〉〈奇行〉の五つをあげることは可能だ。しかも、登場人物は複数であり、物語はとにかく周囲の他者にむけて開かれている。死者Aと子ども

Cとをつなぐ媒介者であるBやDの存在なしには、転生の物語は不可能なのだ。あきらかなのは、それが子どもの孤立した、たとえば作話症のような行為とは一線を劃される、子どもをとりまく家族や親族がみなで共同化している物語であり、現象であるということだ。

ほかに、わたしたちの関心に沿って、いくつかの転生の物語にまつわる興味深い特徴を指摘しておくことにする。

第一に、インドやチベットなどの例では、前世を物語りはじめるのは二~五歳であり、記憶が消滅するのは五~八歳、遅くとも十歳である。スティーヴンソンによれば、前世の記憶を喪失する五~八歳という年齢の段階は、言葉が急速にすすみ、それにともなって視覚的イメージが失われる時期と一致する。視覚的に形作られていた前世のイメージが、言葉によって逆に消去されてしまうと、『前世を記憶する子どもたち』の著者は考えているらしい。

第二に、「夢のなかで」という例外をいくつか除けば、前世の記憶があらわれるのは、大半が覚醒状態のときである。また、これから眠ろうとしていたり、すでに浅い眠りに入っているときや、目を覚ました直後などに、前世の話をしやすい子どもがいくらか見られるという。

さらに第三に、子どもの記憶は前世における「最後の日」の近辺で起こった出来事に集中する傾向がみられる。前世の自分の死の状況をおぼえていると語る子どもが、四分の三近くを占めるという。子どもはほかに、前世の人格の名前や家族・友人・仇敵の一部の名前を知っているのが、普通である。

第四に、前世とは異なる社会的階層におかれている子どもらは、変わった行動をはっきりと示す場合が多い。現在は貧しい家庭の子どもだが、前世には上流階級に属し裕福な暮らしを送っていたと語る子どもの例が、ことにインドには数多くみられ、その場合には今の両親を「本当の」親ではないと拒絶する者が珍しくない。あるいは、前世では今とは逆の性別であったと語る子どもは、前世の性別にふさわしい服装・言葉遣い・遊びなどを好んでおこなう、という。

異界との交信手段としてのマンガ

徳島の少女たちが前世への旅の同行者として、『シークエンス』という転生を主題とした少女マンガを携えていたことには触れた。シャーリー・マクレーンの『アウト・オン・リム』が、近年の欧米における生まれ変わり＝転生信仰のもっとも有力な伝道の書であったとすると、日本では転生と超能力を描く一群の少女マンガこそが、その役割をになったといえるかもしれない。

正直に書いておけば、わたしには少女という存在も、少女マンガの世界もともに未知なる異界である。言葉が届かぬ部分があ

ることは、はなから承知のうえで、わたしは不慣れな言葉たちを怖るおそる繰りだしている。いっそのこと、みずから「マニーでオタッキーなアニマーの一人」を名乗る、まだ少女を了えていない知り合いの女子学生Oさんに援軍を頼むことにしようか。

　Oさんはアニメや少女マンガについての、評論家やマスコミによる大衆向けの解説にも、『おたくの本』にも、当事者たちから見ればどうにもピントがずれていたり偏りがある、と少なからず遺憾の意を表明する。パロディ同人誌の発行者にして、「M君も参加した狂的マニアの祭典」コミケットの常連でもあるらしい、このOさんによれば、少女マンガ家たちの提供する作品が現代の少女たちのバイブルになっているのだ、という。

　しばらくOさんの言葉に耳を傾けることにしよう。――怖れとともにではあるが、少女にはだれしも、神秘的なるものと交通する能力を秘かに誇りにおもう時期がある。これが高じると、少女マンガ家によく見られるように、「うちには座敷童子がいる」ということになる。少女マンガ家には、心霊体験がある人、自宅に人間以外のものを棲まわせていたり、霊界への入り口があると語る人が、実に多い。これは、普通の少女が女になってゆくにつれて異界との交信能力を失ってしまう、または興味を持たなくなってしまうのにたいして、彼女たちが職業柄とはいえ、依然として少女の感性をもち続けていることの表れ、もしくはそれを強調するための逸話である。

　そして、アニメやマンガのパロディ版、つまり同人誌は、異界との交信手段であるという。二次元世界の向こうの異界は、本来ならば手を触れることのできない世界であり、そこで活躍するキャラクターにも接する術はない。が、自らの手で描いてしまえば、その異界に入りこむことは容易だし、異界の人物たちを自由自在にあやつることも可能だ。そうした既成の作品をパロディ化する少女たちが異界との交信者であるとすれば、オリジナル作品を提供する少女マンガ家は、さしずめ異界の創造者といったところだ、という。Oさんは「彼岸の人」について、こんなことを語っている。

　面白いことに、そうした架空の作品や人物に、あまりに深く傾倒した人にたいしては、「彼岸の人」という呼び名があたえられる。日常的な世界、つまり現世からはみ出してしまった人のことである。その呼び方には、揶揄とともに一種の羨望がこめられているし、呼ばれるほうも多少の誇りをもって受け入れる。「彼岸の人」は異界と現世とのあいだの往来を可能とする人であり、異界の住人とコンタクトの取れる人である。

　Oさんのこうした言葉は、実は「自分の経験と想像の範囲内でしか意見を述べられないのですが」といった、控え目な留保をつけて語られたものであることを、断っておく必要を感じる。少女マンガと異界の関わりや、「彼岸の人」についての彼女の話

は、たいへん興味深いものだが、それが少女の内側から発せられた言葉である点で余計に関心を増幅される気がするのだ。

共犯幻想を壊してしまったマンガ家

さて、Oさんに導かれつつ考えてみると、『シークエンス』の作者と自殺ごっこの少女たちとの関係が、まさに異界の創造者と、その誘いによって異界との交信をはかろうとする少女たちとの、ある種持ちつ持たれつの「共犯関係」であったのだと知られる。

『シークエンス』に先行する転生マンガ『ぼくの地球を守って』（『花とゆめ』に昭和六十二年から連載中、これまで第九巻まで単行本化）の作者・日渡早紀は、単行本『ぼくの地球を守って〈8〉』のなかで、徳島の事件を意識してであろうか、以下のように書いている。

日渡早紀「ぼくの地球を守って」白泉社

いいですか？ 心して下さい。きっぱりハッキリ明記しますからねっ。『ぼくの地球を守って』というマンガは、始めから最後まで、間違いなくバリバリの日渡の頭の中だけで組み立てられているフィクションです。実際に在る話をドラマ化したわけでも何でもありません。フィクションの中だから展開出来るお話なんです!! 『何当たり前のこと書いてんだよっ』と思われた方もいらっさると思いますが……。ああ！ ついに書いてしまった。こんなこと……本当は終わるまでは敢えて避けて通る…つもりでいたのに……！ 夢がなぁ――――い!!

作者はこの巻のコラム「わずか1／4のたわごと」の大半を費やして、自分の作品があくまでフィクションであり、物語であ

ることを、作品のインパクトが弱まることも辞せずに繰りかえし書きつけている。直接には、『ぼくの地球を守って』のような特殊な物語の世界に刺激されて、実際にも体験出来るかもしれない……といった、ちょっとアブない思い込みの手紙が、作者のもとに非常にたくさん届くようになったことが、そうしたフィクションの強調につながったらしい。

　ある意味では、これは痛ましくも滑稽な一場の光景である。異界の創造者にして提供者であるはずの少女マンガ家が、実際に異界との交信をマジにはじめてしまった少女たちを前に驚きあわてて、「彼岸の人」になってはいけない！　と叫んでいる図なのだから。逆に、透けて見えることがある。少女らのなかには、疑いもなく「神隠しに遭いやすき気質」（柳田国男）を濃密にもった者たちがいる。彼女らの神秘的なるものへの嗜好と偏愛にもたれかかりながら、少女マンガ家は意図してかあらずか、少女らを現実／物語の境をこえて彼岸へ旅立つようにと誘いつづける。そこに、少女マンガがバイブルとなる、この時代の少女たちをとりまく現実の一端が覗けているはずだ。

　それにしても、日渡早紀という作者は、なぜ種明かしをしなければならなかったのだろうか。少女らのバイブルの描き手という場所（アイデンティティ）を守るためには、種明かしをするべきではないし、自らの紡ぎ出す物語に憑依しつづける、少なくともその振りだけは装いつづけるべきであることくらい、この人は承知していたはずである。にもかかわらず、禁は破られ、伝道者の仮面はあっさり捨てられた。彼女のある誠実さの証しだろうか。あるいはむしろ、少女たちの現実がそれほどまでに切迫していることを、『ぼくの地球を守って』という転生と超能力を描く少女マンガの作者の、どこか悲鳴にも似た「これはフィクションです！」の叫びは、したたかに暗示しているのだろうか。はっきりしているのは、すでに異界は壊れているということだ。それはもはや、物語のなかにしか存在しない。

死んだ日常に息を吹きこむ呪術

　少女らの現実らしきものに目を凝らすことにしよう。来たるべきハルマゲドン（最終戦争）の同志や、前世における仲間を求めて、『ムー』や『トワイライト・ゾーン』といったオカルト雑誌の文通欄に、不思議な手紙を書き送る少女たちがいる。その転生少女たちに関しては、「オカルト雑誌を恐怖に震わせた謎の投稿少女たち！」（別冊宝島92『うわさの本』）と題した、浅羽通明の周到にして確かな報告と考察がある。彼女らをとりまいている状況については、浅羽の論考に譲ることにして、ここでは物語論の視座からのアプローチを試みることにしよう。

　物語のモチーフとして転生の問題を考えるかぎり、その果たしている役割はたいへん視えやすいものだ。一般に、ジャンルを問わず物語的な作品では、登場人物はだれであれ、物語ゆえの宿命＝定型を無意識の

冬木るりか「アリーズ／神話の星座宮」秋田書店

うちに反復する。彼らは自らが物語の捕囚であることに、たいていは無自覚である。視えざる神＝作者、登場人物、そして読者のあいだに取り交わされる定型との抗い／戯れこそが、物語的な作品の基層に埋めこまれた風景の核となるものだ。

　これにたいして、転生と超能力を主題とした少女マンガの場合には、登場人物のほとんどは物語ゆえに宿命＝定型を自覚的に反復する。たとえば、冬木るりかの『アリーズ』はギリシア神話を祖型として、その神々が現代の日本に転生し、ある高校を舞台に愛憎のドラマを繰り広げるといった作品である。ここでの転生モチーフは、物語の宿命＝定型をかぎりなく無邪気に受容し、かぎりなく凡庸に反復するための、侵しがたい根拠である。登場人物と定型との交わりからは、いっさいの葛藤やズレがあらかじめ排除されている。抗い／戯れは存在しない。定型はあくまで自明なものとして与えられているのだ。

　少女らの前に転がっているのは、いつだってかぎりなく物語＝ドラマ性の稀薄な日常にすぎない。それでも神秘的なるものに憧れる少女たちは、ひたすら異界からの呼び声に耳を傾ける。全宇宙を舞台とした神々や英雄たちや異星人らの活躍する、懐かしい、しかし失われたはずの大きな物語が、きわめて狭い日常の空間、たとえば学校や隣近所などのごく身近な場所に移しかえられ、そんな彼女らに提供される。干からびた日常や現実に、いわば一瞬にして息を吹きこみ、そのままに救済するための呪的な装置として、少女マンガのなかに転生と超能力のモチーフが挿入されるのだ。

　これは疑いもなく、物語の専制としか呼ぶほかないものであるが、実はとりたてて論じるべきことがらではない。状況はもう

半回転ほどよじれて、少女らの現実が物語に身をすり寄せるところへと突き進んでいる。少女マンガの世界を現実と混同しているわけではない。むしろ、現実をそのままに物語と化すために、少女たちは必死の賭けをしているのかもしれない。しかも、その賭けの裏側には、とても小さな幻想の共同体への志向ないし欲望が覗けている気がするのだ。残念ながら今は、そんな貧しい想像を巡らしてみることしかできない。再考を期すことにしたい。

関係性や歴史から完全に遊離した物語

わたしたちのここでの関心は、少女らの紡ぐ転生の物語のモチーフと構造である。すでに触れた『前世を記憶する子どもたち』で論じられている転生の物語（転生譚Iと呼んでおく）との比較をつうじて、現在の少女らの物語（転生譚IIと呼んでおく）の特質を浮き彫りにしてゆくことにしよう。

いくつかの明らかな違いがある。スティーブンソンの取りあげている事例が、前世の記憶が物語られる年齢を二〜八歳のあいだの数年間と限定していたのに対し、こちらは圧倒的に思春期である。転生譚Iと転生譚IIとのあいだには、物語のにない手に決定的な差異が見出されるのである。スティーブンソンによって、生まれ変わり＝転生を証拠だてる実例として採用することを拒まれた側に、少女らの転生譚IIが含まれることはあきらかであろう。

わたしたちは転生譚Iにおける定型的な要素を、〈予言〉〈予告夢〉〈スティグマ〉〈物語り〉〈奇行〉という、五つの側面から抽出してみた。ここには転生譚IIとの和解しがたい断絶があることに注意したい。

少女らの転生譚IIには、ただ〈物語り〉のみがあって、ほかの要素が抜け落ちているということだ。同一の物語へと収斂されてゆく物語のかけらを帯びた、複数の前世を記憶する者たちのあいだで、前世の人格との対応が確認され、同一化が果たされる。〈予告夢〉を見るBも、前世の人格Aを実際に知っていて〈奇行〉の意味を解いてみせるDも、ともにいない。いわば、子どもCの〈物語り〉を外側から補完する役割をになう他者が存在しないのだ。つまり、〈物語り〉をする複数のCの集まりの内側に、少女らの転生の物語はあらかじめ閉ざされているのである。

それは別の角度から眺めてみればこういうことだ。転生譚IIの複数のCのあいだには、前世の記憶をめぐる秘密が共有され、そこにある種の幻想の共同性がかろうじて成立している。むしろ、この幻想の共同性をつくり維持してゆくためにこそ、前世の記憶というアブなっかしい秘密が必要とされているかにみえる。ところが、転生譚Iの場合はこれとは対照的に、幻想の共同性は自明のものであって、開かれた他者たちのあいだの共同作業としてのみ、物語は生成を遂げるのだ。前世の記憶は秘密ではない。逆に、より多くの他者の参加を得ることで、物語の確からしさは高められるのである。

また、前世の人格とされるのが、転生譚Iでは家族の内／外の比較的近くにいる、あまり時間的にも遠くない実在の人物であるケースがほとんどである。前世は歴史上の事件や出来事とは、関わりをもたない。それにたいして、転生譚IIでは、前世の舞台は日本以外のどこか遠い異国か、アトランティス大陸や月世界あるいは太陽系外の異星といった、今のところはSF小説や『ムー』の読者層のなかにのみ実在する異界であり、そこに棲まう異人たちである。前世の人格Aをそこまで無限遠のかなたに設定することが、いったい何を意味するのか。それは逆の意味で、少女らが実は物語／現実をきちんと分節化できていることを窺わせる気がするのだが、定かではない。

異界なき時代の貴種流離譚

　そして、最後に、転生譚をささえる心的な基盤に眼を凝らすことにしよう。転生譚Iの場合には、大きく二つの主題が見え隠れしている。第一に、身分的・経済的な上昇の主題であり、第二には性の転換の主題、第三には愛と死の主題である。現在よりも裕福な家庭に生まれたかった、あるいは今とは異なる性に生まれたかった……という欠損や異和の意識、つまり現在における欲望の過去世への投射が、第一と第二の主題の底に垣間見えている。第三の愛と死の主題は、生まれ変わり信仰をもたない文化圏に多いものだ。失われた恋人や肉親（たいていは夭折した子ども）への断ちがたい愛と渇望が、生まれてきた子どもと死者との同一化を、ほかならぬ転生譚として実現するのである。

　少女らの転生譚IIの背後にも、ある欲望の過去世への投射のメカニズムがひそんでいるような気はする。彼女らは好んで、前世の自己を戦士・巫女・王女などになぞらえて物語を紡ぐ。少女はだれしもが、転生した貴種（＝選ばれし者）であり、それぞれに世界を救済するための使命を帯びているのだ。この世に身をやつし流離していた貴種＝戦士が、時をへて覚醒し、今ハルマゲドン（最終戦争）のために起ち上がろうとしているというイメージ。『風の谷のナウシカ』という少女救世主の美しい物語をもった、わたしたちの時代には、それもまた必ずしも奇想天外な夢物語として片付けることはできないのかもしれない。

　だが、それにしても、異界からの音ずれも間遠になり、神秘的なるものからもしだいに遠ざけられ、少女という季節の黄昏を生きている者らの焦燥はかぎりなく深い。どう足掻いたところで、干からびた現実しか手に入れることのかなわぬ少女らは、たぶん物語的な跳躍によってしか、日常からの大いなる離脱を果たすことができないのだと、どこかでしたたかに気づいている。そんな気がする。少女という季節の終わりに狂い咲きする、前世と超能力を語る＝騙るモノガタリの一群よ……、モウ、異界ナンテモノハコノ世界ニ存在シナイ（のだと知れ！）。

豊かな時代の終末観……臨床編

未来という重荷が終末を呼ぶ!

世界の破滅を予感する子どもたちがいる。彼らの予感は正しい! なぜなら、この高度資本主義社会は、それによって育てられた子どもたちに、この社会を維持する力がないために自滅するからだ!

浅野誠(精神科医)

私はこれまでに三十人以上のキリストに出会ったことがある。それに二十人くらいの仏陀と、何人かのさまざまな神様、最近では孔雀王だという少年にも出会った。

彼らは皆、こう言っていた。世界は滅亡する、そして自分は世界を救うために選ばれた者である、と。

彼ら、とは、精神病院にやって来た人びとのことである。

今の日本には雨後の筍のようにさまざまな宗教団体が出現しているが、そういった宗教の多くが共通して、世界の終末を予言し、世界を救うべく選ばれた者を必要としている、と説いている。そして、そのような教団に入る多くの若者も、自らを選ばれた者と思っているらしい。彼らは精神病院に来る人びとと、どこか似通っている。

精神病院に来る人びとは皆、苦しんでいる。その苦しみは死の予感をもたらす。しかし現実の生活のなかには彼らを救う人は現れない。彼らが自らを救うには、自らが救い主となる以外にはない、と妄想するのである。

そうであるのなら、今の世の若者たちも皆、苦しんでいるのだろうか。何におびえ、何を求めているのだろうか。この豊かすぎる時代に。

ムースの大ダイコと宗教

厳しく長い冬のことだった。エスキモーたちは、ムース(大鹿)の群を発見できるか否かが部落の存亡にかかわる、という危

illustration＝藤川秀之

機に直面していた。蓄えた食糧は残り少なく、冬場に通過するはずのムースの群は、その年はいっこうに現れなかった。太陽は地平線をほんのり明るくするだけで消えてしまう。怪しげなオーロラの輝く闇や、灰色の吹雪の壁が視界いっぱいに展開する大雪原のなかに、部落を孤立させていた。

ムースを見つけるには、もはや人間の五感はまったく役に立たない。

そして、ついにエスキモーたちは部落の片隅にひっそりと暮らす占い師に、部落の運命を託す。部落の誰よりも長く生きてきた占い師の必死の祈りは、ついに大自然の神に届き、ムースの群のいる方角を知ることができた。人びとはムースの肉を手に入れ、救われる。

これは、『ムースの大ダイコ』（福音館書店）というエスキモーの民話のあらすじであるが、この話は宗教というものの発生をよく示している。

宗教とはすなわち、危機に瀕し、人間の力では解決不能となったぎりぎりの限界状

況に発生するものである。また、そうあるべきである。

実際、歴史のなかに出現してきたすぐれた宗教は、その開祖たちが、生死をさまようような体験の末に得たひらめきや想念を体系化して、教え広めることから始まっている。生死をさまよう体験とは、言いかえると、それまでに得た知識や経験をもってしても回避できない、死の予感のことである。そういった切迫する死への予感は、人間をして、ある飛躍を可能ならしめる。

たとえば、戦後間もない頃出現したある教団の教祖は、死に至る病にかかっていると医者に宣告された後、意を決して山に登ったところ、神の啓示を得たという。

汝は神の使いであり、数十年後に滅亡するはずの世を救うために、この世に生まれ出でた。そう神は彼に伝える。その後、病は不思議と去り、彼は一念発起して、世界を救うために教えを広め始めたという。

避けられない死への恐怖を克服するためには、死そのものの接近を否認してしまうか、自分は死を回避し得る者と思い込むしかないが、死を回避し得る者は、人間の能力を超える者でなくてはならない。そこで、自分を神と思う、ないしは、自分は神に選ばれた者と思う。選ばれた者と思い込んで実際に生き残った者はそう触れてまわることができる。そう思い込んだが死んでしまった者たちは、そう思ったのは誤りだったとは触れてまわれない。

実際、何人もの人びとが生き残らんとして、神の山に登ったはずである。そして、大半の人が死に、生き残った者のみが、私は選ばれた者ゆえに、死を回避できたのだと言ったのであろう。

死に瀕するのは最も深刻な体験である。そのぎりぎりの場面では、これまで得たいっさいの経験や知識はまったく役に立たなくなる。まさに祈るほかない。

自然科学は死を回避できないし、宇宙が存在する理由や意味を説明することもできない。知識や経験の積み重ねではこのふたつだけは解決できないのである。

「本当の」宗教とは、人間が、知識や経験（自然科学）の及ばぬ彼方に飛躍せざるを得ないところに生じるものである。

社会の速度について行けない感覚

死というものはいつか必ずもたらされる。それは一分後かもしれず何十年も先かもしれないが、明日のことは誰にもわからない。だから、宗教は「時」が限られているという意識から発生する。そして、なぜか最近の若者たちは時が限られている（すなわち、終末が近づいている）という考えに同調しやすいという。

今、日本の社会は、人類史上かつてないあわただしさで変化しつつある。社会全体が、豊かではありながら、加速しつつあるのだ。その加速について行ける者と、ついて行けない者が出るのは当然である。今の日本ほどに、加速しつつある社会は誰にとっても初めての経験なのだ。

かつて百年かかって消費したエネルギー

を、大都会は一夜にして消費する。環境の悪化も加速度的である。人間も、それに伴い加速度的な変化を求められているに違いない。ついて行ける者たちばかりであるはずがない。

取り残される者たちは不安である。不安は取り残されるということだけから来るのではない。取り残され、留まらざるを得ないがゆえに、変化に乗って走って行く者たちには見えないものまでも、見えてしまう。いや、この変化の行きつく先が実は見えないのだということが見えてしまうのかもしれない。こういった不安はあせりを生み、あせりは、時間が足りない、社会全体の死は遠くないという感覚を、もともと死ぬべき人間の脳裡に浮かび上がらせていく。こうして、終末思想が呼び起こされているのではないだろうか。

メディアほど宗教的なものがあろうか！

さて、世はメディアの時代である。昔、人びとは生きるために五感に頼って手と足をフルに動かさねばならなかった。それはまさに手ごたえのある「体験」である。しかし、常々言われるように現在の日本の子どもたちは、生きんがために自分の手足を動かすといった体験に乏しく、その代わりにメディアから知識や情報を得て成長している。しかし、メディアから得られる情報は、身体と五感を使って動かした結果得られた体験的知識とは根本的に違う。たとえば、本当の雪というものはテレビでは絶対にわからない。視覚によって見たり、聴覚によって「冷たい」と聞いても、どれだけ冷たいのかと触って、握って、食べてみる、という検証による認識には及ばない。

雪はそれでもスキー場に行けば触れられる。だが、いったい誰が本当に宇宙を見たと言えるであろうか。宇宙飛行士と言えど、せいぜい月のあたりから眺めたにすぎない。人びとの頭にある宇宙の像というものは、実はメディアから得た情報の断片の集まりにすぎない。断片と断片との間はまったくの空想で埋めてある。だから多くの宗教家や精神病者が「宇宙」を語るのだ。

サンフランシスコ地震の後の火災の報道を見て、日本人はサンフランシスコ全体が火事だと思った。しかし、その時、一部の火事でしかなかったことをどうやって検証できるか。一方的で、実証や検証を拒むこのメディアというものほど、宗教と親和性のあるものはほかにない。

今の子どもたちは過剰なメディアに包囲されて成長してきている。メディアから得られる情報としての幻想と、実際の生活のなかでの体験とを区別するのは、彼らにとってきわめて困難である。それは、生きるための厳しい体験が極端に少ないがゆえに、体験そのものの輪郭が曖昧になるからである。また、メディアからの情報に侵食されつつあることにもまちがいあるまい。

豊かさに閉じこめられた少女

若者たち、とくに少女たちはオカルトに

関心の強い者が多い。それは、豊かさが彼女たちの内なる不安をほとんど解消していないことを示している。

実際、精神病院へ少女たちの入院も減ってはいない。むしろ増える傾向すらあるように思う。

文明は、外なる自然を加工し、生活に豊かさをもたらしたものの、「内なる自然」、つまり人間のこころとからだを豊かにはしなかった。なぜなら、内なる自然は、外なる自然とのダイナミックな交流なしには、健全でいられないからである。

たとえば、次に示すのは、加工された世界のなかで育ち、内なる自然がひ弱なままにとどまってしまった少女の例である。そのひ弱さは漠然とした不安も生み、メディアのふりまく未熟な宗教に救いを求めさせるのである。

彼女は半年ぐらい前から、テレビのアナウンサーやキャスターが、ときどき自分のことについて放送していると思うようになった。

たとえば、有名なアイドル歌手が学校を中退したと、キャスターが告げるのを聞くと、自分のことを言っているに違いないと思い込んでしまうのだった。

彼女も、中学二年で学校へ行かなくなっていた。この一年、マンションの十一階にある自分の家から、めったに地上に降りたことがない。

彼女は十五歳。母親が四十二歳、父親が四十九歳のときの子どもで、まさしくひとりっ子であった。ほとんどあきらめていたときの子どもだったから、両親の溺愛ぶりは相当なもので、心配性の母親が何ごとも先まわりして彼女に与えていた。ちょっとでも寒い日などからだの三倍も着ぶくれして幼稚園へ行ったりした。

なんでも用意されていたから、争って何かをしたということはなかった。親の教えたとおりに行動していても通用する、小学校低学年時は、成績はまあまあだったが、五、六年生では何をしてもいちばんビリになった。

中学校はバスに乗らないと行けないところだったが、朝の混んだバスに割り込んで乗るなんてことはとうていできず、いつも遅刻した。朝はすぐには起きられない体質だったし、そのうち学校を休むようになった。母親はいじめのせいだと思ったが、けっきょく、そのままずるずると家に居っぱなしになった。

彼女の部屋には窓がなかった。マンションの一室にはときどきこういう部屋があるが、空調が完備しているし、十一階では窓があっても開け閉めもできない。そんな部屋に専用のテレビを置いて、一日じゅう見ていた。母や父と顔をあわせると勉強の話が出るので、部屋から出ることすら少なくなっていた。

ベランダに出れば東京タワーも富士山も見える。夕日に映える美しい雲も、季節によって限りない変化を見せている。しかし、彼女はそういったものにあまり興味を持たなかった。ベランダは寒いし、風が強い。

部屋のなかはいつでも快適な温度だ。食事も母親が黙って作っておいてくれる。そもそも彼女は、これまで一瞬たりとも、ひもじい思いをしたことがなかった。季節の風に吹かれたことも、最近はまるでなかった。
もちろん、彼女も学校へ通って、ちゃんと卒業して、できれば高校や大学へ行きたいと思っていた。それ以外の社会生活はそもそも思いつかなかった。だから、皆から取り残されていくとあせりながら、他の、たとえば学校に行かずに働く、などといった生き方などおよそ考えられなかった。
ただ、テレビを見ながら、タレントになるのは可能ではないかと思えた。外見には何も感じていないようにも見えたが、彼女は取り残される不安を感じていた。
雑誌の最後のほうに載っている、妙な首飾りを身につけるとよいことがある、という記事に目を止めた。それを身につけ、お祈りするだけだから簡単である。さっそく母親にせがんで買ってもらった。それは一万円ほどのものであったが、そもそも一万

円を手に入れるためにどれほどの労働を要するのか、まだ知るよしもなかった。

彼女はその妙な首飾りを日がな身につけ、窓もなく、風も吹かない四角い部屋のなかでテレビを見続けていた。タレントになれますようにと、毎日首飾りにお祈りしていた。

スイッチを切れ！

そのうち、テレビがなんとなく、自分のことを放送しているような気がしてきた。どうも、自分が考えたことと同じことをタレントがしゃべるのだ。

彼女は、その頃すでに精神に変調をきたし始めていて、自分の心のなかで起こったことと、外の世界で起こったこととの区別ができなくなりつつあった。生きるために必要ないっさいの活動をせずに、恒常的な環境に長くいたため、メディアからの信号と身近な現実生活との区別ができにくくなってもいたのだ。

彼女はテレビに出ている某タレントが自分の分身であると思うようになっていった。たぶん、前世では同じ人間だったに違いない。そんなことを考えているうちに、半年が経った。

年齢的には中三だったから、たまりかねた母親が、高校へ行くつもりなら勉強するようにと彼女に圧力をかけた。塾に通わせるか、家庭教師をつけるかといった提案もなされたが、こんなことも彼女にはかなりのプレッシャーとなった。母親のみならず父親も、かつてない強さで、いいかげん学校へ行けと叱った。彼女の心の底にただよっていた不安が、いちどに心の表面につきあげてきた。

そんなことのあった次の日、テレビを見ていた彼女に向かって、あるタレントがブラウン管のなかでこう言った。「新宿西口で会いましょう」。彼女は首飾りのなかにひそむ守護霊が、彼女の願いをかなえてくれると思った。守護霊ははっきりと日時は明らかにしなかったし、西口のどこであるとも言わなかった。しかし、彼女は、今夜の十時十三分だと確信した。その理由はよくわからない。語呂がよかったせいかもしれない。彼女は一年ぶりに地上に降りた。

彼女は新宿西口への行き方などよく知らなかった。それでも新宿駅には到着し、東口あたりでうろうろしていた。幸い怪しげなアンケートにも呼び止められず、家出娘を待ち受けているヤクザの目にも留まらなかった。その代わり、二時間うろうろしたあげく、空腹になったところで、交番に行って聞いた。

「タレントの○○さんが来ているはずですが、どこにいますか」

精神を病んだ人びとは、よく「テレビがつながっている」と訴える。自分の家のディスプレイとスタジオが直接つながっているという意味らしい。テレビの映像はあまりにリアルに見えるから、ニッコリ笑ったタレントはまさしく自分にほほえんだと思ってしまうのだ。そういう錯覚には陥らな

いはずの健康な人びとでも、そのタレントが手に持っている品物を買ってみたりする。スイッチを切ってよく考えてみよう。タレントもその品物も本当に遠い世界のことだとわかるだろう。

　メディアからの情報は、知らず人びとの心に侵入していく。人類滅亡という宣伝も、取り残されていくという漠然とした不安に重なったとき、リアルな相貌を帯びてくる。

命がけで戦わずして祈るなかれ

　しかし実は、この文明が必ず崩壊することはきわめて明白なことなのだ。歴史を見れば、崩壊しなかった文明などないことは小学生にだってわかる。しかし、それは、世界戦争とか、宇宙人の襲来とか、最後の審判などによってではない。それぞれの文明を支えるのは人間にほかならない。支える人びとの力が弱まったとき、その文明は崩壊するのである。

　豊かさをめざして、人は文明を発展させるが、その豊かさが完成されたとき、人はひ弱になり、文明を支える力を失う。

　この豊かな時代の若者たちが漠然と感じている不安とは、自分たちにこの文明を支えきれる力が充分にあるとは思えないところから来るのであろう。なぜなら、この豊かさは、彼らの祖先や、父や母によって築かれたものであって、彼ら自身が戦いとったものではないからである。

　精神病者もまた同じである。病いが彼らから文明を担う力を奪うために、社会の崩壊に対してより敏感になっていく。そして、神仏にすがることで不安の克服を試みる。

　しかし、判断のすべてを宗教にゆだねることはできない。たしかに死は必ず訪れ、文明は必ず崩壊するのだから、宗教家たちの警鐘には謙虚であるべきであろう。しかし、まだ、祈るときではあるまい。戦わずして祈ることになるからだ。

　エスキモーたちは日々、持てる英知のすべてを使って、過酷な大自然と戦っていた。そして、もはや祈る以外に何ひとつ残されていないぎりぎりのところで祈るのである。

　精神病者もぎりぎりのところに追いつめられている。彼らの認識では、自分も世界も崩壊に瀕している。その祈りは、すさまじくも真摯な、命がけのものである。

　その証拠に、彼らはいよいよ妄想と幻覚に圧倒されつつあるとき、必ずこう言う。

「私は死なねばなりません。私が死ねば世界は救われるのです」

　そのとき、私たちが止めねば、彼らは自殺してしまう。世界を救うために。

　私もまた、人類が知識や経験のすべてをもってしても、本当に回避不能な事態に至ったなら、祈るであろう。あのエスキモーの占い師のように、平静はまるで目立たずに文明の片隅にひそかに生きている、本当の宗教家とともに。

豊かな時代の終末観……アンケート編

新宗教は終末をどう考えているのか?!

［宗教団体からの回答］

ノストラダムスが予言した滅亡の1999年も近づき、環境破壊による危機感も高まっている世紀末の今、宗教団体はどんな救いの道を主張しているのか?

❖アンケート用紙の質問内容

❶ノストラダムスが予言した終末の一九九九年も近づいておりますが、近いうちに人類が破滅するような危機は訪れるでしょうか?
❷破滅の危機が訪れるとすれば、それはどんな危機ですか?
❸その危機はどのようにすれば避けることができますか?

あまひのみちユニヴァース光団

①破滅の危機は近いのか?

一九九七年頃より全世界に大地震が次々と興るでせう。北半球は特にひどく世界地図が変ります。人類は三分の一に減少します。一九九九年にその大嵐はピークを迎えます。その後で地球統一大平和時代が来ます。

②どんな危機か?

人類の罪業があまりに深く指導者等が不明愚劣巧妙悪質で人民をだまして自己の名誉地位財産を搾取し、それに同調して人民も犯罪ばかり多く犯し、善人は小さくなり悪人が横行闊歩してゐる地球の現代を警しめるために天地の裁きがあります。欧亜米特に神を否定する共産圏の平野は海に沈み山岳のみが大きな島として残るでせう。日本本土は一時海岸が大津波に襲われますが、その後で隆起し広大となるでせう。人民は半減します。南半球は比較的安全です。文化の中心は一時豪州に移るでせう。二十一世紀は日本の文化が世界をリードし、地球連邦大平和社会国家となるでせう。そして世界の中心人物として世界大聖皇（メシヤ）が選出されるでせう。かくて地球文化の黄金時代が長く続くでせう。

③どうすれば回避できるのか?

世界の聖者等が国際的に手を結んで人類の罪業を赦していただくよう大宇宙創造主神に祈ることです。祈りと神法霊術の秘修しか救う道はありません。聖者等は親神様に孝行ですから奇蹟をおこせます。それによって少しは裁きが緩和されます。

その動きを始めているのがあまひのみちユニヴァース光団です。既に百三十三カ国を伝道し超宗教、超民族、超国家の聖地霊場を定めること三百六十九カ所に及びました。他宗排斥の俗宗教等が今は栄えておりますが、その本山は皆滅ぼされ、その幹部は皆消滅するでせう。神力の大掃除が行われます。

その後で祭政一致の神聖政治が世界の聖賢等の結集によって生れてくるでせう。今は人類史の大六劫の終末期に入っております。過去に於ても人類史は天孫降臨より百七十九万五千年の間に原始時代より文化爛熟時代へと数十万年かかって一文化史を形成しておりますが、天変地動の裁きにて再び原始時代に帰っております。そのような変革史をすでに五回繰返しております。ニニギ皇朝、ヒコホホデミ皇朝、ウガヤフキアエズ皇朝前期（ミュー大陸中心時代）中期（アトランチス大陸中心）、後期（エヂプト地方中心）です。その晩期に地球統一大平和時代を数万年経験しております。歴史は繰返します。今は大六劫の末期黄金時代に入る前夜にあたります。恐怖と期待と希望をもって人類は陰徳聖徳を積んで生き残ることです。神は全智全能にして一人一人の言行をヂッと見詰めておられ善因善果、悪因悪果の裁きを行われます。「汝等悔い改めよ、天国は近づけり」とイエス様は豫言されました。日本人は世界の光の源の人民として悔い改めなければなりません。そして一人でも多く生きのこることです。

一切宗

①破滅の危機は近いのか？

予言とは無関係に、破滅の道をたどっているのは事実ではないでしょうか。

②どんな危機か？

原因としては、まず第一に自然環境の破壊。人間が唯単に楽しみのためにのみ、多くの美しい自然をこわしていきます。ゴルフ場建設等、無意味な自然破壊がその例の一つといえましょう。

第二には、人間の私利私欲に起因する無秩序な営利主義。人間に害のある物を平気で売りまくる。

原因第一、第二はそれぞれ政治力と密接に結びついて世の中を動かしています。他にも数多くの原因が考えられます。

③どうすれば回避できるのか？

危機の回避を宗教的立場で論ずると、唯一平和を願う〝祈り〟でしょうか。この〝祈り〟は何千何万と多くの人々によって唱えられる事により、人々の心を変え、破滅の危機を乗り超えられると信じます。

宗教に関与されている方々は、一日も早く霊感商法から脱して、真の信仰を確立すべきではないで

◉この別冊宝島の企画にあたり、本誌編集部では右上のようなアンケートを新興宗教九十六団体に送付し、十一通の具体的回答を得た（五十音順に掲載）。
◉その他、終末は来ない、とだけ回答してきたのが二団体、終末論は当方の教義と無関係というのが一団体、理由（わけ）あって今は回答できない、というのが三団体。回答はあったが後に掲載しないでほしいとの連絡があったのが一団体。
◉ここに掲載した文に関して編集部はいっさい手を加えていない。

しょうか。
マスコミ関係の方々も正しい報道を人々に伝え、正しい物の見方が出る眼を与えて戴きたいものですね。

クリシュナ意識国際協会

①破滅の危機は近いのか？

インドの古典文学『バガヴァッド・ギーター』には宇宙レヴェルでの破滅の記述があります。視野を人類だけに限るのではなく、より広い視野から物事を見ることを『バガヴァッド・ギーター』は教えています。

②どんな危機か？

『バガヴァッド・ギーター』には次のように記されています。
（8・17）地球的記算によれば（四つの時代を一周期として）ブラフマーの一昼は千周期。そして一夜も千周期。
（8・18）ブラフマーの昼が始まると全生物は姿を現わし、ブラフマーの夜が来ると彼らは再びその姿を消す。
（8・19）何度も何度もブラフマーの夜が明ける度、全生物は現われ出てブラフマーの夜が訪れる度、彼らは絶望的に消滅する。（『バガヴァッド・ギーター・あるがままの詩』〈クリシュナ意識国際協会日本支部発行〉より）
ここにあるブラフマーとはこの物質宇宙を創造した人物で、四つの時代とは「サチャ」「トレーター」「ドヴァーパラ」「カリ」の時代と呼ばれ、それぞれの期間は百七十二万八千年、百二十九万六千年、八十六万四千年、四十三万二千年です。

③どうすれば回避できるのか？

この物質宇宙は創造と破壊が繰り返されるのですが、『バガヴァッド・ギーター』には次のように記されています。
「だが、この顕現、未顕現の現象を超えて別の永遠な非顕現自然が実在する。それは至上至高にして不滅。この世界のすべてが消滅してもそのまま残る」
ここでは、この物質界を超えた超越世界――精神界に関して述べられています。その精神界に帰ることにより破壊ばかりでなく、あらゆる危機から解放されます。
精神界に帰る為には古代から様々な行法が伝わっていますが現代では神の聖名
「ハレー・クリシュナ、ハレー・クリシュナ
クリシュナ・クリシュナ、ハレー・ハレー
ハレー・ラーマ、ハレー・ラーマ
ラーマ・ラーマ、ハレー・ハレー」
を唱えることが勧められています。

幸福道教団

①破滅の危機は近いのか？

人類が現在の進路を改めない限り、人類の終末は近いものと考えられます。それは一時に全滅するということでは無いかも知れませんが、各種の破滅現象が世界の各地で発生するでしょう。

②どんな危機か？

地球温暖化によって水位が上昇し、都市の大半が水没する。
酸性雨や酸性霧によって森林が枯死する。
熱帯雨林の乱伐によって陸地の砂ばく化が進み酸素が欠乏する。
フロンガスによるオゾン層の破壊、大気、海洋、土壌、水質の汚染、異常気象、麻薬の蔓延、凶悪犯罪の激増等は現在も進行しつつありますが、これらが複合的に人類の生存を不可能にする。
其の上核戦争の危機もあり、大地震や火山の大爆発其の他の天変地変も起り得ることです。
或は五億年前に水没したと伝えられているアトランチス大陸のような異変も起らないとは限りません。

③どうすれば回避できるのか？

人類はあまりにも物質的な考え方に偏り過ぎているのです。物質的な幸福だけを求めて来た人類は、物質文明を大いに発達させせました。

それも良いことではありますが、精神文明の発達が非常に遅れているために現在の危機を招く結果になりました。

本当の幸福は物質的な欲望を満たすことだけではなく、心の豊かさ、平安、喜び、楽しさ、満足等にある筈です。

従って人類が滅亡の危機を回避するためには、直ちに従来の既成概念と価値観を変えて、物よりも金よりも心を大切にし、物質的豊かさよりも心の豊かさを重んじるようになり、道徳的、精神的に進歩することを幸福と考えるようにならなければなりません。

そのためには、政府も与党も野党も、産業界も教育界も国民も、打って一丸となって道義國家建設を目指す大改革を断行すべきです。そうしてあらゆる公害源を断ち、自然破壊を止め、地球環境保全のために全力を尽すべきです。日本の成功は世界に波及して世界人類を救うことになります。

神は祈るだけでは駄目です。真の祈りとは人間の心が神と調和することです。

人類が誤った進路を改め、その心が愛と平和の光で満たされたならば、必ず調和と繁栄の黄金時代を築くことが出来るものであると確信しています。

これらの大改革は必らず平和的建設的になされねばなりません。意見が対立しても、人類滅亡の危機を避ける大目的で一致しておれば平和的改革が可能です。

神命愛心会

①破滅の危機は近いのか？

神の力をもって、すでに回避されたので、人類が破滅するような危機はあり得ません。

②どんな危機か？

一、「第三次世界大戦の危機を回避させた神の御配慮」

（これは昭和六十二年六月に発行された、小松神擁師の著書『天界からの大予言』〈日本文芸社刊〉の中の目次の一部です。）

昭和五十八年当時のソ連は、世界に誇るミサイル兵器を保有し、軍部においては、その威力を試したくてうずうずしているという状況でした。

そこで、神は小松神擁師に対して「ソビエト軍が、ミサイルを発射したいという気持を自ら制御出来なければ、神が日本を守る。天空の気をもって、ソ連を凍らし、指導者にその行為の愚かなことを悟らせる」とのお言葉を賜わったのです。

この御神言を賜わったのが、昭和五十八年八月二日のことでしたが、それから三十日目の九月一日、不幸にもソ連のミサイルが発射されました。それが〝大韓航空機撃墜事件〟です。

これは、日本人乗客二十八名を含む二百六十九名の乗客、乗員全員が死亡するという大惨事でしたが、神のお手配によって大難を小難に変えて頂き、第三次世界大戦の危機を回避して下さったのです。天の成敗として、その後しばらくしてアンドロポフソ連書記長は死去いたしました（詳しくは『天界からの大予言』をお読み下さい）。

このソ連のミサイル発射事件が起こる少し前に、ニューヨークタイムズの日本支局から取材の申し入れがあり、取材当日には日本支局長ご夫妻がみえられ、ある宗教新聞の編集長も同席されました。

その時、日ソ問題やこれからの世界の動きに関しての質問がありましたが、世界状勢について神は「米ソの話し合いが問題である。米ソのトップの話し合いが成り立てば、第三次大戦はなくなる。話し合うことで物事は解決する」とおおせになりました。

またソ連の状勢についても、神は「これから三代目に平和な時代がくる。ソ連国内にも、自由を求める異分子が発生して、分裂して行く状況が必ず発生する。改革して行こうとする心の表われが出て、平和的人間関係の世界が作られて行く」とおおせになりました。

その御神言通り、米ソの話し合いが行なわれ、ソ連の指導者も、アンドロポフ、チェルネンコの後、三代目のゴルバチョフ書記長になってペレストロイカが進められ、ついにゴルバチョフ大統領が誕生

して、神の御言葉通り共産主義から民主化へと大きく政治が変革されているのが現状です。

二、戦争によって、ミサイルや爆弾が降ってくることよりも「下から奮発されて、落ちてくるもののほうが怖い」と、神はおっしゃっておられます。

これは、資源を確保するために石炭を掘ったり、石油を掘ったりして地下を圧迫する、その反動によって火山爆発などが起ることであり、つまり世界中の自然が汚染され、破壊されることが、火山の爆発や地震、あるいは水害といった天変地異を引き起こす要因になりかねないということです。

また、現実に叫ばれているフロンによるオゾン層の破壊、二酸化炭素による地球の温室効果といった問題は、このまま進めば地球にとって取り返しのつかない大問題となってしまいます。（小松神擁師の著書『ノストラダムス大予言の不安を斬る・21世紀の大予言』〈発行・立幸学館　発売・池田書店〉より抜粋）

③どうすれば回避できるのか？

現代の物質文明は、石油や石炭、天然ガス、ウラン等といった地下資源によって支えられている訳ですが、その地下資源を使えば使うほど、自然破壊も進むというように、今、地球人類は大きなジレンマの中に立たされています。

この問題について、神は「宇宙には無限の資源がある。これからの産業は、その広い空天に存在する資源を利用しなさい。それが発展の道である。地球の中に埋もれている資源を求めて争いを起こすよりも、天を仰ぎみて、その空天にある資源を活用することは平和へ続く道である。ミクロの世界には、使い切れないほどたくさんの核が横溢しているから、これを開発することが人類を救う道である。」（『天界からの大予言』より）とおおせ下されています。

平成元年三月二十三日、この新しいエネルギーについて、改めて神よりご指導賜わった時に「八年後、朝明けにして、その成果をみる」との御神言を賜わりました。

つまり、一九九七年にエネルギー革命が起こり、それによって地下資源を取りっこする必要もなくなるので戦争もなくなり、人類は今までに経験したこともない未知の世界に足を踏み入れることになるのです。

このエネルギー革命を起こす新エネルギーは、低温核融合、超電導といった複数のもので、それらが開発され、実用化されるということです。

神はまた、二十一世紀の世界についても予言されていますが、詳しくお知りになりたい方は『21世紀の大予言』をお読み下さい。

〔土地の霊象と清め〕

人間が生活しているその土地、その土地には、必ず過去に恨みや悲しみを残して死んでいった人達の魂が埋没しています。特に戦争犠牲者となった人達の想いは強く、その霊象を受けて同じような戦争がくり返されてきたのです。

小松神擁師は、そうした霊象地を治める行を、直接神から指導を受け、日本各地の土地のお清めを続けてこられていますが、その成果は世界の長寿国、経済大国という日本の現状が如実に物語っています。

昨年十一月、ベルリンの壁の撤去が大きく報道されましたが、これも実は、神のお手配があったのです。昭和六十年、ある御仁が西ドイツに赴任する時、神より小松神擁師を通じて、ユダヤ人が虐殺されたガス室や焼き場跡などの霊象地を清めるようにとの御指導が入り、その方は休日を利用して丸一年間、ヨーロッパ各地の霊象地を清めて歩かれ、途中、その方の友人数人も日本から合流して、行動を共にされた、その成果が今回の東西ドイツの壁の撤去という形となって表われたのです。

崇教真光

①破滅の危機は近いのか？

危機は訪れます。その危機の訪れの時期を、私どもの教団を御立教されました救い主様岡田光玉師

は、立教（昭和三十四年二月二十七日）三十周年を目処として到来すると述べており、かつ一九九〇年から二千年に至る十年間の〝人間の生き方〟によって、人類の運命が決定して行くことを警鐘乱打されております。現代人類は生存か破滅かの分岐点に立たされていると言えましょう。

②どんな危機か？

次のような危機の問題がありま す。

A　地球環境の悪化の問題
・熱帯雨林の減少
・砂漠化の進行
・酸性雨による環境破壊
・酸素の欠乏
・温暖化する地球
・南極北極の氷解による海面の上昇
・フロンガスによるオゾン層の破壊
・広がる海洋汚染
・異常気象の頻発

など、地球環境が急速に、そして確実に破壊されつつあります。

私どもの師は、

「神様が何億万年おかけになられまして、人類のためにお創り下さいました地上の山川草木、禽獣虫魚に至る万物万生を人類は大切に使わせて頂くという想念がなかったら、海怒り、山怒り、森は怒って無言の反撃を開始し、遂に自然界に依って人類は、裁かれてしまう訳であります」

と、繰り返し御教示下さっております。更に、地球温暖化の問題については、

「世界は日本を中心として熱くなります。冬も暖かくなって冬と夏との差が無くなり、日本は亜熱帯になっていくでしょう」

「神様は、急激な冷しに依りつつ次第に世界異常高温化へ持っていかれます」

と、述べております。今日の世の中は、燃料文明であり、亜硫酸ガスや炭酸ガスが沢山大気中に排出されるため、空気界の温度も上昇しますし、地球の温度も太陽熱も年々上昇することになります。

B　人類の毒化問題

現代人は、身体の外側は風呂に入ってお湯で洗い流しますが、健康に最も大切な身体の中の浄化に関しては怠っております。毒素を充満させ、業病化せしめています。人体に蓄積された毒素は、自然には汗や洟や痰などになって対外に排泄しますが、現代人は、それを〝悪いこと〟として止めてしまいがちです。

更に問題として、
・医薬品の乱用
・食品添加物や農薬を使った食物による食生活
・精神的に悩んだり、悲しんだり、怒ったり、怒鳴ったり、恨んだり、憎しんだり、嫉んだりなどの悪い想いが、体内では濁微粒子という形で物質化してしまいます。

これらにより、人体を汚し遂には染色体・遺伝子の異常を発生させてしまいます。

我々の師は、

「やがて皮膚病が増えるぞ」

「ショック死が非常に増える時代が来るぞ」

と、警鐘を与えておりましたが、今やそれが現実になってきております。

C　対立、闘争の問題

戦いの火というのは必ずしも大戦ではなく、局地における戦火でも、これが重大な人類亡滅の危機に火がつく危険があります。小さくは、人類の想いの中にある「自分さえよければ」という自己愛がぶつかりあいますと争いが生じます。宗教と科学、共産主義と自由主義、親子、夫婦、自分と他人などが、対立闘争し、国家、職場、家庭、学校など至るところで争いが生じ、弱肉強食の世界が展開されてまいっております。

D　七度目の天地かえらく

次の大きな問題として、地球規模での大変動期の到来を覚悟せねばならないでしょう。

地球の数十キロメートル下は、今でもブヨブヨであり、中はドロドロの火の海です。地殻はこの上に乗っている状態です。このバランスが崩れたとき、想像を絶する大変動が起こる訳です。

③どうすれば回避できるのか?

以上挙げましたいろいろな危機は、人間の汚れた魂、心、身体を洗い浄めるためと共に、英知を結集しても解決がつかないことを、人間に知らしめるために、神様が用意されているものであり、これらの危機の本当の原因は、人間の心の奥にある想念の中にある訳です。

神様は、この地上に天国の世界を創造なさるために人類を出された訳ですが、神の実在を忘れ、物欲の行き過ぎにより物や金ばかりを追いかけるようになり、人間の心と想念が穢れ朽ちてしまいました。その穢れを浄め吹き払っていこうと神様はされます。その結果、人類も地球もミソギハラヒ（病・貧・争・災）をうけることになります。そこで人類は、

・一切のものが与えられている感謝
・愛和、協力、団結して神様の法則に従う
・人としてお互いに尊び合う

に目覚めれば、あらゆる問題は解決して行きます。

いよいよ、人類の未来を神様の法則に従って創造する時代が来ております。あらゆる学問、思想、宗教、人種、国境の垣根を乗り超えて、相反するものが協調し、和解し、愛和して行く時代です。

人類の親神様は、これから愛和の時代を築こうとされておられます。それに伴って戦争の危機は平和共存へと移りつつあります。

新たな生き方、新たな文明を求める動きが、世界各地に出はじめているのです。これらの新たな生き方、新たな文明は、唯物の世界だけでは創造出来ません。目に見えない霊の世界、神の世界に目覚めてこそ、開けてまいります。魂と心と肉体の曇りを浄め、かつ目に見えない霊の世界、神の世界を知る業こそ、〝真光の業（手かざしの業）〟なのです。どうか皆様も是非真光の業を体験され、新しく輝く二十一聖紀への文明原理を探求されますことをご祈念申し上げます。

生長の家

①破滅の危機は近いのか?

結論から言いますと、人類が破滅する危機が近いうちに訪れるようなことはありません。何故ならば、予言というものはその時点において霊能者が〝霊の世界〟又は〝心の世界〟の中で造られつつある想念の形を霊感して、それを未来の出来事として発表したものであるからです。

これを説明しますと、世の中の出来事は先ず、〝心の世界〟の中で形が出来上ります。そして、それが、やがて具体化して現実の出来事になるのです。その過程の中で、〝心の世界〟の中でつくられつつある想念の出来事は、例えば、世界の平和を祈る別の想念によって修正されるのです。だから、或る時点において一人の霊能者が人類の運命を悲観的に予言したからと言っても、それはその時点における人類の心の世界の中でつくられつつあった想念の形を霊感したものに過ぎません。だから、それが具体化して何年か後に実現する前に、多くの人々の善念や宗教界の日々の祈り等によって、その時の心の中の悪想念は修正され得るのです。

②どんな危機か?

質問の①の答えの中で言いましたような理由で、近いうちに人類が破滅するような危機は訪れませんが、物の豊かさばかり求めますと、人類の心の中から大自然の恩恵に対する感謝の心がますます失われて行きます。

このような我欲の追求ばかりに人類が奔走しますと、その心が現実化して地球の自然破壊はますます進行します。だから、このままでは人類は利己心をのさばらせて、自らの環境を破壊することによって滅びる可能性はあります。

③どうすれば回避できるのか?

質問の①に対するお答えの中で言いましたように、人生の出来事や人間の運命は先ず、心の世界で

形づくられて、それがやがて具体化して現実の環境となってあらわれます。だから、人間は自分の境遇や運命が気に入らなかったら、自分の心の想いを変えればよいわけです。私たちは心の中に善い想念を抱き続ければ、やがてそれは良い運命となって自分の環境にあらわれます。

　これが私たちが人生において危機的な出来事にあわないようにするための原理でもあります。即ち、自分の心の中にないものは自分の人生には起こりません。自分の心の中が常に幸福の想いで満たされていれば、不幸な出来事や悪い事件から自然に遠ざかります。

　だから、たとえ、人類の心の中の世界が浄化されず、それが善念や祈りによって修正し切れない時、やがてその悪い想念が具体化して、地球的な規模での悪い大きな事件が起こるようなことがあるかも知れません。しかし、それでも善い想念を抱きつづける人々は、その不幸な事件から反発して遠ざかることになります。これがたとえ、地球的規模で起こる危機でさえも、それを避け得る原理もあるのです。

　なお、生長の家においては全ての信徒が日々世界の平和を祈って、人類の運命の改善のために心の世界を光明の善念によって浄めさせてもらっています。これはその危機を避ける大いなる力になることを私たちは信じて、日々こうした〝光明の思念〟を行なっております。

世界基督教統一神霊協会

①破滅の危機は近いのか？

　世紀末思想は、キリスト教では終末観、仏教では末法思想として現れ、ほとんどの宗教に共通する考え方で、そこには必ず審判と応報についての予言がされています。

　キリスト教における終末の起源は、人類始祖が神の願いに反して罪を犯し、堕落したことに端を発します。つまり、人間の堕落で始まった罪悪の歴史を終焉させて、人類を救済するその時を、終末とみているのです。このためキリスト教では、終末期にはメシヤ（救世主）が現れることを最も強調しています。そして当教会も、今の時期が終末時代であることを主張しているのです。

　つまり、終末には、神がメシヤを降臨させ、そのメシヤが示す真理に基づいて救いがもたらされもするし、裁きによって悪の破滅も起こるのです。

　このような観点から、終末は、罪悪世界が終わりをとげ、神を中心とする善なる世界へと転換される時であり、聖書のペテロの第二の手紙の中に示されているような「終わりの日には、天は大音響をたてて消えさり、天体は焼けくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう」というような天変地異は起こらないまでも、悪に対する破滅は訪れるでしょう。

②どんな危機か？

　上記のように終末は、神による救いが完結する時ですから、その時が近づくに従って、善悪の両勢力は完全に分立し、悪なる勢力は追放され、やがて滅んでいくような兆候が現れてきます。

　本来、神が人間を祝福して「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ……すべての生き物を治めよ」と言われたごとくに、人間は堕落しなければ、第一に各個人が完成し、第二に子女を繁殖して家庭、社会を完成し、第三には、すべての万物を主管して安楽な環境を築くはずでした。

　ところが、堕落によって人間は罪悪に陥り、不義なる心に支配され、各個人は愛の心を失い、自己中心となり、人類は相克の中で闘争歴史をつづり、万物世界も自己中心の私欲のゆえに破壊してきたのです。

　そして今日は、愛の秩序の崩壊による混乱と衝突が、個人から家庭、社会、国家、世界全体に及んでその極に達し、このまま放置しておけば、人類全体の滅亡にもなりかねない様相を呈しています。

　このように、破滅の危機とは、人心の乱れに伴う世界の崩壊を意味し、深刻な倫理の崩壊、エイズの蔓延、核戦争の恐怖、公害によ

る異常気象や環境破壊に基づく地球規模の危機が起きていることは、まさにこのことを如実に現しています。

③どうすれば回避できるのか？

終末における破滅とは、悪勢力が崩壊することですから、終末期の危機的事態を避けるためには、個人にはじまり社会、世界に蔓延している悪をいかに一掃するかということが先決問題となります。

神は、終末期には、新しい時代を出発するために、必ず善主義の中心を立てられます。それがいわゆるメシヤ（救世主）といわれる方です。

メシヤの中心使命とは、人類始祖が堕落することにより悪の父母となり、その子孫は悪の血統を受け継いだ罪悪人間となってしまったので、全人類の前に善なる父母の立場をもって現れ、人々に本然の道を教え、愛で導き、生み変えて、罪悪から解放してあげるところにあるのです。

そこで終末の不測の事態に備えるためには、まず、神が善の中心として立てられるメシヤを探し求め、その方を通して終末とは何であり、いつ来るのか、さらにどのように対処すればよいかを知り、同時に、自身から始めて、悪を除去していく努力をすることが最も重要なことです。

つまり、善の個人と家庭の確立をなして、人類が一つの家族となるような平和な世界の実現を目指すことが、危機を避ける最も有効な道であるということができるのです。

世界真光文明教団

①破滅の危機は近いのか？

当教団では、神様から「火の洗礼（大天変地異）」が来ると示されています。なぜ天変地異が来るのかその原因は次の通りです。

まず神様が人間をお創りになられた目的は、この人類界に物質を駆使して、神の世界と同じような「地上天国」を顕現しようということでした。そのため、神は人間に欲を与え物質開発をさせてこられました。ところが長い年月の間に人間は物質欲のみにとらわれ、罪や曇りを重ねてきたのです。

その人類にブレーキをかけるために聖雄聖者（釈尊・モウシェ・イエス・マホメット）などを出現させたのですが、それでも止りません。その結果、人類は神を忘れ、ついには神を否定さえするようになり、自然を破壊し、また核兵器によって地球を破壊しかねない事態になったのです。

そこで神様はがまんにがまんを重ねてこられたのですが、ついに「火の洗礼」（大天変地異）によって、曇りに曇ってしまった地球を徹底的に浄め、人間の霊的な曇りをも浄めてしまおうとされているのです。

その「火の洗礼」の後、生き残った清らかな人類（「タネビト」と言います）によって、次の新しい文明への再出発をさせようというのが、大天変地異を起こされる、神のご意図です。

②どんな危機か？

神様から示されていますところでは、日本も世界も昭和三十七年から大天変地異危険期に入っております。これを「火の洗礼期」と呼びます。そしてやがて「火の洗礼の大峠」といわれる時代も間近いといわれます。

大地震、火山爆発、大洪水、陸地の海中陥没など、この数千数万年来なかったような大規模なもの、人類がかつて経験しなかったようなことが起こると言われています。

③どうすれば回避できるのか？

神様は、人類を救い次期文明を開く先駆けの役として、教団に神術である「真光の業（手かざし）」をお与えになり、「神界の秘義」の公開をされたのです。そして一人でも多くの人を次期文明のタネビトに残すようにとの願いを託されました。

「真光の業（手かざし）」は、イエス、釈尊とその弟子達の一部にしか許されなかった神術でありますが、今回、神様からみ役を賜わった教団教え主を通して万人に（宗門宗派・老若男女・人種貴賤

の差別なく）与えられるようになったのです。そして万人がこの神業（真光の業）を行ない、肉体的、霊的に汚れきっている人類を浄めることが、最も有効な人類への救いの道であるのです。

　また、公開された「神界の秘義」には、宇宙のすべてにわたる法則「正法の教え」が示されており、その法則に添った生き方を学び実践することによって人類に本当の幸福が訪れるのです。

・さらに神様は、神様のご計画である「主神のご経綸」をも示されました。その雄大なスケールの神様のご意志を学ぶことによって、何のために人として生まれてきたのか、人として何をすべきなのか本当の人類の進べく目標がわかってくるのです。

　この現代の荒廃と異常さに悩み、そしてほんとうに幸福を得たいと真剣に考えている皆様に、「真光の業」と「神界の秘義」が授けられる研修会への受講をお勧めいたします。

天照教

①破滅の危機は近いのか？

　地球がなくなる破壊すると言う声が多い様に噂されておりますが、地球がなくなる事は信じませんが、人類の破滅が目立って世の中が変って来る事を信じます。

②どんな危機か？

　天体の変化、地震、津波、雷、火事、爆発、気候の変化で破滅する危機が訪れるでしょう。

　社会の人類の生活環境で、自然を破壊する要素が多い。

　化学が発展すればする程地球の破滅を増長する。

③どうすれば回避できるのか？

　それを避けるには人間の「心」以外にないと思います。宗教と言えども、我が心の儘に歩み自分の事より考えない宗教が多いので神の誡めも重なり、人類の整理される事も心に留め人類永遠の平和を希う宗教活動が大切。生活環境を破壊する要因を作らぬこと。自然を破壊する行為は慎むこと。

〇（マコト）の家

①破滅の危機は近いのか？

　現状のまゝで推移した場合には九〇％の確率で人類の過半数が破滅するでしょうが、人類全滅にはなりません。

②どんな危機か？

1、偶発的核爆発が原因となって核戦争を誘発する可能性もある。

2、大気汚染、水質汚染。食糧飢饉。薬害。殺虫剤。その他、多種類の複合公害により死滅。人類、動物、鳥類、魚類、虫類が死滅する。

3、唯物論、唯心論、宗派宗教、その他の思想的対立抗争。特にキリスト教系宗教との対立による宗教戦争。思想混迷による準戦暴動、その他、殺人、強盗。詐欺、横領等の事件、事故が世界中に続出。

4、地震、火災、洪水、竜巻等による被害。

5、その他、意想外の事件による被害。

③どうすれば回避できるのか？

　大部分は人間が作る危機ですから人間自体が改心して、思想的、物理的、霊的にも人類協同体になって協力し、思想の大改造、物理的大改造をすれば（教育、宗教、政治、文化、科学、事業等）改心、改造の程度に応じて危機を避けられますが、既に破壊の原因ができているから完全な回避は不可能です。努力の程度に応じて三〇％〜六〇％を避けることは可能でありましょう。

危機を避ける絶対的条件

1、神人協同体理念
2、宇宙協同体理念
3、万物協同体理念
4、人類協同体理念

　以上四点を忠実に守り実践協力すること。（以上）

豊かな時代の終末観……テキスト編

世界の終末観と、破局を夢見る子どもたち

マンガ、アニメ、SF、ファミコン、あらゆる子どもメディアがハルマゲドンと、破滅後の世界を描いている。なぜ子どもたちは終末を楽しむのか？

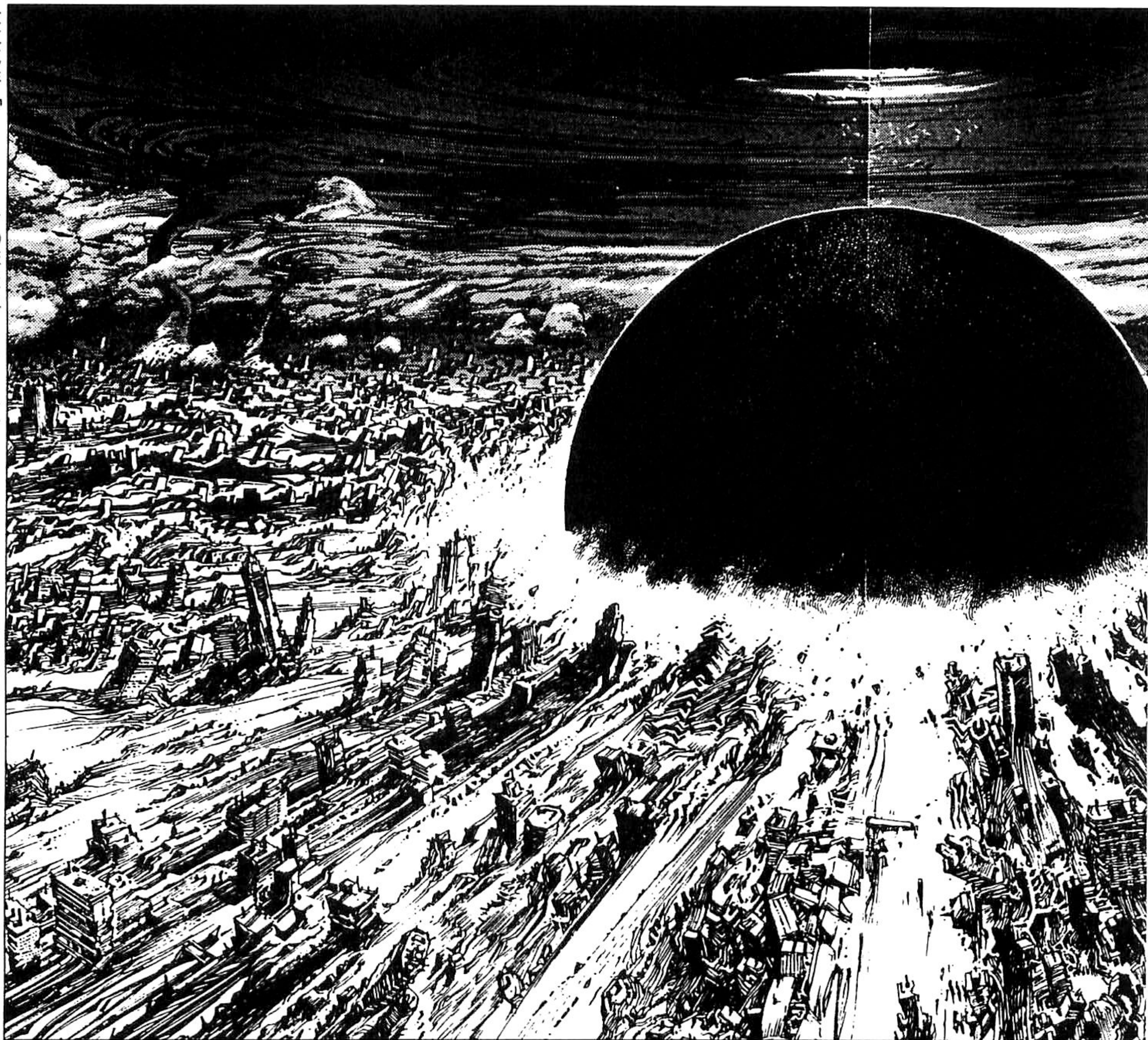
加藤晃（宗教学）

終末観とは、この世の「最期の事柄」に関する観念の総体であり、それが神学的教説になったときは終末論になる。人間はその人生において、解決し難い多くの困難（病、死、社会的矛盾等）に直面する。終末の観念は、こうした困難になんらかの解決を与えようとする宗教的実践から生じたものである。

したがって終末観には、ふたつの段階がある。まず、個人の死後の運命に関する来世観（死、審判、応報、天国と地獄、不死、復活、再生、輪廻等）と結びつく「個人的終末観」。そして、その「個人的終末観」を内包しつつ、それを超えて世界と全人類の終末の運命に関する観念（世界の最終的な破局と復興及び全人類の復活・世界審判と罰・千年王国等）に至る「集合的終末観」である。

世界の宗教的終末

この「集合的終末観」にも、やはり、二種類のパターンがある。

大友克洋「AKIRA」©講談社・マッシュルーム

ひとつは、世界は破局→再生→繁栄→破局というサイクルを何度も周期的に繰り返す、という観念である。こうした循環的時間観念は、農作物の生産暦に沿った豊年祭や祈年祭などの年中行事化された宗教的な儀式によるものであり、世界各地の神話や民間伝承のなかに広く見出すことができる。それはいわば、宗教学者のM・エリアーデの言う「永遠回帰」である。

これに対するのが、一回限りの終末に向かって時間が直線的につき進んでいる、という観念である。キリスト教における「ハルマゲドン→最期の審判→神の王国の到来」がそうであり、聖書学や教義学上の重要な論点になっている。これは、古代イランのゾロアスター教がもっていた「世界期間→世界の大火災→人類の復活→義人の住む新しき天地」という終末観が、ユダヤ教に与えた決定的な影響によるものである。

したがって現在、終末を唱えている新宗教にもキリスト教系の教団が多い。これらの宗教の終末観は、単純化すれば「終末的

状況（危機の時代）→現世の終末→救世主（メシア）の出現→千年王国の到来」という直線性を持っている。

社会学者のブライアン・R・ウィルソンは「千年王国のヴィジョン」（『思想』一九七六年）のなかで、このような終末観を次の六つの要素にまとめている。

（一）この世は救いようもなく悪い。

（二）全体的な変革が必要。

（三）人間はこの変革を遂行できないので、変革は超自然的存在によって達成される。

（四）この世の終末は不可避であり、運命づけられ、切迫したものである。

（五）新しい秩序が確立されると、そのなかで信者は最も優越した地位を得るが、敵（そして人類の大多数）は何の場も与えられない。

（六）この真理を知っている者は、それに対する信仰を公けにし、来たるべき変革に備えなければならない。

そしてこの種の終末観を持つ代表的な教団としては、「セブンスデー・アドベンチスト教団」、「ものみの塔聖書冊子協会」（エホバの証人）、「世界基督教統一神霊協会」などがあり、日本でも七〇年代以降に注目されるようになった。たとえば、「ものみの塔聖書冊子協会」を名乗る「エホバの証人」は、プロテスタントとカトリックどちらにも属さないキリスト教の一派である。本部はニューヨークにあり、信者は世界に約二百八十万人（日本では約十万人）と自称している。この教団は、『ものみの塔』という小冊子（ライオンと羊が仲よく寝そべっている等の表紙）を持って戸別訪問による布教を行っており、その教理の中心は終末論である。

「ものみの塔」の小冊子

つまり、この世は終末に近づいている。神の王国エルサレムの滅亡後、この世はサタンによって支配されていたが、二千五百二十年経った現在、イエス・キリストが目に見えぬかたちで再臨してくる（ハルマゲドン）。そしてエホバの神が最後の審判者となってサタンの軍団を滅ぼし、永遠の地上の天国で幸福に暮らす、というものである。

こういった終末型カルトは、いずれも六〇年代以降のアメリカで急激に信者数を伸ばしていったものである。そこにはアメリカの置かれている時代状況が反映されている。一九五〇〜六〇年代初頭までの強いアメリカ（力と栄光と威信に満ちた地上の楽園）の力が、ベトナム戦争の敗北や政治・経済・外交面の失敗から、著しく後退するに及んで、アメリカ人の精神生活の内面に、終末を予測する志向が強まりだした。それは、新宗教運動のセクト数の増大や、テレビ伝道の人気上昇などに現れている。

日本の新宗教の終末観とは

それでは、純粋に日本で育った終末型宗教とは、どのようなものであろうか。

まず、前記のB・R・ウィルソンの六つの要素のうち、(一)〜(四)までは明らかに各民族の歴史的・文化的伝統を基礎にした民族宗教が共通して内包している性質と言ってさしつかえない。この四つが統合される過程で、新宗教運動の展開が見られるのである。

ここで典型として、「ほんみち」教団をとりあげてみよう。「ほんみち」は大正時代に天理教から離脱した大西愛治郎教祖が創立した教団で、昭和二十七年に宗教法人になり、大阪の泉南市を本拠にし、信者数は公称三十万人とされる。

昭和のはじめ、大西教祖は、近い将来に未曾有の国難が到来して日本は破滅の危機におちいるから、生き神＝甘露台＝大西愛治郎にたより、天皇に代わってその統治に服さなければならないと主張した。このため「ほんみち」は二度にわたり不敬罪及び治安維持法違反で弾圧された。

この「国家の大難→甘露台の出現→万国征服の天業」というパターンは「終末→メシア出現→千年王国」というキリスト教的メシア観に対応するものである。

メシア的救済の特徴（理念型）を宗教社会学者の西山茂の考え（『日本宗教事典』）を参考にまとめてみる。

（一）既存の社会秩序がどうしようもないほどに腐敗堕落しており、そのために多くの人びとが「いわれのない苦難」を強いられているという現世観を前提にする。

（二）その既存の社会秩序は世俗的な人間の手によるいかなる改良改革によっても再建が不可能であり、もはや神がメシア的教祖を通して告知した啓示を受け入れる以外に方法はなく、社会がそれを拒むなら神の審判を受けてまもなく滅亡するであろうという、具体的な日を区切った、切迫した終末論を説く。

（三）終末の到来ののちに、あるいは終末が回避されたのちに、地上に出現するであろう千年王国の理想社会の姿を民衆的な言葉で平易に、だがイメージ豊かに描き出す。

ここで、とりわけ重視されるのは、教祖自身の「いわれなき苦難」の体験である。既存の社会秩序への激しい批判やルサンチマンの感情、激しい現状打破への願望は、まさにその体験に基づいたものであり、それゆえ同じような体験を持つ多くの民衆の共感を得ることができる。

しかし、こうした世の中の「建てかえ」「建て直し」の主張は、現存する政治体制への攻撃となり、まして信教の自由を認めない戦前の日本においては国家権力に対する脅威とされ、「ほんみち」や、やはり天皇制国家と対立した大本教は大規模な弾圧を受けざるをえなかった。

戦後のメシア的教祖としては、天照皇大神宮教の教祖北村サヨが代表的である。サヨは、戦後の混乱した社会を「うじの

世」「利己と文明科学で崩れて行く世」「悪魔の世」と呼び、これらが極まるときこそ「世の末転じて世の初め」となり、宇宙の絶対神がサヨの肚に天降って、「うじの世」の終わりと「神の国」が到来すると人びとに告げたのである。

未来のビジョンは現在のために

このように日本の新宗教にも終末をモチーフにしたものはあるが、キリスト教系の終末観と比較すると、ハルマゲドンのような決定的な一回限りの終末といった観念はあまり見られない。日本の終末観には、やはり、周期的に終末↓克服↓再生が繰り返される、という循環的感覚がある。また、千年王国をつくるために神の軍団と悪の軍団の大戦争が起こるといった認識は薄く、ほかの宗教や非信者を悪魔とする「統一協会」のような例は少ない。

民俗学者の宮田登は、日本の宗教的世界観のなかにある伝統的なメシアニズムを分析し、大本教のミロク信仰の時間意識を西欧的な終末観と比較している。大本教の場合、ミロクを待望しているとは言うものの、実際のところ信者である民衆の間には、破壊と混乱のなかで救世主を迎えようという期待は薄い。これは、東洋の時間認識によるところが大きい。キリスト教的観念では、「現在」は未来の栄光のための過渡的な段階にすぎないが、日本人にとっては現在＝今こそがすべてである。未来の救済も、現在に生きるうえでの精神的慰め以上の何ものにもならない。

だから日本の宗教的風土のもとでは、メシアも「生き神様」という現存の身近な人物にたやすく矮小化されてしまう傾向が根強い。

新・新宗教とオカルト・ブーム

敗戦直後から今日までの新宗教の動向は、三つの段階に分けられる。

第一は、敗戦直後の窮乏生活と急激な規範喪失（アノミー）状態の段階（一九四五〜一九五〇）で、さまざまな新宗教が続々と出現した、新宗教の乱立的発展期。

第二は、朝鮮戦争の特需景気をきっかけに始まる経済復興から高度経済成長までの段階（一九五一〜一九七二）で、多くの新宗教のなかで、発展を続けるものと衰滅するものとがはっきり分化していった期間である。発展したもののなかには、創価学会や立正佼成会のように巨大組織として台頭するものもあった。

第三は、経済成長の行きづまり、つまり第一次オイルショックから今日まで（一九七三〜）で、いわゆる新・新宗教と「小さな神々」が新たに出現した時期である。終末論と神秘主義の色彩が強い小宗教（カルト）が数多く発生し、若者の超能力、オカルト、神秘ブームなど呪術化現象が特色になっている。

新宗教の呪術志向は、それ以前にも、もちろん多かった。しかし多くの教団は、成長拡大する過程で社会に適応するため、次

第に呪術色を薄め、スマートになり常識化していった。その場合の呪術とは、病気治しや深刻な苦悩の解決といった現世利益のためのものであった。

それに対し、現在の豊かな社会における呪術志向は、現世利益的な「実利」のためよりも、「遊び」や「ファッション」に近いようである。また、若者に人気のある宗教の傾向も、「信」から「術」の宗教へ、禁欲の宗教から、瞑想などの心理的解放の宗教へ、より個人主義的宗教へと変化していることにも注目しなければならない。この現象の背景には、宗教そのものへの関心よりも、より広範な意味での非合理志向の一般化、つまりオカルト・ブームの存在がある。

オカルト雑誌は次々に創刊され、発行部数も数十万部にのぼるといわれる。それらの雑誌では、UFO、超能力、古代文明、心霊などの記事に混じって大本教の出口王仁三郎までもが、小学生向けにルビ付きの記事で紹介されており、いかにオカルティズムが大衆化したかを如実に示している。

宗教社会学のいう「世俗化論」によれば、科学技術が進歩し、社会が合理化されていけば、宗教とか呪術というものは次第になくなっていくはずだった。ところが、日本やアメリカのような先端的な科学技術を発展させた国で、最近はその理論が通用しなくなっている。

アイデンティティ獲得のための呪術

一九六〇年以降の合理化・管理化され科学技術万能で、しかも物にあふれた社会に育った若者にとっては、呪術、超能力、オカルトなどや市民社会の価値と異なる集団（カルト、パンクロックバンドなど）は、目新しく興味をそそるものである。そこで子どもたちの間では、そうした呪術的なものはまず「遊び」として広まっていく。口裂け女、人面犬、心霊写真、幽霊の写真、スプーン曲げ、UFO、念力、おまじない、占い……などである。これらは、口コミ、電話、ミニコミ誌、パソコン通信によって大人たちの知らないところで拡散していく。たあいのないたんなるウワサで、実証がなくても信じてしまう。つまり「信じる」という行為そのものが面白いのであり、「信じる」ことでつながれたコミューンを形成することに彼らは意味を見出していく。

社会のシステムからはみ出したウワサや宗教に魅かれていくのは、けっして変わった子どもや特殊な若者たちではない。むしろ、徹底的な平均化を強いる市民社会によって生み出された没個性的な若者たちなのである。

若者のなかには気軽に転職する者が増加している。しかし、今の職を辞めるということが他への転職を意味するとしたら、そこには誰とでも交換可能な自分しかいなくなってしまう。他の誰とも取り換えることのできない交換不可能な価値のある自分を確立するためには、自分が他の誰かと交換可能であるような、この社会から離脱しなければならない。もっとも手軽な方法は、

自分が置かれている場所で自分の役割を逸脱することである。そうすることによって、他人とは違う自分だけのストーリが持てるのであり、そのことによって安心を獲得することができる。

ようするに、若者たちは、自分だけのストーリを作成するために神をもとめているのである。言いかえれば、若者は神そのものを求めているのではない。若者にとって神は、自らを交換可能な単位におとしめているこのシステム社会の中で、自分だけのストーリーの世界へ自分を誘なってくれる媒体として神を存在せしめているのである。だから、その神が「新・新宗教」の「小さな神々」をいただく「擬似宗教カルト」のそれであってもいっこうにさしつかえない。そこでは教祖は、カリスマというよりはたんなるリーダー的存在となり、堅苦しい儀礼はイベント化し、若者はマニュアルに沿って呪術を習得し、その変身願望や短絡的な欲求を充足させているのである。

都市の廃墟を夢見る 子どもたち

この神秘・呪術ブームと並んで、終末観もまたブームになっている。「大本教」「ほんみち」「エホバの証人」「天照皇大神宮教」「統一協会」などすでに言及しておいたもののほかに「真光文明教団」「崇教真光」「神慈秀明会」などが代表的な終末型の新宗教なのだが、これらの教団の終末論とは一線を画するような終末観が少年少女を含む若者層に蔓延している。

人気を集める小説、マンガ、映画、アニメのなかにも、終末をテーマにしたものが、七〇年代後半から急激に増えている。

神と悪魔のハルマゲドンを扱った『幻魔大戦』、『デビルマン』、『聖闘士星矢』などのほかに、核戦争後の荒廃した地球を舞台にした『北斗の拳――世紀末救世主伝説』、『風の谷のナウシカ』、『ＡＫＩＲＡ』、『マッドマックス』、『ブレードランナー』などは特に人気が高い。それでは何故、若者たちは終末にこれほど魅きつけられるのだろうか。若者たちはこの世の終わりを願っているのだろうか。

現在の日本では、終末観は宗教ではなく感性して存在している。経済的には、七〇年代のオイルショック以後に高度経済成長

質問35 世界的天変地異で、今世紀末までに人間は全滅するという予言があるけど、これは本当なのでしょうか?

それは予言が間違った受けとられかたをしているのです。有名な「ノストラダムス」の予言は、言葉の解釈のしかたでいろいろの受けとりかたがあるようです。

お釈迦さんやイエスの予言にしても、こんどの天変地異で、人類が絶滅するとは言っていません。聖風師はこんどの大天変地異は、人類の想像を絶するようなもので、生き残れる人類はせいぜい二割に満たないとおっしゃっています。また天変地異だけでなく、人類最終戦、いわゆる聖書の「ハルマゲドンの戦」が行われることは、アメリカの現代の大予言者、ジーン・ディクスン夫人の予言にも詳しく出ています。

いずれにしても、天変地異も、人類最終戦も人類が神を忘れ、神の法則からはずれて生活するところから起こるものです。

私たちは一日も早く、神の実在に目覚め、神の法則に添った生活へと戻る以外、救われる方法はないことを知らねばなりません。

真光系の団体も終末を語る

永井豪「デビルマン」（講談社）

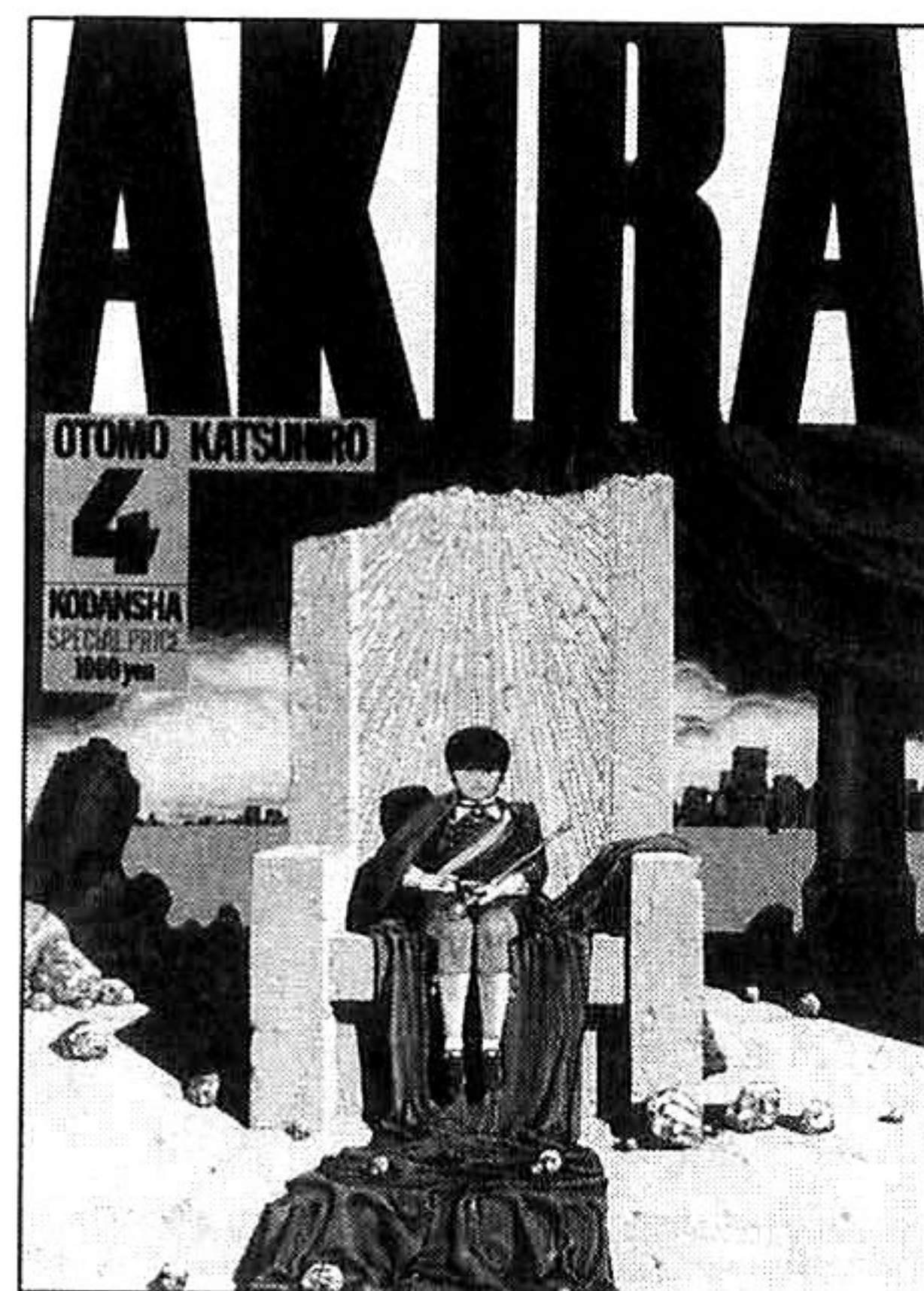
がストップし低成長あるいはゼロ成長社会になり、戦後経済を引っぱってきた大人たちの間に停滞感や不安感が生まれ、それがまず現在の終末ブームの最初のきっかけになった。

　しかしもっと大きな問題は現在、特に都市部の子どもたちをとりまく状況である。

　都市部では中学受験に拍車がかかり、偏差値による高校・大学の序列化以前に、中学の段階ですでに将来の序列が決定される子どもが少なくない。そして、企業の序列化や定年までの安定したポストを求めるブランド志向も強い。

　一見、可能性がありそうで先が見えてしまう社会。個人の自由にあふれていそうでいて、実はもっと大きな規模で柔らかく管理されてしまっている社会。学校を中退したり、就職しなかったりするフリーターと呼ばれる若者たちも、そのシステムから逃れようとする動きかもしれないが、それも一時的執行延期（モラトリアム）にすぎない。こうしたなかでは、冒険はもうありえない。それが、この社会の終末を無意識に願望させる要因になっているのではないか。

武論尊＆原哲男「北斗の拳」（集英社）

「アメリカ、終末観の宗教運動」という宗教学者、荒木美智雄の論文（『宗教の創造』一九八七年）のなかで次のようなことが言われている。アメリカに終末型宗教が多いのは、合衆国開拓のモチベーションのなかに「地上の楽園」に回帰しようとする千年王国的終末観が強く内在していたからであり、それは都市文明とそれにまつわる諸々の価値とはもともと対立する精神であった。そして、アメリカ全体が都市化するに及び、従来の終末観とそれに根ざすフロンティア・スピリットが有効性を失ったため、さまざまな形の終末観が噴出してきたのだ、と。

大友克洋「ＡＫＩＲＡ」（講談社）

　日本で人気のある『ＡＫＩＲＡ』、『北斗の拳』などはいずれも、世界戦争によって破滅し廃墟となった東京で繰り広げられるフロンティアの物語である。そこでは子どもは成長して社会に組み込まれることはな

く、どこまでも広がった遊び場のなかで永遠に冒険し続けていられるのである。
さらに急激な高齢化社会の到来によって、社会全体が老い、死に近づいているという意識も潜在しているのかもしれない。こうして袋小路に向かいつつある社会からの脱出方法として、現代日本は終末を受け入れやすい精神風土になってきている。

メメント・モリの喪失

冒頭で、この世の終わりという「集合的終末観」は、「個人的終末感」を内包していると述べたとおり、「世界の破滅」をつきつめていくと、そこには当然、個人の「死」という問題がクローズアップされてくる。死と宗教は本来、引き離し難い関係にあり、しかも死後の世界はいかに科学が発達しようと絶対不可知な領域のため、死は人間にとって永遠のアポリアにならざるをえない。
ところが現代は、死を拒否する、あるいは死を隔離し、あたかも「死」などというものはこの世に存在しないかのように、地上から排除しようとする時代である。
先進諸国における医療の発達と、生活環境の整備には目ざましいものがあり、ガンなど一部の難病を除けば、病イコール死ではなく、多くの人々は、突発的事故にでも遭わない限り、自分は天寿を全うできるものとなんとなく思っている。
しかし、どんなに医学が進歩しようと、死を引き延ばすことはできても、死を避けることは絶対にできない。この事実だけは変わらない。
ところがこの事実さえ見ないようにする風潮がある。フランスの歴史学者フィリップ・アリエスは、ヨーロッパにおける中世から現代までの死への態度の変遷を論じた『死と歴史』のなかで、このような風潮を、「人類史上、初めての現象」と評し、その特徴を次のように指摘する。
人は、自分の死とそれをめぐる状況のなかでは常に主役であった。しかし、現在は、そうではなくなっている。また、現在、生きている人間は、肉親をも含めた他者の死に対しても、深く係ることが禁じられている。
こうした変化はヨーロッパばかりではない。日本においても、かつては死は日常的な出来事であった。乳幼児死亡率は高く、伝染病は猛威をふるい、また社会治安の悪さや相次ぐ戦乱などのなかで人々は常に「死」を意識しながら生きていた。このような迫り来る死の恐怖と対峙し、克服するための助けとなったのが宗教だったのである。死の近づいた人は自ら死を知るか、知らされるかして、覚悟する時間を得て神に祈る。そして臨終の床には家族、親族、友人、聖職者が集まり、一人ひとりに別れを告げ、神に祈るのである。
しかし現在、死に瀕した病人には、正確な病名、ましては死期などは告げられることはなく、病人自身も医療技術を信頼しているので、死の直前まで、まさか自分が死ぬだろうとは思わない。そこでは人間は、

自分の死における主役にはなれない。
また、現在では多くの場合、死の舞台は設備の行き届いた病院になるので、死はますます日常から隔離され、人目につかなくなってきている。
そこにはもはや「メメント・モリ（死を思え）」という伝統的観念は成り立たない。

イニシエーションなき時代

そればかりか、都会では最近、葬式さえもあまり見かけなくなった。核家族化は進み、長く病の床にある老人と共に暮らしたり、その死に立ち会ったりした体験をもつ子どもの数は極端に少ない。
葬式は重要なイニシエーション（通過儀礼）であった。身内を失う悲しみと、さまざまな儀礼をビジュアルに体験し、さらには大人たちの非日常的な立居振舞いを見ることができる。死を知ることは、母親の保護を離れ、厳しい外界に巣立つための大事な儀礼のひとつであった。

こうしたイニシエーションなき時代に、イニシエーションの役割りを「対象喪失」に求めようとするものに、森省二の『子どもの対象喪失』（一九九〇年）がある。
対象喪失とは、何かを失ったり何かと別れたりしたことによるショックによって、悲しみや絶望の感情に包まれる体験のことをいう。
たとえば、幼稚園に通学する女児が、今まではない夜泣きをはじめる。治療を進めるうちに、この女児が「お父さん」と名付けて可愛がっていた金魚が死んだことで、ショックを受けたにもかかわらず、母親がその女児の悲しみや訴えを聞いてやらなかったこと、また女児が、父親に相手にしてもらえなく寂しかったということが分かってくる。このように対象喪失は、客観的な病像の背後に、個人的な喪失体験を必ず隠しているのである。
同じ対象喪失であっても、大人と子どもとでは病像が異なり、大人の場合は悲しみから主にうつ状態を示すのに対し、子どもの示す病像は多彩であるという。登校拒否やいじめ、心身症やヒステリー、自傷行為や自殺企図、殺意など、子ども特有の現象の中にも、対象喪失の体験が隠されているという。
著者は対象喪失を、「個人の人生を長期にわたって揺るがすような事態」と述べようとしている。対象喪失は、人生のなかで一方で、この体験を積極的にとらえかえそ避けて通ることのできない別離などによる悲しみや絶望感を乗り超えることで、自己を成長させていくきっかけになりうるのであり、それはイニシエーションの役割に近く、日本の場合は、青年層にも適用できよう。

イニシエーションとしての英雄神話

イニシエーションは、分離（古い自分の集団から別れる）→移行（古い自分の集団から新しい自分の集団へ行く過程）→統合（新しい自分の集団に結びつく）の三段階から

なっている。特に移行の段階は、人類学者ヴィクター・ターナーによれば、どっちつかずの状態であるから、若者たちは、生者でもなければ死者でもない。また一方、生者でもあり、死者でもある。赤ん坊でもあり、また遺体でもあるという。つまり象徴的には、若者たちは、いちど死んで、また蘇るのである。

これはまさに英雄神話・英雄伝説の筋書にも共通する。一人の英雄が、日常の生活から、超自然的な驚異の国へ冒険の旅に出る。邪悪な力に出会って危機におちいるが、友好的なもの（しばしば女性）の助力によって、決定的な勝利を得、その英雄は、同胞に幸福をもたらす力をもって、冒険の国から帰ってくる。つまり、「脱出→試練→帰還」というストーリーになっているのである。ギリシャのプロメテウスもオデュッセイも、日本のオオクニヌシノミコトも、民話の桃太郎もそうした型に当てはまる。

そして「ドラゴンクエスト」を代表とするファミコンのロールプレイングゲームのストーリーは、まさにこれらの神話・伝説を下敷きにしているのである。イニシエーションなき時代の若者は、一人テレビの画面に向かい、ゲームの主人公に「死と再生」のドラマを演じさせている。

だが、そこに血の匂いを嗅ぎとることはできない。画面に「あなたは死にました」と表示されても、ボタンさえ押せば何度でもたやすく生き返ることができる。終末をテーマにしたアニメの数々にしても、主人公はもちろん死ぬことはないのである。若者は、遊びを提供してくれる終末は求めてはいても、けっして個人的終末、つまり「死」を求めているわけではない。

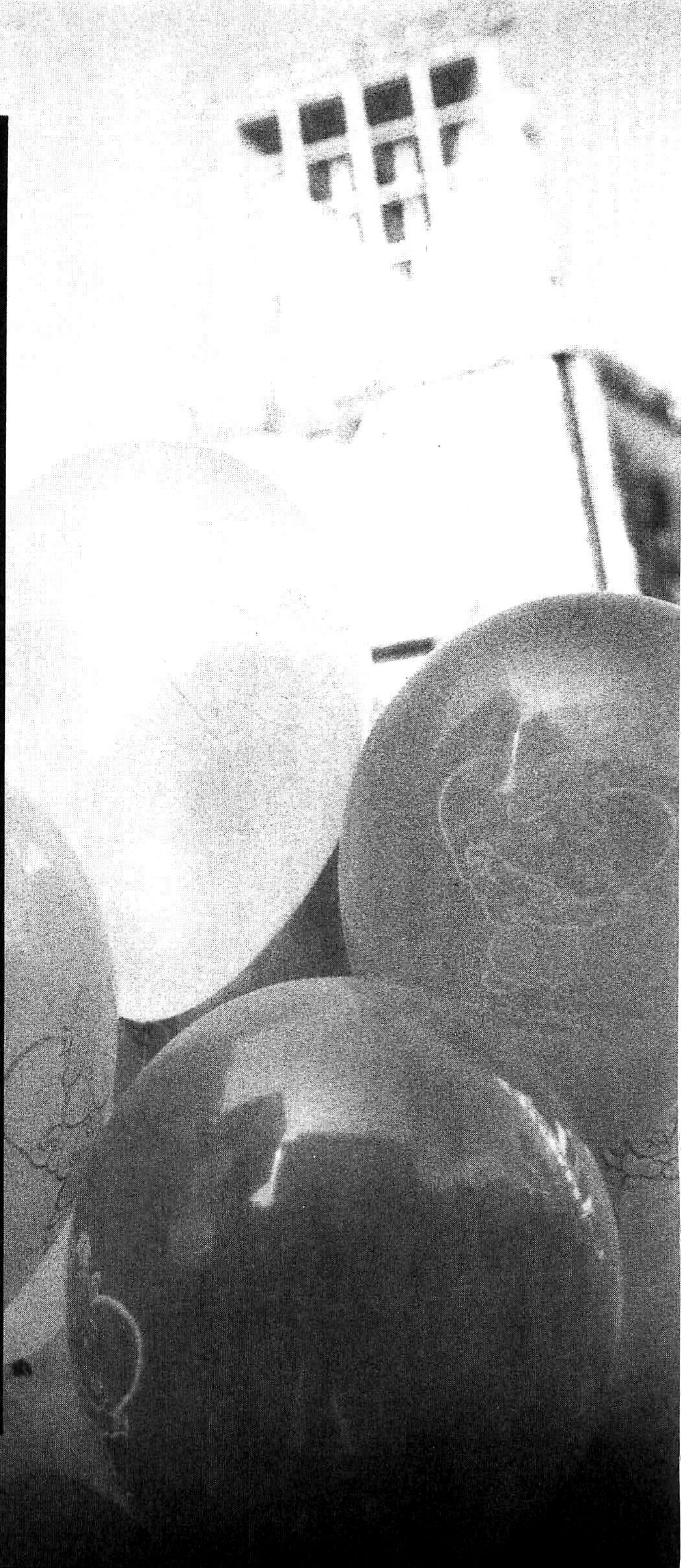
ファミコン「女神転生II」（ナムコ）
核戦争後の東京を舞台にした救世主をめぐる宗教的ＲＰＧ

社会主義はもとより、資本主義や核抑止のシステムが大きく転換しようとしている現在、未来に関して明確な展望を示すことはかつてないほど不可能である。それ故に、人びとは「予言」にすがるのであろうか。予言は少なくとも一九九九年までは破局が来ないことを保証してくれるのであるから。

あるいは再びメシアの夢を見ることにしようか。それとも、解決がないことが唯一の解決なのだ、とうなずいてしまおうか。

PART 4

90年代型の神サマ

ポストモダン宗教展望①

東大出の仏陀、大川隆法の神霊ゼミナール！

マークシート式神霊テスト の通信添削、神霊受験参考書……。
四百万部を売りつくす弱冠三十三歳のベストセラー作家が主宰する
「幸福の科学」は予備校型宗教だった！

米本和広（ルポライター）

今年、また新しい宗教法人が設立され、ひとりの教祖が誕生する。

東大法学部出身の教祖様である。

この教祖、「私は仏陀の生まれ変わり」と、昨年初めて自分の正体を明らかにした。ならば、東大出の仏様である。

宗教関係者によれば、二代目以降ならともかく、東大出の始祖は初めてのことだという。

しかも、年齢は三十三歳。これまた初代教祖で三十代前半はきわめて珍しいケースである。

新興宗教の教祖の経歴を見れば、そのほとんどが貧困や差別、圧迫といったいわゆる不幸のどん底を体験している。たとえば、踊る宗教として知られる天照皇太神宮教の北村サヨは、五人の嫁をいびり出した姑のもとで六人目の嫁として家畜同様の扱いを受けている。また世界救世教の岡田茂吉は家が貧しくて栄養を十分取ることができず、腺病質の虚弱児童だったという。それほどの貧乏を体験したわけだ。

だが、三十三歳の東大出の教祖様はそういったこととはまったく無縁の、エリートコースを歩んできただけの青年、いや仏様である。なんだ、ありがたみがない、などと言うなかれ。この仏様が率いる団体、既存の新興宗教の伸び悩みを尻目に倍々ゲームで信者を獲得中の、今最もパワフルな団体なのである。

何を言っているのか さっぱりわからない仏陀

九〇年の三月十一日、千葉幕張メッセのイベントホールで講演会が開かれた。

開演は一時三十分だというのに、すでに二時間前から広場に人が集まり始めた。主力は二十代、次いで三十代。ひとりぽつねんとしている若者もいるが、連れだって来ている者のほうが多い。北海道などの幟（のぼり）もあり、遠くからツアーを組んでやってきた団体もあるようだ。暗いというわけでもなく、といって明るいわけでもない。若者が多いという以外にこれといった特色のない集合体である。開演時にはその数は七、八千人に膨れあがり、イベントホールはほぼ埋まった。

開演と同時に、講演が始まった。司会者が退くと、宗教的儀式やこけおどしのショーなどいっさいなく、小柄で小太りの仏様が壇上に登場し、いきなりしゃべり始める。

「春はまだ浅く、その陽の光はやわらかく、みなさまがたには、爛漫たる春にはまだほど遠く感じられる今日ではないかと思います。陽の光は、たしかに季節が春であることを物語っているのですが、なぜでしょう、まだ春が浅く浅く、青いものに感じられるのは。それは、私ひとりだけの感慨なのでしょうか。それとも、みなさまもまた同じように感じられるでしょうか」

春が浅く感じられるのはまだ三月だからだと思うのだが、なかなかの名調子である。森進一のようなしゃがれ声。原稿などいっさい目にせずに、よどみなく話す。抑揚をつけたしゃべり方は妙に人を引き込むが、何を主張したいのかは、さっぱりわからない。

「なぜ、あなたがたに情熱の灯がつかない

書店に山積みにされる大川隆法の霊言集

のだろうか。なぜ、あなたがたの心のなかに、神理の灯がまだ点らないのだろうか。なぜ、あなたがたはたんなる言葉として、私の話を聴き続けるのだろうか。なぜ、たんなる活字を読み続けるのだろうか。今という時代を、まだあなたがたに伝えることさえ、私にはゆるされないのだろうか」

　リフレインを効果的に使い、聞いている者にとってはかなりの迫力である。だが、内容がないだけに不謹慎にも欠伸をしてしまいそうになった。ところが驚いたことに、通路を挟んだ隣の女性が泣いているのである。初めはなんの音かわからなかったが、次第にその音は大きくなり、泣き声だと知った。連鎖反応、集団心理というやつか、その周囲で泣く人が増えていく。泣けるようなことを話していたのか、あわてて欠伸をこらえて壇上を見た。

「信仰とは、みなさん、強制されてするものではありません。それは、自分が神の子であるということを知った時に、長年離ればなれになっていた親子が、子どもが、父を見、母を見、飛びついていって、抱きついて泣く姿が、それが信仰なのです。そこに一点のくもりも、一点の迷いも、あってはならないのです。それは、真実なのです。赤裸々なのです」

　やっぱり、何を言っているのかよくわからない。信仰は強制されてするものではない、そんなこと当たり前だろ。それで何が信仰で、何が真実なのかと言いたくなってしまうような話だ。だが、隣の女性の泣き声はさらに高くなっていく。

　講演が終わっての帰りみち、ふたりの男女がひとりの女に、

「会に入って幸せになろうよ。僕はこの会に入って怒りっぽい性格が直ったし、なごやかな気分になれたんだよ」

　ますますわからなくなるばかりだったが、後日、ある新興宗教の幹部にこの話をすると、

「信じてしまうと、話が自分のなかに入りこんでしまい、過去を思い出したり、自分を反省したりするようになるんです。それで自然と涙が出てくるんですよ。べつに不思議なことでもないのです」

四年間で百四十八冊の本を書いた三十三歳

　幕張メッセイベント・ホールに七千人を集め、二時間にわたって滔々としゃべり続けた、初の東大出の教祖様。その名を大川隆法、その大川が主宰する団体を「幸福の科学」という。

「大川隆法」が宗教界で注目されるようになったのは、その著書の多さと売れ行きによる。

　なにしろ、この四年近くでテキストを含め百四十八冊の本を出したのである。一年間に換算すれば三十七冊。一カ月で三冊のハイスピードである。テキスト類を別にして一カ月二冊とすれば毎日四百字×二十五枚の原稿を書き続けていることになる。人にもよるだろうが、大川のマス目一カ月分は、原稿料を糧としている人の一年間近くに相当する。マルクス、赤川次郎顔負けの

量である。
　その本の半数近くは、過去の偉人たちの霊言集、霊示集である。わが氏は特異な才能を持ち、故人の霊を呼び寄せることができ、自分の口を通してその霊にしゃべらせることができるのである。たとえば、昨年出版した『悪霊撃退法』ではミカエル、エドガー・ケイシー、坂本竜馬、モーゼ、出口王仁三郎などの霊が、悪霊撃退法を語っている。後述するが、こうした霊言が多くの信者を獲得する武器になったことは指摘しておく。

大川隆法の「説法自由自在」シリーズは、受験参考書「自由自在」から命名？

　売れ行きのほうはどうか。
　神田にある書泉グランデの担当者によると、
「三年前の夏から置き始めたのですが、新刊が出ると、一カ月に百冊から百五十冊は出ますね。ええ、ベスト3以内にはいつも入りますよ。そして、売れ行きの鈍いものでも月に二十冊はコンスタントに売れていく。だいたい、宗教関係の本の場合、組織の力によってまとめ買いをして、ベストテンに入るようにする。それで、売れてるんだと誇示するわけですが、大川さんの本の場合、そんなことは全然ない」
　同書店では二階の売場で扱われ、「大川隆法のコーナー」の看板の下に三、四十種類が平台にうず高く積まれている。担当者は続ける。
「これまで最もハイスピードで本を出す人は赤川次郎さんでしたが、それをはるかに超える早さですよ。果たしてひとりで書いているのか、ちょっと信じられない。著者大川隆法とあっても、私ら顔も見たことがないでしょ。だから、本当は、大川隆法なんて人は実在せず、グループで書きまくっているんじゃないかと噂してるんですよ。えっ、講演会で見たんですか、へー、実在するんですね」
「幸福の科学」の機関紙によれば、これまで四百万部が売れたという。当事者発表の数字だが、これを裏付けるように取次ぎの日販でも「『常勝思考』という本は二十五万部はいっています」という。また、出版元のひとつ土屋書店でも「四百万ですか、ちょっと多めの発表だけど、そんなに間違ってはいない」という。
「幸福の科学」の普及活動の柱は、出版活動と講演会である。他の新興宗教団体のように戸別訪問や〝キャッチセールス〟をするわけではない。四月以降の講演会は神戸（七千人）、広島（四千人）、千葉（一万二千

人）、札幌（四千人）、盛岡（五千人）、名古屋（五千人）、千葉（二万八千人）と続く。「幸福の科学」の会員が友人・知人を誘うわけだが、他の宗教団体と大きく異なるところは、講演会のチケットが「チケットぴあ」で売られていることだ。

なんとも面妖ではないか。過去の偉人の生まれ変わりと自称する、あるいは霊が語るというのはべつに珍しいことでもないのだが、東大法学部・三十三歳・月に二冊の新刊・四百万部・ぴあ、どれをとってもこれまでの新興宗教にはない字句ばかりである。

六畳間から紀尾井町ビルのワンフロアまで、たった四年！

顔も素姓も知れぬ教祖

しかも、大川が「幸福の科学」（任意団体）を設立したのは、わずか四年前の八六年十月のこと。大川を含め四人からの出発であった。それが今や百人の職員に一万五千人の会員。四年間で約四千倍、ネズミ講も真っ青の〝ゴキブリ講〟とでも呼べそうな超急成長ぶりなのである。

「幸福の科学」は西荻窪の会員の自宅六畳間を借りてスタートした。今では都心の一等地にある二十六階建ての紀尾井町ビルのワンフロア（四階）に本部を構え、全国に九つの支部を持つまでに至っている。紀尾伊町ビルの家賃は月額二千百万円というから、事務所の発展ぶりもすさまじい限りである。「問題は金主。いったい誰が金を出しているのか。新興宗教のスポンサーに多い土建屋か」とよからぬ噂が立つほどだ。

いったい、大川隆法とは何者なのか。「幸福の科学」のパンフレットにはこう書かれ

ている。
「昭和三十一年生まれ。東京大学法学部卒業後、大手総合商社に勤務し、ニューヨーク大学にて国際金融論を学ぶ。昭和五十六年三月二十三日、自らの大いなる使命に目覚め、その後昭和六十一年七月に退社。独立して〝正しい心の探究〟を目的とする神理の学習団体を設立する」
　これに付け加えれば、いろんな霊を呼ぶことができるのが大川の特徴で、八九年には『仏陀再誕』を著し、仏の生まれ変わりだと自ら宣言したということになろうか。
　しかし、具体的なことは三十一年生まれ、東大卒以外わからない。そこで、「幸福の科学」にインタビューを申し込んだ。しかし、取材はいっさい受け付けないという。正式な会員数とか書籍の売れ行きといった差し障りのない質問にも、事務局の担当者は「私としては答えたいのですが、上の命令でいっさい応じるなという話なので。申しわけありません」。命令したのは大川氏かと問うと、「そうです」という。すべてを受け入れるはずの仏様なのに、である。
　ある新興宗教の幹部は、
「妙なんですよ。大川さんの顔写真はいっさい世間に出ていないのです。ふつうは教祖の顔を売り物にするのに。顔が出てまずいことでもあるのかと勘ぐってしまいますよ」
　あわてて機関雑誌（月刊）のバックナンバーをめくってみると、たしかに顔写真がないのである。もちろん百五十冊近いその著作にも写真はまったく見つからない。講演の風景写真はあっても弁士の顔は巧みに外されている。九〇年の五月号に、初めて横顔が載っただけである。
　大川隆法を仏と信じ切っている現会員はともかく、元の会員に聞いても大川隆法自身についてはパンフレット以上のことは知らないという。

大川隆法の正体、中川隆

ならば、調べてみるしかない。
仏様であられる大川隆法、本名を「中川隆」という。中を「大」にし、隆に「法」を加えて「大川隆法」にしたのであろう。昭和三十一年、徳島県麻植郡川島町で、父忠義、母君子の次男として生まれる。讃岐山脈と剣山地に狭まれた吉野川沿いに生家があり、「夜、イタチが寝床の横を通るほどの田舎だった」という。
「幸福の科学」の顧問・善川三郎は『わが悟りへの道』のなかで、
「それからまもなく一九八一年に、大川隆法先生との出会いが始まったのであります」
　と記しているが、実はこの善川、中川の父親忠義なのである。実の子どもをつかまえて出会いもくそもないものだが、それはともかく中川が宗教に触れた時期は、多分に装飾されているであろう本人の言葉（『平凡からの出発』）から借りるしかない。
　中川に宗教の影響を与えたのは、父の忠義であった。大正十年生まれの忠義は、十代の後半にキリスト教、二十代には谷口雅

春の生長の家、五十代の後半に教祖高橋信次が主宰するGLAの影響を受けたという。戦後の一時期には共産主義とも関わっている。多感な人であったらしい。その忠義は毎晩のように、子どもに向かって宗教に関する話をした。そのために、幼い頃から「霊が存在するのは当然のこと」と思っていたという。

父親が中川少年に与えた影響は、宗教ばかりではなかった。それは「常勝思考」ならぬ「一流思考」であり、強烈な向上心だった。忠義はいつも次のように励ました。

「どんな田舎の学校であっても、どんな小さな学校であっても、一番だけは違うよ。二番から下の人はそうでないかもしれないけど、一番だけはどんな天才がいるかもわからないよ。どんな田舎においても、どんな小さな学校でも、一番だけは値打ちがあるかもしれないよ」

四歳年上の兄（京大卒という）は頭脳明晰だったが、中川はそれほど頭がいいというわけではなかった。兄にコンプレックスをいだき、そのために小学校時代から夜中の十二時まで机に向かうというほど、人一倍勉強した。

その甲斐あって、小学校の六年生になると、学校で一番の成績となった。

この一流思考の行きつく先は、エリートコースの道である。地元の中学校を卒業すると、徳島市にある進学校、城南高校に入学する。高校時代はどうだったのか。

中川隆の「いま」を伝えると、高校三年生のときの担任は「えっ」と驚き、次のように語った。

「あの中川君が。おとなしい子で、けっしてリーダーシップを取るようなタイプではなかった。目立たない地味な感じ、意思表示もはっきりしない、どちらかというとやぼったい感じだったなあ。県下の優秀な子が集まるような高校でしたから、頭のほうも目立たなかった、シャープではありませんでした。しかしそれにしても、宗教とかそういったことに興味があるとは思えなかったなあ」

担任から紹介してもらったクラスメートに聞くと、ひとりは「中川？　あー、いたいた。おとなしくて目立たないやつだった。ほかに印象って言われても、それぐらいしか記憶にはないですよ」と言い、もうひとりは「中川なんてまったく記憶にありません」と言う。

一流思考を叩きこまれ、高校時代はともかく、町では一番であった中川が狙ったのは当然、東大であった。大川自身は「どうしたわけか東大に入れた」というが、実は二浪して東大に入っているのである。一流思考の中川にとって、何浪しようが、東大以外は考えられなかったのであろう。学科は法学部の政治学科であった。

十七、八歳から二十二、三歳の間に挫折の体験をしたことがあるというが、この挫折とはおそらく東大受験に二度失敗したことを指すのであろう。八七年九月号の機関雑誌には「私自身、十代後半から二十代前半には、自分の頭の悪さにはずいぶん悩みました」と書いている。田舎では一番で

あったのに城南高校ではそれほどの成績を上げられなかったこと、そして受験の失敗、東大での成績の悪さなどが悩みの種であったようだ。

「一流思考」の仏陀のサラリーマン生活

大川隆法（中川隆）と付き合いのあったある出版関係者は、中川を評して、「強烈なコンプレックスと強烈な上昇志向の持ち主」と言う。

コンプレックスを最初に抱いたのは、身体に対してであった。

「小学校の上級生で超肥満体となった私は、いつもＬＬの短パンをはいて体育の授業に出ておりましたが、飛び箱、鉄棒、逆立の三種目は、私の顔を恐怖でひきつらせました。しかし、私が最もおそれていたのは、夏、すなわちプールの季節でした」（八七年九月号）

そのコンプレックスを頭でカバーしようとした。夜遅くまで必死で勉強をしたことは、そのことも影響したのだと思われる。

しかし、それにしても東大まで出て「頭の悪さ」を嘆かなくても、とふつうの人は思うだろうが、一流思考は比較の思想を本質とするがゆえに、東大であっても東大での成績は気にかかる。一番になる以外に解放されないのが「一流思考」なのである。

コンプレックスについて言えば、音痴、そして異性に対しても抱いたようだ。顔写真を出さなかったのは、べつに深い意味があるわけではなく、あんがい容貌に対するコンプレックスのせいだったのかもしれない。

東大を八一年に卒業すると、総合商社「トーメン」に入社する。ここで、トーメンという会社の〝偏差値〟が問題となる。一部上場企業という意味では〝一流〟なのだが、商社業界でみると〝一流でも下のランク〟ということになる。一流思考の彼の第一志望がトーメンであったかどうか。

それはおくとして、入社直前の三月二十三日、本人によれば、「巨大な霊的能力に目覚める」ことになる。

「忘れもしない、昭和五十六年の三月二十三日の午後のことだったと思います。何者かが自分に伝えようとしているという感覚に打たれたのです。そうして書くものがないかと周りを探して、机の横にあったカード用紙を手にとったのです。そしてそのカード用紙を目の前におくと、私の手が他人のように動き始めました」

最初の霊人は、日蓮聖人の高僧のひとり日興上人。その後に日蓮聖人がやってきて、やがて「自動書記で通信を送っていた霊たちが、今度は私の声、声帯を通しても語ることができる」ようになったという。つまり、商社マン時代はさまざまな霊と通信を交わしていたことになる。

だが、八五年から一年余りトーメン名古屋支社で一緒に働き、同じ寮に住んだことのある商社マンは、次のように言う。

「よくできるかたで、テキパキとこなしていました。とにかく本を読むのは異常に早く、仕事のある日でも一日に三冊といった驚くべき早さでした。文章を書くのも早

会報「幸福の科学」で初めて公開された大川隆法の素顔

幸福の科学主宰 大川隆法先生● 3月11日千葉・幕張 メッセイベントホール

990年第1回
大川隆法先生
大講演会

信仰と愛

かった。寮でいろんな話をしましたよ。政治とか哲学について、あるいはトーメンを発展させるための方法について。だけど、宗教の話はいっさいありませんでした。まさか宗教団体の教祖になるなんて、その当時にはそういう雰囲気はまったくなかったなあ。有能な商社マンという感じでした」

大川隆法は、八六年の春に東京本社に戻るが、その数カ月後に退社している。

「人間関係のトラブルが原因だと聞いてます。仕事ができるため、出る杭は打たれるで、上司とぶつかり、それで辞めることになったのでは」

そのあたりのことを彼自身は、二年前にこう書いている。

「自分が認められたいという気持ち、人より優れたいという気持ち、エリートになりたいとうい気持ち、そうした気持ちがありました。これゆえに、さまざまな苦しみをつくったことがありました」

「自分の神性としてはかなり高いものに目覚めていながら、日本の社会というものは、新入社員、あるいは入社して間もない人間というものを、まったく兵隊としてしか扱っていない。そうした現実に気がついていったわけです。この日本的年功序列の世界、こうしたものに対して非常な疑問というものを感じていきました」

まあ、簡単に言えば、俺は東大卒で、エリート、仕事はよくできるのに、なぜ兵隊扱いを受けなければならないのかという不満である。その不満が「人間関係の軋轢」

となったというわけだ。よくある話ではないか。

大川隆法の教えに、「執着心を捨てよ」というのがあるが、「エリートへの執着」を捨てよ、と自分に言い聞かせているようなものだ。

卑弥呼からピカソまで、次から次の霊言集

トーメンのエリートコースに絶望し、執着することを捨てた中川隆は、大川隆法となって、「幸福の科学」を設立する。

大川の著作の出版に携わったことのある関係者はおもしろい見方をする。

「もし、トーメンではなく三井物産であったら、大川さんはそのまま商社マンをやっていたのではないか」

今でも「幸福の科学」と関係している人の発言である。もし、この見方が正しければ、「三井物産ならエリート心を満たすことができ、トーメンならばとんとん拍子で出世しなければ満足できなかった」、そして「こんどは宗教のチャンピオンを目指す」ということになろうか。

脱サラ後、数々の霊言集を発表する。

最初は父親である善川三郎が霊媒者である大川に問答するという形で発表した。出版社は潮文社、題名は『日蓮の霊言』であった。編集者はこう話す。

「善川さんが原稿を持ってこられた。読んでみるとなかなかおもしろいので、出版しようということになった。本当に日蓮の霊が語ったものか、ですか？　そんなことは証明しようがないから、わが社の方針では内容がおもしろいかどうか、真面目な気持ちで書かれたものかどうかで、判断しています」

日蓮の後は空海、キリスト、天照大神、ソクラテス、坂本竜馬、卑弥呼、孔子と続き、GLAの高橋信次、生長の家の谷口雅春、内村鑑三、親鸞、ピカソ、モーゼ、ミカエル、ニュートン。あらゆる霊が大川の頭をかけめぐった。忙しい限りである。

本当に霊は存在し、わが大川の口から霊がしゃべるのか。それについては、宗教学者に判定を頼む以外にない。しかし、霊言が大川の口から発せられ、それをテープに録り原稿にする、あるいは自動書記で手がひとりでに動き、次々と原稿ができあがったものだとすれば、古代中国語、古代ギリシャ語、古代日本語、フランス語のテープ、原稿を是非見てみたいものである。出版社の担当者も見たことがないという。

本当に、大川は霊媒者なのか。大川自身も「立証できない」というから、あとは信じるか信じないかである。ところが、読者の一部は信じたのである。大川自身が日蓮に、あるいはキリストに、釈迦に、高橋信次に見えたわけである。

信じる者は強しである。たとえば、『悪霊撃退法』の一節を紹介すると、

「あー、竜馬じゃ。みなの者は、元気でやっとるか、うーん。まあ、こんたび、なにやら知らんが悪霊の撃退法をつくるっていうんで、まあ毛色の変わったのも、一人ぐらいはしゃべってもいいじゃないか、とまあ

言われて、なんでわしが出てくるのかよくわからんが、しかし出ろと言われて出ないわしでもない」（坂本竜馬の章）
「はい、高橋信次です。みなさん、こんにちはー。またこういうかたちで、お目にかかれて嬉しいです。悪霊とあっちゃあ、私が出ないわけにはいかないでしょう」（高橋信次の章）
　といった具合なのである。信じる者は幸福というべきか。

偏差値世代が生んだ、テスト、テストの宗教

　書物によって信者を獲得すると、東大出の大川らしい入会資格条件を発案する。
　十冊以上の本を読み、それをもとに論文を提出することを「幸福の科学」の会員要件としたのである。もちろん、合格しなければ会員（月会費二千円）になることはできない。試験選抜によって信者の入門を決めたのは、世界の宗教団体多しといえども前代未聞のことではないか。いかにも受験に苦しんだ教祖らしいアイディアである。
　会員になっても各種の勉強会があり、そこでも次々と新刊本を読まなければならない。また「幸福の科学」の講師になるにも試験、試験である。
　出版関係者はいう。
「二つの点で画期的ですよ。ひとつは本を読まなければ会員になれないから、本が確実に売れるということ。もうひとつは会員の質が高くなるということです。それに、他の新興宗教の信者より勉強しているという自負心も会員の心にめばえる……」
「幸福の科学」を出版社として見れば、実にうまい組織化を考えたといえよう。実際、八八年の十二月から自前の出版社で営業を開始している。
　八九年には全国共通一次試験ならぬ全国統一神理学検定試験というのをスタートさせた。その意義について次のように書かれている。
「幸福の科学の広大な正法神理体系を正しく理解するために、またとない素晴らしい企画であるこの試験は、数年後には世の中で最も権威ある試験となるでしょう」
　最も権威ある、か。執着を捨てよと言いながら権威に執着せよということなのか。
　どんな試験なのかと言えば、
「次の各文について、正しい場合には解答用紙でAを選び、誤っている場合にはEを選んでください。
（1）太陽系に最初の生命が誕生したのは美しきヴィーナスの星、金星ができてからです
（2）アモールの三提案のなかには、守護霊についての提案は特に含まれていない」
などといった設問が五十ほど並んでいるのである。
　これをつくったときの大川は、東大の教官になったつもりで、さぞかしサディズムと恍惚感に包まれていたことであろう。ある新興宗教の広報担当者は、
「かわいそうですよね。試験、試験ですからね。若い人はいいとしても、老人にとってはたいへんですよ」と会員に同情する。

年全国統一神理学検定試験問題

次の各文について、正しい場合には解答用紙でAを選び、誤っている場合にはEを選ん

（配点　各1

太陽系に最初の生命が誕生したのは、美しきヴィーナスの星、金星ができてからです。

) アモールの三提案のなかには、守護霊についての提案は特に含まれていない。

) 存在の愛の段階に到達するには、正しく定に入ること、そして、正しい精神統一がで
が前提となります。

4) 六次元の光の天使の愛は、三つあります。ひとつは、地上人に対する守護神として
次元下段階の人への指導者としての愛。三番目としては、五次元霊界人への教育者

(5) 心が四次元幽界（精霊界）に通じている人の場合は、まだオーラも出ていない。

(6) 「自分の畑を耕せ」という言葉は、日蓮聖人のお言葉である。

(7) 天之御中主之命の光一元の思想は、そもそも、如来の教えであり、教えのレベル
すべての人を救いえたとは言えないでしょう。

ユートピアの思想というのは、ヨーロッパの中世においてはじめて現われた理想

(8) 小桜姫によると、霊界人口は約520億人で、そのうち６％の約30億人が地獄で苦

(9) 地獄に還った人たちには、過去世の記憶というのがすべて甦ってきます。

(10) 善悪のなかで、悪を捨て、善を選び取ってきた人たちが、この六次元世界にい

(11) 悲しみや苦しみは、実在とまでは言いきることはできないけれども、ある一定
したものの存在を許されていることが事実なわけです。

(12) まさしくこの統率者、リーダーとしての使命というものに磨きをかけている
とびとなのです。

(13) 寝われている方は、やがて霊的進化が止まり、その進
ざる感覚であ

全国統一神理検定試験問題。神理受験の参考書まである!!

宗教団体といっても、装置や儀式があるわけではない。あるのは仏陀を自称する教祖大川隆法と、彼が書いたという本だけである。したがって、〝神理〟を普及するには、本を普及させ、知人友人に十冊以上の本を読んでもらい会員にする以外にない。そこで、会員は書店を回り、平台に置くように頼むのである。読者が書店回りをするのだから、きわめて効率的だ。

誤訳のまましゃべるノストラダムスの霊

おもしろくないのは、高橋信次が開いたGLA、と谷口雅春がつくった生長の家である。自分たちの創始者の霊が大川の口を通して話すというから、「にがにがしく思っている」（生長の家）のは当然のことである。しかも、高橋信次の生前の著作集の横に、〝霊媒者〟大川が書いた「高橋信次霊言集」「高橋信次の天国と地獄」などの本が十五冊、谷口のが五冊並んでいる。

「うちの出版物の内容を無断で引用してい

るのだから、著作権法上からも問題があるのではないかと思っています」とは、生長の家の講師のひとりの言葉である。

生長の家では内容証明書を送りつけ、中止を勧告したらしいが、反応はまったくなかったという。このとき、「幸福の科学」の本部では対応策が協議され、「今後とも『忍辱』の姿勢を取ることが最善の策」という結論になった。

霊がなせる技でなければ、無断盗用は著作権法でたちまち引っ掛かる。だが、「私が勝手に書いたものではなく、谷口雅春の霊が私の手を使って書いた」と言われれば、果たして裁判の俎上にのぼるかどうか。悪く言えば、霊を使えば法の網もくぐることができる。両団体がにがい思いをしているのは、無断引用ばかりでなく、生前の教えを「勝手に解釈している」ことだ。しかし、これとても「生前はそのように言っていたが、霊の世界に入ってから考えを改めた」と言われれば、それ以上は追及できない。

「幸福の科学」と大川隆法を批判的に見る人は、こう指摘する。

「彼の霊言の特徴は、教えを書物に残した人の霊が多く登場することです。おそらく、本を読んで自分なりに解釈して、霊がしゃべっているようにしているのにすぎないのでは。まだ原典と彼が書いたものとを比較する作業はしていませんけど、ちょっと見た道元については明らかな間違いがあったし」

これが真実なら、何冊でも本を出すことが可能となるし、毛沢東であれ夏目漱石であれ、どんな霊だって登場させることができる。別の宗教研究家は、ようするに〝孫引き〟だという。

「彼の『ノストラダムスの新予言』をちらっと読んで、おかしいと思いましたね。だって五島勉さんが書いたものをそのまま引用してるからです。五島さんの誤訳がそのまま彼の本に出ているんですからね」

まだ「幸福の科学」と大川隆法を研究している宗教学者はいないようだが、「幸福の科学」がさらに大きくなれば、大川の霊言集が原典と翻訳本に照らし合わせて分析されることは間違いないだろう。そのときになって、あわてないことを祈るばかりである。

とまれ、いま「幸福の科学」では千冊の著書の発行と千五百万部の販売を目標としている。それとともに、今年中に宗教法人を設立し、法人格として大川は教祖になろうとしている。

「千冊というのは生長の家の谷口先生の著作活動を凌駕したいということなのです」

と関係者は話す。比較にとりつかれ、一流思考に囚われたわが教祖は、なかなか「無」の境地には達してくれない。

「六畳一間から出発したときから比べると、大川さん自身、明らかに変質してきている」

と指摘する人もいる。それは大川への呼称の変化に見られるという。最初は「大川さん」次いで「大川先生」そして「大川主宰」、今は「大川主宰先生」と呼ばれてい

る。さらに、最近では、講演の席に特別席が設けられるようになった。普通は二千円だが、教祖のおそばで聞きたい人は七千円という。自分の子どもはイザナギのミコトの生れ変わりだとまで言っているらしい。

トーメン退社直後の中川隆は、エリート意識からの訣別を誓い、そのように振るまい、教えも説いた。しかし、少年時代の一流指向という「旧社会の母斑」をひきずったままの誓いは、「悟り」の境地にまではとうてい達していなかった。それゆえに、「執着を捨てよ」どころか、ますます権威に執着していくのである。

にもかかわらず、大川を信じ、「あの世のある」ことを信じる人は増えていく。何を信じていいのかわからない世の中なのであろう。「全共闘世代で左翼活動をやっていた人が突然大川に狂い出した」と知人がもらした。社会主義に全存在をかけていた者にとっては、昨今の社会主義国家の変貌を見て、「信じる」ことの拠り所をなくしたのであろう。〝科学〟から裏切られれば、その反対の地平に走るのもむべなるかな、だ。

信じることは美しいのかもしれない。しかし、「それは怖いことだ」と新興宗教の団体の幹部が言う。

「信仰は信じることだが、しかしたんにがむしゃらに信じることではなく、自分の価値観をつくっていくことなんです。信じて、それがまったくの嘘であったことがわかったとしたらどうなりますか。精神が破壊されるなんてもんじゃないですよ」

会員の資格要件となる「十冊以上の読書」を実行した。しかし、何が会員を魅きつけるのか、さっぱり分からなかった。「きれいな心になりなさい」とか「人を愛し、人を生かし、人を許しなさい」あるいは「悟りこそ最高の幸福である」とか、ようするにこれまでさんざん言われてきた、手垢にまみれたことしか伝わってこない。読む側の頭に問題があるのかと思ったが、四十冊以上の大川の本の出版に関わってきた人も言う。

「彼の本は売れるから出しているんですが、私も彼が何を言いたいのかわかりませんよ。だいたい神理を普及しましょうと言うけど、原稿を何度読んでも神理ってなーにって言いたくなっちゃう。似たようなことばかりで。そのためか最近は量産主義を改め、点数を絞っていくという方針に変えたそうです。ネタがつきたんと違うかなあ」

それでも、東大出の仏様、出版ビジネスの神様は、今日もどこかの講演会場で、

「過去、一途に、まっしぐらに、誠実に、正直に、怠けることなく、力のかぎり歩んできた人間として、私のその生き方が、神を語るもののいたずらによって翻弄されているとは思えないのです（翻訳すれば、頭の悪さ、超肥満体、音痴にもかかわらず、真面目に勉強をし、二度の東大受験に失敗したけど、見事東大法学部に入り、東大での成績は優秀ではなかったけど、トーメンで力の限り商社マンとしてがんばった……というふうに聞こえてくるけど）」

と語り続けるのである。

（文中敬称略）

ポストモダン宗教展望②

「大霊界」とは何だったのか?!

「死」を隠蔽する現代日本に抗しえない仏教を、丹波哲郎が脅かす!

島田裕巳（宗教学者）

日曜日の午後、新宿の映画館。珍しいことに、観客のなかには年配の人たちが多い。私はふと、大阪の梅田で『お葬式』を見た時のことを思い出した。その時、映画館の入口に列を作っていたのは、普通ならあまり映画館では見かけない初老の人たちであった。最近では、岩波ホールで『八月の鯨』がロングランを続けていた時にも、同じような列ができていた。

私は、丹波哲郎の『大霊界2／死んだら驚いた』を見ようとしていた。考えてみれば、『大霊界』には『お葬式』や『八月の鯨』と共通点があった。それぞれアプローチの仕方はかなり違っていても、どれも人間の「死」の問題を扱っている。死について考えなければならない年齢に達した人たちは、自ずとそういった映画にひかれるのだろうか。案外、『大霊界』を見に集まった観客たちは、霊界についてまじめに考えているのかもしれない。

『大霊界』の一作目が公開されたおりに、丹波哲郎はテレビで、「早く見ないと御利益が薄い!!」と宣伝したという。その影響で、前売り券が予想以上にさばけたため上映館を増やしたが、封切り直後にはかなり混雑したらしい。これまで映画の「御利益」というものが宣伝されたことがあるのかわからないが、どこかいかがわしい宗教団体の勧誘の手口にも似ている。しかし、それが効いたということは、観客が単に娯楽を求めているだけではなく、もっと別の「何か」を『大霊界』に期待している証拠なのかもしれない。

映画館に集まった人たちは、霊界の存在を本当に信じているのだろうか。そういえば、某有名私立大学の私の教え子のひとりは、彼の祖母が丹波の説く霊界の存在を完全に信じていると試験の答案に書いていた。

一作目と二作目の霊界観はまったく違っていた!

『大霊界2』は、ミステリー・タッチで始まり、いきなりカーチェイスに突入した。妻殺しの濡れ衣を着せられた岡本（丹波哲郎）は、刑務所で絞首刑になるが、自分が死んだことに納得できない。彼は幽体となって刑務所の外に出て、護送車の運転手のからだに入り込み、車を滅茶苦茶に乗り回す。パトカーとの追い駆けっこになるが、誰も死者が運転しているとは思わない。そして岡本は、喫茶店で自分の娘（南篠玲子）のからだに入ってコーヒーを飲んだりするが、どうしても自分が死んだとは思えない。やがて、同じように死んでいながら、それに納得していない「浮遊霊」が他にもかなりいることに気づく。

丹波哲郎の霊界についての著作には、死んだ直後には死の自覚がないと書かれていた。『大霊界』の一作目でも、確かにその点が強調されていた。また、死んで霊界に行く死者は、その前にひとまず「精霊界」と呼ばれる人間界と霊界の中間にある世界へ行くことになるという。一作目では、丹波哲郎の息子・丹波義隆扮する曽我は、

事故で死んだ他の死者と一緒に精霊界へやって来た。精霊界は、人間界と地続きになっているようで、その様子もかなり似ていた。
　キリスト教の世界では、天国と地獄の他に、煉獄と呼ばれる場所があるとされているが、精霊界はこの煉獄に似ている。死者は、この煉獄で終末の日のキリストの再臨を待つことになるが、『大霊界』でも、精霊界にいる間に、生前の行いや業（カルマ）によって、「天上界」や「天界層」や「地獄層」のうち、どの霊界に進むかが決定されることになっていた。

「大霊界2 死んだら驚いた」より（7／5松竹ホームビデオよりビデオ発売）

　ところがである。『大霊界2』の岡本は、黄金柱に乗って迎えに来た三人の天使とともに、天界へ直行してしまう。つまり、岡本は精霊界をすっ飛ばしてしまうのだ。
　天界の女神は、驚く岡本に対して、無実の罪で死刑になった者は、天界に直行できるのだと説明する。そして、冤罪事件の顛末を明らかにする。真犯人は、彼の友人であり、裁判で弁護士をした八代（高橋幸治）であった。岡本の妻（中原ひとみ）は、運転を間違って蛇行して走っていた八代の車をよけきれずに崖から転落したのだった。殺意はなかったにせよ、八代はその事実を知りながら、罪を友人の岡本になすりつけたことになる。
　しかしそれも、岡本が百三十年前に前世で犯した過ちが原因になっていた。八代の家来であった岡本は、八代の妻に恋して無理矢理迫ったが、彼女は逃げようとして橋から転落死してしまった。女神は、「自分が蒔いた種は、自分で刈り取らなければならない」と、すべてが「カルマ」の法則にもとづいていると説明する。
　真実を知った岡本は、死んだ妻と再会し、霊界で再び結婚する。丹波は人間界で夫婦であった者が霊界でも同じように結婚することはほとんどないと言うが、霊界で結婚した二人は若返り、一体化して男のからだの中に女のほうがすっぽり入れるようになる。
　岡本は、カルマの法則を八代に教えるために人間界に降りていくが、彼の送るサインはことごとく八代には異常な現象に見え、彼は自分が呪われていると思うようになる。そして、八代は良心の呵責に耐えかね、銃で自殺をはかる。
　自殺した者は必ず地獄へ落とされる。というのも、丹波の説明によれば、人間界は修行の場であり、自殺という行為はいかなる理由に

もとづいていたとしても、本人に課せられた修行を中途で放棄することになるからだというのである。したがって、八代も当然地獄へ落ちていく。責任を感じた岡本夫妻は、三人の天使とともに八代を救い出すため危険を覚悟で地獄へと降りていく。

地獄は市長選挙の真っ最中だった。売春党、狂気党、おかま党、病気党、そして心中クラブ（新自由クラブの亡霊か？）といった政党が思い思いに選挙運動の演説を行っているが、お互いに殴る蹴るの乱暴を働いて収拾がつかない。岡本たちは地獄のキャバレーに連れ込まれるが、金が払えないために、病院に実験材料として売り飛ばされてしまう。

この地獄は、まるで蜷川幸雄演出による『どですかでん』（あの黒沢監督の）といったおもむきではないか？『大霊界』の一作目で助監督をつとめた服部光則監督は、特撮が得意だともいうが、案外こういった遊びの部分に才能を発揮している。地獄のイメージが鮮明なものになることで、天界との違いは際立ったものになってきた。一作目の天界と地獄はいかにも間が抜けていたが、それは精霊界との区別が曖昧だったところに原因がある。あれが霊界の本当の姿だったとしたら、誰も霊界に行く気は起こらない。

丹波自身が雑誌のインタビューなどで言うほどではないにしても、天界がすばらしい場所として描かれ、逆に地獄の恐ろしさが強調されることで、見ている側は、できることなら天界に生まれ変わりたいと思うようになる。ケーシー高峰の地獄の医者に生体解剖されるくらいなら、山瀬まみの天使に天界を案内してもらったほうがはるかにいいに決まっている。

黄泉の国から浄土信仰への発展

どうやらこの『大霊界』は、昔、寺で行われていた地獄絵の「絵解き」の現代版であるらしい。この絵解きというのは、仏教の布教の手段のひとつで、子どもに社会道徳を説く役割を果たしていた。寺の住職は、本堂に地獄のさまを描いた絵を掲げ、付近の子どもたちを集めて絵の解説を行う。絵には、地獄に落とされた亡者たちが、釜ゆでにされたり、火であぶられたり、拷問を受けたりする場面がいかにもむごたらしく描かれている。住職は子どもたちに向かって、この世で犯した罪によってどの地獄に落とされるかを詳しく説明し、ゆめゆめ悪いことをしてはならないと説教したのだった。

本来は、浄土への憧れを強くするために、地獄の凄惨な様子が説かれたわけだが、いつしか地獄の恐ろしさだけが強調されるようになってしまった。悪を戒めることに力点が移り、地獄は威しの手段としての性格が強くなっていった。浄土への信仰を広めることよりも、社会道徳あるいは倫理を子どもたちに伝えることのほうが重視されるようになってきたのである。

『大霊界2』では、自殺をしてはならないという教えが強調されている。自殺した人間は、すでに述べたように、たとえどんな理由があったにしても、地獄に落とされるしかない。自殺した八代は、地獄の大女（ダンプ松本）や大男（荒勢）を乗せたソリを引かされ、幾度も鞭打たれていた。

日本では、自殺が明確に否定されたことは少ない。自殺や心中に同情的なところがあり、自殺の意義が強調されることさえある。したがって、丹波は自殺を完全に否定したことで、ひとつの明確な「倫理」を示したことになる。

倫理の発生は、宗教が進化した証としても考えられる。たしかに、『大霊界』は一作目から二作目へと、宗教進化の道筋をたどっているところがある。それは特に、霊界、つまりは死後の世界のイメージの変化のなかに現れている。

最初の『大霊界』の死後の世界は古代的であった。古代の日本人は、あの世をこの世と連続したところに想定した。古事記などの神話に出てくる「黄泉の国」は、黄泉平坂と呼ばれる、現世と来世の境にある坂を通って行ける場所として考えられていた。お伽話に出てくる他界も、「鼠の浄土」などのお話に見られるように、この世と地続きになっていた。ただし、

黄泉の国は、この世と連続している分だけイメージが曖昧で、目も覚めるようなすばらしい世界でもないかわりに、格別恐ろしい世界でもなかった。それではとうてい、威しの材料にはなってくれない。

こういった古代的な日本人の死後の世界に対するイメージは、中国から浄土の観念が伝えられることによって大きく変わった。死後において極楽浄土に生まれ変わることが重視されるようになり、その一方で地獄の恐ろしさが強調されるようになった。うかうかしていると地獄に落とされると威しをかけることで、仏教者たちは浄土への信仰を広めようとしたのである。

『大霊界』から『大霊界2』への霊界のイメージの変化は、この日本的な死後観の転換に対応しているところがある。『大霊界』の霊界は、黄泉の国に近いという印象だった。霊界に来たはずの死者たちが、自分で死んだことに気づかない点が強調されていたのも、霊界が現世の世界と連続した性格を持つものとして描かれていたからであろう。現世と連続している分だけ、霊界は面白みに欠けていた。特に、すばらしいわけでもなければ、格別に恐ろしい世界でもなかったのである。ただし、丹波自身の著作に見られる霊界の実相には忠実だったかもしれない。

それに対し、『大霊界2』に現れた霊界のイメージは、極楽浄土と地獄、あるいは天国と地獄に二分されたあの世であった。天界、つまりは天国のすばらしさを描くために、地獄の凄惨さが強調されていた。そして天界は、浄土であると言っていい。ジュディ・オングの女神が、阿弥陀仏のかわりに死者を迎えてくれる。

霊能者よりも芸能者の説得力

地獄絵の絵解きが威しとして効いたのは、絵解きの説法に節がついて芸能に近づいたからである。住職の巧みな話術に接すると、地獄がまるで存在するような気になってくる。実際に見てきたわけでもないのに、彼らはまことしやかに地獄の様子を語り、それを信じさせてしまった。

丹波哲郎だって、霊界に行ったことがあるわけではない。普通、霊界が実際に存在すると説くのは、霊的な体験をして自ら霊界を見てきた霊能者たちである。ところが、丹波には霊的な体験はいっさいない。それは本人もはっきり言っている。したがって、彼の説く霊界の有様も、これもまた本人が認めていることだが、まったくの「受け売り」なのである。

この点が面白い。体験を持たない丹波には、自分の体験を根拠にして霊界の存在を証明することはできない。そのために彼は、霊界の証明をしようとするときに、霊的な体験を持った人たちの本を持ち出してくる。それは、エマニュエル・スウェーデンボルグなどの西欧の心霊科学の本でもいいし、『チベットの死者の書』でもいい。あるいは、脱魂状態を意図的に作り出すチベット密教のポアの修行にふれているところから、あの『チベットのモーツァルト』でもかまわない。古今東西のあらゆる本が、霊界の実在を証明するために活用されている。

この寄せ集めで雑然とした霊界の実在を信じさせているのは、ひとえに丹波哲郎自身のパフォーマンス、要するに演技力による。

丹波哲郎は、アメリカのレーガン元大統領に似ているのかもしれない。レーガンが二度まで大統領に選ばれたのは、レーガンの政治手腕が評価されたというよりも、むしろ彼のパフォーマンスの力によるものだったのではないだろうか。レーガンが強いアメリカの復活を訴えれば、国民は感動し、その夢に賭けてみようとする。実際、レーガンにじかに接した人間は、すぐに彼の人間的な魅力の虜になってしまうとも聞く。丹波哲郎が霊界の使者を演じるように、レーガンは、大統領を演じていたのかもしれない。レーガンは単なる操り人形で、原稿が用意されていない時には、しどろもどろになるという噂が絶えなかったのも、人々が彼のパフォーマンスに演技を感じていたからであろう。

映画俳優としては、ときに大袈裟に感じられる丹波哲郎の演技も、

もともといかがわしい部分のある霊界の実在を信じさせるにはかえって都合がいい。人々は、何をバカなと思いながらも、ひょっとしたら霊界が存在するのではないかと考えてしまう。丹波も、霊界をあくまで死後の世界についてのひとつの世界観（コスモロジー）として説くという姿勢をとっている。霊界の宣伝マンという呼称にも、それが現れている。

霊能者ではないことが、かえって幸いしているのかもしれない。丹波哲郎に宗教者特有の押しつけがましさがまるでないのは、体験の欠如に関係があるのではないだろうか。実際に霊的な体験をした人間は、どうしても自分の体験にこだわってしまう。自分の体験を絶対視して、それ以外のものを認めようとしなくなる。丹波哲郎には、その点体験へのこだわりがない。映画のプログラムには、丹波の親族がみな東大卒であるにもかかわらず、本人は「物事にこだわらない性格」から中央大学の法学部に進学したとある。

もちろん、『大霊界』はもとより宗教ではない。商品であり、巨大な商業プロジェクトである。丹波哲郎は、教祖ではない。

しかし、その受け取り手である一般の人たちは、『大霊界』を単なる商品とは考えていない。彼らは、霊界の存在を半分はまじめに信じている。死あるいは死後の世界についての不安と期待が、彼らを『大霊界』へと向かわせる。丹波哲郎は、そういった不安と期待を十分にすくいあげているのである。『大霊界』だけでなく、『お葬式』や『八月の鯨』など、死を扱った映画に対する関心は高い。そういった年配の人たちの関心を、これまで映画界は十分に把握できていなかったのではないだろうか。

丹波哲郎が仏教を脅かす

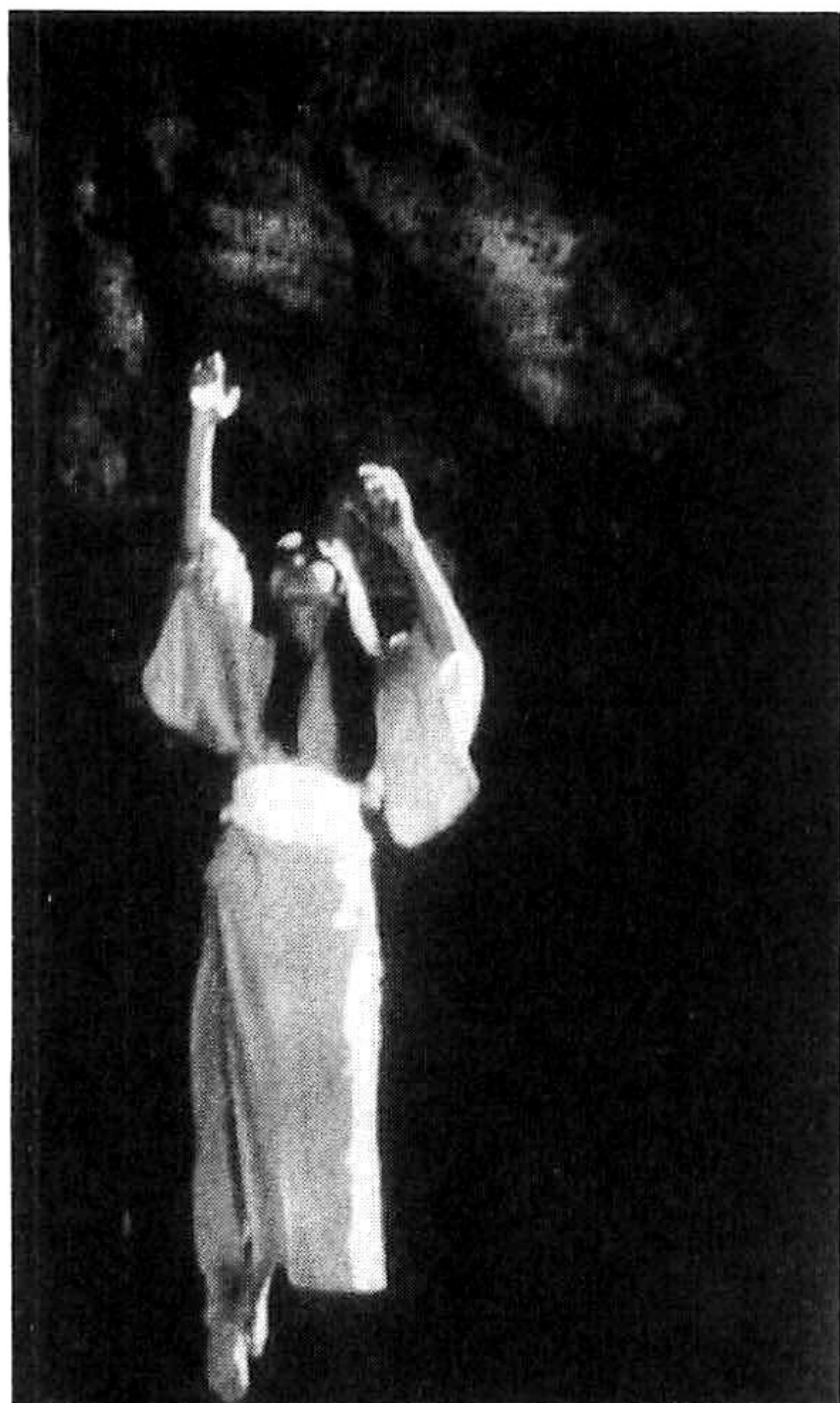
しかし、問題は映画界ではなく、本来死について語るべき責任を負っているはずの宗教界にある。今、丹波哲郎以上に、死後の問題について雄弁に語っている宗教者が果たしているのだろうか。寄せ集めであるとはいえ、死後の世界の姿を、「大霊界」という一貫したコスモロジーにまとめあげて語ることは、それほど簡単なことではない。だからこそ、多くの人が集まってくるのである。

こういった事態は、今後仏教にとって大いなる脅威になるかもしれない。丹波哲郎は、その著作のなかで、死にまつわる儀礼は、霊界に昇った死者にはいっさい関係がないと断言している。お経をあげることも、戒名をつけることも、そして法要などの供養をすることも、すべては生きている者のためであって、霊界には関わりがない、と。「葬式仏教」と言われる現代の仏教の意義をまっこうから否定している点で、彼の主張はかなりラジカルである。

もし、こういった丹波の考え方が広く受け入れられるようになったとしたら、どういうことになるのだろうか。それは仏教にとって、大きな痛手となる可能性を秘めている。

仏教は、日本ではこれまで祖先崇拝の観念や儀礼と結びついて受け入れられてきた。それは、家の制度と強く結びついている。生産の基盤となる家の存続を保証するために、祖先崇拝の儀礼が継承されてきた。しかし、家の重要性が失われ、近代社会のなかで家制度が崩壊していくことで、祖先崇拝の意義は薄れ、仏教への関心も衰えていくことになる。

丹波哲郎の説く霊界は、新しい死後観を示すことによって、仏教

「大霊界 死んだらどうなる」より（株）エスピーオーよりビデオ発売

的な死後の世界が失われた後の空隙を埋めようとしているのかもしれない。霊界は、個人主義の性格が強い。個人の死後の運命を決定するのは、その当人の生前、あるいは前世での行いであるとされる。すべては個人に還元され、遺族による供養が死者の死後の幸福に影響するというこれまでの仏教的な考え方は少しも見られない。個人がますます重視されつつある今の日本社会において、祖先崇拝を基盤とした仏教にかかわる新しい死後観はたしかに必要なのであろう。

　仏教は、「大霊界」という強敵を前にしながら、案外のんきに構えている。丹波の霊界についての見解を批判しようという動きも見られない。「大霊界」などしょせん金儲けにしかすぎず、宗教とは無関係だと考えているのだろうか。しかし、現代の仏教も、実は死者をとむらうための一大ビジネスなのではないだろうか。院号居士の戒名をもらうために何百万円もとられたという話も、決して珍しくはない。しかも、それは「お志」という、信仰にもとづく自発的な行為の体裁をとってはいるものの、ほとんど「したきり」といった形で強制されたものといっていい。それに比べれば、「大霊界」の商法ははるかに良心的である。本にしても映画にしても、価格は定まっていて、しかも他のものより特別に高いわけではない。

「大霊界」が仏教を根底から脅かすようになるという事態が起こったとしたら、それはそれで歓迎されるべきではないか。『大霊界』の観客たちは、密かにその日の来ることを待ち望んでいるのかもしれない。

ポストモダン宗教展望③

教祖になったマンガ家、天使と交信するSF作家！

この物語は私が想像したのではない、神に書かされたのだ！
作家(クリエイター)が創造主であることを放棄し、霊媒(メディア)を名乗り出したとき、
宗教がはじまった！

安藤尚彦（フリーライター）

朝九時。山梨県、JR線塩山駅。私は駅前でタクシーを拾い、「神山会の観音堂のお山」と、告げた。それだけで運転手さんは了解して、発車させた。雑誌で読んだとおり、このあたりでは神山会はかなりの顔のようだ。

私が目指しているのは、少女マンガ家山本鈴美香を中心にした宗教団体の本山。今日はそこで、巫女(ミコ)である山本を通して御神託が下される定例会が催されるのだ。

巫女を囲むコミューン

山本鈴美香は、テニス・マンガ『エースをねらえ！』で一世を風靡した。同作品は二度にわたってTVアニメ化されたほどの大ヒット作だ。しかし、最近はそれよりも、巫女になってしまったマンガ家として知られているようだ。

もともと少女マンガ家には、神秘体験や霊能の持ち主が多い。数々の心霊現象を体験した山岸涼子、夢でUFOと交信し、やはり心霊マンガ『アマテラス』を執筆する美内すずえなどが有名だが、そのほかにも現在は数え切れないほどの少女向け心霊、ホラー・マンガ誌が書店には並んでいる。

少女というのはもともと「憑巫(よりまし)」だから、と言ってしまえばそれっきりだが、山本鈴美香のように、その作品すら神に書かされ

霊界からメッセージを送る
長南年恵

雑誌で初めて!

巫女となった作者が
霊界からのお告げを
受けて『自動書記』!
連載中は白米断ち!

霊界通信

劇画

生誕120年!
天国から贈る
奇跡の主人公が、
幸福メッセージ

神のお告げを受ける
山本鈴美香

微笑別冊「超能力者列伝」の扉に登場した山本鈴美香

た自動書記だというケースは珍しい。

たしかに「書かされてしまう」というのはヒット作を生むために重要な要素だ。個性的なキャラクターと、確固たる世界観さえ設定してしまえば、あとはストーリーが作者の思惑を越えてひとり歩きしてくれる。そうでなければ数年間の連載を乗り切るのは難しいといわれている。

それはたんにマンガだけの話ではない。ゲーテや三島由紀夫などもそうだろう。作家とは、多かれ少なかれ、自らの作った世界観に動かされて、いや、異界と交信して物語を紡いでいく存在なのだ。

しかし、もし、物語のほうが作者よりも完全に優位に立ってしまったらどうなるのだろう。自分が作ったという前提さえ忘れ、物語に自分の世界観ばかりか、生活まで支配されてしまったら……。

降りてこない神様

タクシーは十分ほど走ると、大菩薩峠の登り口あたりで私を降ろした。そこから丘をしばらく登っていくと、数戸のプレハブと、小さな講堂が見えてきた。そこが山本鈴美香の主宰する、神山会の本部だった。新興宗教にありがちなキンキラキンの建物を想像していた私は、その質素さにちょっと驚いた。

とりあえず受付へ。取材とは断らなかった。誰でも参加できる定例会ということだし、ありのままの姿を見るためにはそのほうがいいと思ったからだ。

頂上の中央は広場になっており、そこには、三つ四つの社が建っている。社には木花咲耶姫を始めとする諸神が祀られており、お神酒や花がいっぱい供えられている。

丘に集った者たちは、皆、かわるがわる社に詣で、柏手を打ち、頭をたれていた。そのほとんどが若い女性。トレーニング・ウエア姿がやたらに目につく。みんなこの山で共同生活を送っているのだ。

それにしても、神事や行事が始まる様子はまったくない。参加者のほとんどが顔見知りのようで、楽しそうに雑談などをしている。私は初参加であり、話す相手もいない。

受付で聞いたところ、御神託はいつ下されるかわからないので、ずっと待ち続けるしかないという。このまま夜まで山本鈴美香に神様が降りてこなければ、神の供物を料理した御神饌を皆で食べて、般若心経を唱え、会は終了するという。

ということは、彼女に神が降りてこない限り、私は夜まで何もすることがない！

しかたなく、まわりをうろつく。丘の上には畑の跡があり、鶏も飼われている。後で聞いたのだが、シーズンになれば、皆で畑を耕作するという話だ。自然に親しみ、身近に神の存在を感じ、感謝する。そんなコミューンの形成を目指しているという。

どうもここには、宗教団体にあるべき、明確な教義や厳密な組織なんてものはなさそうだ。あるのは、ただ巫女を中心とした人の輪だけなのではないか？

大ベストセラー「エースをねらえ！」(集英社)と、微笑別冊「超能力者列伝」(祥伝社)表紙

神様を担当する編集者の苦労

山本鈴美香が、はっきりとした神の啓示を受けたのは、一九八三年二月三日の夜八時、連載マンガ『白蘭青風』のストーリーを考えていた最中だという。

「巫女に所望する！」彼女は、はっきりと神のお告げを聞いた。子どもの頃から霊能はあったというが、これを境に、巫女としての活動を本格化した。

『白蘭青風』は八三年より、小学館『プチフラワー』誌上に連載された、平安朝を舞台にした神霊マンガだ。

神の声を伝える巫女の少女が、邪悪な勢力と戦いながら宝探しをするという内容で、当初は歴史ロマンと銘打たれていた。

私はこのマンガのファンだった。わざわざスクラップしたこともある。その理由をひとことで言えば、「異常だったから」である。

なにしろ、ある回など全五〇ページ中、

二九ページが心霊世界の解説、あるいは自分の体験談なのだ。それが、つのだじろうの『うしろの百太郎』ていどの心霊解説なら、まだ理解できるのだが、彼女の場合、ストーリーと直接関係のない私的な話に終始してしまうのだ。美貌術の紹介、近所のエセ霊能者の悪口、悪質な寺の手口公開……これじゃあ編集者はたまったものではない。「これは幻の作品になるぞ……」という私の密かな期待は的中し、ついに連載は突然中止となった。

　そんな彼女の神憑りに目をつけたのが、女性週刊誌『微笑』だった。八四年より、山本鈴美香は『微笑』に「超能力者（エスパー）列伝」の連載を開始した。彼女はこのとき、自分が神の巫女であることをはっきりと宣言する。作品の内容も、明治期の霊能者、長南年恵の伝記で、山本自身の投影として描かれている。

　たとえば、長南年恵は生涯ほとんど食を摂らなかったというが、山本もこの頃から食事断ち、水断ちを始める。口にするのはわずかな牛乳とお神酒（みき）のみ。さらに恐るべきことに、このマンガのストーリーは、神憑り状態の自動書記で書かれたものだと山本は言う。

　完璧な巫女になってしまった山本は、八五年には、学研のオカルト雑誌『ムー』誌上で「山本鈴美香の御神託メッセージ」を開始する。読者の相談事に対し、彼女は神の声や、ワープロによる「お筆先」で答えるという企画である。

　ただし、彼女の編集者の苦労は想像を絶するものがある。なにしろ相手は神様だ、しかもその神様がなかなか降りてきてくれないときてる。

「まずたいていの編集者は音をあげますね」

　彼女の担当を経験した編集者はそう言った。

　だが、山本自身は可愛い人柄で、面倒見もよく、アシスタントや信者の皆に好かれているのも事実。家族との関係も親密だという。

　彼女の父親は事業で財をなした地元の名士。神山会の活動資金の多くは、この父親の財力によるところが大きいという。

「その点で、信者から無理に資金を調達するといったことはないですね。お山自体も質素ですし、お金目当てでは絶対ないです」

　集まってくる信者の多くは、やはり彼女の大ファンが多い。あこがれの先生に会えるといったことから関係が始まり、親身になって相談に応じてもらったりで、信者になる例が、ほとんどらしい。

「あたしが悪いんです！」彼女は泣き出した。

「もともと、マンガ家とファンの関係って、教祖と信者みたいなものですから」

　そんな編集者の言葉を思い出しながら、私はまだ、観音山の上にいる。活き活きとした表情の信者たちのなかで、私はとくにやることもなく、休憩所のベンチに座っている。かれこれ五時間になるだろうか、向こうに見える講堂の中に山本鈴美香がいる

連載が中止になった「白蘭青風」(小学館)

のだろうが、まだ神様の降りてきた気配はない。暖かかった春の日差しも翳りはじめ、気分はどんどん滅入っていく。

身の置きどころのない私は、それとなく周囲の人びとの会話に耳を傾けた。

『エースをねらえ！』を自分の人生に重ねて語っている女性がいる。普通の少女が、努力に努力を重ねて自己の限界を超えていく姿を描いたこのテニス・マンガは、修行に励む信者たちにとってのバイブルと化しているようだ。

また、ある少女は、会長（山本鈴美香）から「人のことを思いやって行動せよ」との御神託をいただいて、それ以来心を入れ替えました、と目を輝かせて語っている。なんのことはない普通の人生訓にすぎないのだが、彼女たちは有難い神様の御言葉として真摯に受けとめている。

私の隣に座っていた女の子は、もう半年以上お山に通っているのに、いまだにお言葉がいただけないと、別の女の子に嘆いている。

機会をとらえ、彼女に話しかけてみる。
「みなさんもう長くお山にいらっしゃるのですか?」
彼女から会のことなどをいろいろ聞き出そうとしたのだ。彼女は私の問いに、親切に答えてくれた。
彼女によれば、長い人では、もう一年もお山にいるそうだ。というのも、一年前の月例会のとき、山本鈴美香に降りてきた神様が「会は終了」という御言葉を残さなかったからだ。信者たちは話し合いの結果、「まだ例会を続けよ、という意味ではないか」と判断し、それ以来ずっとここに残っているのだという。俗世を捨てて。
ただ「終わり」の合図がなかっただけで!　いや、それはたんなる言いわけだろう。彼女たちはきっとここで暮らしたかったのだ。やはりここは、何も強制しない教祖山本鈴美香を中心に、自然発生したコミューンだったわけだ。
その女の子と話していると、突然、年配の女性が割り込んできた。
その女性は警告した。
「会長のおっしゃった言葉を自分の判断で第三者に伝えるのは間違いのもとだから、軽率にそんな話をしてはならない」と。
その口調は穏やかなものだった。しかし、言われた女の子は、いきなり顔を手で覆って泣き出してしまったのだ。
「あたしが悪いんです!　あたしが……」
いいえ、僕のほうが悪かったんです、といくらあやまっても泣き止まない。注意した年配の女性も優しく慰める。しかし、いったん高まってしまった感情はなかなかおさまらない。
しくしくと泣き続ける彼女、当然人の目をひく。その場になすすべもなく立ちつくす私……。
しかたなく受付に下山を申し込む。
「みなさんが、真剣な気持ちで神様に接していらっしゃるのに、自分は興味本位だけで来てしまっていて、申し訳ない」
私の言葉は半分以上本気だった。なによりも、少しでも人の役に立ちたいと思っていた女の子の気持ちにつけこんで、いろいろと聞き出そうとしたことは事実なのだ。
さきほどの年配の女性や、受付の人たちが熱心に引きとめてくれる。とにかく同じ口上を繰り返して、その場を離れた。
塩山の駅で東京行きの急行に乗り込んだときには、もう夜の七時を過ぎていた。
朝から晩まで、ほとんど行事らしい行事もなく、孤独な状態に置かれていた私は、ひどく消耗していた。
あの場を去ったのは、こんな精神状態で信者たちに囲まれたなら、いとも簡単に折伏されてしまうような気がしたせいでもあったが、なによりも私は、彼女たちの真剣さに打たれていた。
山本鈴美香に神が降りようと降りまいと、本当に巫女だろうとなんだろうと、私にはもうどうでもよくなった。山本を中心に共同体を自主的に作り上げた信者たちの信心は、けっしてまやかしではなく、真剣そのものだったからだ。

「幻魔」と闘うネットワーク

もし自分の敬愛する作家が、突然神憑りになっても、あなたはその作家を信じ続けることができるだろうか。私はできなかった。

神山会の信者たちと出会って思い出したのは、かつて私がファンだった作家、平井和正のことだった。

平井和正の場合、神憑りというよりも「天使憑き」と言うべきか。なにしろ彼は天使との出会いによって、人類救済の物語を書かされているというのだから。

自動書記になってから寡作になった山本鈴美香と違って、平井は「言霊使い」を自認して以来、怒濤のごとく執筆量を増やした。彼のライフワーク『幻魔大戦』シリーズは、わずか四年間に一万四千枚のペースで書き続けられ、個人で書かれた世界最長の小説としては、あの中里介山の『大菩薩峠』を抜くのも時間の問題という、ギネスブック級の大長編宗教叙事詩となった。

大菩薩峠から遠ざかる列車の中で、私はこう思い始めていた。かつて挫折した『幻魔大戦』読破に再び挑戦してみようか、と。

この日以来、私のこぎたないアパートには、『幻魔大戦』全二十巻（角川書店）、『真幻魔大戦』全十五巻、『新幻魔大戦』全一巻、『ハルマゲドン』全三巻、『ハルマゲドンの少女』全三巻（いずれも徳間書店）がうず高く積み上げられることになる……。

天使と出会ったSF作家

平井和正、一九二八年生まれ。往年の人気アニメ『エイトマン』の原作者として有名だが、彼を一躍ベストセラー作家にしたのは、陽気な狼男を主人公にしたアダルト・ウルフガイ・シリーズだ。

ウルフガイ・シリーズは、現在の菊地秀行や夢枕獏などの先駆けといえるオカルト・バイオレンス小説で、超一級のピカレスク・ロマン。もちろん私もその魅力にとりつかれた熱狂的ファンのひとりだった。

そんな私が「あれれ」と戸惑い始めたのは、七六年の『人狼白書』からだ。

私が好きだった陽気なアウトローの軽口は隅に追いやられ、天使や悪魔が跋扈するなにやら宗教的展開を見せ始めたからだ。

そして、この傾向は続編『人狼天使』（七八～八〇年）でさらに強まる。

なにしろ『人狼天使第二部』（七八年）のあとがきでは、天使や悪魔の実在を説き、これらの存在との遭遇さえもにおわせているのだ。彼ははっきりと言い切っている。

「この作品は、高次元世界の仕組みを解明し、天使の存在を説くために書かれているのである」と……。

「天使と出会った……」と平井和正は言う。

それは、自ら大天使ミカエルの生まれ変わりと称する高橋佳子との出会いを指すのではないか、と言う人もいる。

膨大な幻魔ワールドの、ほんの一部

『真創世記』(祥伝社)におけるＧＬＡ代表、高橋佳子との出会いが平井和正を大きく変え、ウルフガイ・シリーズは"天使"小説となった

高橋佳子は、新興宗教団体ＧＬＡの始祖高橋信次の長女。高橋信次亡き後、弱冠二十歳で教団の指導者となる。祥伝社ノン・ブックスから著した『真創世記』三部作はベストセラーになったが、それを口述筆記したのが、ほかならぬ平井和正だったのだ。

平井は『真創世記』の推薦文で「佳子さんと会った瞬間、世界はみるみる鮮やかな変貌を遂げた。過去の私は、本当の生をいきていなかったのである……」と述べている。そして、実際、ＧＬＡならぬＣＬＡという宗教団体まで登場する完全な宗教小説『幻魔大戦』シリーズが始まった。

超能力アクションから宗教団体の内部抗争劇へ

もともと『幻魔大戦』は、平井和正が天使と出会うよりもはるか以前、一九六八年ごろ『少年マガジン』に連載されたマンガだ。絵は石森章太郎、平井和正は原作者だった。

天使が憑いた後、平井和正がとりかかっ

異色対談
平井和正VS.犬神明

われらのスーパーヒーローウルフガイ"犬神明"があらわれた!

"全国のウルフガイたち

司会 南山宏

平井和正の小説世界が現実と
ままリアルな世界の存在だった
彼はわれわれに何をもたらすの
べき内容をもっていた。残念な
るわけにはいかない。ともあ
が語る言葉に耳を傾けよう。
クト"真八犬伝"の仲間たち。こ

徳間書店『SFアドベンチャー』1986年8月号に掲載された、平井和正と〝実在した〟犬神明との対談

た『真幻魔大戦』は、そのマンガの世界と並行に存在する、いわゆるパラレル・ワールドの物語だ。幻魔シリーズのいちばんの特徴は、さまざまな物語が、時空間を超えて同時進行し、なおかつ密接に結びつく、という複雑さにある（後に平井和正は、石森章太郎のマンガは幻魔シリーズから除外している）。

　では幻魔大戦とは何なのか。それは大宇宙全域で行われている「（幻魔）侵攻軍」と「大連盟軍」との戦いである。幻魔は全宇宙に完全なる滅亡を与えようとする巨大な負のエネルギー体であり、すべての邪悪なるものの根源である高次元存在と定義づけられている。

　この戦いは現在、幻魔側が優勢なのだが、地球において救世主が誕生し、覚醒した人びとが真の信頼で結びつくことによって成立する人の和、光のネットワークを完成させることによって、人類に勝利がもたらされるとされている。

『真幻魔大戦』に続いて、かつてのマンガ

版『幻魔大戦』の小説化として『幻魔大戦』の執筆が開始された（ややこしい）。
鼻たれのガキの頃、胸を躍らせたあのマンガが小説になって帰ってきた！　当時、高校生だった私は、一も二もなくこの小説に飛びついた。ところが……。
いちおうSF小説らしく超能力アクションが展開するのは最初だけ。四巻あたりで、対ハルマゲドン団体GENKENが話の中心になっていき、なんか雲行きがおかしいなと思っているうちに、しまいには新興宗教団体の確執や内部抗争を描いた現実的な人間ドラマになってしまう。しかも話の途中で、肝心の主人公、東丈は失踪してしまって出てこない！
そして私は幻魔ワールドに挫折した。

SFを哲学書として読む人びと

落ちこぼれていったのは私だけではないだろう。平井和正自身、何万もの読者が去っていった、と言っている。しかし、その一方でよりいっそう熱狂する読者たち、あるいは『幻魔大戦』で初めて平井和正に目覚めたという者も増大していった。いわば『幻魔大戦』を境に、ファンの再編成が行われたのだ。
『SFアドベンチャー別冊・平井和正の幻魔宇宙』というムックに目を向けてみよう。
この本には、読者から大量の懸賞論文やイラストが送られてきており、その熱い息吹を感じとることができる。
この懸賞論文を読んでみると、実に多くの読者が、幻魔ワールドをもうひとつの現実として受けとめていることがわかる。

「幻魔大戦ぎらいを分析してみると、例外なく哲学書に傾倒したことのない者達だ。（中略）真の救世主が幻魔に向けて戦いを挑むとき、せめて迷惑をかけないよう、心を光で満たしておきたいではないか」

——読者懸賞論文より

彼らはこの小説に、自己啓発の書として接しており、登場人物に一体化することで、魂の覚醒を本気で目指しているようだ。
また、幻魔ワールドの開かれた構造が、読者の創造力を喚起するのだろう、作品中に登場する架空の映画のポスターなどを自作したり、本当にGENKENまがいの団体をつくったりする読者も現れた。彼らは自らを「ヒライスト」と呼び、外界との異質ぶりを自覚している。
もはや『幻魔大戦』はフィクションではなく、彼ら幻魔信者たちをつなぐネットワークそのものなのだ。その環のなかで本気で遊べる読者のみが生き残り、最後まで醒めている者は疎外されてしまう。私のように。

「私が本物の犬神明です」！

こうして私は、読者としては平井和正と訣別した。しかし、平井和正への興味は逆に高まる一方となった。
なによりも、自分は「作家」ではない、

この小説は自分が書いたものではない、と主張する作家、という存在自体が異様ではないか。平井和正は、覚醒した後に書いたものばかりか、以前に自分が書いたものまで「創作ではない」と言ってのける。平井自身こう語る。

私は一九七八年から自分が作家であるという意識がどんどん薄らぎ、(中略)『幻魔大戦』に至っては、自分で物語をでっちあげているという実感がほとんどなくなってきたわけです。

平井は、どこかで起きていること、起きるだろうことを、高次元からの自動書記によって書かされているだけだ、自分は「言霊使い」にすぎない、などと公言する。

クリエイターとしてのアイデンティティを放棄し、メディアであろうとする作家。まさにそれを実証する（?）事件が八六年の夏に起こる。

平井作品の登場人物、ウルフガイこと犬神明が、実在したのだ！

その衝撃的な対談は、八六年の八月の『SFアドベンチャー』誌上に掲載された。「異色対談平井和正VS犬神明」。実際に出現したウルフガイとの対談である（これは架空対談の企画ページでは、決してない！）。

この犬神明氏、自分のことが小説になっていることを知って、驚いて名乗り出て来たのだという。つまり、自分は小説と同じ体験をしてきたというのだ。某国のスパイと激しい戦闘を繰り広げ、ゾンビとニューヨークで戦い、拳銃で撃たれたが死なず、切断された親指も生えてくる。そればかりか小説と同じように、天使にも会ったのだ、と——。

「天使の言では、向こうの（パラレル・ワールドの）地球ではハルマゲドンが早く起こり、すでに破滅したとのことだ」

小説と現実を混同した妄想狂、と誰もが思うだろう。実際、平井和正も、その手の人物が自分のもとに押しかけてくることはよくあると言っている。しかし、平井は言う。

「彼に会っていろいろ話を聞いているうちに、彼が決して妄想狂やパラノイアのたぐいではないことを確信しました」

平井和正によれば、この世にはあと七人のウルフガイが隠れているという（八犬伝だ！）。彼らを大至急集めて使命を果たさねば、世界が危ない。そのために彼は残りのウルフガイに呼び掛けるために、自称犬神明との対談に踏み切ったのだという。

では、その使命とは……。それは、ハルマゲドンにそなえて、ある種の人びとを守ることであるという。まさにウルフガイ、幻魔シリーズそのものの世界——そしてそれを平然と受けとめる平井和正。

「このままでは、幻魔大戦におけるハルマゲドンも実現するかも知れない……」

そう彼は、冗談めかしつつも恐れを込めて、対談後に語っている。

ちなみに、この犬神明氏は、その後、行方不明だそうだ。

冷静には読めない奇書

私は数年ぶりに手をつけた幻魔シリーズをついに読み終えた。半月以上かかった。

読後の感想は「やはりものすごい」のひとこと。これだけ膨大な物語でありながら、事態はいっこうに収拾の見込みがつかず、肝心の宿敵、幻魔そのものもどこかに行ってしまう。

読むあいだじゅう、私は「魂の覚醒」を問われっぱなし。しかしそこで「説教される筋合いはねえ!」と反発してしまっては、読み通せない。それほどにこの小説は強烈なメッセージ性に満ちている。醒めていたのではただの不気味な布教書にしか思えない。

まさに、現代日本に現れた最高の奇書の名に値する。しかも出口王仁三郎の『霊界物語』と違って、全部読んだ読者が日本中にやたらといるというところにすごみがある。

日本の少年少女は、これを読んで、魂の覚醒を今日も押し進めているのだろうか。そうして人と人とが真の信頼で結ばれた光のネットワークづくりを至上の理想として生きていくのだろうか……。

ちなみにオウム真理教の教義には、幻魔シリーズとの共通点が異常に多い。オウム幹部のなかにヒライストがいることは、ほぼ間違いないと私は思う。

宗教団体の「大教主さま」に

ここは八王子市のとある会館の一室。十数人の人間を前に、女性が講義を進めている。

「実は、今ここに集まっているみなさんは、前の人類が消滅したときに、神に逆らった人たちなのです。その罪をつぐないたいがために、この神団に集ってきているのです」

参加者のひとりである少女が感極まってひと筋の涙を流した。そばに座っている少女たちからも、すすり泣く声が伝わってくる。

この日私は、ス光光波世界神団の公開研導会を受講していた。これはその一場面だ。

ス光光波世界神団。信者四千五百人。最高神「ス神」を崇め、神霊界の法則である御経綸を世に伝えることを使命とするこの団体は、今伸び盛りの中堅宗教法人だ。

この団体の大教主は黒田みのる。一九二八年生まれ。中央大学在学中より心霊現象に興味を持ち、研究を開始したという。一九五八年、怪奇劇画家としてデビュー。以来一貫して心霊世界について書き続け、神霊研究家、七次元研究家としても名を知られるようになる。

ひばり書房などに代表される怪奇少女マンガ界のエース格だった黒田みのる。私も彼のマンガは、よくクラスの女の子から借りて読んだものだ。その彼が宗教団体を主宰しているのは知っていたが、これほどま

でに発展しているとは意外だった。

インタビューの条件

今回、彼に直接インタビューする機会にめぐまれた。ただし、ひとつ条件がつけられた。インタビュー前にこれから信者になる人たちのために行われる講習会、公開研導会を受けなければならないのだ。

研導会は朝十時から開始された。スケジュールの都合で前日の第一日目の研導会に出席できなかったため、私は早朝七時前から、神団の事務所で、ビデオによる講習を受けようと、始発の電車に乗って来たのだ。

参加者は十数人。中高生らしき女の子が四人、大学生ぐらいの女性が二人、中年女性がひとり、あとの数人は男性だ。

四人の女子中高生は、黒田の作品のファンらしく、休み時間のあいだ熱心に彼の最新作について話していた。黒田は、この神団とは別に「見えない世界」を楽しく学ぶことを目的とした「アイ200友の会」という一種のファンクラブも主宰している。彼女たちは、どうやらそちらのほうから来ているらしい。

講義の内容は、なかなかダイナミックでドラマ性に富んでいて、聞く者を思わず引き込む迫力がある。

いわく、世界はス神界を頂点とする七次元で構成されており、それを司るのが最高神ス神である。そして現在の我われは、七度目の人類であり、それ以前の人類は肉体

少女サタン 1 黒田みのる 古出幸子

死者の国のマリア 1 黒田みのる

竹の家 黒田みのる

海の魔少女 黒田みのる

黒田みのるの心霊少女マンガの数々。昔懐かしい貸本屋や駄菓子屋にも似た味わい(?)

を持たず、幽界にいたが、すべて神に背き、核戦争で滅びている。そして現在、幽界と現界の境界がなくなる現幽界統合が行われ、人にとり憑いている憑依霊が苦しくなり人に影響を与えはじめている。もはや憑依霊を祓うという時代ではない。霊たちに心を開かせ、共に生きていく時代なのだ……。

さらには、「サタンのつくりあげた人間が、一般の人間に混じって活動している」「UFOは以前絶滅した人類の生き残りの霊的乗り物」

といったショッキングな内容が続く。

会場の参加者は、皆、熱心に講義ノートをとり続ける。途中、黒田大教主のビデオによる浄光（炎の業という）が参加者に行われるなどしたが、夕刻六時まで講義は続いた。

長い講義に、集中力も薄れ、つい眠くなる（なにしろ私はかれこれ十二時間近くも講義をうけているのだ）。コクリコクリと舟をこぐ参加者もいる。しかし講師いわく。

「集中できず、眠くなったりするのは、憑依霊が講義を受けさせないよう邪魔をしてるかもしれないですよ」

幸せにこれほどまで影響を与えているとは！
この光を受けて幸せに……
パワー"炎の業"ができる！
3日間の研修
公開研導会
毎月、沢山の人が受講して輝く人生を送っています。
う間に合います。今すぐお電話
案内書をお送り致します。
9 〒193 東京都八王子市小比企町435 いそまビル3F
明研究会 ムー係

作品はあくまでも「作品」

こうした研導会をへて、私はやっと黒田みのるに会見する資格を得た。

八王子のレストランに現れた氏は、理路整然とした話しぶりの理知的な中年男性だ。いかめしい教祖様といった雰囲気ではなく、きさくで親しみやすい人柄のようだった。

心霊マンガを書くうちにとある宗教団体に誘われ、それを機会に、憑依現象の実態がわかるようになったという。

それから神との関わりが始まった。

「啓示もたくさん受けましたよ。けれどそれだけで成り立ったわけじゃないんです。それまでの研究で組み立てられた理論があってこそ、今があるんです」

普通の教祖様だったら、もっと劇的なことを格好よく言うんでしょうが……と、氏はくったくなく笑う。飾り気のない人だ。

作家が自動書記によって作品を書くという現象に関しては懐疑的だった。

「確かに、あれ、これどうして書いたかな？と思うことはありますね。しかし自分を抜きにして神や仏に描かされているというのは、思い上がりです。描かされながら、自分で描く。私はそういう姿勢で描いています」

とにかく作品はあくまでも、黒田みのるという血の通った人間として描く。それができなくなったらおしまいだという。

もともと教祖なんかにはなるつもりなんかなかった。皆に担ぎ出されて、なってしまった。だから無理に教祖様然とするつも

「衝撃の光の照射！」黒田みのるの〝炎の業〟を見られるイベントの広告。下の「美起フェスティバル」というのは、黒田みのる著の人気少女マンガ『死者の国のマリア』の主人公美起のファン・イベント。

りもない。氏はきっぱりと言い切った。

　宗教団体の成立には、三つの段階がある。まず第一に、カリスマ的指導者の誕生。そして第二に、カリスマを中心とした集団の成立。最後に明確な教義の確立による、教団の組織化だ。

　これは、平井和正の幻魔ネットワーク、山本鈴美香の神山会のコミューン、そして黒田みのるの宗教法人、のそれぞれにあてはまりそうだ。

　私は今回の取材で、宗教団体成立の三過程を、それぞれ垣間見たと思っている。

　人気作家＝教祖→熱狂的ファン＝信者。

　この図式は永遠不滅のものであり、両者は、「物語」という名の教義によってがっちりと結ばれている。

　これからは、すぐれた物語を構築できる者のみが、卓越した教祖となる時代なのである。

（文中敬称略）

ポストモダン宗教展望④

コンピュータは神棚である!

コンピュータはビッグ・ブラザーではなかった、ビッグ・マザーだったのだ!
メディア・ネットワークという母性的環境のなかで、
人はみな霊媒(メディア)となる!

[対談] 桝山寛(テクノ・ディレクター)&島田裕巳(宗教学者)

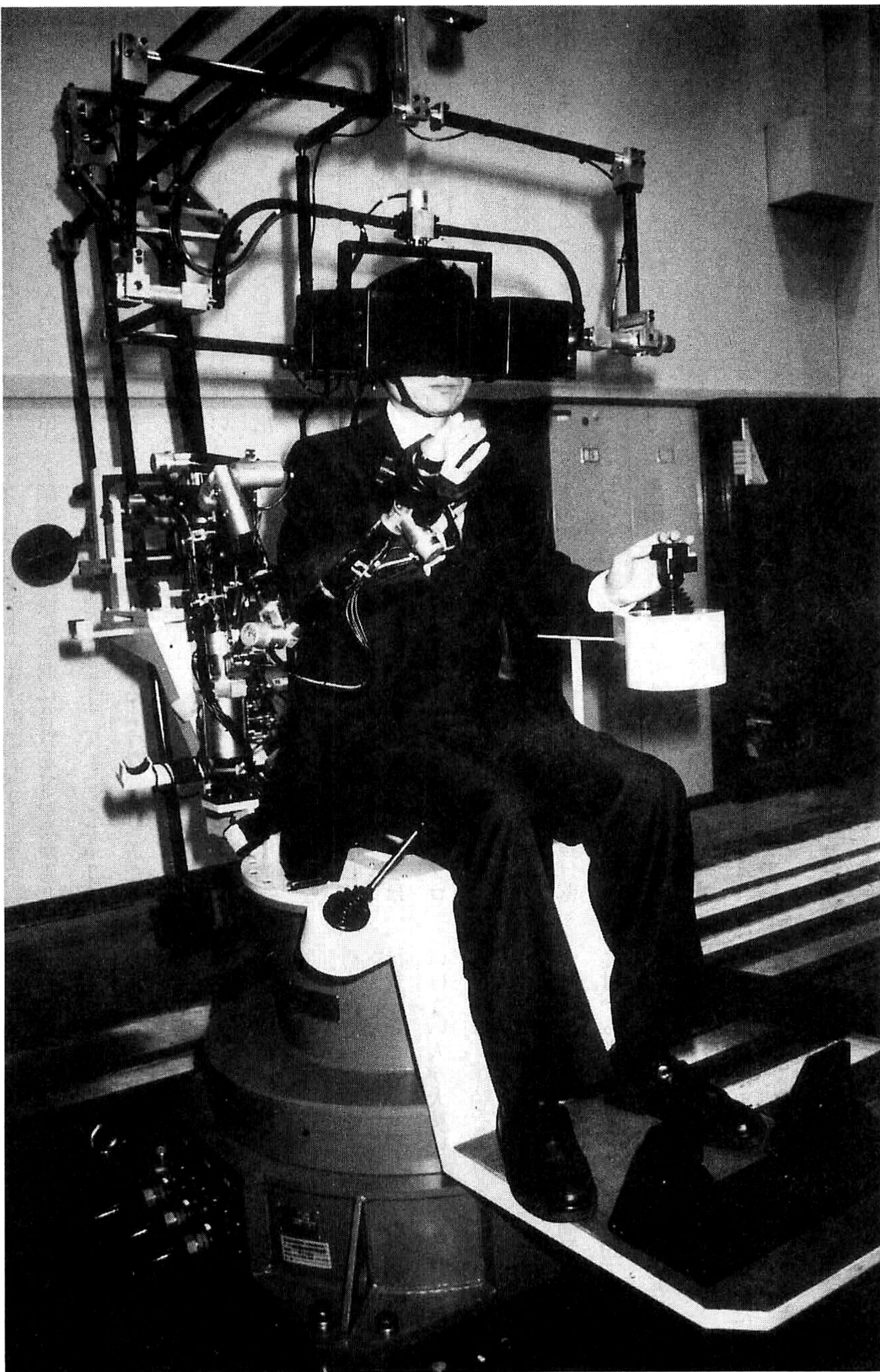
桝山　コンピュータとオカルティズムというテーマなんですが、僕がコンピュータに関わっていった動機というものからお話ししようと思います。今の僕は、テクノ・ディレクターなんて肩書きを自分で作って名乗ってますけど、実はまったく理数系ダメだったんです。大学も文学部だし。まぁ、いわゆるロック少年で、セックス、ドラッグ、ロックンロールといった三点セットの、いわゆるカウンター・カルチャーが終わっちゃって、つまんないなー、と思っていたら、コンピュータと出会ったわけです。

そこで、カウンター・カルチャーが出てきたカリフォルニアの話をしますと、あそこは地理的にも西の端で、文化の行き着くところだと思うんですが、昔、フリー・セックスだのドラッグだの言ってた人たちが今何をしているかと言うと、やはりコンピュータとニューエイジなんですよね。

コンピュータとスピリチュアリズムっていうのは、もともと別のものなのに、なんで結びついてしまったんだろうか。そのへんについて宗教学の立場からいろいろお話をお聞きしたいと思います。

島田　でも、ドラッグとかフリーセックスというのは社会に認知されてはいなかったものでしょ。だからカウンター・カルチャーのなかでは、個人を解放する、という反体制的メッセージがそこに含まれていたんだけど、コンピュータはべつに反社会的ではないし、かなり違うんじゃないですか?

桝山　反体制というか、コンピュータ・ハッカーなんかは、非社会的と言ったほうが

通産省工業技術院機械技術研究所で開発中の極限作業用ロボットのコントロール・システム。操作者の視覚、首の動き、腕の動きが、離れた場所のロボットのそれと連動する
（撮影・岡田明彦／写真提供・Ａｓａｈｉパソコン／２５２ページも）

いい人もいるんですが、それは後で話すとして……。僕自身にとってはメッセージとか思想性というよりも、たんに「気持ちいい」という快感原則のほうが強かったですね。パーソナルな部分では他の人もそうだったんじゃないかと思うんですけど。で、カウンター・カルチャーなき後、気持ちいいものを探していたらコンピュータと出会った、というわけです。

瞑想(トリップ)マシンとしてのコンピュータ

島田　コンピュータが気持ちいいというのは具体的にどんな感覚なんでしょう？

桝山　その頃はゲームセンターで「ゼビウス」とかをやっていたんですが、ものすごくリアルで、よくできた映画みたいな、でも見るだけじゃなくてこちら側から動かせるわけですから、とにかく今までのメディアでは味わったことのない快感でしたね。まさにドラッグなんですよ。

　今、資本主義が共産主義に勝ったとか言われてるんですけど、それも思想性、イデオロギーの問題ではなくて、やはり資本主義のほうが快感原則に合致していたからじゃないかと思うんです。で、コンピュータは資本主義を代表するような快楽装置だと思うんです。

島田　でも資本主義というのは、ヨーロッパ近代で発生した段階ではとても禁欲的なものだったんじゃないかな。人間の欲望を抑えてそれを生産に向け、資本を蓄積して社会を発展させていくわけで。もともとはマックス・ウェーバーが言うように、プロテスタンティズムが根底にあったから。

桝山　でも、それは資本主義のイデオロギーの側面ですよね。今はその部分は抜け落ちちゃってるでしょう。

島田　それはアメリカや日本的な資本主義なんですよね。本質にあるのが生産じゃなくて消費になってしまったわけでしょう。いわゆる消費社会の到来ですよね。

桝山　その消費志向を支えているのが快楽原則である、という意味なんですけど。それがテクノロジーと掛算になって拡大してきている。そのなかではコンピュータといっしょに最近浮上してきたオカルトとか宗教とか精神世界というのも、カウンター・カルチャーの頃とかそれ以前のものとは違ってきてるんじゃないでしょうか。

島田　違いというのはこういうことですか？　以前は宗教といえば必ず「貧・病・争」という三つの苦難がきっかけであると言われていたんです。「貧・病」というのは貧しさと病気なおしですね。病院にさえいけない人が大勢いましたから。「争」というのは、嫁姑の争いとかについて宗教がカウンセリングをする。とくに第二次世界大戦後に勢力を拡大した創価学会などは、農村から都会に出てきた比較的下層の都市民の共同体として機能し、彼らの生活を支えていたわけです。

　でも現在は平均的に豊かになったから「貧・病」ではないですね。オウム真理教なんかもいい家庭の子が多いと聞きますし。苦難の解決という現世利益が宗教ブームと

結びついてるわけではなさそうですね。

桝山　それはかなり新しい状況ですね。コンピュータも最初は実際の役に立つ、という意図で生み出されたんですけどね。

島田　戦争中に弾道計算するためでしょ。

桝山　でも今はそうじゃないですね。今でもビジネス・ユースの世界なんかでは、コンピュータはたんに効率化の道具でしかないという認識がありますけどね。

　でも、データ・ベース作るときに、インプットやシステム・デザインにえらく時間がかかっても、もう情報をシステマティックに構築することそれ自体が快感になってきちゃう。たとえば円をプログラムするのもたいへんなんだけど、苦労して円がディスプレイに出ると「やった!」と、ものすごく気持ちいい。

桝山　寛氏

島田　たしかにコンピュータって便利じゃないですね。ワープロとして使うなら「一太郎」よりは、専用機のほうがずっと速いのに、わざわざコンピュータ使うのは、楽しさがあるんでしょ。

桝山　そんななかで、ユーザーにとってとっつきやすいと言われているのが、アップルのマッキントッシュですが、パソコン界でもCPU（中央処理装置）やOS（オペレーティングシステム）の種類によって、派閥みたいなものがあるんです。

　とくにマッキントッシュの信奉者は宗教じみたところがあって、アップル社は初期の営業マンを「伝道者（エバンジェリスト）」と呼んでたんですよ。だから、その世界の体系に入っちゃうとすごく快感ってとこで宗教に近いのかな。

島田　具体的にその快感ってどんな質のものですか?

桝山　瞑想なんかと同じで、脳内麻薬物質がジワッと分泌される感じですね。

島田　コンピュータいじってるだけでそうなりますか?

桝山　出来のいいゲームをやってるとなりますね。問題は擬似体験度の高さ。流行の言葉で言うとバーチャル・リアリティ。人工現実なんです。だから今は、サイバー・スペースとか言って、目にはゴーグルつけて、手にデータ・グローブつけたりデータ・スーツ着たりして、コンピュータ内の世界に全身の感覚を直結しようという動きもあります。

島田　個人的な気持ちよさの追求と言えば、最近の宗教にはその傾向がありますね。商売がうまくいくなんて現世利益よりも、瞑想してアストラル界とかで神秘的体験を得たり、超能力獲得したり、というのを売りにしている。たとえば阿含宗では星まつりで護摩焚いて、その炎が龍に見えるとか言う。

桝山　メディアによる擬似体験の快楽とい

うのは昔はなかったんですか？

島田　宇治の平等院のすごい伽藍というのはようするに極楽浄土のシミュレーションですから、そこで儀礼やればもちろんトリップできるんですけど、それはごく限られた貴族だけの快楽でしたからね。庶民がハイになるには集団の力に頼るしかない。おかげまいりがそうですね。あとは滝に打たれたりとか、厳しい修行の末、やっとなれたんです。

桝山　今はみんな貴族みたいになってしまった。

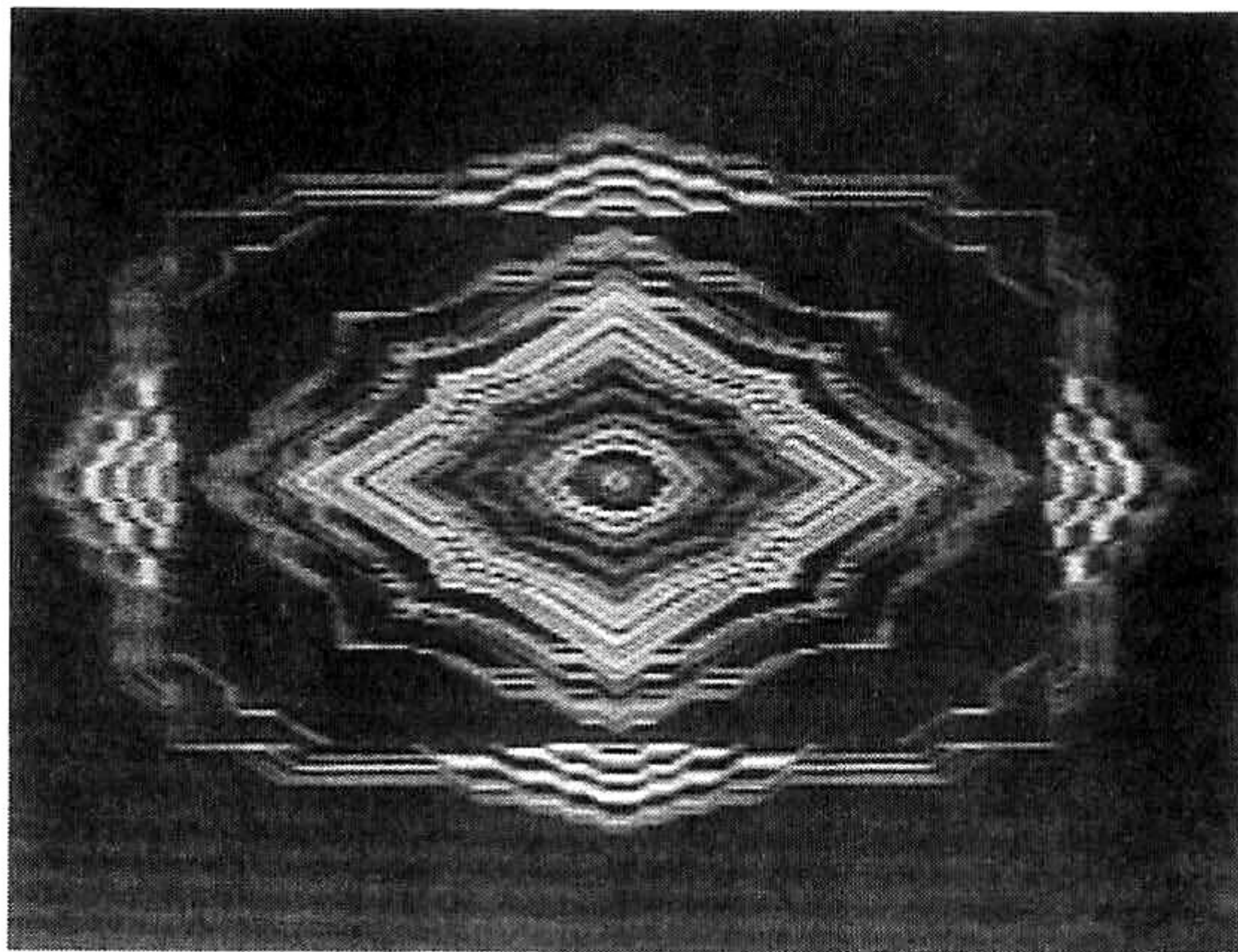
島田　苦労しないでもよくなると、そういう快楽への関心が出てくるんですよ。

宗教もコンピュータも マインド・ミラー

島田　でも、コンピュータやる人は最初から快楽が目的なんですか？

桝山　いや、むしろ内的な目的がない人がコンピュータの快楽にハマっていくんじゃないかな。岸田秀みたいな言い方なんだけど、かつては共同体があって人間を支えてきて、人生の目的とかを与えてくれた。それが戦後の資本主義社会では、まあ会社とかが共同体の代わりをして、今それをやってるのがコンピュータに代表されるメディア環境じゃないかって思うんです。

島田　でも本当はコンピュータ自体は何もしてくれないでしょ。なにしろメディアなんだから。ローザックも『コンピュータの神話学』のなかで批判してるけど、コンピュータは主語にはならない。コンピュータはすごいと思われてるけど、あのなかには実は何もない。こちらがプログラムしたようにしか決して動かない。

桝山　だからすごいんです。他者じゃないのに他者みたいに見える。それでいて、こちらの命令にまったく反抗せずに従ってくれるんですから。『イライザ』っていう精神分析シミュレーションがあるんですが、六〇年代に作られた初期のＡＩ（人工知能）で、まあ、対話の相手をしてくれるわけですね。パソコンネットがまだ始まったばかりの頃、その『イライザ』のパロディみたいな人工人格が、チャット（おしゃべり）に登場したことがあります。それはバカみたいにオウム返ししかできないんで、「人工無脳」（笑）と呼ばれたんですが、ようするに端末のこちら側にいる者にとっては、相手が人間だろうとコンピュータだ

コンピュータ・ゲーム「リラックス」（シナプス社）プレイヤーの精神状態を図形化したＣＧを見ながら、精神を安定させるバイオフィード・バック

ろうとちゃんと話をしてくれればかまわないんですね。ティモシー・リアリーの作った『マインド・ミラー』という自己精神分析みたいなコンピュータ・ソフトがあるんですが、まさにコンピュータはマインド・ミラーなんです。だからコンピュータとの対話というか相互作用によって、目的がどんどん自己増殖していくんです。

島田　コンピュータによって人が変わるんですか。

桝山　いちがいには言えませんが、コンピュータは神のような外的絶対性として存在しうるので、使うほうがコンピュータの思考体系に合わせて自分を変えていくんです。だからフローチャート的思考になりますね。論理的すぎるくらいに論理的になる。

島田　ファミコンとかでもそうなりますか？

桝山　いや、ただ受動的にゲームをしてるぶんにはそんな影響はないですね。自分でプログラミングするようになると変わるんです。コンピュータの言語体系に合わせざるを得なくなるから。だからテクニックとしては密教に非常に近い。

島田　宗教では、その宗教独特の言葉が、イニシエーションのとき重要な要素になるんです。その点では近いですね。

桝山　だからコンピュータおたく、と呼ばれるような人たちは日本のなかの異文化なんですよ。彼らには0か1、黒か白しかない。グレイ・ゾーンがない。ようするに、日本的な人間関係の曖昧さを許容できない。本音と建前とかね。コンピュータには「気配りボタン」なんてないですから。彼らにとっては気配りしながら人と話すよりもコンピュータと対話していたほうがいい。

島田　たとえば以前の新宗教やイエスの方舟なんかでも、そこに集まった女性を調べてみると、家庭に軋轢がある人が多かったんです。昔から人が宗教に走るのは日本の家制度とか人間関係から逃げる場合が多かった。日本は「家」を重視しましたから、たとえばキリシタンなどでも最後は先祖崇拝に行きついたと言います。ところが最近は丹波哲郎も先祖を祀るのは無意味だ、なんて言うんですよ。宗教の魅力が家庭に代わる共同体集団の魅力だったのも終わってきているようだし、オウム真理教なんかにしても、もはや個人の問題でしかなくなってきてるんですかね。

誰もが霊媒(メディア)になれる時代

桝山　実際に人と人が会って集団作らなくても安定してしまうようになった、ということかな。それはやっぱりメディアのパーソナル化という問題とからんでいるかもしれない。僕なんかも、実はこうして人と実際に顔を突き合わせるよりは、電話で話すほうが好きなんです（笑）。電話のほうが本音が言いやすい感じもあるし、なんといっても切りたくなったらいつでも切ることができるでしょ。

島田　僕は電話が普及する前に生まれたから、電話はこわい、という感じがまだありますね。

桝山　電話がこわい？

島田　電話が鳴るとびっくりする。こっちの世界に勝手にいきなり外の世界が入り込んでくるわけですから。

桝山　僕はメディアを通して世界とつながってる感覚を常に持ってないと裸になったような感じがするんです。だから電話がないと不安。

島田　それは原体験の差ですね。今は言葉覚えるより先にテレビ見てるでしょ。人はもはや言語のなかに生まれるのではなくてメディアのなかに生まれてくる。

桝山　マクルーハンになっちゃうんですけど、以前は共同体や自然環境との関わりのなかで肉体だけで体験していたのが、メディアが環境になることで、体験しない情報を蓄積できるようになって、近代的自我も生まれる。そのときに「肉体としての自分」の他に「メディアのなかの自分」というものが生まれた。それで僕は今の人間は肉体と情報体で成り立ってるんじゃないかと思うんです。だからメディアとの接続が切れると情報体が死んでるような感覚がする。だから最近、電話持ち歩いてる人とか、ノート・パソコンとモデム持って、いつでもネットワークにアクセスできるようにしてる人がいるけど、あの気持ちはわかるな。

島田　カトリックの人も、子どものときに椅子なんかに座るとき、必ず少しスペースを空けて座っていたんだとか言ってましたね。いつも守護霊みたいな目に見えない天使と共にあるんだと考えるので、天使が座れるようにするんですね。

桝山　情報体というのも幽体みたいなもので、たとえ肉体は部屋から一歩も出なくても、メディアがあれば情報体は世界じゅうどこにでも拡がって存在できるわけです。だから僕は肉体よりも情報体だけで生きるほうが気持ちよかったりして(笑)。

島田　昔、山のなかの村で調査したことがあるんですけど、テレビがいつもつけっぱなしになってるんですよ、見てなくても。村という閉じた世界ではテレビが外の世界、もうひとつの世界への窓になっていたわけですね。

桝山　田舎に行くと必ず有線がありますね、いきなり村のお知らせが流れたりして、強制的にメッセージを送りつける。昔はテレビもオーディオもそういう形の一方的メディアだった。言わば神棚なんでしょう。

島田　でも今の子どもはビデオに慣れちゃってるから、テレビ見てても、なんで早送りできないのかって言う。

桝山　それがインタラクティブということなんですが、最もインタラクティブなメディアがコンピュータなんです。メディアの向こうの世界を、こちらから個人のレベルでクリエイトできる。上のほうから神棚に一方的に降りてくる神のメッセージを受けとめるだけじゃないわけです。たとえば、現実に日本のパソコン・ネットワークには「オンライン寺院」というネットワーク宗教も登場してますし。

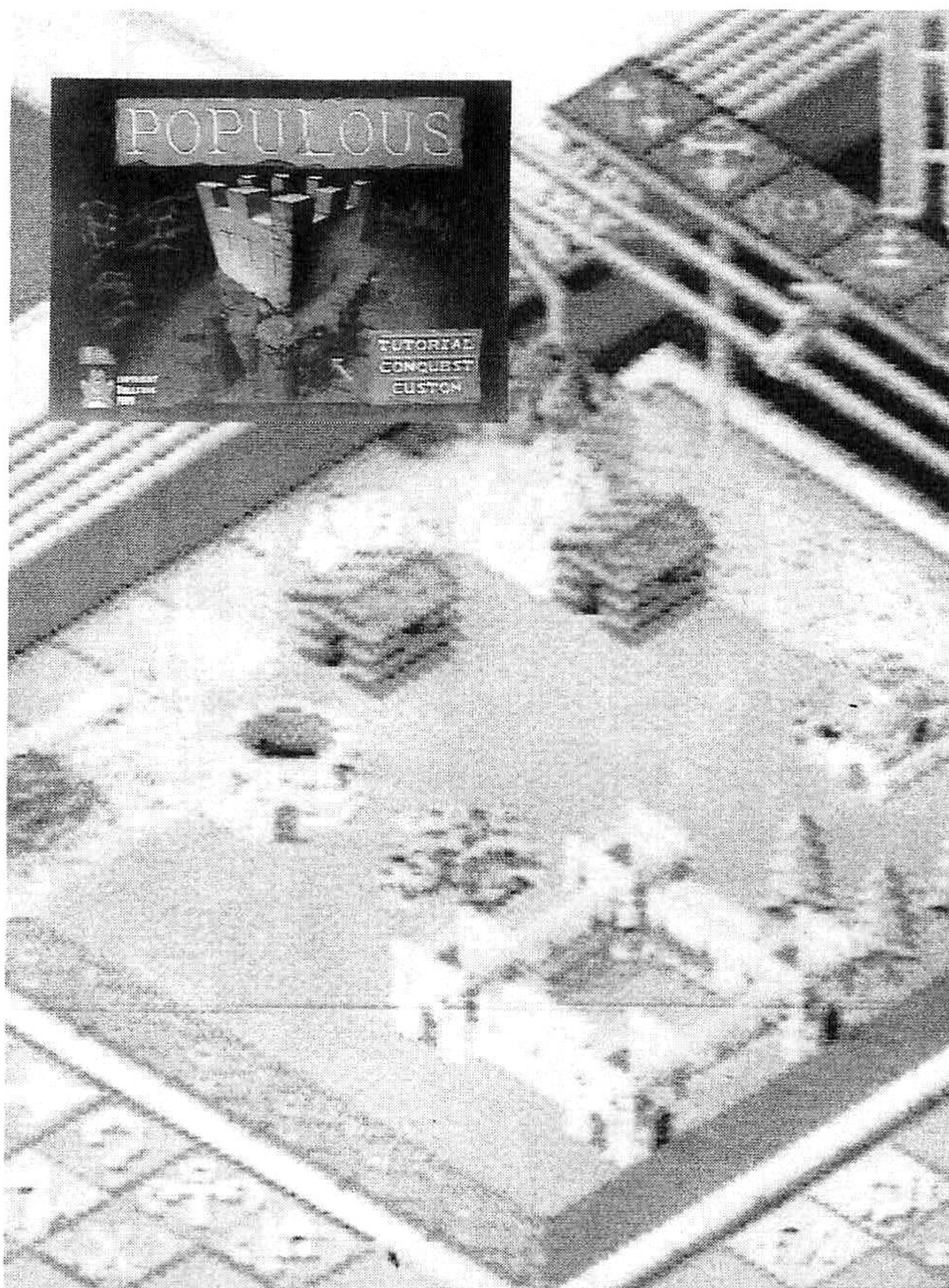
島田　もともとメディアという英語には霊と交信する「霊媒」という意味があるんですけど、電子メディアによる別の世界は宗

教に似てはいますけど、果たしてそれがかつて宗教が媒介したものと同じなのかはわからない。両方体験した人がいないから。

桝山　メディアのパーソナル化で、誰もが霊媒になってしまうというかメディアになってしまえる。だからパソコンの「パソ」の部分が重要なんです。昔はコンピュータ社会というと、『1984』みたいに絶対的権力が国民を管理するような世界だとイメージされてましたよね。でも実際は、パーソナル・メディアのネットワークによって中央集権的構造は崩壊し、ハッカーのように国家の中枢に侵入することさえできるようになった。彼らはもうゲリラですね。まぁ、そのように、端末さえあればなんでもできる感じ、コンピュータがもたらす「全能感」、というのは超能力に近いものだと思いますよ。

造物主という快楽

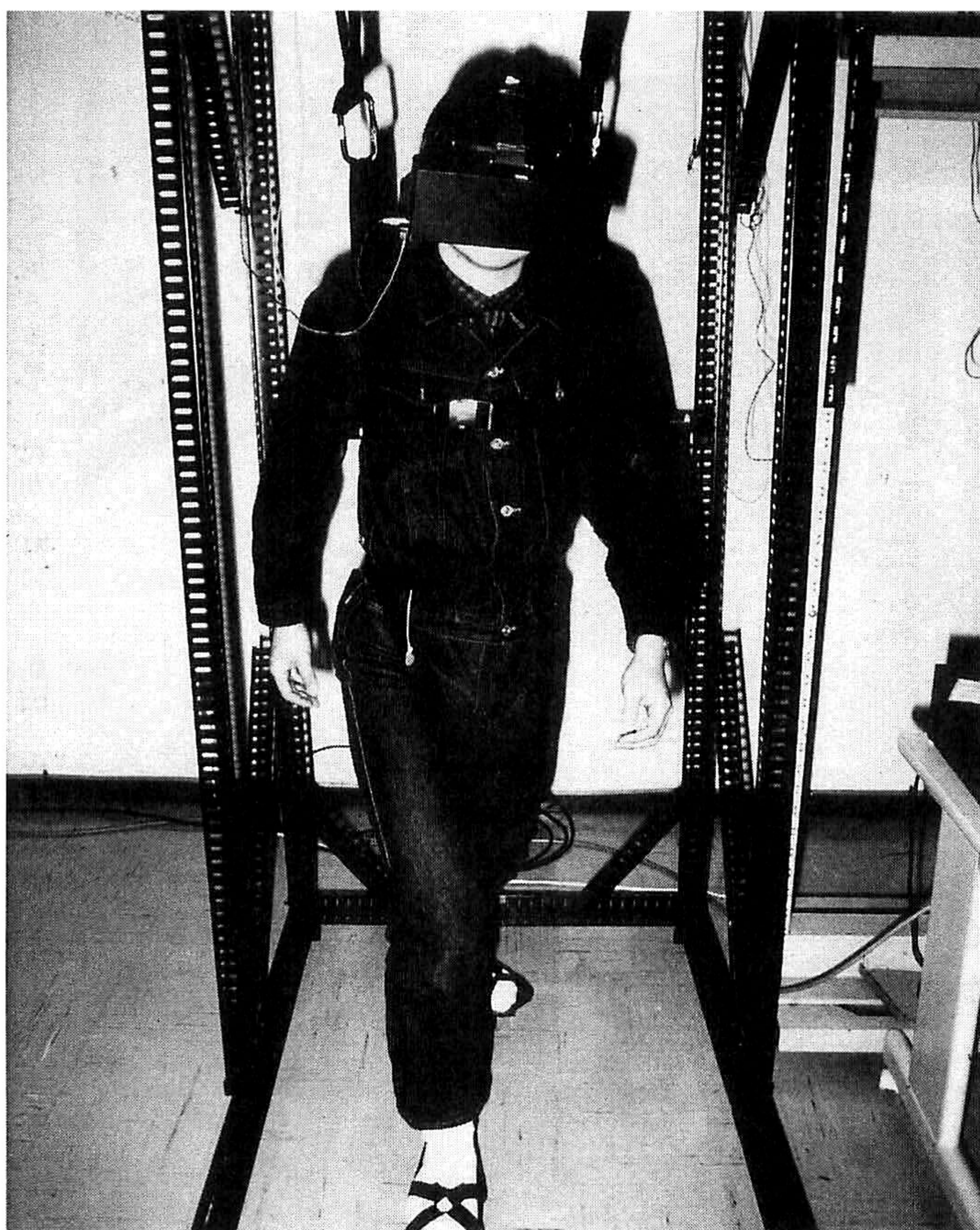
桝山　「ポピュラス」というコンピュータ・ゲームがあるんですが、これはマニュアルにちゃんと「あなたは神です」と書いてあるんです。プレイヤーがまさしく全知全能の神になって、人類を育てていく。農耕を教えて文明を発展させると、村から町になっていく。神（プレイヤー）は気に食わなくなったら大地震とかを起こしてそれまで築き上げられた文明を全部チャラにすることもできるわけです。

島田　エホバの証人とかが言ってるハルマ

「ポピュラス」（エレクトロニック・アーツ社）プレイヤーは神になって天地創造し、飽きたら天変地異を起こしてもいい

ゲドンをもっと建設的にした感じなのかな。『信長の野望』とかのシミュレーション・ゲームとは違うんですか。

桝山　こっちはもっと箱庭治療みたいな感覚ですね。こういうゲーム見るとコンピュータっていうのはやはり別の世界を神のように見下ろして、自由自在にするのを可能にしたメディアなんだ、というのがよくわかる気がします。昔の庶民にはこんな世界全体を見渡す感覚なんてなかったでしょう。だから宗教が地獄とか天国とか言って世界観を与えていた。

島田　そうでしょうね。でも今ではもう「神の視点」なんてあまりにも日常化しちゃってますね。テレビもあるし、高いビルがいっぱい建ったから、子どもでも世界を上から見渡せる。

桝山　『トロン』という映画には、コンピュータのプログラムのなかに入ってしまったプログラマーが、自分の作った〝トロン〟というプログラムに会うと、まさに神様扱いされるという場面がありましたっけね。

筑波大学岩田洋夫講師が研究中の、サイバースペース（コンピュータのディスプレイに現れた空間）の中を歩きまわるシステム。ディスプレイ中の物をつかむと、手の平に「手応え」が返ってくるサイバー・グラブもある

島田　「神の視点」と言えば、ビックリマン・シールはすごいですね。あれは、世界観を全部提示しないで断片だけを与えて、子どもたちにそれを組み立てさせるわけでしょ。かなり知的に高度な遊びですよ。おそらく日本でしか成り立たないんじゃないかと思うけど。

桝山　ただ受動的にアニメを見たりシールを集めたりするのとは次元が違う。自分でシール作っちゃう子もいるくらいですから。

島田　独自のコスモロジーを作ってそこに参与するわけですからね。オウムもね、麻原彰晃以外の人が世界観というか教義を作っているように感じますね。今、組み立てている最中だから楽しいでしょうね。世界を作ったりコントロールしたりするわけで、比喩的に言えば神みたいなものですから。そういう快感はなんとなくわかっちゃうんですよ。学者っていうのも世界のつじつまを合わせる作業でしょ。教義を作るのと同じなんです。快感原則なんですよ。

桝山　そういう快感原則って人類普遍のものですか？

島田　未開と呼ばれたオーストラリアの原住民の人たちなんか、一年の半分は何もしないでいいんですから、雨季の間はお祭りばっかりしてたわけです。そもそも、こんなに人間が働くようになったのって近代以降なんですよ。

桝山　人類が快感を抑えて働いたのは、近代の百年あまりの期間だけなんですか。

島田　いや、生産活動だって楽しかったはずですよ。高度成長で、どんどん産業が発達していくのって、それはやっぱり資本主義っていう世界を作ることだから、快感なんです。山岸会なんて今でも一日十何時間も農場で働いてるんですけど、楽しくなけりゃやりませんよ。さっき、昔の庶民がトリップしたりハイになるには集団の力しかないと言いましたが、戦争とか革命だって、おかげまいりみたいなものですからね。楽しんでるんですよ。命がけだけど。

桝山　近代では働いて、物作って、それが善であって、快感でもあった。宗教もその価値観にくっついていたんだけど、それがもう日本においては必要じゃなくなってきた。ようするにポスト・モダンになってきたから、労働とか生産に代わる新しい快感を探しはじめた。コンピュータだったり宗教だったりオカルトだったり。

島田　「働く」ということが曖昧なものになってますよね。僕と桝山さんがこうして話しているのだっていちおう仕事なんだけど、果たしてこれが「働く」と呼べるのか。

学者やってると「遊ぶ」ことへの興味がなくなるんです。学者の仕事って、いろんな情報集めて、それを整理してまた世間に提出するという作業でしょ。自分がメディアになるってことですよね。コンピュータとかビックリマンで遊ぶのと同じ。だから「遊ぶ」と「働く」が区別できない。

子ども、そして、メディア的人間の自我

桝山　「遊び」と「労働」の区別がない非生産的知的快感が一般化してきたのは、近

代の主体である「おとな」にならない人が増えたということかな。豊かさとメディア環境という、なんか母性的なものが世の中を覆っちゃってるから、端的に言えば子どものままでもよくなった。そうするとイニシエーションはどうなっちゃったんでしょう。

島田　イニシエーションというのは、母親のもとから子どもを引きはがすことですから、少なくとも、今までのような形のイニシエーションは崩壊してますね。我われはそれに代わるものをまだ見出してはいない。でも、そこでイニシエーションはやっぱり必要だ、と言ってしまっていいのか。だって実はイニシエーションというのは、その人が属する共同体や国家を守る兵士をつくる作業なんですから。それが武力戦争のためにしろ経済戦争のためにしろ、とにかく戦力をつくることなんですよ。

桝山　今はそういう戦争はなくなってきてる。

島田　それなのに、とにかくおとなにならなきゃいけない、と言い続けていいのか。だっておとなって人為的なつくりものなんだもの。だから、アリエスが「子どもの発見」なんて言いましたけど、僕はあれは嘘っぱちで、本当は「おとなの発見」だと思う。今、おとなと子どもの二元論が壊れてきて、みんな子どもで困ると言うけど、子どものほうが人間の本来の姿なんじゃないのか、そのままでいられることのほうがむしろ理想に近いんじゃないか。

桝山　コンピュータ少年って、コンピュータという、なんでも言うこと聞いてくれる母親に保護されてるから、自分の絶対的な自我が傷つけられることを極度に恐れる傾向がありますね。価値観の違う他者と接するのを嫌がる。メディア的人間は自我がないって言われるけど、実は非常に自我は強いんです。近代的自我とは違うけど。

島田　ふと思ったんです。日本人はずっと自我が弱いと言われ続けてきたけど、もうみんな強い自我を持ってるんじゃないかと。メディアを通して世界とつながりたいと思うのも、実ははっきりとした「私」というのを認識してるからじゃないのか。

島田裕巳氏

桝山　自我は子どもも持ってるんだけど、おとなになるというのはその「私」というか、自我を抑圧することですからね。

島田　明治以来、百年以上も自我を持てって教育され続けてるんだもん、いいかげん自我も育つよね。

桝山　で、コンピュータ少年は自我が傷つけられるのを恐れるから恋愛しようとしないんです。失恋って一種のイニシエーションですからね。純愛への憧れはあるんですけど、コンピュータやアニメがそれをあるていど満たしてくれる。それから、アイド

ル・マニアも多いですね。となりにいる実物の女の子よりもメディア上の美少女のほうがリアルに感じる。

島田　宗教のなかでも恋愛に対するドライブは低いですね。憧れは教祖さまに向かうし。教祖さまっていうのも実物には直接会えないほうが神格化される。誰かを媒介して、メディアにして信者に接する。だからまさに偶像（アイドル）なんです。

桝山　ある知り合いのマニアのマシンは、立ち上げると『二〇〇一年宇宙の旅』のコンピュータＨＡＬのサンプリングで、

"I am completely operational. All my circuits are functioning perfectly." と話し、電源を切るときには『スターウォーズ』のダースベイダーのサンプリングで、

"I must obey my master." （陛下のお言いつけどおりにいたします）と言うんです。彼はそれを聞くたびにコンピュータがいとおしくなるって言うんですけど、よく考えると、それをしゃべらせてるのは彼自身なんですよね。それと同じで、恋愛というのもそもそも幻想なんです。互いに愛し合ってるというのも実は、相手が好き、という幻想がふたつあるにすぎない。

島田　ドラッグやっても幻想を見てるだけなのに現実よりリアルだとか言いますね。「リアル」ということが言われ出したのは七〇年代くらいかな。日常ではなんらドラマチックなことが起こらなくなったけど、フィクションにはドラマがある。そのほうがリアルに感じてしまう。

桝山　現実はドラマではない。筋も通らないのが現実。でも筋が通るのが普通と考えてしまう。コンピュータ・マニアは筋の通ったプログラムを「美しい」と言うんですよ。論理的でムダがない、イコール美しい、と。建築物に近い感覚みたいですね。

島田　学者だってそうですよ。きれいに筋の通った論文は「美しい」。だから論理体系の快感ってものすごいんですよ。これ以上の快楽はこの世にない。

桝山　そこまで言う(笑)。じゃあコンピュータ・マニアって、図らずも人類の根源的な快感原則の姿を見せているのかもしれないですね。

島田　今さら、メディアや宗教にかまってないでおとなになれ、なんて近代的な凡庸な結論出したってしょうがないでしょ。どんどんやってもらって新しい価値体系作るしかない。だって何度も言うけどコンピュータ自体は本当は何も考えられないんだから。けっきょく自分で考えるしかないんです。キリスト教だって、聖書なんて矛盾だらけのものでしょ。それを神学者たちが千年もかかってつじつま合わせて論理体系を作りあげたんだから。

桝山　神学者の仕事ってデバグだったんだ(笑)。

島田　でもそれは決して無駄じゃない。近代科学だって、キリスト教と物理現象のつじつま合わせてるうちに生まれたんですから。

桝山　どれだけりっぱな建築物作れるか、ということですね。

ポストモダン宗教展望⑤

人みなすべてネズミ講（ネットワーク）にハマる！

この本に集められた宗教やオカルトの話をひとごとだと思ってはいけない！
この地平線の彼方までのっぺりとした民主主義と、躁病的な高度資本主義のなかで
フワフワ暮らすコカコーラのCM野郎ども、てめえらみんな信者なんだよ！

大月隆寛（民俗学者）

ああ、布施博だ、と思った。

厚手のつややかな紙にフルカラーで刷られた誌面に、ずらり並んだ明るくさわやかな顔、顔、顔……。撮り方にもよるのだろう。しかしそれでも、ここまで同じ明るさを等量に放射する写真を並べるためには、撮る側の意図や技術とはまた別に、その撮られる側の表情と、その表情を裏打ちする身体のありかたに、かなりなめされた均質性がないことには不可能だと思う。

そこに並ぶ男たちの顔のどれもが、俳優の布施博と不意に重なりあった。なぜかはわからない。『抱きしめたい！』などの鎌田敏夫系男女複数バトルロイヤルTVドラマで人気を獲得し、具体的な結婚相手として「おいしい男」の典型とされて世の女性たちのどこかなれなれしい視線を浴びる彼のイメージは、決してトンガっていず、といってネクラではなく、適度にひょうきんで、そこそこにウブで、根本的には健全な「良識」の持ち主で、要するにオンナたちにとってたやすく取り扱い可能でわがままを許容してもらえそうな、ぬいぐるみか家電製品のような男、といったものだ。

生きがいを売るアムウェイ・ビジネス

別の言い方をすれば、テニスやスキーといった十把一からげに大量消費されるスポーツのインストラクターたち、あの表情に近い。みんな、どの顔をとっても、突き抜けて「いい人」という印象しか引き出せないのだ。かつて『めぞん一刻』で仇役を振られた三鷹コーチ、あのカリカチュアライズされたキャラクターが決して冗談にならないほどに、白い歯、よく整えられた髪、そしておだやかな眼を持った顔が実際の人間のツラとして整然と並んでいる。もとより、誰もが納得する、見るからに不快な表象として流通するようになってしまったあの「おたく」ヅラではない。むしろそこから対極に位置する、まず誰に聞いても「好青年」という答えが返ってきそうな、けれ

NEW RUBY DIRECT DISTRIBUT

新ルビー・ダイレクト・ディストリビューター

NEW DIRECT DISTRIBUTORS

新ダイレクト・ディストリビューター

アムウェイの会報「AMAGRAM」より。一定の目標を達成した直販員は、こうして毎月表彰される

どもやはり確実に不快な顔。たとえば、受験産業でひとくくりに私大文系と呼ばれるそのもっとも中ぶくれの部分、偏差値にしておよそ50から60そこそこ、どう頑張っても70まで伸ばすことはできないが50以下に落ちることはないあたりが、人並みの「キャンパスライフ」の後に人並みに世間につつき出されていった果て、2DKマンションに詰め込まれた無印良品と薄っぺらなエコロジーとそこそこのエリート意識と横着な市民主義とにまぶされた難儀を無自覚に刻み込んだツラ――いっそここまで差別的に言えばわかってもらえるだろうか。

仕出し役者のプロダクションやモデルクラブのカタログではない。洗剤や家庭用品を無店舗販売する外資系企業、アムウェイの機関誌だ。

アメリカン・ドリームの上陸

一九五〇年代末のアメリカ、ミシガンの片田舎グランドラピッズに住むオランダ系移民の息子ふたりによって創業されることになったこの会社は、その後一九六〇年代から一九七〇年代にかけて飛躍的な成長をとげた典型的な「アメリカン・ドリーム」の依代(よりしろ)となっている。ニュートリライトという、今で言うところの健康食品の直接販売から身を起こした彼らは、その会社を逆に併合してしまうまでに巨大になってゆく。「ほとんどのダイレクト・セールス企業は、長年にわたって〝ブルーカラーの会社〟というイメージを強く持たれている。一般大衆はダイレクト・セールス会社というと、家計を助けるために洗剤や聖書あるいは真空掃除機などを訪問販売で売り歩く失業者、学生アルバイト、主婦が集まる会社を連想する」といういずこも同じ状況で、アムウェイはそのような「持たざる者たち」の欲望を組織してゆき、のちには社会的に比較的高い地位にある者たちをもその版図に収めるようになっていった。(チャールズ・P・コン『アムウェイビジネス』)

このアムウェイの日本法人である日本アムウェイが設立されたのは一九七七年六月。実際に家庭用品や一般消耗品の直接販売を開始したのは、二年後の一九七九年五月だった。そこからわずか五年の間に、売り上げにしておよそ六十倍という成長率を記録している(グループシータスリー『驚異のアムウェイビジネス』)。ネズミ講、およびネズミ講に類似したいわゆるマルチ商法が社会問題としてクローズアップされたのが一九七〇年代前半と一九八〇年代半ばだったことを考えれば、このアムウェイの上陸時期はビジネスチャンスとして決して有利な時期だったとは言えない。だが、その後の成長は、そのパンフレットに並ぶ「成功者たち」の脳天気な顔が物語っている。

石鹸や洗剤など、台所まわりの生活用品を家庭に直接届けてくれるというこのビジネス、ちょっとそこまで、という具合に買物に出かけることがしにくい広がりをもった多くのアメリカのコミュニティの日常生活を考えれば、確かに「便利」だったに違いない。だが、POSシステムが導入され

たCVSが増殖し、石鹼、洗剤はおろか犬猫のエサ、果ては「ベルリンの壁」に至るまで、あらゆるものが二十四時間体制で手軽に買うことができるようになったこの国の八〇年代にとって、このアムウェイ、アメリカにおけるほど具体的な「便利」を与えてくれていたとは思いにくい。

「ウソ臭いほど明るくて なんだか宗教みたい」

「とにかく『チャンス』とそれを『選ぶ』ってことをしつこく言うんですよね」

かつて、友だちにすすめられてほんの少しだけアムウェイに関わっていたという女性はこう言った。

「パーティっていうのかな、普通のマンションで開かれた集まりに呼ばれたんですよ。上のほうの会員の人の家なんですけど、そこで洗剤なんかを実際に宣伝するわけです。いろいろ器具とかあってね、まぁマニュアルがきっちりあるんですけど」

そこで宣伝されていた製品は決して変なものではなかった。市販の普通の洗剤を使っていて手が荒れて困っていた彼女は、「騙されたと思って」このアムウェイの洗剤を使ってみて結構満足したという。ただ、そこに集まっていた人びとのある雰囲気に、彼女は最初から「ついていけない」ものを感じたともいう。

「なんていうのかなぁ、やったら明るいんですよね、で、『あなたがここにこうしているってことは、ここに来るための選択をした人だからだ』みたいなことを言って、それでまたみんなウンウンって元気にうなずいてんですよねぇ……」

この稿はアムウェイそのものを問題にすることが目的ではない。ことはもっとデカく、そして厄介だ。そのような身近なんでもない集まりが仕掛けられ、その集まりで醸し出されてゆく、ある共同性のありかたがあること、そして、その共同性のありかたも、ナマ身の人間があらゆる歴史と経済から自由ではあり得ないという程度には具体的な時代のありかたに規定されていること、さらに、そのような共同性のありかたが、具体的なものを具体的な他人に対して具体的に売るという行為と、主体との間に何か言いようのない遮蔽材を作っているらしいこと、ひとまずその三点を確認しておこう。

「そう、『宗教』みたいって言ったらいいのかな、そういうウソ臭い明るさ、それなんですよ」

「超越的なことば」

申しわけないが、ぼくはおよそ「宗教」というものを信じていない。

もう少し微分して言う。ぼくは「宗教」と名づけられる営みにおいて典型的に現れるある種の超越的なことばの効用というものを、この国に生きるぼくの現在にとって切実なものとはおよそ認めない。

そのような超越的なことばでしか表現できないようなある現実の水準があるらしい、ということは、実感としてでなく論理とし

て認める。これは、ことばというこのかなり暴力的な飛び道具さえも、生きものとしての人間の全体性のかなり偏った次元しか取りおさえることができないらしい、という経験的に形成されてきたものの見方に基づいている。そう思わざるを得ないような、ことばと現実の乖離がことさら当たり前となってゆくもみくちゃの時代に、ぼくたちは社会化していった。ことばの不自由、そしてことばによって構築される論理の不幸。その程度に人間えーかげんなもんだ、ということを、あらゆる機会にあらゆる手段で思い知らされてきた、そんな気がする。

だが、だからと言って、そのような現実をいきなり超越的なことばに結びつけてゆくこと、これはまた別だ。ことばそのものの限界に足をつけるのとまったく同じ踏んばりで、今、それだけは極力避けることを自分に言いきかせている。それは、カッコつけて言えば、ことばをなりわいのすべとしてこの国の現在を生きる立場にある者としての、なけなしの倫理だ。ことばの不自由とことばによって構築される論理の不幸から逃げずに、それを生の速度でまっすぐ受け止める構えを自分のものにすること。それが、いくつも「学校」をくぐり、たとえ何かの間違いにせよ「学者」を看板にし、ものを書いて世渡りしている自分の、このとりとめない同時代に対する責任だと思うのだ。

アムウェイの「パーティ」の「ついていけない」雰囲気を説明しようとするとき、先の彼女が「宗教」ということばを持ち出してきたことは偶然ではないだろう。反省的な契機をあらかじめ閉ざしたところで醸し出される共同性。もちろんそれは、人が見知らぬ集団に関与しようとするときに必ず現れる、遭遇のある段階でもある。だが、その集団に帰属してゆくためのイニシエーションの過程に、「常識（コモンセンス）」を強制的に変形させてゆくような契機が含まれざるを得ない場合、その種の共同性のありかたを表現するものとして、おそらく「宗教」というようなことばが持ち出されてくる。

◉宗教も「現在」から自由じゃない◉

徹底した唯物論者として知られる文化人類学者のマーヴィン・ハリス (Marvin Harris) は、チルドレン・オヴ・ゴッドやハーレ・クリシュナからムーニズムに至るまでのいわゆる「カルト」について、「これらのグループすべてが、一九六〇年代から一九七〇年代にかけての四、五年の間に目立つようになり、急速にその勢力を拡大し始めた」と概括したうえで、「私に言わせれば誤った考えなのだが、これら新たな宗教意識がまず何よりも西欧の物質主義に対するリアクションなのだ、という考えは広く流布されている」と言っている。彼は、これら宗教に関する「第三の大いなる覚醒

期」とも言える流行現象は、しかし一般に信じられているのとは逆に、「究極の意味や価値を求めてのものと言うより、アメリカの未解決の社会経済問題に対する解決を求めてのものと解釈した方がより妥当なものに思える」と主張し、かなりの皮肉を込めてこう語る。

「アジアのスピリチュアリズムの瞑想的性格を浪漫主義的に謳歌することにより、西欧の観察者たちは、一握りの聖者たちや禁欲的な修行者たちとは違う普通の人々がアジアの宗教に何を期待しているかを、しばしば見落すことになった。大多数のヒンズー教信者たちが、メディテーションを通じて超越（トランセンデンタル）的な至福（ブリス）を達成することなどよりも、雨が降ること、子供の病気が治ること、飼っている牛が仔を宿すことのためにはるかによく祈るものだということを私は知った」

（"Why The Cults are Coming"）

カルトが反近代、反物質主義の無媒介な根拠地などではなく、どこまでもアメリカの「現在」に根ざしたものだ、というここでのハリスの立場は明快、かつ健康的だ。どうかするとカルト商品そのものとして消費され、その現象にカウンターをあてることばもロクに内側から組織できなかったこの国の文化人類学や民俗学や、あるいは宗教学やある種の社会学なども含めてもいいかも知れない、いずれ高度大衆消費社会に足もとをかっさわれた「歴史と経済なき人間科学」の惨状を爆心地近くで眼の当たりにしてきた身にしてみれば、この素朴な「常識（コモンセンス）」には眼がさめるような思いがする。ちなみに、この行論において槍玉にあげられているのが、六〇年代サブカルチュアを脳天気にヨイショする典型的な西海岸派社会学者ロバート・ベラー（Robert Bellah）の見解であることは象徴的だ。敢えてこの国の状況に引き比べると、まあ、見田宗介といった役回りだろうか。

「一発デカく儲ける」という超越願望

さらにハリスは、「重要なのは、神を探し求めることと富を得ることとは、不可避的に対立するものではないということだ」と続ける。「通常の手段では解決できないような不可抗力的問題について『最終的な解決』を与える」という意味で、それは確かに共通している。

金もうけか、それとも宗教か、という問いは、物質か精神か、という問いのように不毛だ。少なくとも、存分に大衆化され、しかも過度に消費志向である資本主義の網がかけられた社会において「宗教」ということばにくくられて表現されるような現れを論じようとする時には、だ。いずれも、世界の広がりをある限度を超えて手もとに引き寄せようとする仕掛けが介在することで現実のものになる結果という意味で、ある次元でそれはきわめて近しい営みになってくる。

人が超越的なことばの快楽にハマった瞬間から、それは「宗教」の匂いをまつわらせ始める。なんらもとでなしに世界の広がりを手もとに引きつけようとすることばと、そのことばを上演してゆく技術は、それ自体「宗教」をはらむ。

限度を超えたボロ儲け。ある臨界点を突破した過剰な富。「一発当てる」ということばにこめられた意識の電圧の高さは、そんなあらゆる「超えてゆくもの」への想いに支えられている。そして、他ならぬ近代とは、それまでとは桁違いのそんなとっぱずれた超え方を可能にする現実を、それまで以上に広汎な人びとに、まさに平等に準備してゆく時代だった。

成金は健全だった

べつにここ数年のことばかりではない。

明治三十九年

成金時代

戦勝國は經濟的にも惠まれた。諸株は暴騰、事業は勃興、所謂成金なるもの續出。盛んに札びらを切つて贅澤三昧、極端なる遊蕩振りを發揮して淳朴な日本風

大正初年、第一次大戦の戦争景気に湧き返った頃、そんな「超えてゆくもの」への欲望がどのような方向に発動されたかについて、たとえばこんな記述がある。

「大景気に浮かされた当時の日本は、云はば大きな精神病者収容所のやうなものであった。傍若無人をきはめた大小成金の跋扈と、度しがたいその濫費生活は、手厳しく非難されもしたが、寧ろ一世の羨望の的であった。悪く云ひ云ひ、真似がしたくて、小濫費を競争して、現世果報を一身に集めたやうな得意さであったのである」

「お召し一反百二十円百五十円を呼んだので、奥様方は着ばえがしたさうである。一疋五六十円の織賃は、パリ製のちゃちなリングを以ては機織女の指を飾らしめた。製糸工場も、紡績工場も、半化けのお嬢さんで充満した。職工達は到る所に百円札の威力を揮った。田舎の若者は若者で、活動小屋の不浄場でサイダーで手を洗ったと云ふ馬鹿もおり、負けずにビールを奮発したライヴァルもあったそうだ。青豌豆で儲けた北海道のあるお百姓さんは、贅沢して見る見当がつかず、満足な活きてる歯を残らず抜いて金の総入歯を光らしてもっとも得意であったさうだ。ばかばかしいとけなしてはいけない。サイダーの若者や、総入れ歯の百姓と、手法は異なってゐても、てんでにケチな贅沢に夢中であったのが当初の社会相だ」（福沢桃介『桃介夜話』）

「全国八つの高等学校で一千人の生徒を募集するのに対して、一万一千余人の志願者がある。急設電話三千五百個の架設に対して、何万と云ふ多数の申請がある。勧業債券は毎年二回、二千円の当たり籤が十六本つくと云ふので、猫も杓子も十円券一枚づつくらゐ、虎の子の様にして持っている。少数の特権、希有の僥倖に

一週間に一千萬圓を儲け忽ち沒落した夢大盡の成金振り。

下駄の裏金、足袋の鞐まで黄金づくめ。

お茶屋の玄關先で履物が見えぬとて十圓札に火をつけて蠟燭代りにした大馬鹿者。

主なる事項
◇振替貯金開始（三月）
◇鐵道國有公布（三月）
◇凱旋大觀兵式（四月）
◇帝大生藤井實始めて百米及び棒高飛びに世界記録を破つてチャンピオンとなる（六月）
◇南滿洲鐵道株式會社設立（十一月）
◇年賀郵便特別扱始まる（十二月）

「キング」誌昭和六年新年号の付録「明治大正昭和大繪巻」（大日本雄辯會講談社刊）より

対する射利心が潮の如く全社会に漲っている」（堺 利彦『地震国』）

何も変わってないじゃないか、この国は!!

通常の手段では実現できない現実へと至る契機が、そこここに口を開け始めていた。「一世の羨望の的」や「現世果報を一身に集めたやうな得意」という表現は、「成金」ということばを流行らせた時代の空気を的確に表している。しかし、とは言うものの、当時、立ち現れ始めたその「超えてゆくもの」にとり憑かれた身体の表現は、間違いなく官能的だったようだ。成金が正しく成金だった時代、そこでは教祖もまた正しく教祖だったに違いない。

思い切り開き直って考えれば、ことばを与えるべき現実にもみくちゃにされる経験に宿るものが、教祖なのかそれとも破竹のごとき成金なのか、という違いは実は結構紙一重なのかもしれない。この紙一重をつなぐ力点をおくべき呪文が、「一発当てる」

だ。一気呵成に何かことの解決を見出そうとすること、そして、その快楽に半ば中毒してしまうこと、それがもみくちゃの変動期にもっとも苛まれた精神をとらえて離さない。整理のつかないものをえいっとばかりに整理してしまう魔法の呪文。誰もがそれを探し求め、群を抜くことに発情した視線を注ぐ。

「株式界は暴騰に沸き、新規の事業が雨後の筍のように起こった。そして、ここでも目立ったことは、自由な『個人』の自覚であった。一介の若い商社員が小資本で汽船会社を起こし、忽ちにして『船成金』にのしあがる。――こんな話は当時、珍しくなかった。名もなき『個人』にも、財界に乗り出すチャンスが訪れたのであった。素人が株式や商品の投機に手を出して、大儲けした。もともと、ささやかに実業に従事していた者が、一躍巨利をおさめるのは、なおさら、やさしいことであった」（羽間乙彦『蛮勇の時代』）

ゴミでも商品にする「体験談」というフォークロア

他の誰でもない、この自分がもうける、あるいは幸せになる、その新たな鮮烈さで削り出されてきた「個」の具体性の前には、どんなタテマエも色褪せる。群を抜くことへの切羽詰まった欲望は、その群れと個との弁証法がそれまで以上に発熱し始める状態を前提にしてむくむく肥大する。

うねり始めた近代資本主義の現実のなかでそのような「個」を表現してゆくことは、そのような下部構造に見合った速度と振幅を獲得し始めていた、見る／見られる関係の暴風雨に積極的に身を投じ、なおその広がりを身ひとつに引き受けようとする緊張と葛藤を必然的に要求する。人前に立って演説をする時だけどもりが治った、という大杉栄にまつわるフォークロアを引き合いに出すまでもない。新たな難儀として意識され始めていたどもりや対人恐怖、赤面症といった病いが整理的な病いであると共に社会的な病いであることは、「個」をうまくとりおさえるマニフェストのことばと上演技術を身に宿すことがそのような病いをもたらす緊張・葛藤状況の負荷を下げる効果があるらしいことからも推測できる。そこでどのようなマニフェストに投じ、どのような表現を獲得して自身を安定させてゆくか、言うまでもなくそれは自身の主体的選択だけでなく著しく偶然的要素が介在してくることだが、ただ、その安定させてゆくための手続きの違いによって、人は教祖にも、成金にも、政治家にも、革命家にもなれるのかも知れない。

人が敢えて集まり、何かことを起こそうとするモティベーションというのは、とりあえずあやしげなものだ。それは、ある方向に人を動かし、とりまとめてゆくことばを発動させてゆく技術が場に宿らないことにはあり得ない。そして、「宗教」にせよ、あるいはアムウェイに代表されるような種類のどこかとりとめない「ビジネス」にせよ、確かにそのような技術を持っている。

たとえば、その広がりのなかに人を巻き込もうとする際、かならず、わたしはこのように病気が治った、このように幸せになった、といったモティーフの「個人的」体験談が語られ、あるいは書かれたものとしてばらまかれてゆく。

それは、読者の側から言えば、自分とよく似た境遇の体験談を探し、それに重ね合わせる作業を組織してゆく。大学受験の合格体験記が、志望校と偏差値と、使った参考書という要素のクロスしたところに「自分」を発見するような読みを発動してゆく効果をもっているのと同じに、これらの「体験談」もまた、文脈を十全に考慮した読みによって反省的契機を与えることは決してないという意味で、フォークロアにほかならない。

語る側からすれば、たとえ定型化されフォークロアと化した語りの枠組みのなかであれ、なんとか整理のついた編集された経験を語ることで、ある種の解放感、カタルシスを獲得する。経験とは、ただ即自的な体験ではない。たとえ、他人に向かって語ったり、文字に変形して流通させたりといった作業を介すことはなくても、自分自身の内側で体験は不断にことばに変えられ、そしてそのことによってのみ人は自分が何を考えているか、どんな体験を介して世界と接触しているのかに気づくことができる。つまり、人は体験を編集する作業を行うことによってのみ、体験を真に経験化してゆくことができるということだ。

一般的な体験談や身の上話の効用は、このような雑駁をきわめるようになった近代的世界のもみくちゃのなかのそれぞれの体験を編集してゆくうえでの材料を提供することでもあった。柳田国男が「世間話」と呼んだのも、実はこのような体験談や身の上話を含み込んだ、ある世界認識のための材料を提供する語りだったはずだ。

そのような「体験」を組織してゆく場は、必ずまず等身大の小さな集団によって形成される。組織してゆく技術の宿るもっともミクロな場がこれだ。

問題は、そのような場で語られ、上演されることばと、そのことばによって相互的につむぎ上げられてゆく共同性のありかたである。その技術さえ身につけてしまえば、人はどのようなものに対しても過剰な意味をまつわらせることができるようになる。占いの語り、あるいは教祖の託宣の語りと、テキ屋の語りとが基本的によく似たたずまいを持っていることを思い起こして欲しい。あらゆる状況に応じて縦横無尽、自由自在の語りを繰り出し、過剰な意味の場を相互的に作ってゆく技術。それは、そのような意味の場の過剰さに応じた価値を何か確かなもののように立ち上がらせ、何であれひたすら「売る」ことが可能な「万物販売装置」と化す。その仕掛けが作動し始めたら最後、そこで取り出されるものが羽毛布団であれ、もっともらしい壺であれ、得体の知れない健康食品であれ、はたまたありがたい宗教書であれ、実は何だっていいのだ。「売れと言われれば河原の石でも売ってみせる」という一本どっこのセール

スマンたちにありがちなタンカは、そんな語りの技術、過剰な意味の場を作り出してめくらますテクネーに対する誇りと信頼に裏打ちされている。

　それはそのような語りで組織されてゆく側にしても同様だ。あるセールスマンは、羽毛布団を買った家は必ず健康食品も買うし、宝石だって買うよ、と言う。ということは、豊田商事にひっかかり、国利民福の会にひっかかり、NTT株にひっかかり、バブルスターにひっかかるといった人がいる可能性は高いということになる。商行為というのは、どうも本質的にこのような具体性を超えた意味の交換というところがあるらしい。そしてその過剰さに酔っ払い、自分の位置が確認できなくなった瞬間から、「超えてゆくもの」への欲望は魔物のようにそこここにとり憑き始め、ひとまず「宗教」としか言いようのないような、自らをとりまく世界の具体性を見失った意識が公然と、ゾンビのごとくかっ歩するようになる。

◉民主主義バカどものネズミ講(ネットワーク)◉

　こうなると、ことはたんに「宗教」と名指しされる集団だけの問題ではない。たとえば、「ネットワーク」ということばに根深くまつわっているある雰囲気にも、このような具体性を超えた「宗教」めいた超越性は漂っているとは言えないか。

　階層的な秩序によってしか維持できない近代の広がりがあり、あくまでもそれに対するカウンターとして発想されたものがネットワークだったはずだ。だが、それはいつしか無限大に水ぶくれしてゆき、ネットワークこそが階層的秩序にとってかわるものだ、という分際をわきまえないとんでもない妄想を生んでいる。反原発や自然食や、さまざまなスローガンを掲げた「市民運動」の次元で馬鹿のひとつ覚えのように標榜される「ネットワーク」は、どこかで主体性なき無責任のシェルターになっている。それは実は民主バカのネズミ講にすぎない。冗談ではない。ネズミ講で原発を直接とめられるだろうか。ネズミ講で大工場が運営できるだろうか。ネズミ講で天安門の軍隊に対抗できるだろうか。

　落ち着いて考えてみよう。どこの誰が最終的に責任を負っているのか、どこの誰が儲かっているのか、その広がりのなかのどの位置からもそれが確実に見通せないからこそネズミ講は増殖できる。それは、民俗社会における「講」のあり方とよく似ているようでいて、しかし決定的な違いをはらんでいる。頼母子講にしても、あるいは信仰を軸にした伊勢講や富士講にしても、講を組み、ある約束事のもとに広がりを確保するメンバーは必ずお互いよく知っている、見通しのきく範囲に限られていた。暮らしの場の共同性に規定された、その意味では

逃げようにも逃げられない窮屈な関係があって初めて講を組むことができたのだ。だからこそそれは、ある文脈においては相互的な社会保障のような役割を果たすこともできたし、また時に強靱な戦闘力を支える共同性も発揮したのだ。

だが、そんな暮らしの場の共同性がほぼ腰砕けになり、何らお互いの生を確認し合う機会も場もないまま、電話一本、パソコン通信一発でそんな見通しのきく範囲、自ら責任を負える範囲を超えてだらしなく連なってゆくネズミ講（ネットワーク）の、まさに無限連鎖の無責任では、ことが具体性のほうへ降りてゆかざるを得ない状況に直面した時、足場があいまいな分はや上がりの意思決定が折り重なり、「やるっきゃない」と必ず妙な方向になだれてゆくしかない。

それぞれができることをする、という素朴な市民主義は、その初志から遠く、今や「そのままでいいのさ」というたんなる横着を正当化するネズミ講にまで成り下がっているのだ。それは、オカルトめいた超越的なことばを信心もないまま垂れ流し、都市伝説やら子どものうわさやらの向こうに「ネットワーク」という呪文でとらえられる何ものかを勝手に想定しては自分に関わりのない限りにおいて無責任にあおり立てる醜態にまでなだらかにつながってゆく。たとえば、かつていとうせいこうあたりが得意気に唱えた「自宅闘争」など、自分だけは絶対に安全であることを当て込み、そこに居汚なく開き直った主体性なきガキの無責任ないたずらにすぎない。闘争にそのようないたずらの効果を折り込むことは、もちろんあり得る。しかし、それはそのいたずらを戦術として働かせるだけの戦略と、理念と、何よりもそれらに責任を持とうと構える確かな主体あってのことだ。

彼らは歴史と経済をナメている。歴史と経済の格子にがっちり支えられて初めてあるはずのこの文化という化け物をナメている。そのような縦横の脈絡にからまってしかあり得ないてめェの現在をナメている。そして、そのようにしか存在できない生きものというやつを、およそ根拠なくナメきっている。そんな無礼極まりない連中がにこやかに言いつのる「自然保護」や「エコロジー」って、「異界」や「前世」って、いったいなんなんだ。

なのに、そこになお「ネットワーク」という呪文さえかかれば、それもまた何か近代の階層的秩序に対するカッコいい抵抗のように思えてくるらしい。タテ対ヨコ、男対女、「堅い」対「やわらかい」、といった丁半バクチのような二分法に依拠したもの言いが、そこでは好んで使われる。プロレスのように単純でわかりやすいからだ。だが、そのような相互補完的な二分法をも常にカッコにくくり、足もとに投げ返し続けるという反省的知性は、その呪文の場には永遠に宿らない。

ネズミ講（ネットワーク）によってしか反映されない意志とことばの水準というのも、おそらくある。それを階層的秩序の側に、ある程度効率よくつなげてゆくための仕掛けが民主主義だろう。だが繰り返して言うが、それはネズ

ミ講（ワーク）がそのままで階層的秩序にとってかわるためのものではない。とってかわるのでなく乗り超える瞬間ならば、論理的にあり得るのだとは思う。しかしそれにしても、ネズミ講を支えるそれぞれに、おそらくもっと別の主体的意志が宿ることが条件になる。そして、それはまた別の仕掛けで問われねばならない大きな問いだ。

◉㈱リクルートという宗教団体◉

困ったことに、具体性を離れたこのネズミ講的とりとめなさは、その内側にいる者にとっては結構盛り上がれるものだったりする。

リクルート社にA職（新規クライアント開発を主な業務とした臨時雇いの営業実行部隊）として約半年余り働いた経験を持つ男性は、社内の独特の「明るさ」についてこう語ってくれた。

社内では誰もがまったくの横並び。社員同士が役職で呼びあうことはない。事業計画の基礎となる年度割りは当時一年が三期に分かれ（現在では四期）、その開始時の会議（「キックオフミーティング」と呼ぶ）には常に全員で参加。営業はこの期間内に達成すべきノルマをテリトリー内の潜在的市場ニーズからあらかじめ設定し、部署ごとにこのノルマに向かって動き始める。ノルマの妥当性については論議の余地はない。

この間、毎週会議があり、ノルマ達成率を逐次公表する。これは「情報の共有化」という言い方で正当化される。営業活動の最前線にいるA職に関しては、全国レヴェルの営業成績が日報で発表され、全国で上位にランクされたりすると毎日の朝礼で部署全員の拍手でたたえられる。そして、各期ごとの成績はその期が終了するとすべて御破産になる。A職の達成した成績は、そのA職を使っている正社員の成績としてカウントされ、A職たちは次の期にはまたゼロから同じスタートラインに立つことになる。

「とにかくね、いつも青春ノリなんだよ。学校っぽい共同性のなかでみんなガンバローって感じ」

リクルート社には行ったことはないが、さぞその通りだろう。

これは「学校」的民主主義のイデオロギーを企業組織のなかで徹底的に純化したものに他ならない。男女も平等、上下のヒエラルキーも、職制の差もない、という恐るべきタテマエ。そして人間理解はきわめてフラットで機能主義的明快さに貫かれているという恐るべきイデオロギー。労使関係などということばは全く辞書にないだろう。もしもこんな組織で具体的な「もの」を作ろうというのなら、それはムチャクチャだ。だが、幸か不幸か、リクート社は「もの」の具体性からきわめて遠い「情報」を扱う企業だった。

「リクルートは生涯産業だ、ゆりかごから墓場までを情報商品にする、ってやってるわけ。出版やってるセクションのヤツらなんて、ウチはどこよりもデカい出版社だ、って言ってんだよ。こいつらマジかよ、って思わず顔見ちゃったよ」

　もちろん、組織の側は自覚的にその「民主主義的な性格」をプラスのものとして称揚する。しかも、時間の軸は数カ月毎の三期制ないしは四期制。そのなかで、社員たちは設定された目標に対して、まるでスポーツかゲームのような感覚で駆り立てられ続ける。偏差値めいた序列を刻々と作り出してくれる装置もきっちり準備されているし、社内研修の連続で日々細かく管理されているから「自主的に」働く。第一、毎日がそんな具合だから考えてるヒマはない。

毎日が文化祭 BGMはユーミン

　そんな上滑りの感覚を減衰させないための、さまざまな仕掛けも設定されている。毎週のように部署ごとスキーに行ったりするし、宴会の名のもとの馬鹿騒ぎも異常に多いという。リクルートが忘年会などをやったホテルはその後ペンペン草も生えない、とまで言われるほどの騒ぎようらしい。こりゃ学生のコンパだ。つまり、会社のなかがそのまままるごと文化祭、サークルのノリなのだ。

「そうね、体育会がキライなヤツら向けの会社なんだよね。なんか今思い出しても、ひっきりなしにユーミンの曲がかかってるような、そんな印象があるね」

　毎日が文化祭、ないしは運動会、というのは、なるほど「学校」にならされた意識にとってはかなりワクワクする夢かもしれない。だが、そのワクワクに同調できない人間は「ノリ悪いなー」と排除されることになる。

　同調を強いる場は社内研修だ。「トレーナー」と称する講師がいて、部下が採点した自分への評価と、自分自身が採点した自分への評価とのズレを徹底的についてショックを与えてゆく。「他人に影響を与えることがマネジメントであり、目的なんだ」と繰り返され、少しでもシニカルな態度が見えると「我われは他人と関わりにきたんだから、自分のことばかり考えちゃダメだ」「あなたクールじゃないですか、他人のことばに耳を貸さなきゃダメだ」と突っ込まれる。とにかく自分から自己同一化させてゆくように仕向けるのだ。明らかにグループダイナミックス（ライフダイナミックスなどの方式と似た〝洗脳〟システム）の手法を応用したものだ。

　話してくれた男性自身、最初から「こんなこと長く続けられっかよ」と思ったという。そうだろう。それがまっとうな感覚だと思う。

　そう言えば、リクルートの関連企業や事業のいくつかには、「コスモス」やら「エターナルフォーチュン」やら、なにやらカルトめいた名前がつけられている。そこでの商品とは身の大きさで扱えるような具体的なものでもなく、といってその商品価値

自体リクルートがでっちあげた「情報」（！）である以上、このようなどこまでも超越的なことばがたやすく無限連鎖できるのもべつに不思議ではない。就職を控えた学生たちに山と送られてくるそれら就職情報の量は、すでに彼らがていねいに読みほどける限度を超えている。誰もまともに読めないし、読まない「情報」にニセの実効性を与え、さらに「情報」の価格をつりあげる、というやり口は、その実効性に対する批判力を宿す場がないことには無敵だ。マーケティングリサーチによって引き上げられてくるデータが消費の動向を確実に予測する資料になりにくくなって以降、広告代理店系の仕事の現場の先端にいる連中が「超越的なことば」に淫していったこと、そしてそのようなことばの実効性についてクライアントたる企業の側から批判力がなくなっていったことと、それはよく似ている。具体的な仕事の内容については何ひとつ語らない、どこか妙につるりとした求人広告（「おもしろあたま」だの、「ピテたまトロプス」だの）を打ち始めたものの、その実効性については当の人事課の企業人でさえ「これでいいのか」と首をひねり、しかしそれでも、一定の学生は集まってくるという無限連鎖の悲喜劇は、冒頭、アムウェイの機関誌に漂うどこか過剰な明るさ、健康さに布施博を重ね合せた直感にとって、千年王国のような終わりのないものにも思え、どうにも気が滅入る。

ミロクの世

今、この国は、おそらく人類史上初めての千年王国、「ミロクの世」を謳歌しているのかも知れない。

誰もが生れながらにして平等で、鍛錬すべき目標も守るべき倫理もなく、ガキのわがままがいつまでもそのままにまかり通り、それでいて何をやっても食べてゆけて、しかも世界一の平均寿命を誇って人はなかなか死ななくてすむ。人類が「しあわせ」ということばに込めてきた具体的な要素のかなりの部分は、ひとまず現象としてはすでに実現している。生がギリギリの営みのなかでなんとか支えられることが当たり前だった時期から遠く、あらゆるリスクを排除した真綿の上の生がはてしなく連なる。「宗教」を支える三代要素と言われた「貧」も「病」も「争」も、とりあえず、生に関わる切実さを喪失してしまった。中心も周縁も、内部も外部も、光も闇も、とりあえず均質になめされ尽くし、人は自分の足場を計測する基準を見失い、どうやら自らがどうしようもなく生きものであることすら忘れてしまった。

それでも、人は具体的にものを食らい、排泄し、呼吸し、細胞の次元で無数の生と死を繰り返しながら、個体としての死へと向かう。肉を食べるためには誰かがどこかで牛や豚を叩き殺さねばならないし、死なないですむシステムのためには、誰かがどこかの救急医療や発電施設の現場で働き続けねばならない。どんなに横着な水ぶくれの生であれ、その生を支える現場は厳然と

してある。具体的な外部は存在する。だが、それは人びとの視線の全く外、五感の向こうへと押しやられ、生との距離を意識しおののくための媒介として立ち現れることはない。具体的でまるごとの外部をちらりとでも予感した瞬間、即座に身体の感度を鈍くする遅延装置が埋め込まれているらしいのだ。

このような状況の下、あらかじめコーティングされ、毒気を抜かれ、きれいさっぱり漂泊された「外部」を生産する構造的な装置としてのみ「宗教」は作動する。能動的に主体を主張する教祖はうとまれ、空虚な中心（アイドル）である教祖だけがおもちゃとしてみんなに遊んでもらえる対象となる。人畜無害な「外部」。決してこの大衆化した横着に破綻をもたらすような力を持たない「異界」。だから、「超越的なもの」に対する「信じる／信じない」というパラダイムはこの主体なき世界では無効だ。繰り返すが、具体的な外部は間違いなくある。が、それを意識する術（すべ）をことごとく衰弱させられた「ミロクの世」の今、状況としてもはやそれはないのも同じだ。それでもなお、この「ミロクの世」の内側から新たなパラダイムが生まれる、と脳天気に言えるだろうか。「しあわせ」の実態が実感できないほどに自明のものとなり、それでも「望みは？」と聞かれて「しあわせ」としか答えられない不条理劇のような居心地の悪さに、新たな志を従えたことばを組織できるだろうか。

言わねばならない、組織できねばならない、という思いはある。もてあますほどに、だ。そして、おそらくそう言っておくのはとてもたやすいことだ。いわく「子どもたちには未来がある」、いわく「若者はそんなにバカではない」……誰もがそこで安心し、判断停止をする。しかし、今、そのようなもの言いをにこやかにふりまく連中が、そのことばを本当に自分自身の足もとに引き受けるという確信をもって言っているとは、ぼくには到底思えない。

かつて、分際を知る、といういいことばがあった。だが、誰もが分際を見失い自分の足場が見えなくなったこの戦後民主主義のもみくちゃのなか、どのような目的にせよ、人がなお横並びに手をつなごうとするとき、大なり小なりこのようなネズミ講（ネットワーク）の不幸にハマらざるを得ないらしい。いわゆる宗教はもちろん、さまざまな市民運動の集まり、バンドや劇団といった表現のための小集団から、もしかしたら親子、夫婦の関係に至るまで、この国の人間たちが肩寄せ合った場には、今、軒並みこんな「宗教」めいた「超越的ことば」のもたらす妙な明るさが充満している。

筆者紹介

●**島田裕巳**しまだ・ひろみ
'53年東京生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修了。現在、日本女子大学史学科助教授。専攻は宗教学。著書に『私というメディア』(パーソナル・メディア社)、『戒名』(光雲社)、『フィールドとしての宗教体験』(法蔵館)などがある。

●**浅野誠**あさの・まこと
'48年新潟県生まれ。千葉大学医学部卒業。精神科医。現在、千葉県精神科医療センター診療部長。共著に別冊宝島『精神病を知る本』がある。中年男性の精神崩壊の症例を扱った初の著作集をJICCより今秋上梓予定。

●**高崎真槻子**たかさき・まきこ
'59年東京生まれ。酒場の女給、女優のマネージャーなどを経て、現在、突撃体験ライター。温泉旅館の仲居さん、テレクラなどを経験。「愛人バンクとか、ヌード・モデルとかラブホテルとかもいいかな」という。旅と人と出会いが好き。

●**小原田泰久**おはらだ・やすひさ
'56年三重県生まれ。名古屋工業大学工学部卒業。漢方、鍼灸などの東洋民間医療や気功治療のルポを中心に、週刊誌などで活躍中。自分自身も「気」を出せる!

●**那須ゆかり**なす・ゆかり
'61年和歌山県生まれ。大学卒業後、図書館司書を経てルポライターに。『朝日ジャーナル』誌に連載した女子高生のルポルタージュを集めた『少女たちの放課後』を近日JICCより上梓。

●**志水一夫**しみず・かずお
'54年東京生まれ。慶応義塾大学文学部史学科卒業。超能力やUFOの実証的研究の必要性を力説し、占星術などの迷信を批判する科学解説家。著書に『古代の宇宙人を科学する』(新人物往来社)、共著書に『UFOと異星人の謎』(池田書店)、訳書にカズー&スコット著『超古代史の真相』(東京書籍)などがある。

●**呉智英**ご・ちえい
'46年愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒業。評論家。封建主義者。クリスチャン・ネームはパウロ。以費塾においてニセ学生たちに論語を教える。著書『インテリ大戦争』(JICC)、『馬鹿につける薬』(双葉社)、『大衆食堂の人びと』など多数。

●**新山哲**にいやま・さとし
'66年千葉県生まれ。アニメ雑誌などの編集者を経て、現在フリーライター兼アダルトビデオ助監督。ときにはイラスト、オブジェ、SFX、特殊メイク、怪獣ぬいぐるみ操演もこなす。少林寺拳法の有段者。

●**赤坂憲雄**あかさか・のりお
'53年東京生まれ。東京大学文学部卒業。日本における異人をめぐる歴史を中心に、テキヤから精神病に到るまでを幅広く研究する。著書に『異人論序説』(砂子屋書房)、『排除の現像学』(洋泉社)、『王と天皇』(筑摩書房)、『境界の発生』(砂子屋書房)などがある。

●**加藤晃**かとう・あきら
'56年生まれ。駒沢大学仏教学部在学中に宗教学に興味を持ち、大正大学大学院宗教学科修士修了。日本宗教学会会員。ひろく民俗事象に関心を持ち、研究している。

●**米本和広**よねもと・かずひろ
'51年島根県生まれ。横浜市立大学卒業。ルポライター。その取材力、調査力にはいつも驚かされる。著書に『これで日本一』(世界文化社)、共著に『くたばれ税金』(プレジデント社)などがある。

●**安藤尚彦**あんどう・なおひこ
'63年愛知県生まれ。早稲田大学教育学部卒業。広告代理店勤務を経て、現在フリー。日本史の隠された部分に興味がある。霊体験もあり。ファミコンのシナリオライターとしての作品に『アイドル八犬伝』(トーワチキ)、『孔雀王』(ポニーキャニオン)などがある。

●**桝山寛**ますやま・ひろし
'58年東京生まれ。慶応義塾大学文学部卒業。ニューヨークに渡ってスクリーミング・マッド・ジョージ(特殊メイク・アーティスト)のバンドのギタリストとして活躍。その後帰国して音と映像、活字、コンピュータなどを統合したメディアのディレクターを目指す。編著に『電脳都市感覚』(NTT出版)、ファミコンソフトに『オトッキー』などがある。

●**大月隆寛**おおつき・たかひろ
'59年東京生まれ。早稲田大学法学部卒業。現在、東京外国語大学助手。民衆運動としての民俗学の復権を志す横義横行の場「都市のフォークロアの会」世話人。訳書にJ・H・ブルンヴァン『消えるヒッチハイカー』(新宿書房)、近刊予定に『厩舎物語』(日本エディター・スクール出版部)、『民俗学という神話』(青弓社)。

別冊宝島114号
いまどきの神サマ

1990年7月12日発行
1995年6月30日第28刷

編集人▶石井慎二　発行人▶蓮見清一
Editor in chief:石井慎二　Editor:町山智浩, 小嶋優子
発行所▶株式会社　宝島社©
〒102東京都千代田区麹町5-5-5
電話［営業部］03-3234-4621［編集部］03-3234-3692 郵便振替 00170-1-170829㈱宝島社
印刷所……東京書籍印刷株式会社　Printed in Japan
ISBN4-7966-9114-6

同時代の知的フィールドワークマガジン

別冊宝島

月2回(10日頃、25日頃)発売/定価1010円(税込み)

1 全都市カタログ
都市生活者にとって必要なものをユニークな視点から徹底的に追求した知的シティ・カタログ。

2 新版・道具としての英語
学校英語とは全く異なった視点から、生きた英語世界に読者を案内する〝革命的英語教科書〟。

3 BODYの本
からだとの対話で自分を知り、自然の環の一部として人間を考える東洋の英知に基づく身体論。

4 おんなの事典
女が自立して生きるための、女たちによる、女たちのための、男たちのための、女の本!

5 女と男
性の本質とは?結婚とは?役割分担とは?切実なテーマを新鮮で大胆な問題意識で探る!

6 性格の本
もうひとりの自分に出会うためのマニュアル
自分はどこから来てどこへ行くのか——。性格を手がかりに現代人のアイデンティティを探る。

7 仕事の本
仕事を通しての人間関係の回復を切望する現代人に贈る画期的な仕事論。

8 道具の本
ライフルからのこぎりまで、冒険と遊びのための道具を体系的に網羅した道具の百科事典。

9 女のからだ
女のセクシャリティグラフティ
女のからだに関する具体的な最新の知識を織り込み、女がのびやかに生きるための方法を考える。

10 都市探検入門
未知の都市探検作戦を豊富な体験に基づいて伝授する画期的マニュアル。

11 みんなのライフ&ワークカタログ
99人の仕事の現実を無味乾燥な職業案内でなく、生身の人間が語る本音でつづられた仕事論。

12 ライス・ブック
こめと日本文化のかかわり方、こめから見た日本史など、こめ文化論を縦横無尽に展開。

13 マンガ論争
のらくろ3世代からクロス・オーバー世代まで、それぞれの甘くほろ苦い同時代のノスタルジー。

14 道具としての英語・会話編
英語の核になる850語のベイシック・イングリッシュと、状況創造型学習法による英会話の本。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

15 夢の本

ユングの方法を武器に夢の不思議に挑む。コンプレックスから自分を解放するためのマニュアル。

16 精神世界マップ

人類の歴史とともに古いオカルト＝隠れた知の系譜に、未来を生きる立場から光をあて総展望する。

17 決定版・知的トレーニングの技術

絶版

知力を自己鍛練する作業＝職人的手仕事の積み重ねを、段階的に記述し体系化した知の錬金術！

18 現代思想のキーワード

科学の知から神話や魔術の知の領分まで、文明転換期の知の流儀を理解するための思想用語辞典。

19 文章スタイル・ブック

ちょっとしゃれて書くための
初級修辞学講座

流行作家の文体から新聞・雑誌・広告コピーまで、ちょっとしゃれて書くための初級修辞学講座。

20 センス・パワー

センス・エリートになるための
[感性トレーニングの技術]

感性の党派性が火花を散らす！センス・エリートになるための［感性トレーニングの技術］

21 街を耕す本

伝統的な生活技術と知恵、季節とともに生きる技術を実践的に、かつ実用的に集めた保存板。

22 アジア・太平洋［発想する旅のガイドブック］

環太平洋に広がる島々と半島に、日本人の源流を求めて、国境を越えた旅、第三の旅に出かける。

23 アウトドア学教程・技術編

安全で快適なアウトドア・ライフを送るためのベーシック・テクニックを豊富なビジュアルで解説。

24 道具としての英語・読み方編

英語を読むのが苦手だと思っている人に捧げる、ムダなく苦労なく英語が読める画期的手引書！

25 レトリックの本

文章に生命を吹きこめ！極悪文を恐れるな！いま、もっとも過激で新しい発想の作文術の本！

26 メディアのつくり方

すぐに役立つ編集・印刷ハンドブック

編集技術から製本まで、ミニメディア作りの全工程を徹底的にときあかした完全マニュアル！

27 機械オンチに捧げるパソコン・ブック

機械・電気が苦手でもコンピュータは使えるのだ。文化系の頭脳がコンピュータを裸にする！

28 新しい道具の本

ちょっと変わった分類法を使った宝島流道具のスーパーマーケット。道具たちの地図を塗りかえる一冊。

29 道具としての英語・テキスト編

200を越えるバラエティに富んだ文章で、英語と友達になるための新しい英文スタイルブック。

30 映像メディアのつくり方

映画、ビデオを中心とした映像作品のつくり方が具体的に理解でき実際に応用できるマニュアル。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

31 珍国語

教わる側にはショックを、教えられる側には笑いと共感の渦を巻きおこす国語狂科書。

32 答えられないあなたのために 科学読本

身近な不思議の数々から科学技術の最先端まで、愉快で納得できる科学技術質問箱。

33 発想トレーニングの技術

リラックスして発想するための実践的ガイダンス

しんどい「主体的発想」からの解放めざして！リラックスして発想するための実践的ガイダンス。

34 みんなの文章教室

書くべき原体験を何ももたない世代に送る、ちょっと風変わりな文章を書くためのマニュアル集。

35 もっとしなやかに生きるための 東洋体育の本

身体に聞いて自分でつくる健康法

しなやかな心とからだを育てるために。からだに聞いて自分でつくる健康法の具体的レッスン集！

36 アメリカを読む本

多民族の混沌とした文化、ビジネス、政治、アート、アメリカをもっと知るためのエッセイ&ガイド。

37 会社の本

会社という謎に満ちた不思議世界を旅するための旅行ガイドブック。会社ツアーの案内書！

38 タブーと常識に挑戦する 日本史読本

歴史は進歩しない。変化するだけだ。タブーと常識に挑戦し、日本史を書きかえた大胆知的な本。

39 朝鮮・韓国を知る本

隣の国が見えてくる！

隣邦でありながら、視野外におかれがちな朝鮮・韓国を、等身大のサイズで理解するための本。

40 道具としての英語・やり直し編

英語をやり直すための新しい発想と方法！使える英語をものにする総合的自己学習マニュアル！

41 脳力トレーニングの技術

脳を「体育」してやろう！爆発的潜在力を秘めた脳のパワーを全開するための体系的な訓練法！

42 10日間のハングル

気になるコトバのいちばん優しい入門書

無理ない10日間のカリキュラムで学ぶ、ハングルの最もやさしい入門書。カセットテープ別売。

43 道具としての英語 しくみ編

ここが分かれば英語は分かる！英語攻略の核心点である〝しくみ〟をわかりやすく伝授する本。

44 わかりたいあなたのための 現代思想・入門

サルトルからデリダ・ドゥルーズまで
知の最前線の完全見取図

現代思想の問題とは何か？サルトルからデリダ・ドゥルーズまで、知の最前線の完全見取図！

45 人間・宇宙・精神まで 進化論を愉しむ本

大博物時代から現代進化論の最先端までを完全収録！

これ一冊で万華鏡のように変化にとんだ進化論の全貌をつかむことができる！

46 東京できごと史

1945〜1985

闇市からポストモダンまで、40年間の東京の様々な事件をコラム形式で綴る、新東京史。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

48 自信をもちたいあなたのための
イメージ生産の技術
イメージがつかめない、つくれない、伝わらない、伝えられない人に贈るワークブック
イメージのソフトウェア66のプログラムを、超具体的にマニュアル化。

47 柳田国男から山崎正和まで
保守反動思想家に学ぶ本
柳田国男から山崎正和まで、テーマ別編集で、ポスト近代と保守思想の最前線を探る！

50 初めてのトレーニング・ペーパー形式
ハングルの練習問題
主要単語と実践的な例文がマスターできる
初心者でもすぐ始められ、また心得のある人は自分の実力が確認できる。カセットテープ別売。

49 道具としての英語
基礎の基礎
〝メアリーポピンズ〟をガチガチ学校英語となめらかな訳で対照、英語の構造を立体的に示す。

52 わかりたいあなたのための
現代思想・入門II日本編
吉本隆明からポスト・モダンまで 時代の知の完全見取図
日本の思想はどう変わったのか？吉本隆明からポスト・モダンまで時代の知の完全見取図！

51 東京の正体！
あるいは「知識／権力の系譜学」にして近代の言説による「東京経験案内」
近代百年の文学を通して作られる「東京という経験」の系図！「新しい」都市であり続けた東京！

54 ジャパゆきさん物語
ジャパゆきさんをめぐるさまざまな物語を、現地取材、インタビュー、手記などによって全公開！

53 精神病を知る本
「狂気と理性」をめぐるあなたのまなざしが変わる！
精神病とは何か？精神医学の知の体系に批判を加え、人間の「狂気と理性」について考察する。

56 ヤクザという生き方
極道の力の源泉は市民社会の視野の外にある！都市の底に棲む男たちの生き様とその実態に迫る！

55 学校が合わない親と子のための
学校に行かない進学ガイド
今の学校はいやだ！どうしていいか悩んでいる親と子のための実際に使えて役に立つ情報ソース！

58 国鉄に生きてきた
鉄路を愛した男たちの自画像
国鉄解体によって私たちは何を失ったのか？鉄路を愛してきた男たちが自らの肉声で描く自画像！

57 道具としての英語
表現編
これまでの英語理解を一変させる〝英文四つの型〟論で、英語が自由自在に話せて書ける！

60 収容所社会・ソ連に生きる
ナマの声で綴るいまロシア人であることの悲劇
ソビエト体制下の普通の人々の生活を通して明らかにされる、いまロシア人であることの悲劇！

59 思想の測量術
あるいは近代の言悦による「記号経験案内」にして「知識/権力の系譜学」
現代思想への断乎たる異議申し立ての書。フーコーの「言葉と物」の偉業の日本版とも言える作業。

62 自民党という知恵
日本的政治力の研究
自民党とはどんな政党なのか？人事・政策・組織の三つの軸から、日本的保守政治の核心をえぐる。

61 道具としての英語
言いまわし編
鮮度100%の生きた英語で、アメリカ英語のキマリ文句をマスター！英語の表現力を豊かにする！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

64 女を愛する女たちの物語
日本で初めて!234人の証言で綴る
レズビアンレポート

レズビアンたちが語る悩み、苦しみ、喜び。234人の証言による初のレズビアン・レポート!

63 ミステリーの友
ミステリーグルメになるためのメニュー105

ミステリー通が贈る、エッセイ形式のミステリー小説徹底ガイド。ミステリーグルメになる本。

66 盛り場の資本主義
悪場所という欲望の経済人類学

盛り場に咲きほこる〈いかがわしさの経済〉がもつ磁力の秘密を解き明かす、欲望の経済人類学!

65 道具としての英語 英語で雑談編

〈自分のおしゃべり〉を英語でするための本。身近な30の話題に、ふだん着の英語表現集つき。

68 新しい韓国を知る本
躍進する隣国、その政治と経済をどう読むか?

躍進する隣邦、その政治と経済をどう読むか?あらゆる角度からみた、現代韓国の実力と将来。

67 エイズの文化人類学
「エイズ現象」をどう読むか?

さまざまなメタファーを身にまとう社会現象としてのエイズをテキストとして、現代を読み解く!

70 ザ・中学教師
〈不思議の国の中学校〉に棲息する
センセイたちのありのまま

中学教師の奇妙な生態を、具体的なエピソードを通じて具体的に描き出す、現場直送、素顔の教師!

69 道具としての英語 表現辞典

英和辞典ではわからない言葉のニュアンス、英語表現のコツを、英米作家から直接学びとれる辞典。

72 ザ・新聞
「病める巨人」のカルテを公開する

いま、新聞のどこがどう危いのか?「メディアの帝王」「病める巨人」のカルテを全公開する。

71 わかりたいあなたのための 現代美術・入門
印象派からハイテク・アートまで
現代アートの完全見取図!

印象派から、シュールレアリズム、ダダ、ハイテク・アートまで、現代アートの完全見取図!

74 競馬コーフン読本
直線いっきのおもしろさ!

馬、騎手、厩舎、馬主、牧場、血統、予想、必勝法など、競馬の魅力を全てみせる、ファンに送る本命本!

73 楽しい俳句生活
「読みかつ詠む」ためのスタイル・ブック

近くて遠い俳句の世界への入門書。まったく新しい「読みかつ詠む」現代俳句スタイル・ブック。

76 ホテル物語
ホテルは都市の劇場だ!

世相を映し出す鏡、ホテル、その多彩なドラマからビジネスまでの華麗なるインサイド・レポート。

75 「モダン都市解読」読本
あるいは近代の「知覚」を横断する
「知識/権力の系譜学」

東京という近代都市の空間と近代日本人の知覚がどのように形成されたのかを視覚資料から解読する。

78 ザ・中学教師 [プロ教師へのステップ]編

人はいかにしてプロ教師になるのか?学校という戦場を生きぬくための、教師のサバイバル・ブック。

77 新しいソウルを歩く本
ソウルっ子も知らなかったソウルの真実

写真とイラストを駆使して語るソウルの街と人々の生活文化案内&旅する人のためのガイドブック。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

80 道具としての英語
胸いっぱいの形容詞！

5000の形容詞を読みやすいコラムで紹介。同時代の英語を読み、人と違う言いまわしができる本。

79 世紀末キッズのための
SFワンダーランド

20世紀最後のカルチャートレンドSFで遊ぶ！サイバーパンクを始めとした〝SFの現場報告〟。

82 わかりたいあなたのための
経済学・入門

経済学の誕生と展開、基礎理論を分かりやすく説きほぐし、90年代への展望を探る画期的な入門書。

81 推進か？ 廃炉か？
決定版・原発大論争！

電力会社の内部資料に、反原発派の論客が〝安全性〟〝放射能〟〝経済性〟など20の対立点で総反撃！

84 楽屋裏のテレビジョン
ブラウン管の向こう側のすったもんだ！

テレビの国のすったもんだをオールロケ！TV雑誌では絶対に読めないブラウン管の裏側の狂詩曲。

83 当世死に方事情
死とお葬式とお墓をめぐる日本人の現在

〈死〉という窓からニッポン人とその社会の変貌をみつめる、ちょっと変わった生態ウォッチング！

86 競馬ぶっちぎり読本
大外強襲の大迫力

馬とレースに関する話題、競馬に関わる人々の話題、今いちばん気になる話題など競馬の話題が26本。

85 わかりたいあなたのための
フェミニズム・入門
フェミニズムの理論の見取図と世界各国の状況がわかる本

フェミニズム理論の見取図及び世界における理論と運動の状況まで、フェミニズムの現在がわかる本！

88 現代文学で遊ぶ本
現代文学をわがままに読み
勝手に楽しむためのやり方！

日本編・作家51人の処方箋、海外編・42か国の文学事情など現代文学があなたの〝遊び道具〟になる！

87 ファッション狂騒曲

華麗なる世界、ファッション業界に生きる人々の生活と意見、そして真実！

90 大学の事情

〝冬の時代〟の苦心のあれこれから大学教師という変な種族の扱い方まで、こんなもんです素顔の大学。

89 軍部！
銃口で韓国を支配した強大な組織
その驚くべき真相

栄光の人から疑惑の人へと転落した全斗煥大統領。全斗煥の軍部内組織『一心會』とは何か？

92 うわさの本
都市に乱舞する異事奇聞・怪談を
読み解く試み！

語られた物語と語りのネットワークの検証をとおして、都市のもうひとつの貌に肉迫する！

91 道具としての英語
単語パワーアップ編

漢字の「へん」「つくり」と同様に英単語を71の語根の意味から覚えて単語力を200％パワーアップ！

94 もっと知りたいあなたのための
天皇制・入門

天皇制研究の最新成果に６つの視座からアプローチ。2000冊完璧リスト付。天皇制の全てがわかる本。

93 プロ野球の悩み
野球狂のための脱プロ野球読本

グラウンドの外から、プレイの裏側から野球を観戦。これがプロ野球の新しい愉しみ方だ！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

96 口語訳・論語
現実を生きるための書

高度化する資本主義社会に、指標なくさまよう現代人の目からウロコを落す紀元前5世紀のマントラ。

95 ザ・中学教師［親を粉砕するやりかた］編

現場の教師が体験した〝恐るべき親たち〟の生態！すべての教師に捧げる痛快〔親退治〕

98 高校野球の真実
熱気倍増の甲子園ウォッチング！

ゲームの意外性、祝祭の高揚感、欲望とカネの渦巻く最もニッポン的なスポーツ〝甲子園〟を全解剖！

97 わかりたいあなたのための 現代写真・入門
写真の過去・現在・未来を読むガイドブック！

写真の系譜をたどり、多様な写真表現を見わたす。写真は何をどのように表現してきたのか？

100 映画の見方が変わる本

今まで誰も言わなかった、言えなかった映画の秘境探険！映画に隠された「闇」を読み解く！

99 超プロレス主義！
格闘王たちのバトルロイヤル

もっとも感動を与えてくれる格闘技戦と、もっとも魅力ある格闘家について徹底追求した１冊！

102 欠陥英和辞典の研究

日本でいちばん売れている英和辞典はダメ辞書だ！日本語、英語双方の観点から精査し、検証する。

101 地球環境・読本
あるいは地球の病について
あなたが間違って信じていること

「地球を守れ！」の大合唱のなかで信じ込まされている〝常識〟を、第一線の論客が徹底的に打ち破る!!

104 おたくの本

「おたく」は高度消費社会を読み解くキーワードだ。ロリコン、やおい、コミケなどの知られざる生態。

103 気は挑戦する

気はデカルト以来の心身二元論をくつがえし、自然科学のパラダイムをも変える新しいエネルギーだ。

106 日本が多民族国家になる日

日本に移り住んだ彼らの現場を直視して単一民族幻想が崩壊するこの国の近未来を照射する！

105 中国・危機の読み方

中国ウォッチャーたちが明かす、中国の危機を読み解くための新しい視点の数々！

108 ザ・中学教師〔ダメ教師殲滅作戦〕編

金八教師、熱血教師、ダメ女教師など無能教師の群れにプロ教師軍団が宣戦を布告した!!

107 女がわからない！

男には理解できなくなってきた、［女］の現在をめぐるフィールドワーク。

110 80年代の正体！

80年代はどんな時代だったのか？ハッキリ言って「スカ」だった。この本は「現在」につけるクスリです!!

109 競馬ダントツ読本

競馬のホンネがここにある！ズバリ的中の痛快感！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

112 男が危ない!?

「女の時代」のなかで孤立無援の男たち。「男」の語られ方がいま、あらためて問われている！

111 新版・学校に行かない進学ガイド

塾、正規でない学校、自主夜間中学、国内・海外留学などいますぐ役に立つ最新・徹底ガイド。

114 いまどきの神サマ

ＵＦＯ、おまじない、超能力、占い、ハルマゲドン、前世戦士……オカルトのメンタリティを暴露！

113 英語辞書大論争！

欠陥の指摘は本当だったのか？伝統と権威を敵に回して勝ち目はあるのか？「論争戦」観戦の手引き。

116 宇宙論が楽しくなる本

アインシュタインからホーキングの最新理論まで現代宇宙論の完全見取図！

115 天下国家の語り方

日本と世界、政治と経済をめぐる「神話」の検証！「常識」を根底から揺るがす大地震！！

118 非常事態のソ連

ソ連人によるソ連社会の病状報告！

ソ連全土を襲う経済恐慌の嵐、社会秩序の混乱、民衆の政治不信！ソ連の生活現場からの痛切な叫び。

117 変なニッポン

ガイジンが好きな、そう思われているこの国！

海外で受け入れられるニッポン現象を合わせ鏡にして、ジパングの現在を発見！

120 プロレスに捧げるバラード

漂泊する芸能者、異形の神々、人類最古にして最高の文化としてのプロレス……

119 誤解しているあなたのための 新釈どうぶつ読本

動物は浮気もすれば、子殺しもする。動物の未知の世界を読み解く最新理論！

122 道具としての英語 英語の発想/日本語の発想

日本人なら誰でもわかるが、英語で表現できない言葉にこだわり、日本語と英語の発想の違いを探る。

121 競馬おいこみ読本

ターフを駆ける馬、ターフに賭ける人、ターフを翔ける夢、ターフに欠ける物語、すべてがこの本に。

124 セックスというお仕事

女にとって風俗産業とは何か？はじめての女だけによるセックス産業をめぐるフィールド・ワーク！！

123 科学論争を愉しむ本

科学はもう法廷の裁判官ではなくなった！

エイズ論争、脳死論争などの論争の構図を描き、論争の内情を探り科学の正体を暴く！

126 江戸の真実

誰も挑まなかった近世日本のわかり方

明治よりもエネルギッシュで昭和よりも豊かで平成よりもダイナミックな江戸の姿がいまここに甦る。

125 当世ぎゃんぶる読本

やめられない人たちの懲りない日々

裏ワザ師からフツーの人までギャンブル・アドベンチャーたちの天国と地獄！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

128 道具としての英語
暗記しないで覚える英単語

丸暗記の苦労をいっさいしないで「単語の力」と「英語の力」が同時に身につく、究極の学習法。

127 謎の島・台湾

不思議の島・台湾を通して、いま東アジアの変な資本主義が見えてくる！ いま台湾に興奮するワケ！

130 スポーツ科学・読本
最新理論から体力トレーニングの技術まで

生理学や物理学などの最新成果を楽しみながら、自分で実際に活用し、未知のパワーをひきだす本！

129 ザ・中学教師
子どもが変だ！
子どもはもはや、あなたの知っている子どもではない!!

大衆消費社会はいったいどのような子どもを生み出したのか？ 学校にはいま、こんな子どもがいる！

132 競馬ボロボロ読本
激走、激走、また激走！

ボロ勝ちの人もボロ負けの人もこの本を読め！ 競馬読本シリーズ、どと一の第５弾！

131 ライターの事情
ボーダレス化した「書く仕事」の現場を追う！

書いて稼ぐ人びとの生活と意見をたずねて、高度情報社会の足元に迫り来る液状化現象をさぐる！

134 編集の学校

知的生産能力を全開させる超・具体的な完全学習プログラム！ 新シリーズ「使える本」第１弾！

133 裸の自衛隊！

自衛官そのものに迫ることで初めて明らかになった、世界第三位の軍隊の驚くべき真実の数々！

136 闘う男！
アナクロニズムの逆襲

ケンカの現場からその考察に至るまで、一冊まるごとケンカの本！ 天下御免のラジカル・ファイト！

135 ニッポンと戦争
われわれは湾岸戦争をどう語ったのか？

ラジカルな平和主義から新保守主義まで、湾岸戦争をめぐってたれ流されたあらゆる論議を検証する。

138 宇宙論が怪しくなる本
現代宇宙論はどこまで信用できるのか！

宇宙論ブームの昨今。でもこの本はあなたの疑問に答えません。もっと宇宙論がわからなくなる本です。

137 研究する人生
「理系」の彼らは何をしているのか？

科学技術立国・日本の繁栄を黙々と支えてきた人びとの情熱、喜び、愛、不安、苦しみ、そして人生。

140 トランスフォーメーション・ワークブック
20日間で自分を変える自己改造メソッド

この本はあなたが自分で書き込みながら、隠れていた自分に気づき、自己変容していくための道具です。

139 恋をしない女たち
愛がわからない時代の、私たちの恋愛さがし

ダイヤルQ² で出会い、パソコン通信で不倫するフツーの女の子たちの愛の物語！

142 道具としての英語
暗記しないで使える英熟語

熟語を使いこなして、もっと豊かに表現するための「丸暗記主義反対！」の学習法。

141 巨人列伝

われわれを攪乱するケタはずれな大物たちの、とんでもない生き方に見る人間性の研究。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※定価はすべて税込みです。

別冊宝島

144 シナリオ入門

シナリオは映像ドラマの設計図だ。映像ドラマを言葉で表現するためのレッスン！

143 競馬名馬読本

「名馬の時代」80年代を駆け抜けた111頭の物語。誰がなんと言おうと、この馬は私にとって名馬だ！

146 変態さんがいく

倒錯した性愛に情熱を注ぐ、セックスおたくたちの生活ウラ＆オモテ！ 本当の変態たちが語り始めた！

145 農業大論争！

普通の人には理解しにくい、農業をめぐる論争のすべてがこの一冊でわかる！

148 F1激走読本

ニッポンのＦ１ブームはどこへ行く？このブームをブームで終わらせないために！ 決定版!! 読むF1。

147 我らがバブルの日々

バブルとともに生き、バブルとともに眠る企業戦士とアウトローたちの金とノルマと女の物語!!

別冊宝島ＥＸ

絵画の読み方

感動を約束する、まったく新しい知的アプローチ／
別冊宝島編集部・編／定価1010円

名画は、見て「感じる」よりも、読んで「わかる」方がおもしろい！まず解読！鑑賞するのはその後だ！

モニター上の冒険

渡辺浩弐・著／定価1300円

「テクノロジー」の先端シーンを探険していたら「神秘」の森に迷い込んでしまった！現実が、ＳＦを超越した！

ニュース・キャスター

ジェシカ・サヴィッチの栄光と挫折
グウェンダ・ブレア・著
岸野郁枝・訳／定価2000円

ひとりのアンカー・ウーマンの挫折はTVニュース報道の崩壊だった！TV界の内幕を抉る迫真のノンフィクション。

父親主義

辻創・著／定価1500円

女・子どもの教育談義を粉砕するウルトラ常識教育論！日本の父親が語る子育て、学校、教育について。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621※定価はすべて税込みです。

映画宝島

異人たちのハリウッド

「民族」というキーワードで映画の見方が変わる/
別冊宝島編集部・編/定価1100円

出自と差別という問題から目をそむけたアメリカ映画論なんてみんなインチキだ！映画で見るアメリカ民族ガイド！

よいパソコン悪いパソコン

'92年前期版
大庭俊介＋PUG・著/定価1300円

パソコン最新情報&92年の話題満載！あなた自身の「ベストパソコン」を探せ!!パソコン選びはこれで決まり!!

ザ・ジャパニーズ・パワーゲーム

アメリカのどこが、なぜダメなのか?
ウイリアム・J・ホルスタイン・著
田原総一朗・監訳/定価2200円

この本はなぜアメリカで反感を買ったのか!?抵抗を感じながらも否応なく引き込まれる日本踏査リポート！

ジャズ・ウェスト・コースト

50年代ＬＡのジャズ・シーン
ロバート・ゴードン・著
上田篤・後藤誠・訳/定価2200円

日本人の聴き方は間違っている！新証言＋名盤・隠れ名盤の解説で綴る、50年代ウェスト・コースト・ジャズ史！

喜納昌吉チャンプルーブック

ハイサイ＋宝島編集部・編
定価1700円

喜納昌吉を通すと、リアルな沖縄、そして世界が見える。さあ～唄え～踊れ。永遠なる祭りは、あなたを無限の彼方へ。

このミステリーがすごい！

'92年版
別冊宝島編集部・編/定価490円

地味だった翻訳もの、読む本がない！とお嘆きの皆様、多様化するミステリー作品の中に、あなた好みの本がある。

マフィアの帝国

ファブリジオ・カルピ・著/
小林修・訳/定価1980円

いま、厚いヴェールに包まれたシチリア・マフィアの聖域が暴かれる！内側から描かれた迫真のノンフィクション!!

我ら家なき者

ホームレスと“冷たいアメリカ”
ステファニー・ホリーマン・写真/ビクトリア・アーウィン・文
ロバート・M・ヘイズ・序/関元・訳/定価1980円

数百万のアメリカ流民はなぜ生まれたのか？写真と文で報告される現代アメリカの病巣。衝撃のレポート!!

大川隆法の霊言

神理百問百答
米本和広・島田裕巳・著/定価980円

「幸福の科学」につけるクスリ。宗教にキョーミなくても大丈夫！信者も思わず笑う本。大川隆法主宰先生徹底解剖！

ベリンダの冒険

馬で駆けたスペイン～パリ1700マイル
ベリンダ・ブレイスウェイト・著
海都洋子・訳/定価1400円

21歳のベリンダは今日も乾いたスペインの大地を行く。目指すはパリ…。英国のノンフィクション・ベストセラー！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621※定価はすべて税込みです。

〝視覚の時代〞の斬新な発想法！

新装版
図解発想法

知的ダイアグラムの技術
西岡文彦・著／定価1600円

視覚的な材料を駆使する知的ノウハウを体系化した手引き書！難解な哲学書の読解から広告企画の立案まで活用できる!!

編集的発想

〈知とイメージ〉をレイアウトする
西岡文彦・著／定価1300円

組み合わせ、編み出す工夫の中に創造性を発揮するための総合入門書。発想の技術書、創造力を刺激する読書論としても有用。

別冊宝島134
編集の学校

知的生産能力を全開させる
超・具体的な完全学習法プログラム！
別冊宝島編集部・編／定価1010円

企画力をつけたい、イマジネーションを広げたい、クリエイティブな仕事がしたい…。そんな人はこの学校で学びなさい！

「やりがい」の構造

自分的価値の発見術・実現術
西岡文彦・著／定価1030円

本当の「やりがい」を発見し、真の自己実現を果たす「方法」をはじめて明かす画期的な相談相手本！具体的に役に立つ!!

THE CD-ROM WORLD

マルチメディアの時代がやって来た！
GTV・制作／HIPPON SUPER！・編集
定価1200円

人間の素晴らしさを、どうやってマシンに、メディアに置き換えるか? 21世紀を迎えようとする今、贈る世界最先端レポート。

モニター上の冒険

SCANNING ADVENTURE
渡辺浩弐・著／定価1300円

現代の電脳ビジネスマン達のために、近未来メディア・シーンを解き明かしてみせる、新スタイルのビジネス書！

ISLAND BOOKS
能力トレーニングの技術

脳のパワーを全開にするための
体系的な訓練法！
佐藤正弥・津村 喬・共著／定価1400円

身体としての脳を鍛えるためには脳の「体育」が必要である！自分でできる能力訓練の実際！人間の脳を「体育」する本。

ISLAND BOOKS
イメージ生産の技術

西岡文彦・著／定価1400円

イメージがつかめない、つくれない、伝わらない、伝えられない人に贈るワークブック！イメージ生産をマニュアル化した本。

書店にない場合は、書店にご注文になるか当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621※定価はすべて税込みです。

見えない時代を照らし出す！

我ら家なき者
ホームレスと"冷たいアメリカ"

ステファニー・ホリーマン・写真
ビクトリア・アーウィン・文
ロバート・M・ヘイズ・序／関元・訳
定価1980円

数百万のアメリカ流民はなぜ生まれたか？職を失い、家を追われて漂流する同胞をアメリカは切り捨てるのか!?

マフィアの帝国
ファブリジオ・カルビ・著
小林修・訳
定価1980円

ファミリーのボスが「沈黙の掟(オメルタ)」を破って語った闇の世界！いま、厚いヴェールに包まれたシチリア・マフィアの聖域が暴かれる。

みんな、やせることに失敗している
森川那智子・著／定価1100円

あなたはなぜ、いつもダイエットに失敗してるの？ダイエットを続けていれば、絶対にやせられるの？ダイエットに傷ついたあなたへの21章。

天使の王国
「おたく」の倫理のために

浅羽通明・著
定価1500円

言葉が失われ、身体が稀薄化し、そして「欲望」が見えなくなった！高度消費社会の「現在」を読み解く、「おたく」世代の思想家(イデオローグ)の誕生！

ビジネスマンの精神病棟
浅野誠・著／定価1400円

日本の繁栄を支えてきたサムライたちの人生はなぜ挫折したのか!?心病める12人の無器用な男たちの人生の軌跡を描く「愛と冒険」の物語！

洗脳体験
二澤雅喜・島田裕巳・著
定価1250円

あなたの親しい隣人たちが泣きわめき、踊り狂い、抱きあって「ちがう自分」に変わっていく「自己開発セミナー」潜入体験記！サイコ・ノンフィクション。

ベリンダの冒険
馬で駆けたスペイン〜パリ1700マイル

ベリンダ・ブレイスウェイト・著
海都洋子・訳／定価1400円

21歳のベリンダは今日も乾いたスペインの大地を行く。めざすはパリ。現代のおとぎ話と大評判になった英国のノンフィクション・ベストセラー。

モダン・マナーズ
自分流に生きるための常識を超えた処方箋

P・J・オローク・著
渋谷太郎・訳／定価1950円

有名人との交際術から、デート、結婚、人生の幕の引き方まで。A・ビアスの再来と評されるP・J・オロークが笑いとばす世紀末マナー読本！

書店にない場合は、書店にご注文になるか当社までお問い合わせ下さい。※定価は全て税込みです。

別冊宝島バックナンバー常設店一覧

東京

（千代田区）三省堂書店神田本店／書泉ブックマート／書泉グランデ／東京堂書店／丸善お茶の水店／岩波BSC／いずみ書店南口店／前田書林／BM市ケ谷／山脇ブックガーデン／パイオニアブックス／旭屋水道橋店／プレスセンター丸善／飯田橋書店／ブックス松田屋飯田橋店／改造社国際ビル店／明正堂秋葉原店／法政大学市ケ谷生協店／麴町書店／山王書房（中央区）八重洲ブックセンター／近藤書店本店／旭屋銀座店／福家書店／教文館（港区）モノレール山下書店／書原新橋店／文鳥堂新橋店／新橋駅書店／青山BC六本木店／誠志堂東日ビル店／イグレグ書房／金松堂／文鳥堂赤坂店／流水書房共同通信店／アシーネ芝公園／リーブルダール／流水書房青山店／福家書店高輪店（新宿区）紀伊國屋本店／西武新宿ブックセンター／新星堂新宿NSビル店／福家書店新宿センタービル店／福家書店野村ビル店／啓文堂／風書房／ぶっくらんど／芳林堂書店高田馬場店／ソーブン堂書店高田馬場店／いちかわ書店／ラムラ芳進堂／文鳥堂飯田橋店／ブックスサカイ深夜プラス1／早大生協コーププラザ店／早大生協文学部店／丸正バラエティブックス／オーブックス／三省堂高田馬場店／未来堂書店／ブックス高田馬場／鈴木書房／ブックスミヤ／ヒマラヤ書店／工学院大学生協／あゆみブックス早稲田店／三省堂新宿西口店／三省堂サウスブックポート／雄峰堂北新宿店（文京区）東大生協本郷書籍部（台東区）明正堂中通店／リブロ浅草／明正堂丸井上野店（墨田区）リブロ錦糸町／ブックストアー談錦糸町店（品川区）明屋五反田店／リブロ大森／文星堂大崎ニューシティ店／アイブックス目黒店／浜田山書房目黒店／芳林堂大井町店／三省堂大井町店／博文堂大井町店（目黒区）恭文堂／三省堂自由ヶ丘店／東大駒場生協／ブックス中川（大田区）栄松堂蒲田店／ACT4／アクトブックスサンカマタ／いけだ書店大森／龍文堂駅ビル店（世田谷区）博文堂書店／ブックメイツ経堂店／近藤書店／サンマーク書店／アイブックス祖師谷店（渋谷区）三省堂渋谷店／紀伊國屋渋谷店／大盛堂／旭屋渋谷店／放文社／全国書房／リブロ渋谷／ブックストア談原宿店／金港堂／青山学院大学生協（中野区）オーブックス沼袋店／明屋／はた書店／雄峰堂書店新井薬師店／青林堂／あかつき書店東中野店（杉並区）新正堂下井草／現代書店／書原杉並店／書楽／新星堂荻窪店／ブックセンター荻窪／八重洲BC荻窪ルミネ店／積文館荻窪店／明大和泉生協／サンブックス浜田山／浜田山書房桜上水店／ブックガーデン／西荻パームガーデン／高円寺文庫センター／湘南堂／今野書店／信愛書店（練馬区）青山堂／リブロ光ヶ丘／雄峰堂上石神井店／JBB練馬店（豊島区）リブロ池袋／パルコ三省堂／旭屋池袋店／芳林堂書店池袋店／書原椎名町店／武蔵書店／新栄堂本店／新栄堂アルパ店／成文堂巣鴨駅前店／寿楽洞東急ハンズ店（板橋区）文教堂西台店／ブックタウン／博文堂書店大山店（北区）日鳥書房／日鳥書房アピレ店／昭和堂（足立区）文教堂竹ノ塚店／近代書店／良文堂あやせ店（葛飾区）詩泉堂／文教堂青戸店（江戸川区）弘栄堂書店小岩店／あゆみブックス瑞江店／明和書店（武蔵野市）弘栄堂／パルコBC吉祥寺店／紀伊國屋東急店／陽光ブックス（三鷹市）東西書房／三省堂三鷹店（小金井市）東西書房小金井店／かごや／文教堂小金井店／文教堂新小金井店（調布市）パルコBC調布店／真光書店／真光書店南口店／かもしだ書店（府中市）啓文堂府中店／啓文堂中河原店（国分寺市）三成堂国分寺店（国立市）東西書店／増田書店（田無市）田無書店（保谷市）正育堂本店（小平市）文教堂小平店／文教堂新小平店／一橋大生協店／朋文堂書店（東村山市）文教堂東村山店／丸山書房／あゆみbooks東村山店（立川市）オリオン書房本店／オリオン書房ウィル店／BCリブレ若葉町店（日野市）啓文堂書店高幡店／啓文堂書店豊田店／三成堂豊田店（八王子市）くまざわ書店／三成堂／啓文堂八王子店／文教堂めじろ台店／中央大学生協／啓文堂高尾店／ブックダム／パル三成堂めじろ台店（福生市）文教堂福生店／ブックスタマ（青梅市）ブックスタマ千ヶ瀬店／ブックス西東京（多摩市）啓文堂多摩センター店／くまざわ書店桜ヶ丘店／東西書房聖蹟桜ヶ丘（町田市）有隣堂町田店／文教堂鶴川店／山下書店／久美堂小田急店／久美堂東急ハンズ店／福家書店／文教堂南成瀬店／文教堂小川店／久美堂旭町店（昭島市）ブックスイケダモリタウン店（稲城市）住吉書房稲城長沼店（瑞穂町）ブックス武蔵瑞穂店（羽村町）ブックスタマ小作店

神奈川

（横浜市）有隣堂イセザキ店／有隣堂西口ダイヤモンド店／有隣堂東口ルミネ店／横浜そごうブックセンター／ジョイナス栄松堂／丸善ブックメイツ横浜店／神奈川大学生協／横浜書店／文教堂青葉台南口店／キディランド横浜関内店／ブックスシーガル／ブックスキタミ港南台店／大蔵書店／浜書房バーズ店／浜書房サンモール店／ブックスキタミ網島店／有隣堂戸塚店／戸田書店能見台店／横浜市立大学生協／関東学院大学生協／天一書房網島店／横浜国立大学生協／慶応義塾大学生協日吉店／アーバン文華堂／文教堂栄上郷店／文教堂東戸塚店／文教堂三ッ境店／文教堂弥生台店／文教堂戸塚南店／文教堂すすき野店／文教堂横浜本牧店／天一書房鴨居店（川崎市）住吉書房小杉店／有隣堂川崎アゼリア店／文教堂溝ノ口店／大塚書店百合ヶ丘駅ビル店／リブロ川崎／有隣堂BE店／丸善ブックメイツ／文教堂麻生店／文教堂上作店（横須賀市）平坂書房WALK店／平坂書房駅前店／リブロ横須賀／平坂書房本店（藤沢市）リブロ藤沢／コスタブックセンター／有隣堂藤沢店／文教堂六会店／文教堂辻堂店／ブックセンターよむよむ藤沢湘南店（鎌倉市）島森書店／島森書店大船店／目耕堂／文教堂鎌倉店（茅ヶ崎市）川上書店ルミネ店／ブックセンターよむよむ茅ヶ崎店（平塚市）文教堂四之宮店（伊勢原市）稲元書店／伊勢原書店（秦野市）内田屋書房秦野店／伊勢原書店秦野店／伊勢原書店渋沢店（小田原市）伊勢治書店／文教堂小田原店／ブックス・カネコ（相模原市）文教堂星ヶ丘店／ブックスアミ／文教堂相模大野店／ブックメイツ相模原店／文教堂相模台店（大和市）ブックスオオトリ大和店／文教堂高座渋谷店（厚木市）有隣堂厚木店／石村集文堂駅ビル店／内田屋書房本店（座間市）ワコー書店相武台店（城山町）文教堂城山店／伊勢原書店城山店（葉山町）文教堂葉山店（大磯町）文教堂平塚店

千葉

（千葉市）パルコ改造社／中島書店／セントラルプラザ多田屋／キディランド／千葉大学生協／文教堂小倉台店（市川市）アイブックス／大杉書店／くまざわ書店本八幡店／BCパティオ（船橋市）三省堂西船橋店／リブロ船橋／旭屋船橋店／弘栄堂／パルコ芳林堂津田沼店／文教堂金杉店／ときわ書房（習志野市）多田屋ブックス津田沼（松戸市）辰正堂駅ビル店／堀江良文堂／ユーカリ書林／オークスBCきよしケ丘（柏市）新星堂／世紀堂／スカイプラザアサノ（市原市）文教堂市原店（佐倉市）ブックマートさくら（浦安市）文教堂浦安駅店（八千代市）文教堂八千代台店

埼玉

（浦和市）須原屋／須原屋コルソ店／一清堂／埼玉大生協／岩淵書店（大宮市）押田謙文堂／新栄堂／ブックセンター押田／三省堂ブックポート（与野市）文楽書房（蕨市）須原屋蕨店（上尾市）ロダン合格堂／明林堂上尾店（朝霞市）東武ブックス朝霞台店（新座市）ブックスキャメル／タナブックス（志木市）新星堂（川越市）マインブック／いけだ書店（所沢市）芳林堂／白樺書房／早稲田書房／パルコBC新所沢店／いけだ書店／ブックランドタンデム1／文教堂所沢店／B.Cよむよむ西狭山ケ丘店（狭山市）文教堂狭山店（入間市）文教堂入間店（大井町）ブックピア（坂戸市）雄峰堂坂戸店（越谷市）住吉書房南越谷店（春日部市）文教堂春日部店／酒井書店中央店（秩父市）時習堂（川口市）文教堂東川口店／岩淵書店芝店（東松山市）ブックス富士見（熊谷市）須原屋熊谷店（草加市）竹島書店／高砂ブックス（八潮市）竹島書店（三郷市）竹島書店（日高市）B.Cひまわり

北関東

（宇都宮市）amsブックセンター／新星堂（小山市）進駸堂駅ビル店（前橋市）煥乎堂／リブロ前橋／文真堂問屋町店／文真堂本店／文真堂下小出店（高崎市）戸田書店高崎店／高崎新星堂／サカヰ書店／ATOZ荒縄店（太田市）文真堂新井店（藤岡市）戸田書店藤岡店（水戸市）川又書店／川又書店駅前店／ツルヤBC／リブロ水戸／AtoZ水戸店（土浦市）白石書店駅ビル店（牛久市）ブックランドカスミ牛久（勝田市）武石書店（つくば市）友朋堂／リブロつくば／筑波大学丸善（鹿島町）文教堂鹿島店（岩井市）文教堂岩井店（潮来市）文教堂潮来店（日立市）B.B伊勢甚日立店

北海道

（札幌市）富貴堂東急店／旭屋札幌店／弘栄堂札幌駅店／弘栄堂地下鉄店／明正堂そごう店／北大学生書房クラーク店／北大学生書房教養店／リーブルなにわ／紀伊國屋札幌店／明正堂12号店／本の店岩本北野店／本の店岩本平岸店／五番館西武書籍／明正堂石狩街道店／本の店岩本琴似店／本の店岩本新道店／ビブロス新琴似店／蔦屋清田店（函館市）西武ブックセンター／魁文舎ブックセンター／ブックハウス大文堂／森文化堂（旭川市）三省堂／旭川富貴堂本店（苫小牧市）旭屋苫小牧店（帯広市）信正堂藤丸店／ザ・本屋さんパレット店／ザ・本屋さん東店（釧路市）釧路BC（室蘭市）室蘭工大（小樽市）ビブロス小樽朝里店（広島町）ブックプラザ北広島店（江別市）ブックプラザ江別

東北

（青森市）成田本店／成田サンロード店／いけだ書店／成田本店つくだ店（弘前市）紀伊國屋弘前店／今泉本店／弘前大学文京店（盛岡市）東山堂ブックセンター／岩手大学生協（秋田市）あぶみ書房／秋田大学生協／キャッスルブックセンター（山形市）八文字屋／船山書店／山形大学生協／こまつ書店（仙台市）金港堂ブックセンター／金港堂泉店／丸善141店／アイエ本店／アイエ駅前店／八重洲書房／丸善／高山書店／高山書店東一店／ブックスなにわ／東北大生協文系店／東北大生協理薬店／東北大生協工学部店／東北大生協教養店／ブックスみやぎ（福島市）岩瀬書店コルニエツタヤ店／博向堂（会津若松市）会津ブックセンター（郡山市）東北書店／郡山ブックストアー

中部・北陸

（甲府市）リブロ甲府／朗月堂書店／文教堂甲府店（伊那市）ニシザワ書籍部（松本市）松本駅改造社／ブックスロクサン／鶴林堂／パルコブックセンター／信州大松本生協（長野市）平安堂長野店／平安堂吉田店／平安堂長野大橋店／長谷川書店／改造社（須坂市）平安堂須坂店（岐阜市）自由書房本店／自由書房パルコ店／岐阜大学生協／自由書房鷺山店／大洞堂岐阜東店（美濃加茂市）丸圭書店／三洋堂みのかも店（多治見市）三洋堂多治見店（大垣市）大洞堂ブック258店（関市）三洋堂関店（瑞浪市）三洋堂瑞浪（金沢市）うつのみや片町店／金沢大生協／福音館／北国書林香林坊本店／大和ブックセンター（野々市町）王様の本本店（新潟市）紀伊國屋新潟店／北光社／セゾン・ド・文信堂／萬松堂／新潟大生協／文信堂書店とやの店／日軽戸田書店／ブックマン（長岡市）ブックスアシタバ／ブックセンター長岡／覚張書店／貴光堂（上越市）JBB平安堂上越店（三条市）ブックスササハラ（富山市）清明堂書店／

東　海

瀬川書店／清明堂マリエ店／booksなかだ本店／booksなかだ豊田店／booksなかだ奥田店／文苑堂根塚店（高岡市）文苑堂本店（福井市）福井大生協（敦賀市）千田書店

（一宮市）カルコスブック／文泉堂／文正堂昭和店（春日井市）勝川三洋堂／至誠堂アオキ（小牧市）三洋堂（尾張旭市）ブックスかまくら102（安城市）竹内書店（岡崎市）サン書房（刈谷市）ブックセンター名豊／三洋堂刈谷店／愛知教育大学生協書籍部（西尾市）三愛堂（豊橋市）精文館書店／豊川堂（豊田市）三洋堂若林店／三洋堂梅坪店／豊田精文館（津市）別所書店南郊店／別所書店11ビル店／三重大学生協（松阪市）別所書店船江店（四日市市）白揚本店／シェトウ白揚（鈴鹿市）シェトウ白揚スズカ（静岡市）江崎書店／静岡谷島屋／戸田書店SBS屋店／吉見書店／戸田書店曲金店（沼津市）宝塚マルサン書店／吉野屋雑誌店（函南町）戸田書店函南店（富士市）戸田書店（富士宮市）戸田書店（清水市）戸田書店本店（焼津市）戸田書店／谷島屋大富店（藤枝市）藤枝江崎書店／戸田書店（吉田町）TANAKA BOOKS（袋井市）戸田書店（浜松市）山本書店有楽街店／山本書店ニチイ店／谷島屋書店メイワンビル店／谷島屋なかざわ店／戸田書店幸店／エイチビー

名古屋

（北区）名鉄栄進堂／サンヨーB&D（東区）谷口正文館（昭和区）アスコ書苑／杁中三洋堂本店（瑞穂区）新端有隣堂（中村区）三省堂名古屋店／近鉄星野（中区）パルコブックセンター名古屋店／丸善ブックメイツ／丸善／福文堂（千種区）ちくさ正文館／池下三洋堂／ウニタ書店／名古屋大生協南部／名古屋大生協北部（名東区）白樺書房／ポランの広場（天白区）ヴィレッジバンガード／大洋書店天白店（熱田区）泰文堂日比野店（緑区）三洋堂鳴海店

大　阪

（中央区）ヒバリヤナンバ店／ナンバブックセンター／旭屋ナンバ店／髙島屋書籍・鉢の木／心斎橋アセンス／ブックスダイトー／丸善松坂屋店（北区）旭屋書店堂島地下街店／ヒバリヤ朝日ビル店／紀伊國屋梅田店／旭屋本店／清風堂／旭屋書店梅田地下街店／リブロ梅田／大栄書店（阿倍野区）ユーゴー書店／旭屋アベノ店／福家ベルタ店（淀川区）ブックストア談新大阪店（都島区）駸々堂京橋店／大阪書店／博文堂京橋（吹田市）関西大学生協／文学館南千里店（池田市）らんぷや／アシーネ池田店（箕面市）大阪外語大生協／ブックセンターOS（豊中市）佐々木創文堂／緑風堂／大阪大学生協豊中店／ブックスRIZA（茨木市）和作屋書店（堺市）旭屋堺東店／ブックスファミリア（東大阪市）フタバ長瀬店／経法大書店／栗林レッド店／ヒバリヤ本社／近畿大学生協／ヒバリヤロンモール店（八尾市）リブロ八尾／ミヤコ書店／西川書店（富田林市）ジャスコ金剛店／ブックス・オリオン（枚方市）水嶋くずは店／水嶋枚方店／学運堂／ブックフォーラムくずは（泉佐野市）ブックス・パル／イワキ泉佐野店（羽曳野市）ブックスファミリア羽曳野店（和泉市）アシーネ光明池店（寝屋川市）水嶋寝屋川店

関　西

（京都市）洛陽書店／洛陽女子大／同志社大生協今出川店／アオキ書店／大垣書店／立命館大生協／丸山書店高野店／リーブル京都烏丸店／丸山書店千中店／リーブル京都本店／ヤサカメイト／春琴堂／リーブル京都銀閣寺店／京都大学生協中央店／ブックプラザ優／京都駸々堂京宝店／京都駸々堂三条店／オーム社河原町店／京都書院ヴァージョンB／ふたば書房河原町店／オーム社外大／サン書房／ブックストアー談京都店／ジュンク堂京都店／アバンティBC／いのしし堂／ふたば書房山科店／マルヤマ書店山科店／ブックス新京都／オーム社竹田店／キャップ桃山店（城陽市）オレンジポート城陽店（田辺町）同志社大生協田辺店（宇治市）駸々堂トライアングル／キャップ宇治店／ブックセンター万葉店（八幡市）ビブロス八幡店（亀岡市）ビブロス亀岡店／ブックイン

（神戸市）ジャパンブックス／甲南大生協／南天荘メイン六甲店／神戸大学生協学館店／神戸大学生協LANSBOX店／ジュンク堂サンパル店／ジュンク堂センター街店／流泉書房三宮店／コーベブックスさんちか店／日東館書林／海文堂／コーベブックスサンコウベ店／ブックフォーラムメトロこうべ店／ブックフォーラムジョイプラザ店／すま書房／神戸市外国語大生協／流泉書房パティオ店／ジュンク堂学園都市店／ビブロス須磨友ケ丘店／ブックフォーラム西神中央店／アシーネオーパ店（西宮市）ビブロス西宮店／関西学院大生協／ヤングタウンなるお（加古川市）ブックフォーラム加古川店／新興書房加古川店（明石市）トッパンセールズ（尼崎市）リブロ塚新／タイムブック（姫路市）誠心堂本店／誠心堂書店辻井店／ブックスサンヨー田寺店／（奈良市）駸々堂奈良大丸店（大和郡山市）啓林堂郡山店／水嶋奈良店（生駒市）ジャパンブックス南（和歌山市）宮井平安堂／イワキ狐島（大津市）リブロ大津／ビワコタワーBC／ブックス丸山瀬田店（近江八幡市）マイブック中村／ブックス八幡（長浜市）書店Aアカデミー

中国・四国

（岡山市）紀伊國屋岡山店／細謹舎／丸善岡山店／泰山堂鹿田店／泰山堂本店／黎明書院／飛行船北方店／AZ岡南店／ビブロス岡山（倉敷市）BS啓文社／飛行船ライブ倉敷店／三友書房（広島市）紀伊國屋広島店／金正堂／ニシヤ書店／広文館本通り店／パル金正堂可部店／ブックスラフォーレ／井口ブックセンター／啓文社コア店／フタバ図書八丁堀店（廿日市市）啓文社廿日市店（東広島市）ブックセンターアオイ八本松店（福山市）啓文社福山店／BC啓文社／サントーク広文館／啓文社コア店／啓文社キャスパ店／ビブロス福山木之庄店／啓文社サンピア店（出雲市）BCタケダ（松江市）今井書店本店／ブックセンター今井／BC今井学園通り店（米子市）今井書店米原店／今井書店本通り店／今井書店皆生店（鳥取市）富士書店本店／定有堂／鳥取BC／ブックランド富士書店湖山駅前店／ブックランド富士書店吉成店／ブックランド富士書店田園町店／鳥取大学生協（山口市）文栄堂山口大学前店／五十部誠文堂（下関市）ブックス中野（宇部市）ブックワールド（高松市）宮脇本店／宮脇円座店／宮脇築港店（高知市）富士書店（徳島市）アダムと島書房／BC平惣／阿波屋書店／小山助学館バイパス店（津山市）津山BC本店／津山BC駅前店（松山市）紀伊國屋松山店／明屋本店／明屋大街道店／明屋城北店／丸三書店／愛媛大学生協／松山大学生協

九　州

（福岡市）九州大学生協理系／明林堂箱崎店／紀伊國屋福岡店／積文館新天町／りーぶる天神／アニマート原／黒木書店片江店／福岡金文堂大橋駅／福家書店福岡店／明林堂野芥店／アニマート長住（那珂川町）アニマート那珂川（北九州市）福家書店北九州店／金栄堂／ナガリ書店／ブックセンター金山堂守恒店／小倉ブックセンター／明屋小倉店／北九州大学生協／旭屋北九州店／八幡井筒屋BC／九州工業大学生協／グリーンバレー／カルパーク平野／白石書店本城店（久留米市）たがみ書店／エマックスたがみ／ブックあんとく（粕屋町）仲原ブックセンター（大牟田市）麒麟書店田隈店／明林堂南大牟田店（三橋町）Book Cityやまと（田川市）ブックステーション（飯塚市）ブックステーション（長崎市）ステラ好文堂／遊ING長崎本店／好文堂新大工町店／スペースエム城栄店（佐賀市）積文館ディトス店／積文館佐賀松原店／金華堂本店／北バイパス金華堂／明林堂佐賀北店／明林堂南佐賀店／明林堂嘉瀬田店（熊本市）紀伊國屋熊本店／まるぶん／明林堂武蔵ケ丘店／明林堂北部店／明林堂長嶺店／明林堂竜田口店（鹿児島市）春苑堂本店／鹿児島大中央生協／ブックスみすみ南港店／春苑堂ブックプラザ／ブックセンターふこく（大分市）ブックタウン・カク／明屋書店大分本店／パルコBC／本の開書堂（中津市）明屋中津店（別府市）明林堂別府本店／明林堂鶴見店／明林堂青山店（延岡市）明屋延岡浜町店（宮崎市）中央田中書店／明屋浮ノ城店／明屋宮崎店／りーぶる宮崎（清武町）見開読タナカ（那覇市）球陽堂／OBB末吉店／文教図書パレット店（浦添市）OBB牧港店／沖縄宮脇書店（宜野湾市）田園書房宜野湾店／宮脇書店（沖縄市）宮脇書店美里店（西原町）琉球大学生協／西原球陽堂書房（北谷町）OBBバンビー店

小社へのご注文は、定価に送料260円をそえて現金書留か郵便振替（郵便為替も可）にて下記までご送金下さい。
〒102　東京都千代田区麹町5-5-5　宝島社通信販売係　☎03（3221）1994　振替＝00170-1-170829（株）宝島社

“現場”から─別冊宝島のルポルタージュ

定価各1010円(税込)

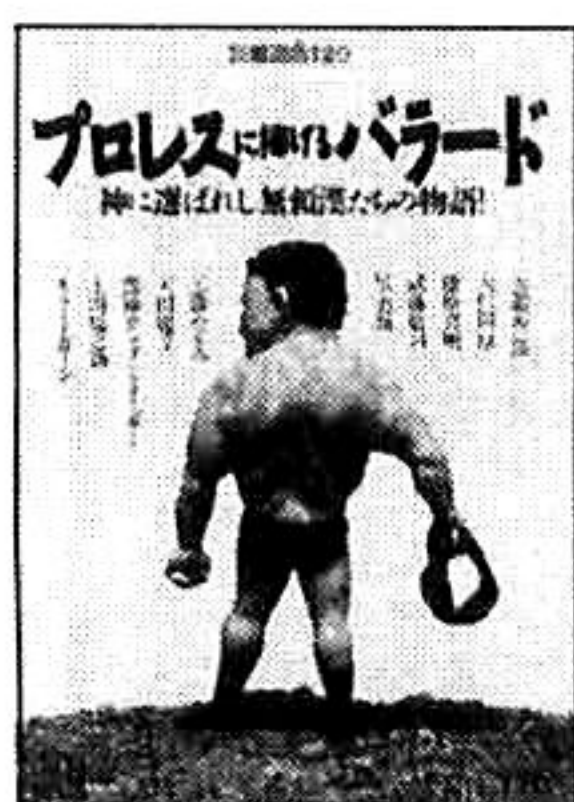
別冊宝島83
当世死に方事情
死と葬式とお墓をめぐる日本人の現在！
日本人の死に方が変わった！死という窓からニッポン人とその社会の変貌をみつめる、ちょっと変わった生態ウォッチング！

別冊宝島147
我らがバブルの日々
「ギャンブル資本主義」最前線からの証言！
バブルとともに生き、バブルとともに眠る企業戦士とアウトローたちの金とノルマと女とベンツの物語!!

別冊宝島133
裸の自衛隊！
おかしくてやがて悲しき、世界第三位の軍隊の実態
戦うべき敵もいなけりゃ守るべきものもない、こんな軍隊に誰がした!?実態を知らずして自衛隊を論ずるなかれ。

別冊宝島131
ライターの事情
ボーダレス化した「書く仕事」の現場を追う！
あらゆるメディアを根幹で支える「書く」という営み。「書く仕事」から高度情報社会の足元に迫り来る液状化現象をさぐる。

別冊宝島139
恋をしない女たち
愛がわからない時代の、私たちの恋愛さがし
ダイヤルQ² で出会い、バリ島のビーチで抱き合い、パソコン通信で不倫する、フツーの女の子たちの愛の物語！

別冊宝島124
セックスというお仕事
女が見た女を売る女たち
女にとって「セックス産業」って何？総勢20人の女性探査隊による、初の風俗探検記！

別冊宝島120
プロレスに捧げるバラード
神に選ばれし無頼感たちの物語！
プロレスは人類最古にして最も神聖なる文化(スポーツ)だ！流血と抗争を繰り返し、旅から旅へ、レスラーたちは今日も行く！

別冊宝島114
いまどきの神サマ
退屈な世紀末、人びとは何を祈る？
オウム真理教入信日記！東大卒の仏陀、大川隆法の正体！宗教・オカルト・精神世界ブームの最前線での従軍体験(フィールド・ワーク)！

別冊宝島112
男が危ない！？
「男が立たない」時代の男たち！あなたは「男」を続けられますか？
男らしさという価値観の変化にとり残され、女の時代の中で孤立無援の男たち。男の語られ方が今、あらためて問われている。

別冊宝島107
女がわからない！
男には理解できなくなってきた「女」の現在をめぐるフィールドワーク！
女について、これまで誰も語らなかったことがいっぱいある！女について、いろんな男が考えたこと。

書店にない場合はご注文になるか当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621

いまどきの神サマ

PART1 通過儀礼なき時代の宗教体験

【オウム真理教とは何か】

実践編 オウム真理教入信体験日記！

分析編 オウム真理教はディズニーランドである！

【宗教にハメられないための基礎知識】

実践編 私たちはこうして宗教にひっかけられた！
原理研から創価学会まで、宗教団体別勧誘の実態！

理論編 自己投資の時代に蔓延する、洗脳のテクノロジー！

キャラバンの白い少女
宗教は、もはや狂気の受け皿としての役割さえ放棄している！

PART2 オカルト・ブームの深層心理

【精神世界マーケット探検隊】

インスタント・ハイのハシゴ体験記！

通信販売で超能力を買う人びと！

おまじない少女と占いウーマンの幸せ？

UFOは宗教になってしまった！
シャーリー・マクレーンなどの著名人を夢中にさせるUFO教の実態

虚々実々のエンターテインメイト、その本音とタテマエ
オカルト雑誌編集者覆面座談会！

気功、超能力、ニューエイジ……巷のオカルト分子を断固殲滅！
オカルト馬鹿につける薬

世界一平等で
世界一金持ちで
世界一長生きのこの国には
一億三千万も神サマがいるのです……

PART3 前世少女と終末ブーム

【前世少女という異界】

現場編 人類救済の戦士たちはチョコパフェがお好き！

論考編 前世夢紡ぎ――少女たちの共犯幻想！

【豊かな時代の終末観】

臨床編 未来という重荷が終末を呼ぶ！

アンケート編 新宗教は終末をどう考えているのか!?

テキスト編 世界の終末観と、破局を夢見る子どもたち

PART4 90年代型の神サマ

【ポストモダン宗教展望】

東大出の仏陀、大川隆法の神霊ゼミナール！

「大霊界」とは何だったのか!?

教祖になったマンガ家、天使と交信するSF作家！

コンピュータは神棚である！

人みなすべてネズミ講（ネットワーク）にハマる！

たっぷり　書2冊分

誌65988-78 定価1010円(本体981円) ISBN4-7966-9114-6 C0076 P1010E